田原本町文化財調査年報27

田原本町文化財調査年報 2018年度 27

田原本町教育委員会

田原本町文化財調査年報27
田原本町教育委員会

田原本町文化財調査年報 27

2018年度

田原本町教育委員会

例　言

1．本書は、田原本町教育委員会が2018年度（平成30年度）に実施した文化財事業の概要をまとめたものである。

2．埋蔵文化財の発掘調査については、土地所有者・施工業者ならびに近隣の皆様にご協力とご理解を賜った。記して感謝します。

3．本書は、Ⅰを藤田三郎・清水琢哉・柴田将幹・渡瀬加奈子・西岡成晃、Ⅱを奥谷知日朗・柴田、Ⅲを藤田・奥谷・清水・渡瀬・西岡、Ⅳ．１を佐々木由香 氏（東京大学総合研究博物館）・米田恭子 氏（㈱パレオ・ラボ）・藤田、２を奥山誠義 氏（奈良県立橿原考古学研究所）・寺澤薫 氏（桜井市纒向学研究センター）・藤田が執筆した。Ⅰ．２の遺物は清水・渡瀬・江浦至希子、Ⅳ．２の遺物は藤田が実測し、清水・渡瀬・西岡がデジタルトレースをおこなった。本書は西岡・清水が編集した。

目　　次

Ⅰ．田原本町の埋蔵文化財
1．町内における開発と遺跡の異動
（1）町内における開発と発掘調査 …… 1
（2）遺跡の異動 …… 2
2．埋蔵文化財の調査
（1）発掘調査の概要 …… 3
1．唐古・鍵遺跡 第124次調査 …… 5
2．唐古・鍵遺跡 第125・126次調査 …… 17
3．保津・宮古遺跡 第50次調査 …… 22
4．保津・宮古遺跡 試掘調査（S-201802）・第51次調査 …… 29
5．十六面・薬王寺遺跡 第37次調査 …… 35
6．十六面・薬王寺遺跡 第38次調査 …… 47
7．十六面・薬王寺遺跡 試掘調査（S-201801）・第39次調査 …… 49
8．薬王寺東遺跡 第４次調査 …… 63
9．薬王寺南遺跡 第３次調査 …… 68
10．西竹田遺跡 第５次調査 …… 70
11．佐味遺跡 第５次調査 …… 79
12．東井上遺跡 第３次調査 …… 85
13．千代遺跡 第９次調査 …… 88
14．平野氏陣屋跡 第15次調査 …… 91
15．平野氏陣屋跡 第16次調査 …… 100
16．宮森遺跡 試掘調査（S-201803） …… 103
（2）工事立会の概要 …… 106
3．文化財資料の整理・保管
（1）埋蔵文化財の整理・保管 …… 108
（2）木製品の樹種同定と保存処理 …… 109
（3）図面・写真の保管と資料撮影、写真のデジタル化 …… 114

Ⅱ．唐古・鍵考古学ミュージアムと唐古・鍵遺跡史跡公園
1．唐古・鍵考古学ミュージアム
（1）リニューアルオープン …… 115
（2）田原本ギャラリー　今回の逸品 …… 115
（3）企画展「唐古・鍵遺跡の重要文化財～新指定品の紹介～」 …… 116
（4）リニューアル記念シンポジウム …… 117
（5）秋季企画展「古墳時代黎明―唐古・鍵弥生ムラのその後―」 …… 118

（６）講座…… 119
（７）入館者数…… 119
（８）入館者アンケート…… 120
（９）視察・研修・学校等からの利用…… 120
（10）ホームページ…… 121
２．唐古・鍵遺跡史跡公園
（１）施設概要・開園…… 121
（２）公園利用・イベント…… 123
（３）公園来園者 …… 125
（４）ＡＲ唐古・鍵…… 125
（５）フォトコンテスト …… 125
３．ボランティア活動
（１）史跡公園ボランティア …… 126
（２）唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会 …… 126
（３）ミュージアムボランティア …… 126

Ⅲ．文化財の保護と活用
１．遺跡・文化財の保護
（１）国指定文化財 …… 127
（２）県指定文化財…… 130
２．刊行物一覧 …… 131
３．資料の活用
（１）資料の貸出 …… 131
（２）写真掲載・撮影 …… 132
（３）資料調査及び資料分析 …… 133
（４）楼閣くん・ロゴマーク …… 133
４．桜井市・田原本町共催シンポジウム …… 134
５．社会教育活動
（１）町内小・中学校の授業 …… 135
（２）講師の派遣 …… 136

Ⅳ．資料の報告
１．唐古・鍵遺跡出土土器付着炭化物から見た弥生時代の鱗茎利用（佐々木由香・米田恭子・藤田三郎）‥ 137
２．唐古・鍵遺跡出土の青銅器鋳造関連遺物（補遺）（寺澤　薫・藤田三郎・奥山誠義）…… 145

Ⅰ．田原本町の埋蔵文化財

１．町内における開発と遺跡の異動

（１）町内における開発と発掘調査

本町における平成 30 年度（2018 年度）の民間開発行為等による埋蔵文化財発掘届（第 93 条）は 84 件、地方公共団体等による通知（第 94 条）は 10 件で、計 94 件を数える。

平成 30 年度の発掘調査は 16 件である。内訳は、個人住宅の建築４件、公共事業５件、民間開発７件である。

本年度は、総調査面積に対する出土遺物数が、1 ㎡あたり約 0.06 箱と平年並みの比率である。

第１表　田原本町における平成 30 年度の発掘届・通知件数一覧

発掘届 93 条	発掘通知 94 条		発掘調査	工事 立会	慎重 工事	先行 工事
84	10	通知内容	19	31	41	3
		実施分	町　16 県　0	27	－	－

※通知から実施までに年度をまたぐ場合がある為、件数は一致しない

第２表　田原本町の発掘届・通知と発掘調査件数の推移

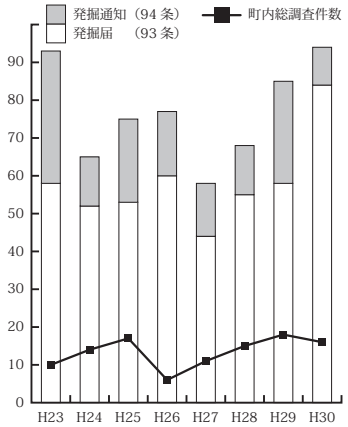
		H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
発掘届（93 条）		58	52	53	60	44	55	58	84
発掘通知（94 条）		35	13	22	17	14	13	27	10
計		93	65	75	77	58	68	85	94
発掘件数	町	10	14	17	6	11	15	18	16
	県	0	0	0	0	0	0	0	0
町内総調査件数		10	14	17	6	11	15	18	16

第３表　町教育委員会が実施した発掘調査の原因別推移

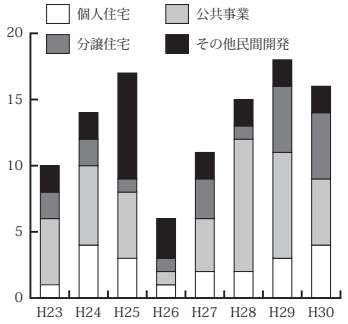
		H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
範囲確認		0	0	0	0	0	0	0	0
個人住宅		1	4	3	1	2	2	3	4
公共事業		5	6	5	1	4	10	8	5
民間開発	分譲	2	2	1	1	3	1	5	5
	その他	2	2	8	3	2	2	2	2
計		10	14	17	6	11	15	18	16

第４表　町教育委員会による調査の面積及び出土遺物数の推移

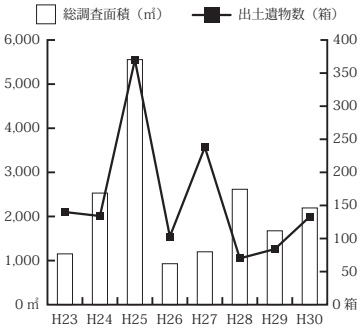
	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
総調査面積（㎡）	1,152	2,530	5,555	929	1,199	2,616	1,675	2,193
出土遺物数（箱）	140	134	370	103	238	70	84	133



第１図　発掘届・通知と調査件数の推移



第２図　発掘調査原因の推移



第３図　調査面積と出土遺物数の推移

（２）遺跡の異動

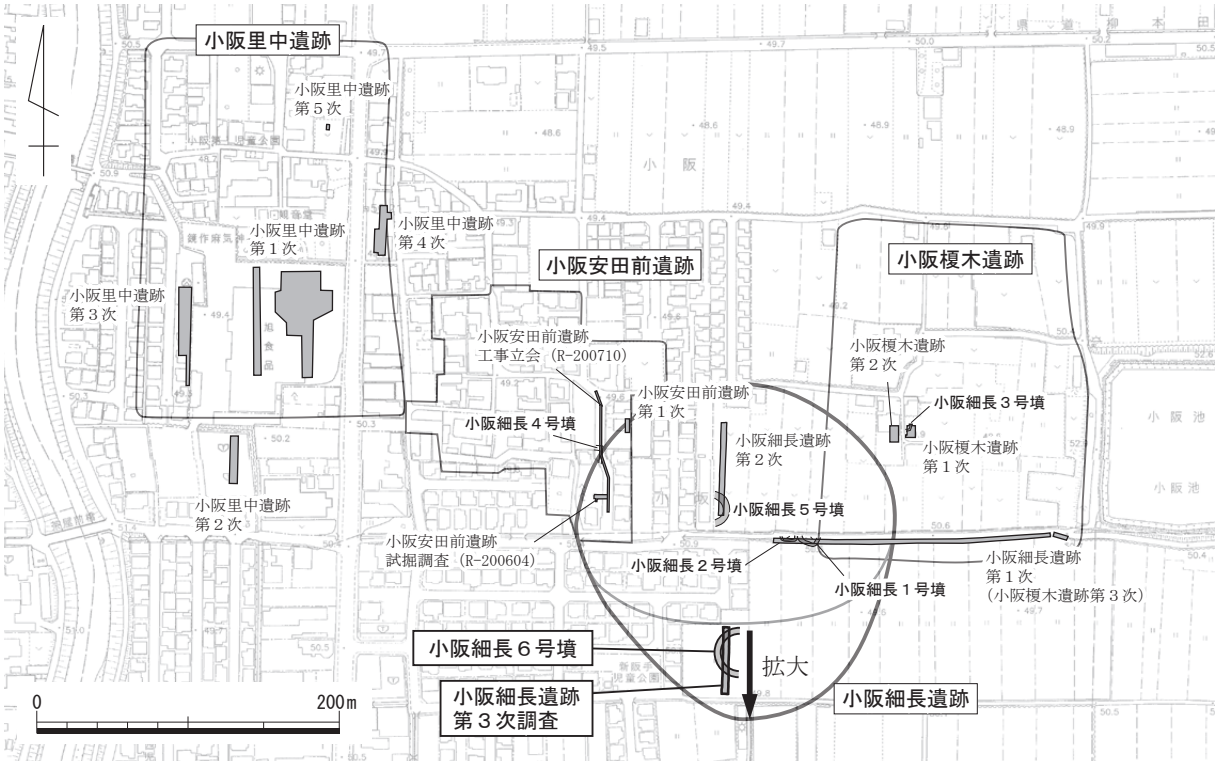
平成 30 年度は、２件の異動があった。

小阪細長遺跡　田原本町の中央部、大字小阪小字細長を中心に位置する、弥生時代～近世の遺跡である。平成 18 年度に奈良県が小阪榎木遺跡第３次調査を実施した際、遺跡内容が異なる地区を確認したため、この地区を第１次調査として「小阪細長遺跡」が新規登録された。平成 29 年度に実施した小阪細長遺跡第３次調査においては、従来の遺跡範囲の南側を調査した結果、古墳・平安・鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。特に平安・鎌倉時代の土坑からは土師器皿や瓦器椀等がまとまって出土しており、遺跡範囲に含める必要があると考えられた。このため、遺跡範囲を南側に拡張し、奈良県遺跡地図の登録範囲を変更した。

小阪細長６号墳　小阪細長遺跡第１・２次調査、隣接する小阪榎木遺跡第１次調査および小阪安田前遺跡での工事立会において、古墳時代後期の円墳・方墳を複数検出しており、「小阪細長古墳群」として奈良県遺跡地図に登録している。平成 29 年度に実施した小阪細長遺跡第３次調査において、推定直径 25 ～ 30 ｍの円墳１基を検出した。時期は古墳時代後期とみられる。小阪細長１～５号墳と同時期であり、位置も近接していることから、名称を「小阪細長６号墳」とし、奈良県遺跡地図に新規登録した。

第５表　遺跡の異動一覧表

遺跡番号	遺　跡　名	異動内容	異動原因	遺　跡　概　要	報　告	通　知	施行日
11-C-0138	小阪細長遺跡	範囲・ 内容の変更	小阪細長遺跡 第３次調査	古墳時代初頭の土器、古墳時代後期の円墳、平安・鎌倉時代の井戸を確認	H31. 2. 1 田教文　第534号	H31. 3.19 教文　第7029号	H31. 3.29
11-C-0171	小阪細長６号墳	新規発見	小阪細長遺跡 第３次調査	北西・南西側周濠を検出、推定直径25～30m、円筒・朝顔形埴輪片が出土	H31. 2. 1 田教文　第535号	H31. 3.19 教文　第7028号	H31. 3.29



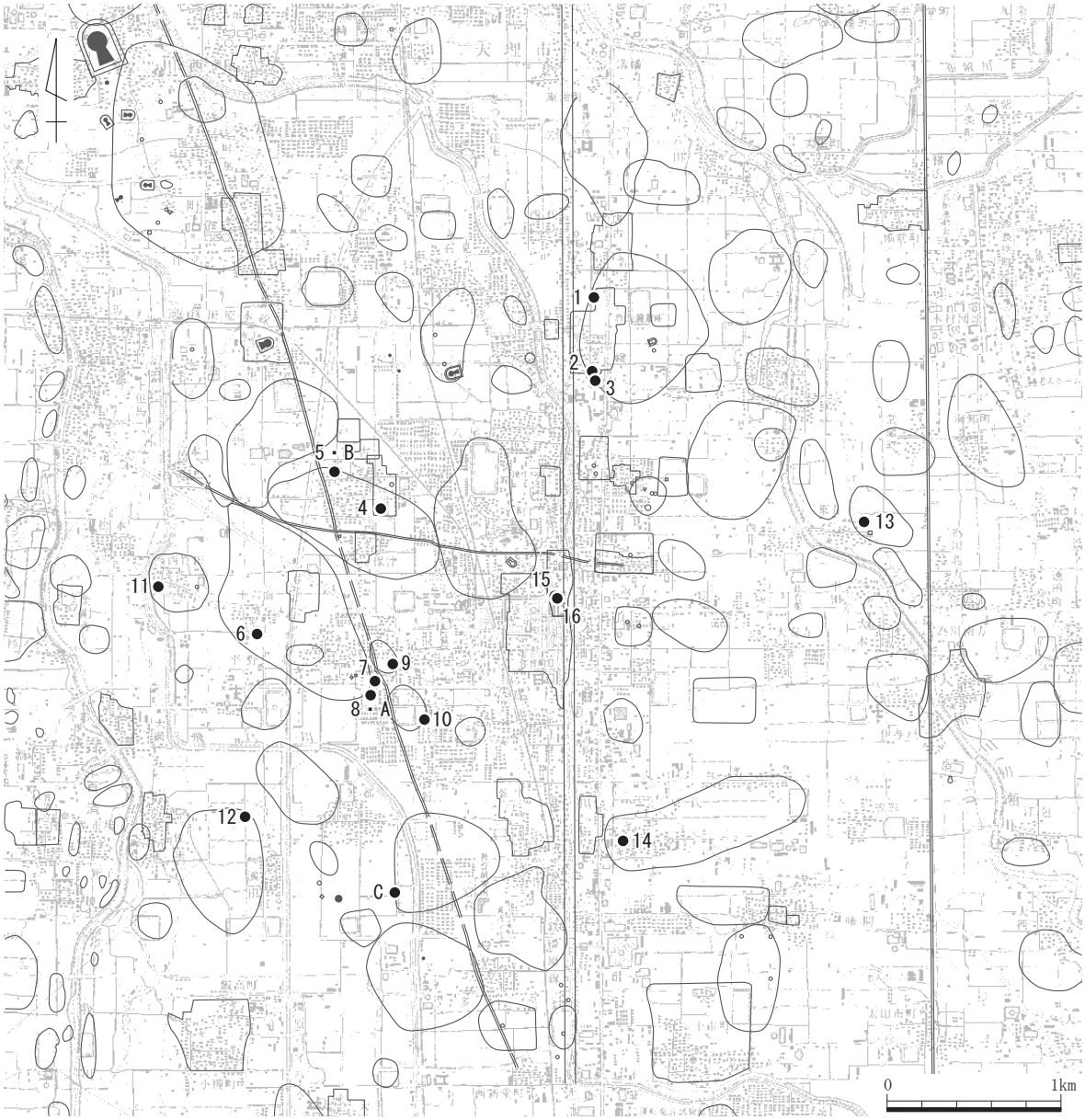
第４図　小阪細長遺跡・小阪細長６号墳（Ｓ＝1/5,000）

２．埋蔵文化財の調査

（１）発掘調査の概要

本年度は 16 件の発掘調査を実施した。弥生時代～古墳時代では、唐古・鍵遺跡第 124 次調査で遺跡北西端の環濠を確認した。また、十六面・薬王寺遺跡では第 39 次調査で古墳時代初頭頃の溝から多量の土器が出土したほか、第 37 次調査では古墳時代中・後期の集落遺構を確認し、多量の製塩土器が出土した。

中近世では、佐味遺跡で中世居館を囲むとみられる大溝を確認した。また、平野氏陣屋跡では陣屋内を巡るとみられる溝や、近世の井戸を検出した。



第５図　田原本町の遺跡と調査地点（Ｓ＝1/40,000）

第６表　2018 年度　発掘調査一覧表

	遺跡名 次数	調査地	原因者	原因	期間	面積	担当	備考
		検出遺構			出土遺物			遺物量
1	唐古・鍵 第124次	田原本町大字唐古小字柳田67・68番合併・69番1	㈱八州 エイジェント	宅地分譲	2018. 5.16 ～ 6.21	173㎡	柴田将幹 渡瀬加奈子	受託事業
		弥生時代中期：大溝８条、河跡１条、落ち込み１基 中　・　近　世：小溝群			弥生土器、土師器、瓦器、木製品、石器、獣骨等			12箱
2	唐古・鍵 第125次	田原本町大字鍵小字垣内338番1	個人	個人住宅の建築	2018.12.17 ～12.28	32㎡	柴田 藤田三郎	国庫補助事業
		弥生時代：土坑３基、柱穴群、小溝１条 中　　世：大溝１条、小溝２条、落ち込み１基 近　　世：井戸１基、土坑１基、溝１条			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、近世陶磁器、瓦、石器、獣骨等			17箱
3	唐古・鍵 第126次	田原本町大字鍵小字垣内345番	個人	個人住宅の建築	2018.12.25	6㎡	柴田・藤田	国庫補助事業
		弥生時代？：大溝１条			弥生土器等			２袋（小）
4	保津・宮古 第50次	田原本町大字宮古小字大門76番外	田原本町長	ため池改修工事	2018.11.26 ～2019. 1.11	522㎡	渡瀬 西岡成晃	農政土木課
		時期不明：河跡１条 中　　世：土坑２基			土師器、瓦器、近世陶磁器、瓦、木製品、石製品等			２箱
5	保津・宮古 第51次	田原本町大字宮古小字西幸波329・330番合併の一部	㈱ルーフホーム	宅地造成	2019. 2.18 ～ 2.22	62㎡	柴田	受託事業
		中世以前：土坑２基、小穴３基 中　　世：大溝１条、小溝５条			土師器、須恵器、近世陶磁器、瓦等			１箱
6	十六面・ 薬王寺 第37次	田原本町大字十六面小字十六面276番1外　南側道路	田原本町長	道路拡幅工事	2018. 9.21 ～11.19	258㎡	柴田	農政土木課
		古墳時代：土坑11基、小穴群、大溝５条、溝29条 古　　代：溝４条、足跡群 中・近世：土坑１基、小穴群、大溝１条、小溝群 近　　世：井戸２基			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、近世陶磁器、木製品、石器、金属器等			31箱
7	十六面・ 薬王寺 第38次	田原本町大字薬王寺小字大筒121番1	㈱ローソン	サインポールの設置	2018.11.19	4㎡	柴田	受託事業
		中・近世：小溝２条			土師器等			１袋（小）
8	十六面・ 薬王寺 第39次	田原本町大字薬王寺小字蔵ヶ町 127・128・129・130番	㈱ティーズ コーポレーション	宅地造成	2019. 2.12 ～ 3.28	437㎡	渡瀬・西岡	受託事業
		弥生時代末～古墳時代初頭：井戸２基、柱穴群、大溝１条、河跡１条 古墳時代中期～古代：土坑４基、柱穴１基、大溝２条、溝１条、河跡１条 中　　世：小溝群			弥生土器、土師器、須恵器、木製品、石製品等			49箱
9	薬王寺東 第４次	田原本町大字薬王寺小字卒都波堂84番1、85番 各一部	㈱やまと不動産	宅地造成	2019. 1.30 ～ 2.12	75㎡	柴田	受託事業
		中世以前：河跡１条 中　　世：土坑５基、小穴５基、落ち込み２基			土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、近世陶磁器、瓦等			４箱
10	薬王寺南 第３次	田原本町大字三笠小字文東195番6	個人	個人住宅の建築	2018. 5. 1	6㎡	柴田・渡瀬 西岡	国庫補助事業
		なし			なし			０箱
11	西竹田 第５次	田原本町大字西竹田小字道仙寺182番1・183番1	個人	宅地造成	2018. 4. 1 ～ 5.17	270㎡	西岡・渡瀬 柴田	受託事業
		時　期　不　明：河跡１条 古墳時代前期：土坑４基、溝５条 中　・　近　世：土坑５基、大溝３条、素掘小溝５条			土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、瓦、木製品、石器等			４箱
12	佐味 第５次	田原本町大満田小字アテノ木206番1外　東側道路	田原本町長	農道改良工事	2018.12.10 ～2019. 1.11	227㎡	西岡	農政土木課
		中　世　以　前：土坑２基、溝１条 鎌倉～室町時代：土坑１基、大溝３条、小溝群、足跡群			土師器、須恵器、瓦器、石器、石製品、土製品等			１箱
13	東井上 第３次	田原本町大字東井上小字大日149番2　南西側道路外	田原本町長	下水道工事	2018. 7.11 ～ 7.13	15㎡	柴田	下水道課
		中世？：小溝２条			弥生土器、土師器、黒色土器、瓦器等			１袋（中）
14	千代 第９次	田原本町大字千代小字垣内1170番	個人	個人住宅の建築	2018.11.26 ・11.27	6㎡	柴田	国庫補助事業
		中世：小穴３基、大溝１条、溝２条 近世：土坑１基、小溝４条			土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、近世陶磁器、瓦、銭貨等			３箱
15	平野氏 陣屋跡 第15次	田原本町小字奥垣内762番	田原本町長	防火水槽の設置	2018. 8.27 ～ 9.19	78㎡	柴田・西岡	防災課
		中世：土坑１基、井戸１基、大溝１条、溝１条 近世：土坑３基、小穴２基、大溝１条、小溝２条 近代：建物跡１棟			土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、輸入磁器、近世陶磁器、瓦等			６箱
16	平野氏 陣屋跡 第16次	田原本町小字奥垣内762番	個人	地区集会所の増設	2018.10.17 ～10.19	14㎡	清水・西岡	受託事業
		江戸時代：井戸１基、土坑１基、柱穴11基、落ち込み２基、小溝２条			土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、輸入磁器、近世陶磁器、瓦等			２箱

第７表　2018 年度　試掘調査一覧表

	遺跡名	調査地	原因者	原因	期間	面積	担当	備考
		検出遺構			出土遺物			遺物量（箱）
A	十六面・ 薬王寺 S-201801	田原本町大字薬王寺小字蔵ヶ町124番1外	㈱ティーズ コーポレーション	宅地分譲	2018.10.29 ～10.31	93㎡	柴田・西岡 渡瀬	国庫補助事業
		古墳時代：土坑２基、大溝１条、落ち込み１基 古　　代：溝１条 中　　世：小穴１基、小溝２条、落ち込み２基			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等			１箱
B	保津・宮古 S-201802	田原本町大字宮古小字西幸波329・330番合併の一部	㈱ルーフホーム	宅地分譲	2019. 1.24 ・ 1.25	36㎡	柴田・渡瀬 西岡	国庫補助事業
		時期不明：河跡 古　　代：土坑１基 中・近世：土坑？１基、小溝群			土師器、須恵器、瓦等			１箱
C	宮森 S-201803	田原本町大字矢部小字東亀田345番1外　東側道路	田原本町長	農道改良工事	2019. 3.18 ～ 3.22	9㎡	柴田	国庫補助事業
		弥生時代：大溝３条 中　　世：小溝３条			弥生土器、須恵器、瓦器、近世陶磁器等			１箱

１．唐古・鍵遺跡　第 124 次調査

１．既調査の概要

唐古・鍵遺跡は、奈良盆地の中央、標高 47 m前後の沖積地に立地する、弥生時代の集落遺跡である。これまでの調査成果から、直径 400 m前後の集落域を幾重もの環濠帯で囲む環濠集落であることがわかっている。今回の調査地は遺跡の北西端に位置する。周辺では過去に第６・13・31・42・115・119 次調査がおこなわれており、大溝を多数検出している。これらの調査成果から、本調査地は居住区縁辺部の環濠帯にあたると予想された。

２．調査の成果

今回、宅地造成が計画され、共有道路となる箇所について発掘調査を実施した。２×４ｍの調査区を４ヶ所、５× 15 ｍの調査区を２ヶ所、計６ヶ所のトレンチを設定した。北側から第１～６トレンチと呼称する。第１～４トレンチについては顕著な遺構は検出しなかったため、第５・６トレンチのみ報告する。

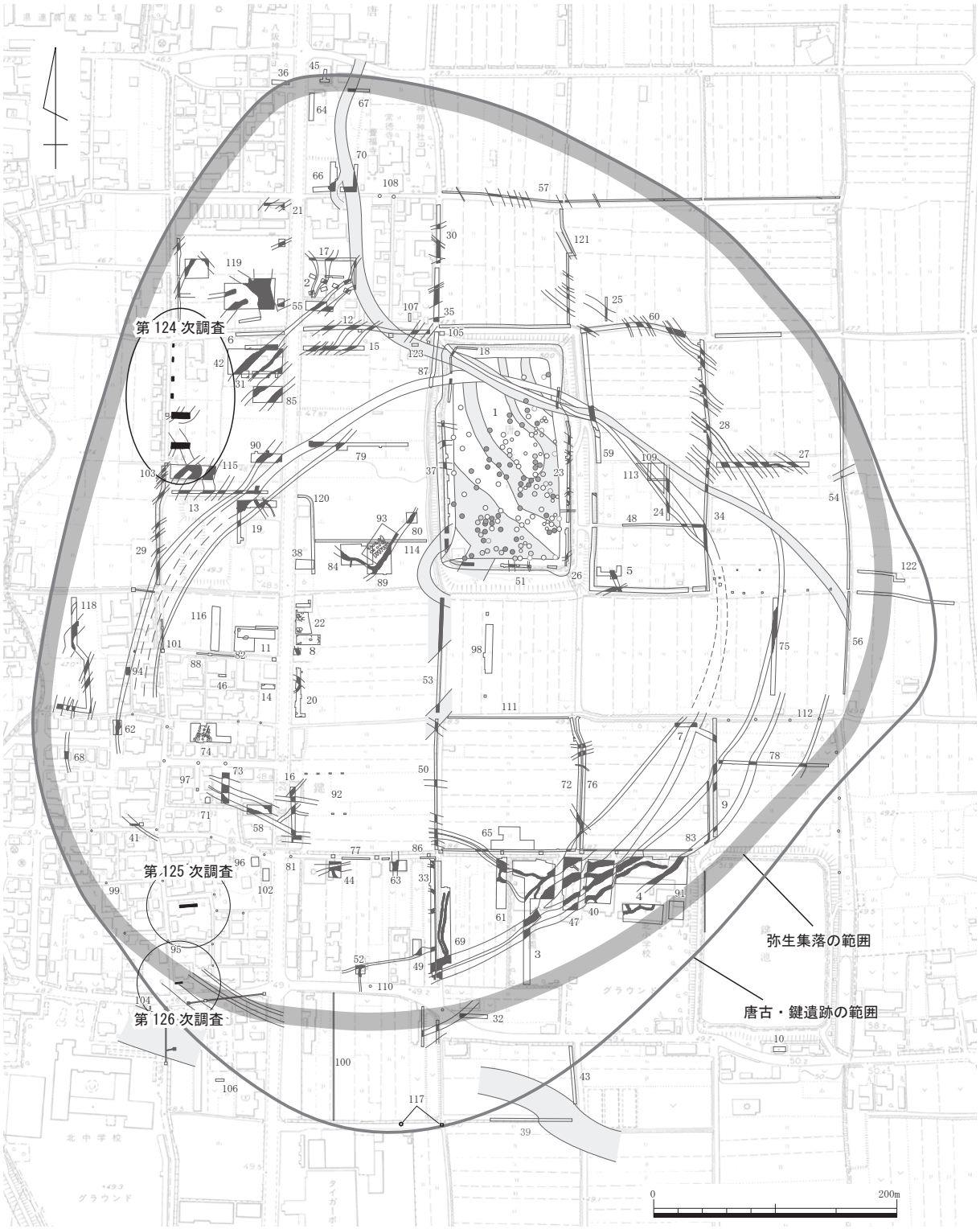
（１）層序

Ⅰ:造成土〔検出標高 46.9 ｍ、以下数値のみ記す〕、Ⅱ:暗灰褐色土〔46.6 ｍ〕、Ⅱ’:暗灰色土〔46.5 ｍ〕、Ⅲ：暗青灰色土〔46.4 ｍ〕、Ⅳ：茶灰色土〔46.2 ｍ〕、Ⅴ：赤褐色土（ハード）〔46.0 ｍ、第６トレンチでのみ確認〕、Ⅴ’：灰褐色土〔46.0 ｍ、第５トレンチでのみ確認〕、Ⅵ：淡黄灰色砂質土〔45.9 ｍ〕

現状は青空駐車場となっていたが、以前は水田であった。第Ⅱ層及び第Ⅱ’層が旧水田耕土、第Ⅲ層が旧水田床土層である。

第８表　唐古・鍵遺跡　第 124 次調査　遺構一覧表

遺構名	前期		中期									後期						古墳初頭	古墳前期	規模	方向	備考
	Ⅰ-1	Ⅰ-2	Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ-3	Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅲ-4	Ⅳ-1	Ⅳ-2	Ⅴ-1	Ⅴ-2	Ⅵ-1	Ⅵ-2	Ⅵ-3	Ⅵ-4	庄内	布留			
ＳＲ-5152																				幅3.8m 深さ1.9m	北北西－南南東	粗砂堆積
ＳＤ-5101																				幅4.0m 深さ1.0m	東北東－西南西	粗砂堆積、 環濠
ＳＤ-5102																				幅2.5m 深さ1.0m	北東－南西	環濠
ＳＤ-5103																				不明	北西－南東	粘砂堆積
ＳＤ-5151																				幅2.1m以上 深さ1.3m以上	北北西－南南東	粗砂堆積
ＳＤ-6101																				幅4.0m 深さ0.3m	南－北	
ＳＤ-6102																				幅2.4m以上 深さ0.5m	南－北	
ＳＤ-6151																				幅4.4m 深さ0.7m	北北東－南南西	
ＳＤ-6152																				幅7.3m 深さ0.7m以上	北西－南東	木製穂摘具（第10図）、杭（第12図）
ＳＸ-6101																						



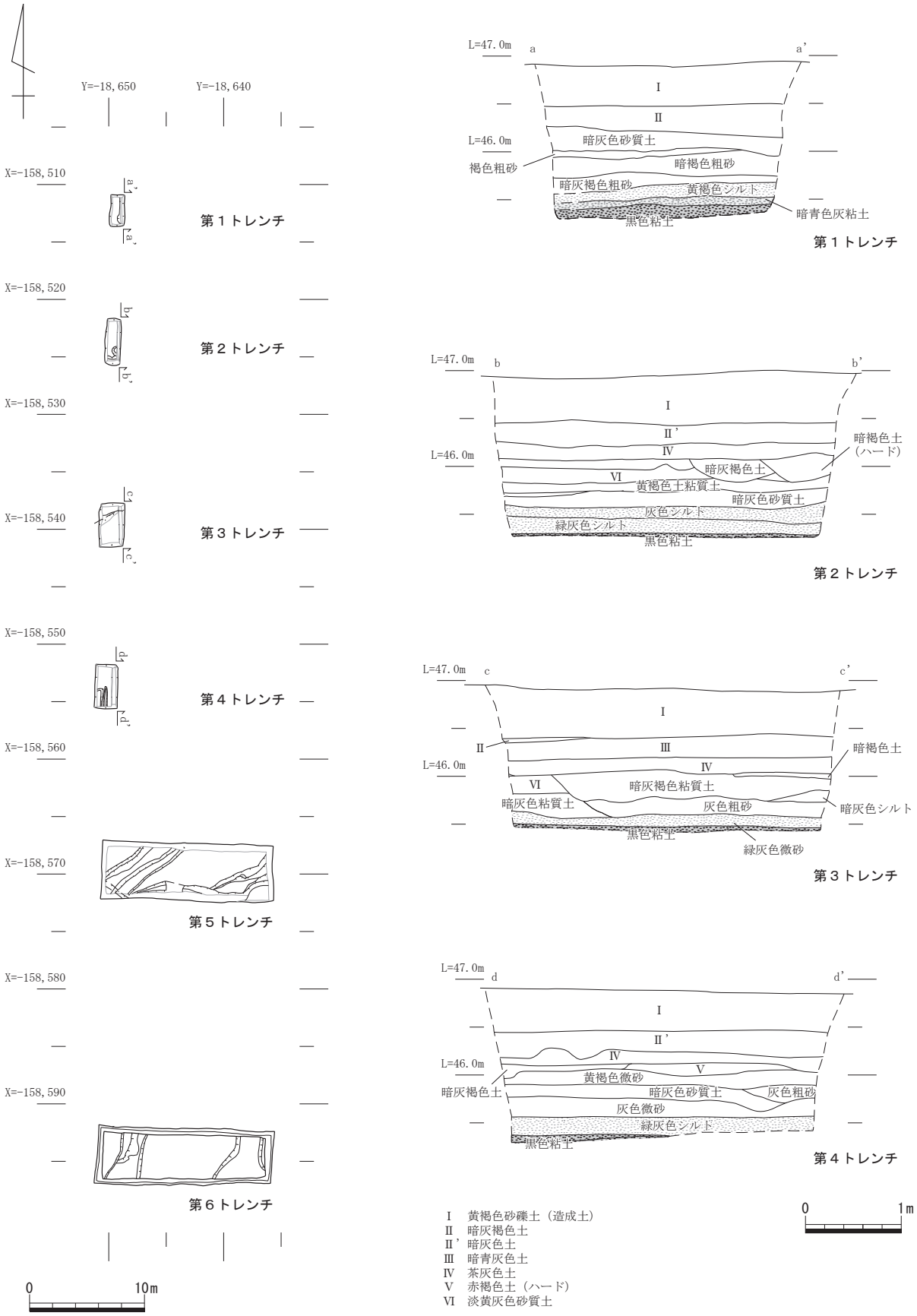
第６図　唐古・鍵遺跡調査地位置図（Ｓ＝1/5,000）

（２）遺構と遺物

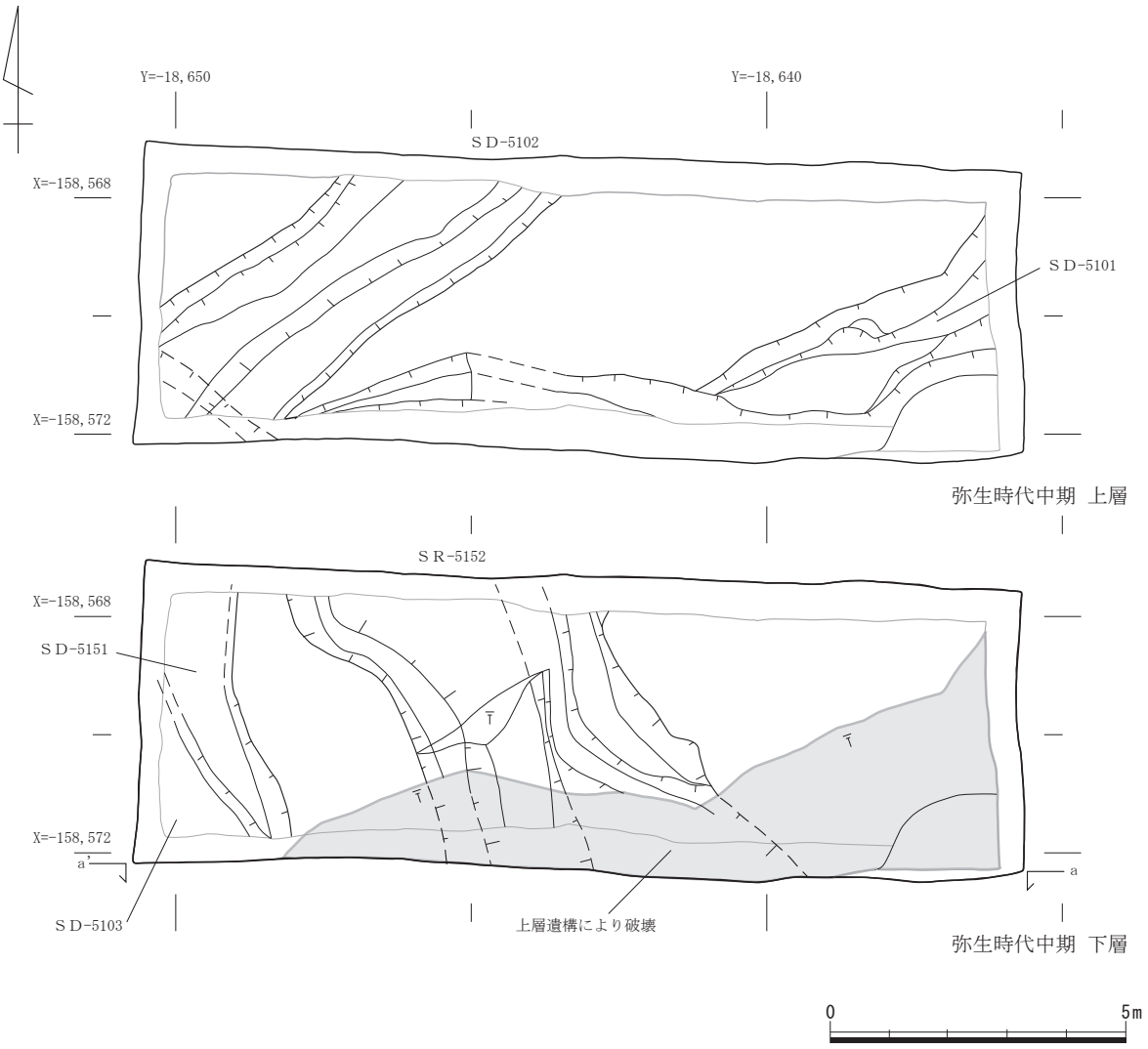
第５トレンチ

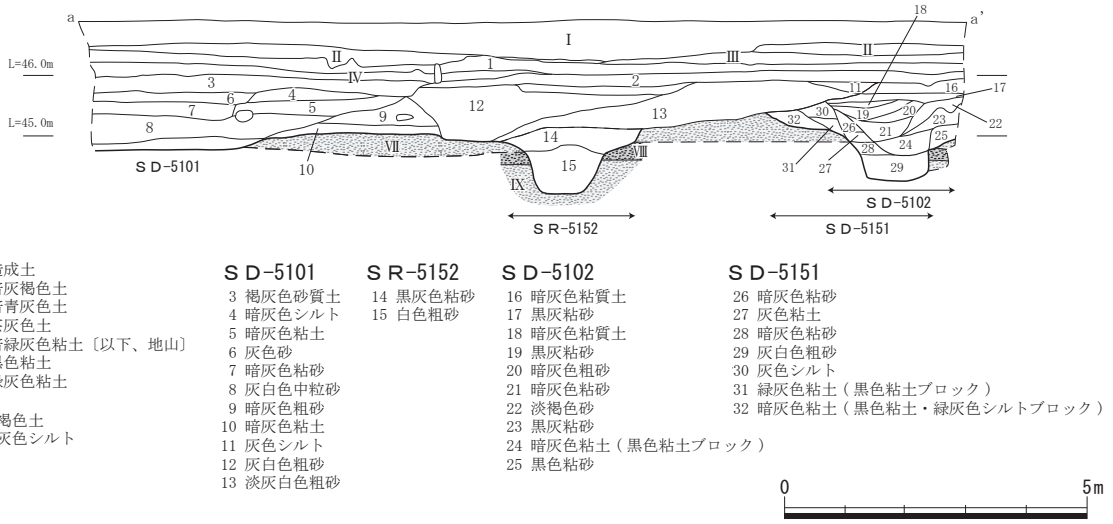
弥生時代

ＳＤ－5101　　第５トレンチ南で北肩を検出した東北東－西南西方向の弥生時代中期後葉（大和第Ⅳ様式）の大溝で、南肩は調査区外になる。走向方向から、環濠と考えられる。幅は4.0



第７図　調査区位置図（Ｓ＝1/500）及び第１～４トレンチ東壁断面図（Ｓ＝1/60）





Ⅰ 造成土
Ⅱ 暗灰褐色土
Ⅲ 暗青灰色土
Ⅳ 茶灰色土
Ⅶ 暗緑灰色粘土〔以下、地山〕
Ⅷ 黒色粘土
Ⅸ 緑灰色粘土

1 淡褐色土
2 暗灰色シルト

SD-5101
3 褐灰色砂質土
4 暗灰色シルト
5 暗灰色粘土
6 灰色砂
7 暗灰色粘砂
8 灰白色中粒砂
9 暗灰色粗砂
10 暗灰色粘土
11 灰色シルト
12 灰白色粗砂
13 淡灰白色粗砂

SR-5152
14 黒灰色粘砂
15 白色粗砂

SD-5102
16 暗灰色粘質土
17 黒灰粘砂
18 暗灰色粘質土
19 黒灰粘砂
20 暗灰色粗砂
21 暗灰色粘砂
22 淡褐色砂
23 黒灰粘砂
24 暗灰色粘土（黒色粘土ブロック）
25 黒色粘砂

SD-5151
26 暗灰色粘砂
27 灰色粘土
28 暗灰色粘砂
29 灰白色粗砂
30 灰色シルト
31 緑灰色粘土（黒色粘土ブロック）
32 暗灰色粘土（黒色粘土・緑灰色シルトブロック）

第８図　第５トレンチ平面図・南壁断面図（Ｓ＝1/125）

m以上、深さは1.0ｍを測る。第５トレンチで検出した弥生時代の遺構で最も新しい。全体的にラミナが発達した粗砂で埋没しており、流れの速い環濠であったと推測される。また、遺物としては、組合せ鋤身の未成品が出土した（第11図-6）。ほぼ縦長の長方形を呈し、刃部両端は丸みを帯びている。

ＳＤ-5102　第５トレンチ西半で検出した北東－南西方向の弥生時代中期中葉（大和第Ⅲ様式）の大溝で、幅は約2.5ｍ、深さ1.0ｍを測る。走向方向から、環濠と考えられる。ＳＤ-5101に切られるが、ＳＤ-5103・5151、ＳＲ-5152を切る。堆積層は大きく３層に分けることができる。下層に暗褐色砂が堆積しており、若干の流水があったようだが、中層・下層は砂質土や粘質土の堆積となっており、埋没時には水はほとんど流れていなかったと推定される。

ＳＤ-5103　第５トレンチ南西隅で検出した北西－南東方向の溝で、大溝の可能性がある。ＳＤ-5151の堆積層として掘削をおこなったが、南壁・西壁の検討により、ＳＤ-5151とは別の溝であることがわかった。ＳＤ-5101・5102に切られ、ＳＤ-5151を切る。粘性のある砂で埋没していることから緩やかな流水があったとみられる。

ＳＤ-5151　第５トレンチ西端で東肩を検出した北北西－南南東方向の大溝で、南半のみ調査した。西肩は調査区外である。幅2.1ｍ以上、深さは1.3ｍ以上を測る。肩で足跡を検出したほか、鋤で掘削したとみられる単位も確認された。全体的に粗砂が堆積しており、調査中も多量の湧水があったことから、当時も相当の流水により短期間で埋まった可能性が高い。また、一度埋没した後再掘削されていた。遺物が小片のみで時期不明であるが、ＳＤ-5101～5103に切られることから、弥生時代中期中葉（大和第Ⅲ様式）以前の遺構であると推定されるが、短期間で埋没した可能性もあることから、ＳＤ-5102と並存した可能性も残される。

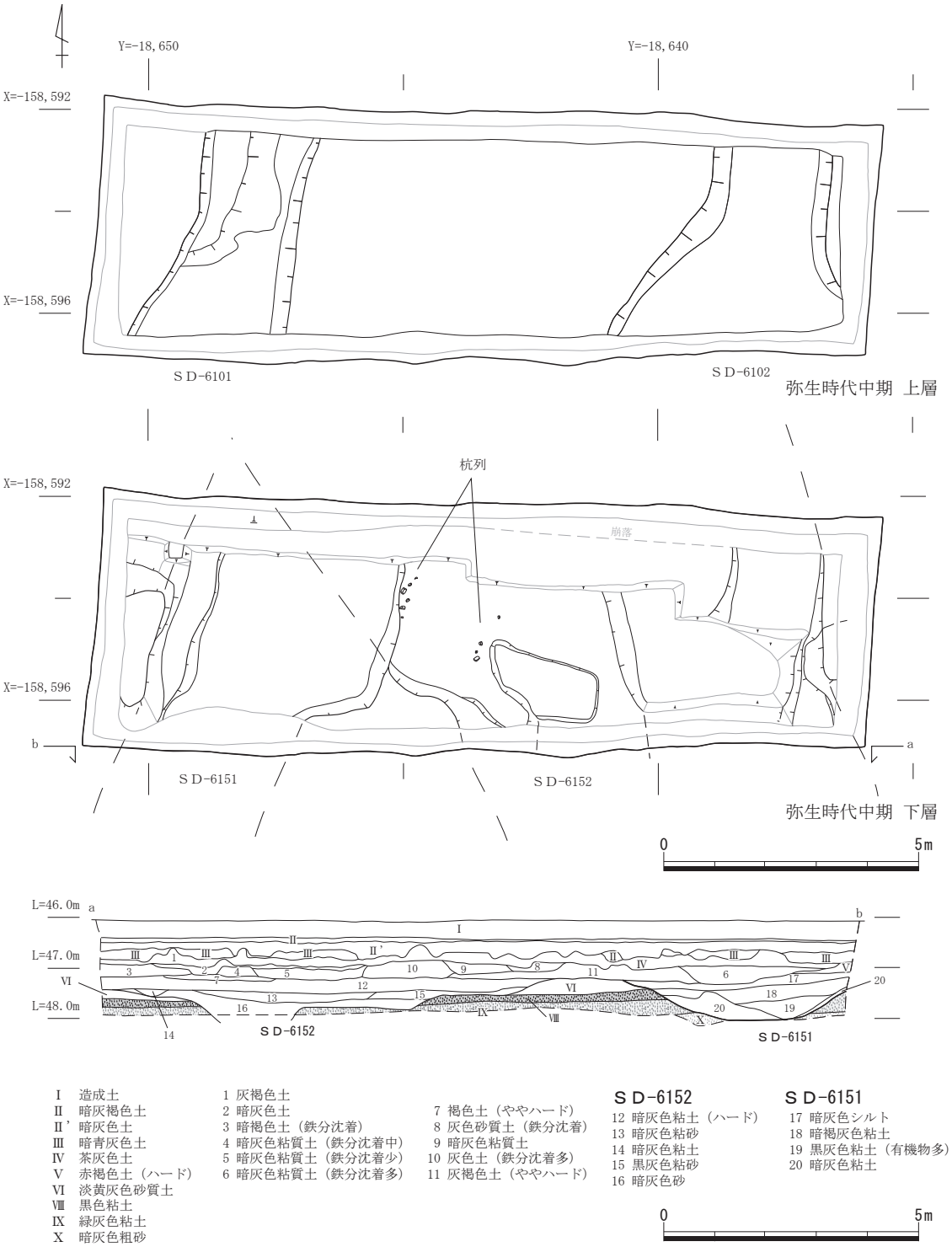
ＳＲ-5152　第５トレンチ中央部で検出した北北西－南南東方向の弥生時代中期の河跡で、幅3.8ｍ、深さ1.9ｍを測る。南半のみ調査した。第５トレンチの全ての弥生時代遺構に切られることから、最も早く埋没した遺構である。肩に鍬で掘削した際の痕跡と思われる単位を確認しており、人工的な溝の可能性も考えられる。主にラミナがみられる粗砂で埋没していた。また、検出高-0.8ｍでオーバーハングしており、かつ掘削時も激しい湧水があったことから、当時は相当の流水があったと推定できる。

中・近世

第５トレンチでは南北方向の小溝を６条検出した。幅0.3～0.8ｍ、深さ0.2ｍである。遺物は弥生土器、羽釜、近世の土師皿等の小片が出土している。また、第６トレンチでは南北方向の小溝を18条検出した。幅0.3～0.7ｍ、深さ0.1ｍである。

第６トレンチ

ＳＤ-6101　第６トレンチ西で検出したほぼ南北方向の大溝である。幅4.0ｍ、深さ0.3ｍを測る。鉄分を多く含む硬い赤褐色土（第Ⅴ層）に掘り込まれた大溝で、後述するＳＸ-6101の最終堆積の可能性がある。



第９図　第６トレンチ平面図・南壁断面図（Ｓ＝1/125）

ＳＤ-6102　第６トレンチ東で検出したほぼ南北方向の大溝である。幅2.4～5.0ｍ、深さ0.5ｍを測る。ＳＤ-6101と同様に鉄分を多く含む硬い赤褐色土（第Ｖ層）に掘り込まれた大溝で、後述するＳＸ-6101の最終堆積の可能性がある。

ＳＸ-6101　第６トレンチ全体で検出した落ち込み状の堆積である。第Ｖ層の下に暗灰色粘土が堆積していた。埋土の観察から、ほぼ水流のない沼地のような状態で堆積が進み、最上層

では鉄分が沈着して硬化したものと考えられる。ＳＸ－6101 の下層からは用途不明木製品（第 10 図－４）が出土した。横槌に似た形状だが､持ち手と思われる箇所が丸く加工されておらず、断面は四角いままで、通常の横槌と異なる。

ＳＤ－6151　第６トレンチ西半で検出した北北東－南南西方向の弥生時代中期中葉（大和第Ⅲ様式）の大溝で､環濠と考えられる。ＳＤ－6152 に切られる。幅 4.4ｍ、深さ 0.7ｍを測る。埋土は上層：黒灰色粗砂、下層：暗灰色粘土（ややシルト質、有機物を多く含む）の２層に大別することができることから、機能時はほぼ流水がなかったようだが、埋没直前で流水があったと考えられる。また､ＳＸ－6101 と同様に､横槌に似た形状の用途不明木製品（第 10 図－５）が出土した。

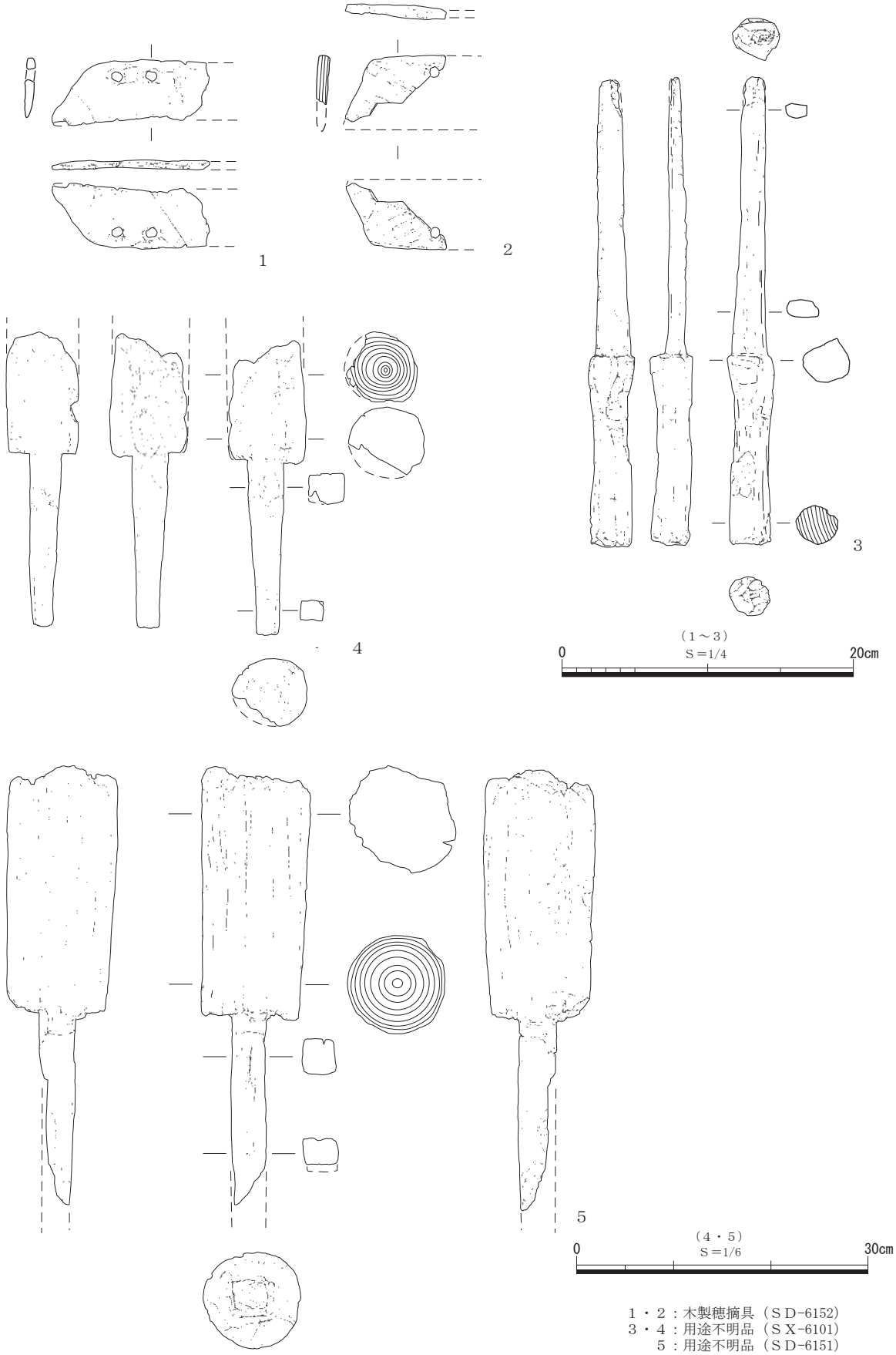
ＳＤ－6152　第６トレンチ中央から東半にかけて検出した北西－南東方向の弥生時代中期中葉（大和第Ⅲ様式）の大溝で、ＳＤ－6151 を切る。幅 7.3ｍ前後、深さ 0.7ｍ以上を測る。第 115 次調査で検出されたＳＤ－101C の延長に位置し、時期もほぼ同じと考えられることから、同一遺構の可能性が高い。埋土は粘土やシルトであり、流水の少ない溝だったと推定される。また、ＳＤ－6151 とＳＤ－6152 が切り合う地点で、ＳＤ－6152 の流れに直交するように 0.1～0.4ｍの間隔で杭が２列 10 本打設されていた。杭は、太さ 0.1ｍ程度、長さ 0.3～0.6ｍと、サイズはまちまちであるが、先端を鋭く削りだす加工が施されている。この杭列の性格は不明である。遺物については木製穂摘具が２点出土した。いずれも完形品ではない。木製穂摘具は第 13・115 次調査でも環濠から出土している。

３．まとめ

第 124 次調査では、弥生時代中期頃の大溝８条、河跡１条、落ち込み１基、中・近世小溝群を検出した。

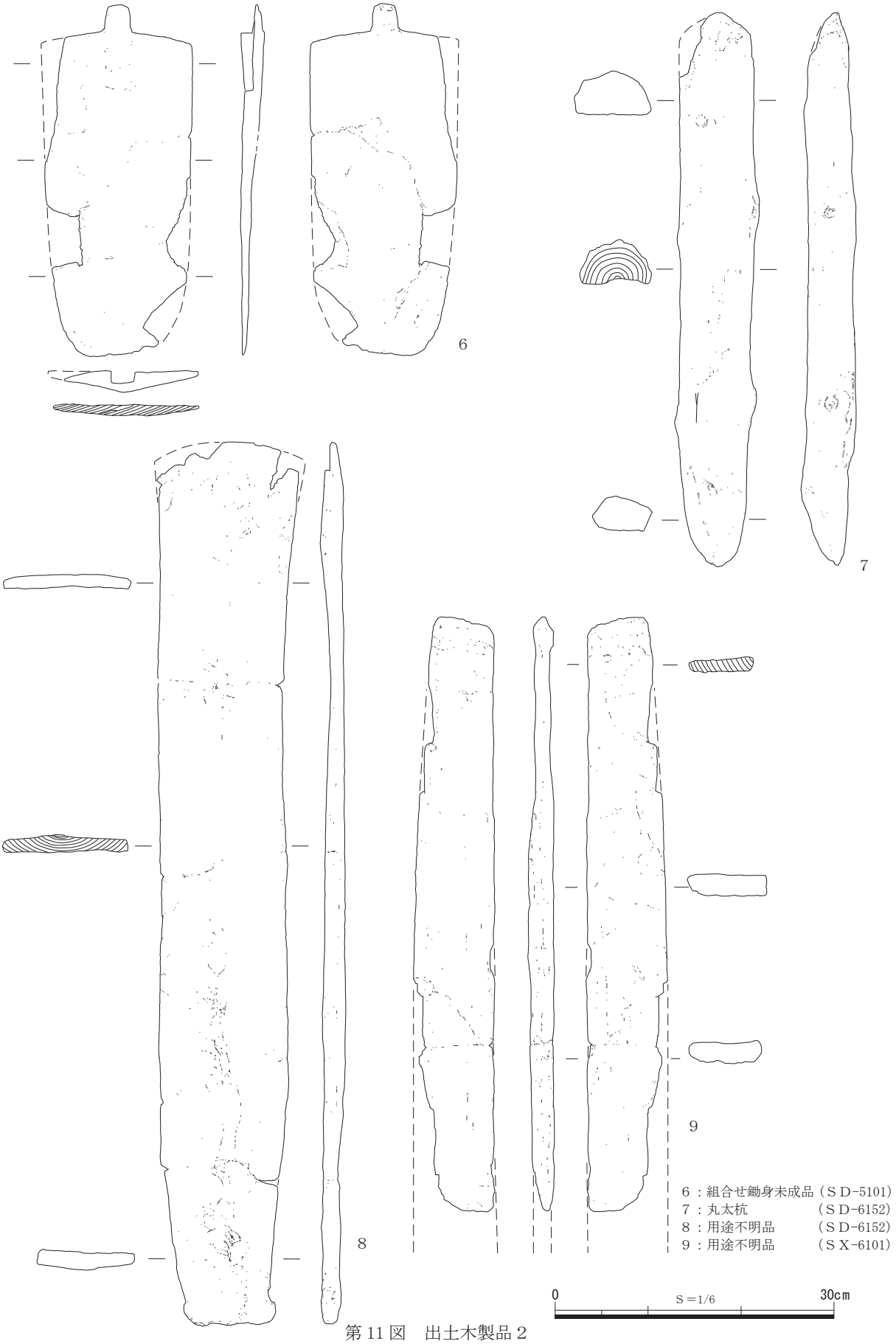
第５トレンチでは、環濠に取り付く北西－南東方向の溝を検出した。この溝は、唐古・鍵ムラの南から環濠に入った水を北西に流す機能があったと考えられる。近隣の調査では、第 119 次調査で検出されたＳＲ－1101 が同様の性格と想定されている。ただし、ＳＲ－1101 は自然の河跡であったが、第 124 次調査の成果を積極的に解釈すると、３条の人工的な溝が掘削されていた可能性が想定でき、環濠を自然河川に取り付かせるだけではなく、環濠と環濠、または環濠と自然河川をバイパスする溝が存在したといえるだろう（第 13 図)。

第６トレンチでは、ＳＤ－6152 から木製品が出土した。第 115 次調査のＳＤ－101B からも木製品が多数出土しており、大環濠から外へ４条程度までの環濠には木製品が出土することが明らかになった。また、ＳＤ－6151・6152 の埋没後は、第６トレンチ周辺は湿地帯のような状況であったことが確認できたことは、唐古・鍵遺跡北西端エリアの土地利用を考える上で重要な知見である。

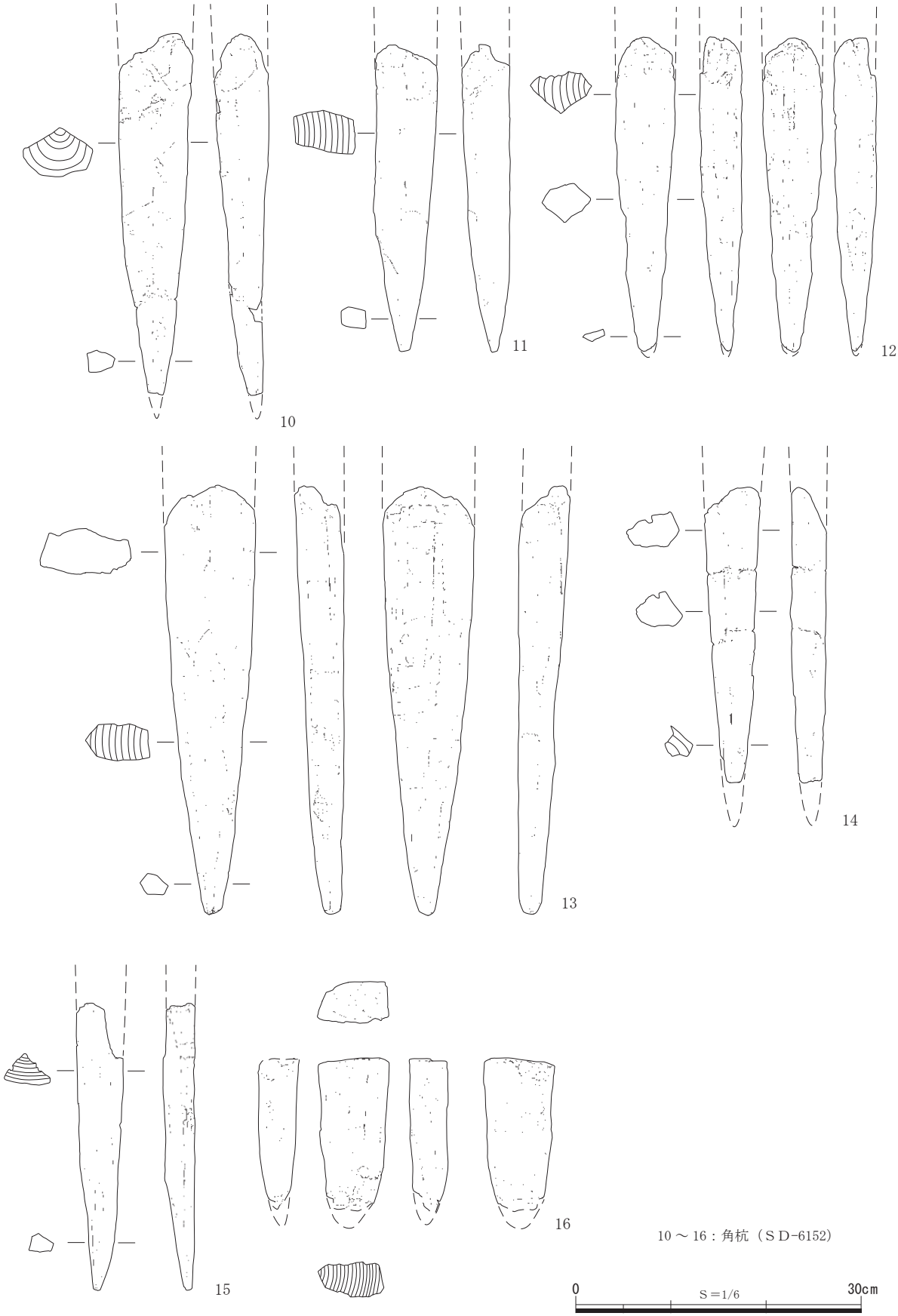


1・2：木製穂摘具（SD-6152）
3・4：用途不明品（SX-6101）
5：用途不明品（SD-6151）

第10図　出土木製品1


6
7
8
9
6：組合せ鋤身未成品（ＳＤ-5101）
7：丸太杭　（ＳＤ-6152）
8：用途不明品　（ＳＤ-6152）
9：用途不明品　（ＳＸ-6101）
0
S＝1/6
30cm

第 11 図　出土木製品 2

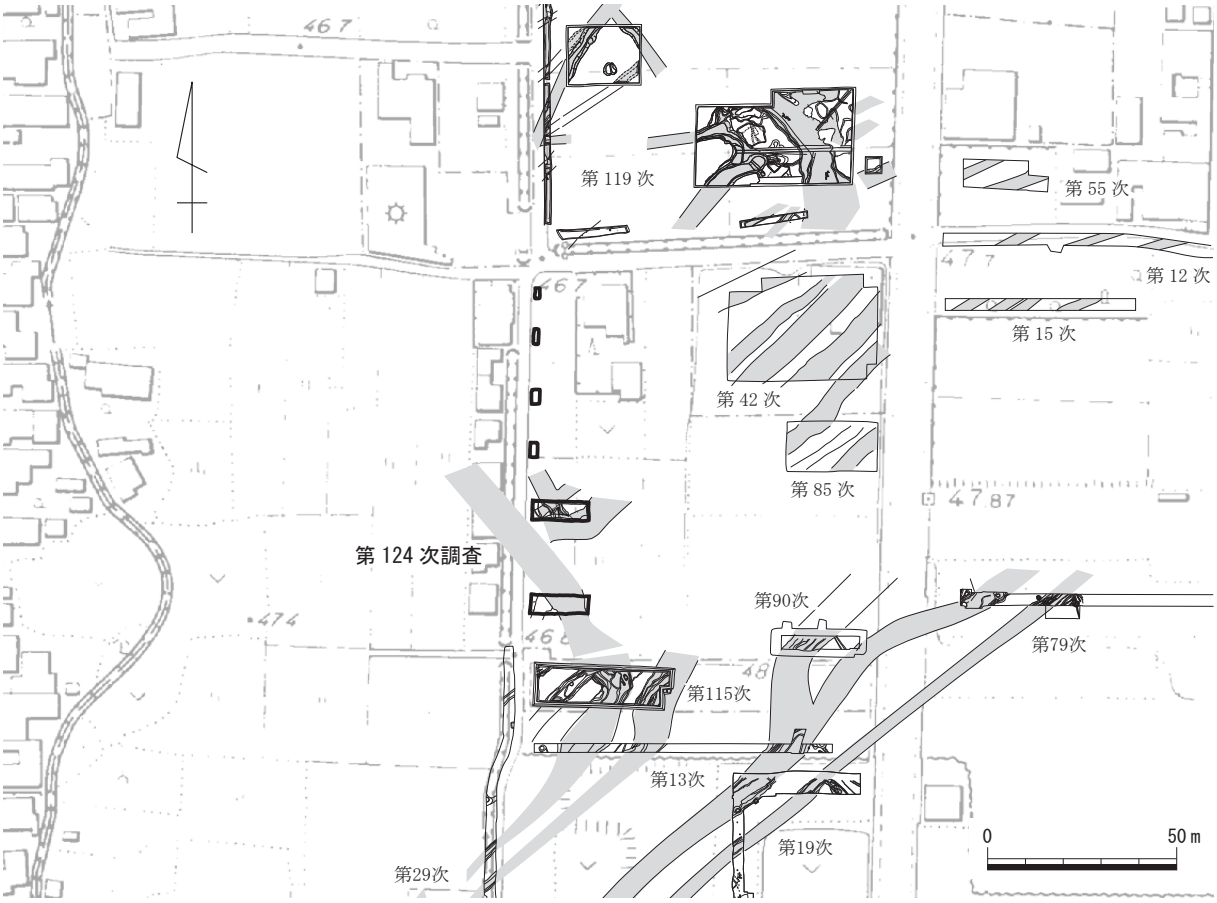


第 12 図　出土木製品３

第９表　木製品一覧表

図版番号	製品名	備考	樹種	全長	幅	厚さ	遺構名	層位	処理方法
第10図-１	木製穂摘具		ヤマグワ	4.5	(10.8)	0.6	ＳＤ-6152	第１層	令和元年度 PEG処理済
第10図-２	木製穂摘具		コナラ属 クヌギ節	4.5	(6.9)	0.8	ＳＤ-6152	第１層	令和元年度 PEG処理済
第10図-３	用途不明品	刀子状	スギ	32.3	3.2	2.7	ＳＸ-6101	第１層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第10図-４	用途不明品	砧状の木製品	ヤマザクラ	(34.3)	8.8	8.1	ＳＸ-6101	第１層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第10図-５	用途不明品	砧状の木製品 柄は３㎝角	タブノキ	(45.3)	10.3	11.4	ＳＤ-6151	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第11図-６	組合せ鋤身 未成品		コナラ属 アカガシ亜属	38.0	15.7	2.7	ＳＤ-5101	第４層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第11図-７	杭	半裁丸太杭	コナラ属 クヌギ節	59.7	8.5	5.3	ＳＤ-6152	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第11図-８	用途不明品		ヤマグワ	95.1	14.7	2.2	ＳＤ-6152	第２層	令和元年度 PEG処理済
第11図-９	用途不明品		ツブラジイ	(64.2)	8.7	2.7	ＳＸ-6101	第１層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第12図-10	杭	角杭状	ムクノキ	(38.1)	7.6	5.6	ＳＤ-6152	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第12図-11	杭	角杭状	ムクノキ	(32.3)	6.4	5.0	ＳＤ-6152	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第12図-12	杭	角杭状	ムクノキ	(33.0)	6.2	4.5	ＳＤ-6152	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第12図-13	杭	角杭状	ムクノキ	(45.3)	9.6	5.3	ＳＤ-6152	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第12図-14	杭	角杭状	ムクノキ	(31.1)	5.7	3.6	ＳＤ-6152	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第12図-15	杭	角杭状	ムクノキ	(30.2)	4.9	3.3	ＳＤ-6152	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第12図-16	杭	角杭状	ムクノキ	(16.1)	7.5	4.2	ＳＤ-6152	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済

※法量はｃｍ、欠損は（）



第 13 図　唐古・鍵遺跡北西端調査成果（Ｓ＝1/2,000）

写真 1-1　環濠から出土した弥生時代中期の小型土器（左）と後期の長頸壷（右）

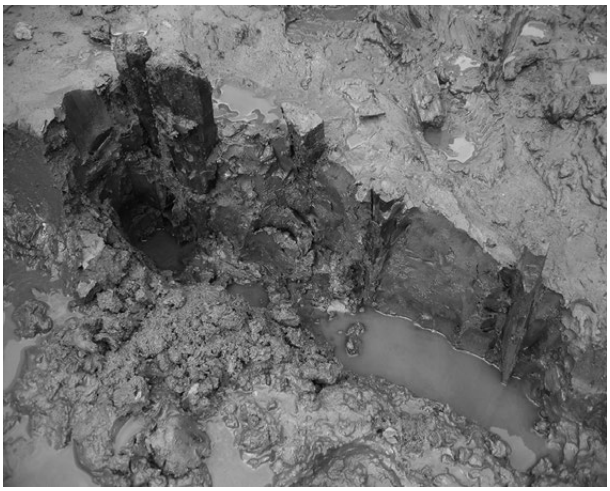


写真 1-2　ＳＤ-6152 杭列出土状況（西から）

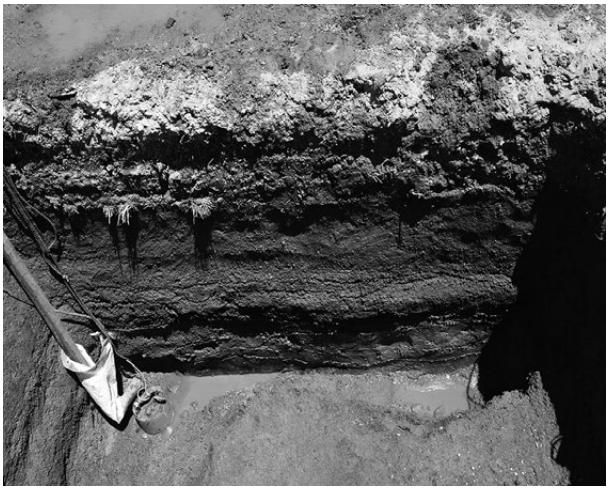


写真 1-3　第１トレンチ東壁断面（西から）

写真 1-4　第３トレンチ全景（南から）

写真 1-5　第５トレンチ弥生時代調査状況（東から）

写真 1-6　第６トレンチ弥生時代調査状況（東から）

２．唐古・鍵遺跡　第 125・126 次調査

１．既調査の概要

唐古･鍵遺跡は、田原本町北部に所在する弥生～古墳時代前期を中心とする集落遺跡である。第 125・126 次調査は、遺跡の南西部において個人住宅の建築に伴い発掘調査を実施した。近隣では下水道工事に伴う小規模な調査（第 96 次調査・第 104 次調査）をおこない、土坑や区画溝・環濠などを検出し、居住域から環濠帯部分でることが判明している。また、第 125 次調査地は唐古南氏居館跡推定地にも該当し、中世遺構が拡がることも推定された。

第 125 次調査は個人住宅の建物の北半部分で東西 14.6 ×南北 2.2 ｍの調査区を設定した。また、第 126 次調査は東西６×南北１ｍの調査区を設定した。

２．第 125 次調査の成果

（１）層序

Ⅰ -a：茶灰色土（砂混じり）〔盛土、検出標高 48.8 ｍ、以下数値のみ記す〕、Ⅰ -b：黒灰色土（淡褐色土ブロック）〔48.7 ｍ〕、Ⅱ：淡黄褐色土〔48.4 ｍ〕、Ⅲ：暗茶灰色土〔48.2 ｍ〕、Ⅳ：暗灰褐色粘質土〔47.9 ｍ〕、Ⅴ：黄色微砂〔47.7 ｍ〕、Ⅵ：暗灰褐色粘質土〔47.6 ｍ〕、Ⅶ：暗灰黄色粘質土〔47.5 ｍ〕、Ⅷ：淡黄灰色土〔47.3 ｍ〕、Ⅸ：淡緑黄色シルト〔47.1 ｍ〕、Ⅹ：淡緑灰色シルト〔47.0 ｍ〕

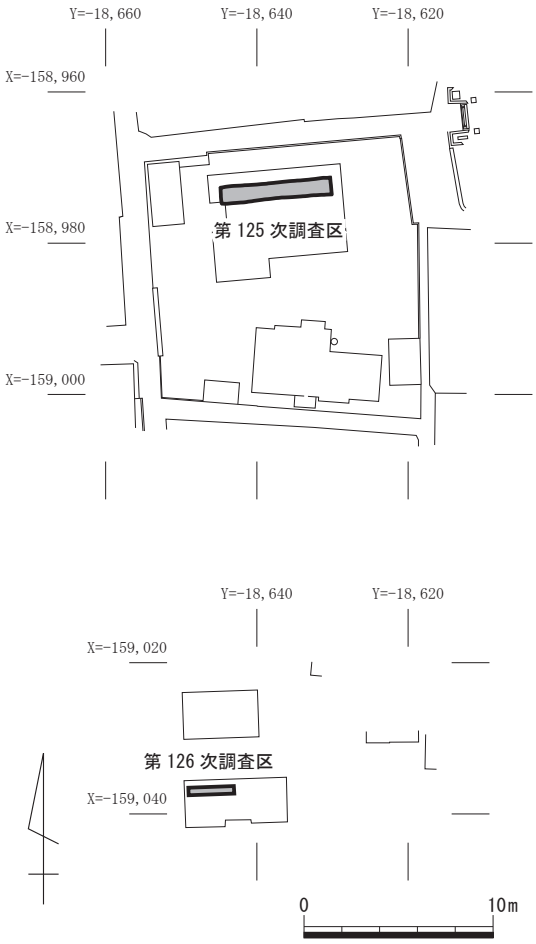
第Ⅰ -a ～Ⅲ層を重機で除去し、以下を人力で掘削した。第Ⅰ -a 層は造成土、第Ⅳ層上面が中世遺構検出面、第Ⅴ層上面が弥生時代中～後期遺構検出面、第Ⅷ層以下は地山である。

（２）遺構と遺物

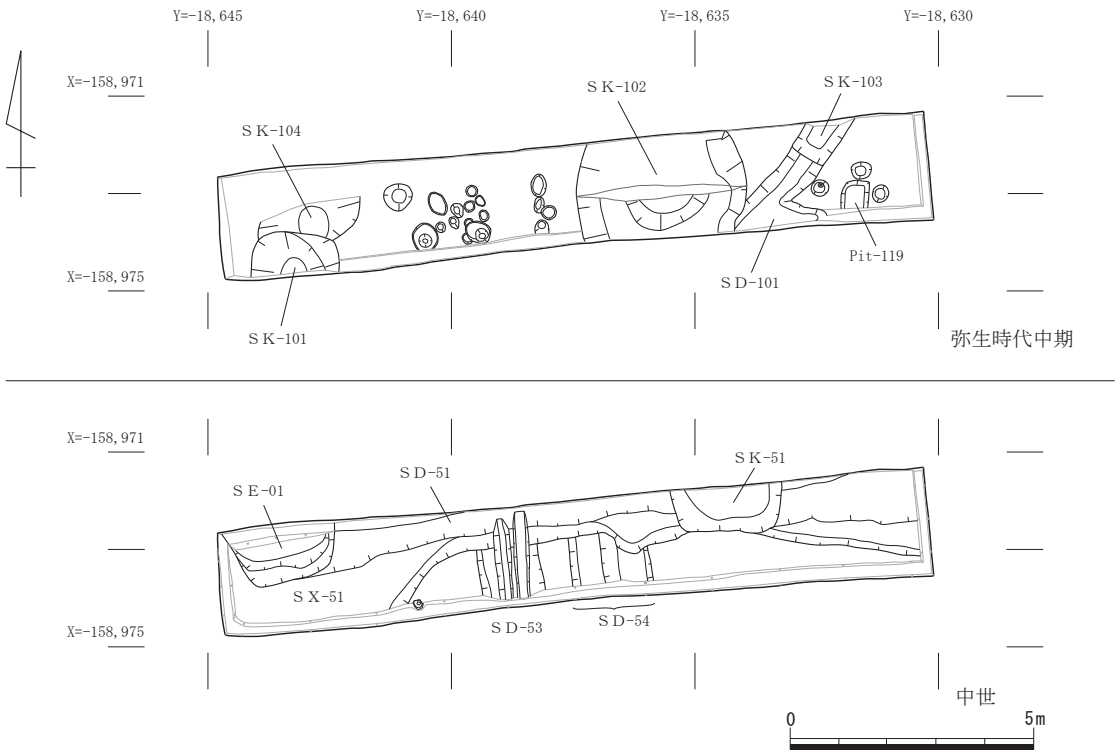
弥生時代中期

ＳＫ -101　調査区南西部で北半を検出した直径 2.0 ｍ、深さ 0.8 ｍのほぼ円形の土坑である。後述するＳＫ -104 に切られている。出土遺物から、時期は大和第Ⅳ -1 様式である。

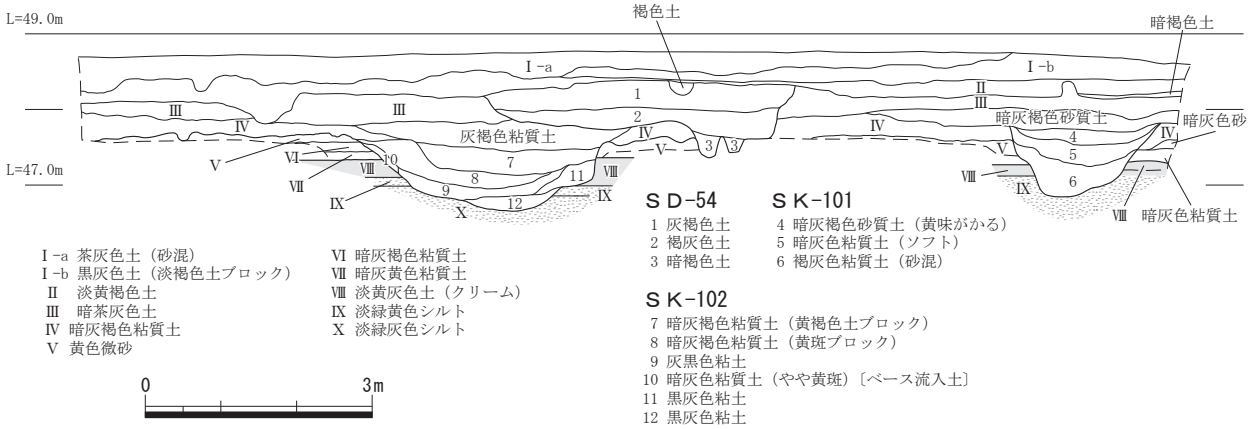
ＳＫ -102　調査区中央で検出した直径 3.6 ｍ、深さ 1.1 ｍの大型の円形土坑で、井戸と考えられる。中層から半完形の土器やサヌカイト製の



第 14 図　調査区位置図
（上：第 125 次、下：第 126 次、S ＝1/1, 000）



第 15 図　第 125 次調査区平面図（Ｓ＝1/150）



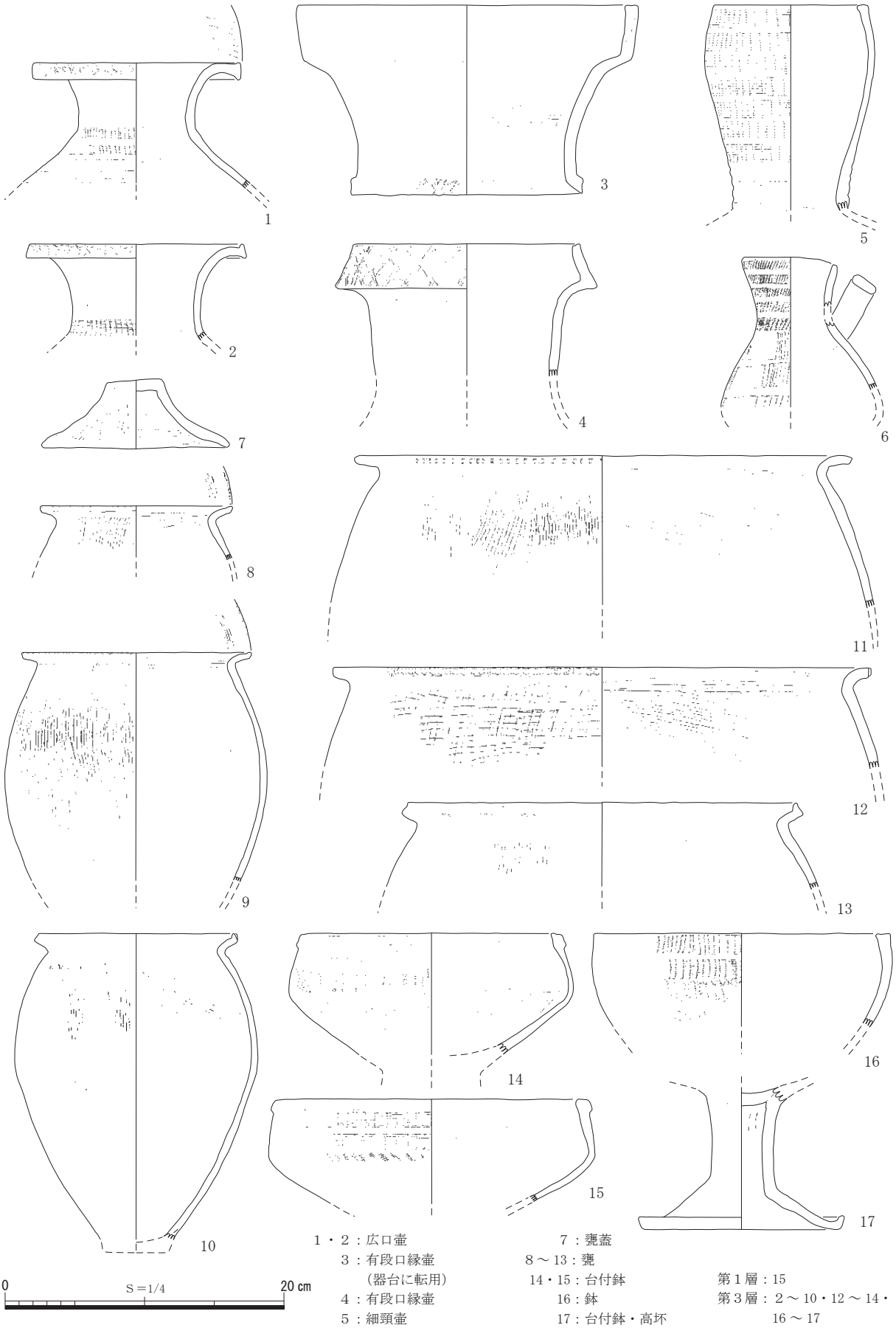
第 16 図　第 125 次調査区南壁断面図（Ｓ＝1/100）

局部磨製の扁平両刃石斧、磨石が出土した。また、最下層にはおがくず状の有機物が堆積していたが、どのような成因のものかは判断しがたい。形状から井戸の可能性がある。時期は大和第Ⅲ-3 様式である。

ＳＫ-103　調査区北東部で検出した長軸 1.2 m以上、短軸 0.7 m、深さ 0.5 mの長方形の土坑である。土坑の主軸は北東－南西で、ほぼＳＤ-101 と軸を合わすが、ＳＤ-101 を切っている。堆積土は暗灰色粘質土で炭を含む。時期は大和第Ⅲ-2 様式頃と推定される。

ＳＫ-104　調査区西部で検出した長軸 2.3 m以上、短軸 1.2 m以上、深さ 0.7 mの楕円形土坑である。北側をＳＤ-51 に、南側をＳＫ-101 に切られる。土坑下層上位から完形の広口壷が１点出土しており、井戸の可能性がある。時期は大和第Ⅳ-1 様式である。

柱穴群　調査区東部で４基、ＳＫ-102 西側で 17 基の柱穴群を検出した。隅丸方形の Pit-



1・2：広口壷
3：有段口縁壷（器台に転用）
4：有段口縁壷
5：細頸壷
6：水差形土器（生駒山西麓産）
7：甕蓋
8～13：甕
14・15：台付鉢
16：鉢
17：台付鉢・高坏

第1層：15
第3層：2～10・12～14・16～17
第5層：1・11

第17図　唐古・鍵遺跡 第125次調査　ＳＫ-102出土土器

119 を除いて、全て円形～楕円形である。直径は 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mである。

ＳＤ -101　　調査区中央やや東寄りで検出した、幅 0.7 m、深さ 0.2 mの溝である。北東－南西方向の溝だが、調査区南部で北西－南東方向に屈曲する。ＳＫ -102･103 に切られている。出土遺物は弥生土器片 36 片のみである。時期は大和第Ⅲ様式である。

中世

ＳＫ -51　　調査区東部で南半を検出した一辺 5.0 m、深さ 0.9 mの 15 世紀の隅丸方形の土坑である。ＳＤ -51 を切る。

ＳＤ -51　　調査区北半で検出した幅 0.8 m以上、深さ 0.6 m以上の東西方向の溝で、大半は調査区外となる。15 世紀の唐古南氏居館跡に関連する大溝と考えられる。

ＳＤ -53・54　　調査区中央で検出した南北方向の溝である。上面はＳＤ -53・54 を覆うような幅４m、深さ 0.4 mほどの浅くて幅広の溝となる。下面では、ＳＤ -53・54 として幅 0.3 mの小溝を２条検出した。ＳＤ -51 に切られるが、ほぼ同時期の 15 世紀の遺構である。

ＳＥ -01　　調査区北西隅で南半を検出した直径 2.3 m、深さ 1.5 m以上の井戸である。15 世紀頃の土器や瓦が出土した。

近世

ＳＫ -01　　ＳＥ -01 埋没後に再掘削された 18 世紀の土坑である。調査時は平面で検出できず、北壁断面で確認した。径 0.8 m以上、深さ 0.8 mである。

３．第 126 次調査の成果

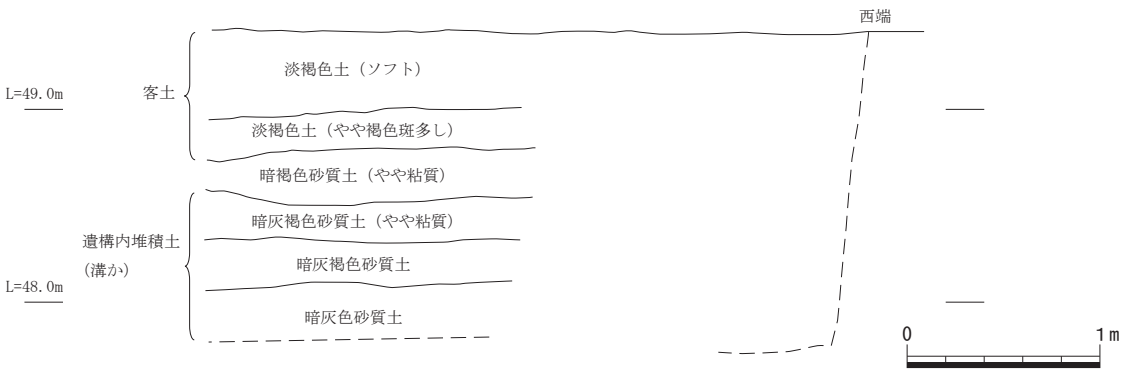
ＳＤ -101　　調査区中央部で検出した大溝である。湧水が激しく、断面の確認にとどまったため、平面的な拡がりは不明だが、その位置から唐古・鍵遺跡南西の環濠と考えられる。出土土器は５小片で、弥生時代後期から庄内期のものであった。

４．まとめ

第 125 次調査では、土坑（井戸）や柱穴を検出したことから、「西地区」南部の弥生時代中期の様相が明らかになった。出土土器では、弥生時代前期から庄内期までのものがあり、継続的に居住域であったことを示している。

一方、第 126 次調査では、軟弱地盤で湧水が激しく、満足な調査ができなかったが、状況から弥生時代の集落縁辺（環濠帯）であることが判明した。

中世では、第 125 次調査で大溝など中世居館を示す遺構を確認しており、当期の遺構が大規模な範囲に拡がっていることが判明した。



第 18 図　第 126 次調査区南壁断面図（Ｓ＝1/40）

写真 2-1　第 125 次調査　弥生時代調査区全景（東から）

写真 2-2　第 125 次調査　ＳＫ-104 土器出土状況（東から）

写真 2-3　第 125 次調査　ＳＫ-102 断面（南から）

写真 2-4　第 126 次調査　調査区南壁断面（北から）

３．保津・宮古遺跡　第 50 次調査

１．既調査の概要

保津･宮古遺跡は、奈良盆地の中央、標高 47 m前後の沖積地に立地する。これまでの調査で、縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。

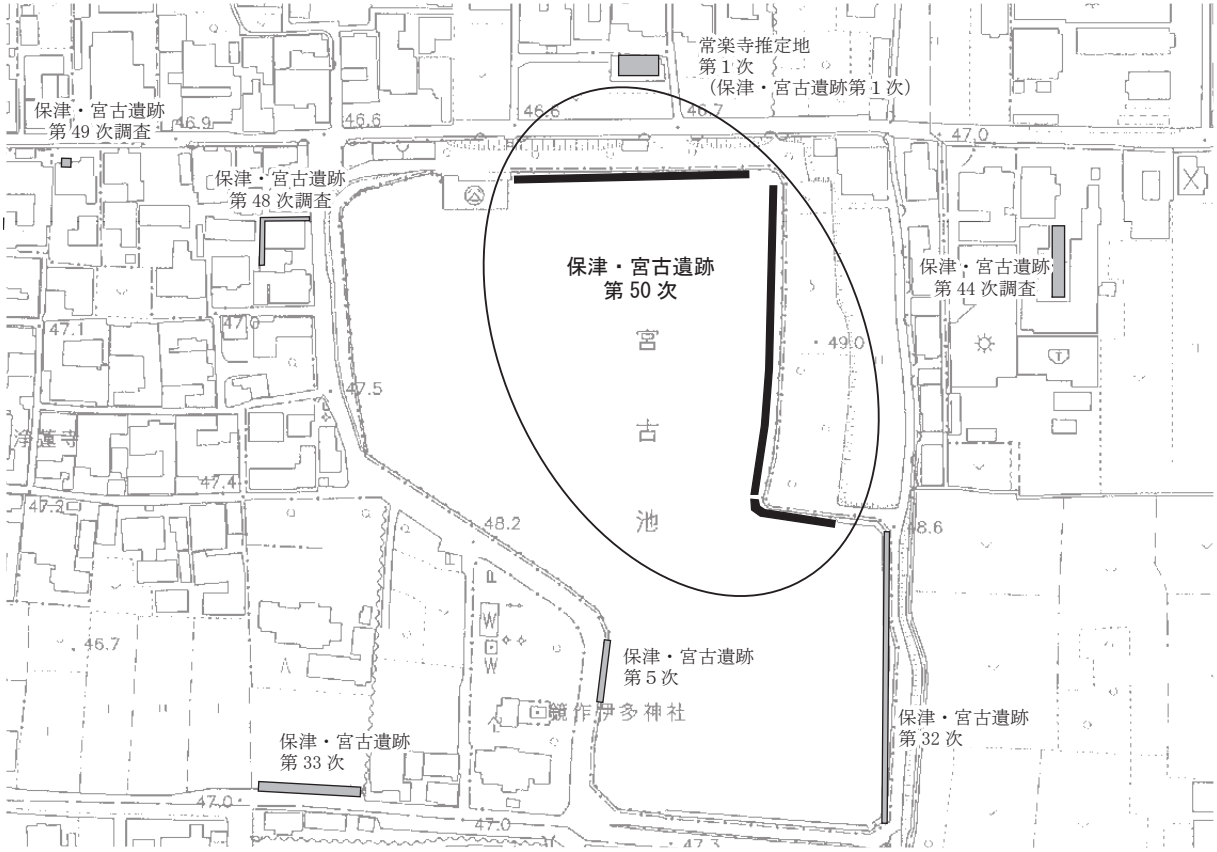
保津・宮古遺跡の中央東には、農業用のため池「宮古池」がある。この池は、近世に築造され、明治期に拡張されたという経緯をもつ。池の字名は「大門」であり、それ以外にも周囲に寺院関連の地名が残ることから、池周辺が中世に存在した「常楽寺」の旧境内に相当する可能性が考えられている。なお、宮古集会所には平安時代の「薬師如来坐像」（重要文化財）が安置されており、かつてこの地に存在した寺院に由来するものとみられる。

今回、宮古池北半の護岸が老朽化しているため、改修工事がおこなわれることとなった。これに先立ち、掘削の影響を受ける部分を発掘調査で対応した。

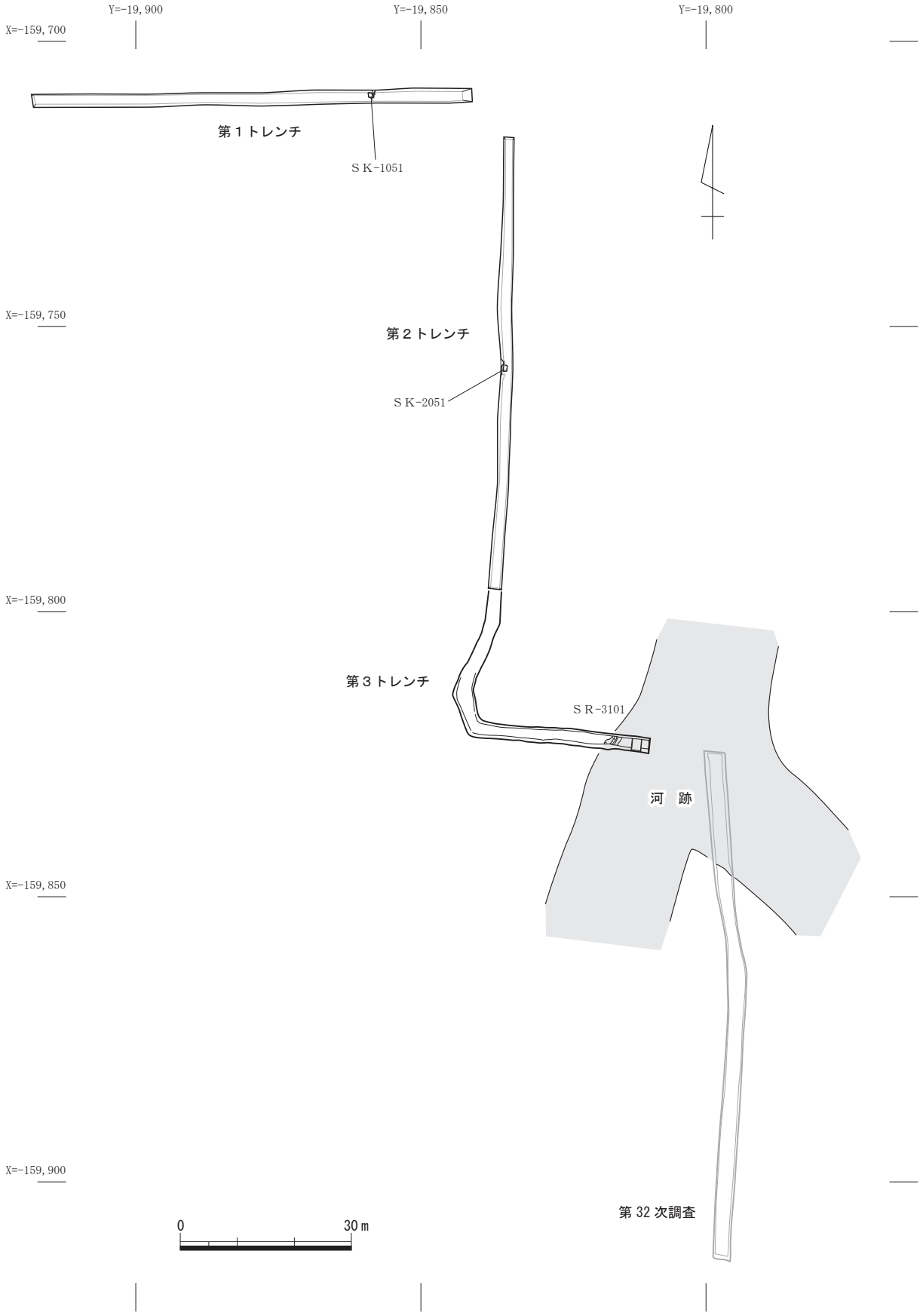
２．調査の成果

（１）層序

調査地の現状はため池である。池内は過去の土取りにより本来の遺構面から大きく削平され、また池内にはヘドロ化した泥土が厚さ 0.4 m前後堆積していた。調査区の護岸側については池



第 19 図　調査地位置図（S=1/2,500）



第 20 図　調査区配置図（Ｓ＝1/1,000）

堤防盛土の関係でヘドロの影響を受けずに層序を確認しており、ここでは第３トレンチ北壁での層序を示す。

Ⅰ:褐色土（ブロック状）〔検出標高 46.1 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ:黄褐色粗砂〔45.9 m〕、Ⅲ:暗青灰色砂質土〔45.85 m〕、Ⅳ:暗灰色微砂〔45.65 m〕、Ⅴ:淡青灰色微砂〔45.6 m〕、Ⅵ:淡灰色細砂〔45.4 m〕、Ⅶ：淡青灰色粘質土〔45.25 m〕、Ⅷ：青灰色粘土〔45.0 m〕

第Ⅰ層は池の堤防盛土とみられるブロック土、第Ⅱ層は堤防築造時に形成された可能性がある薄い粗砂層である。第Ⅲ層以下は弥生時代よりも古い堆積とみられる。古墳時代～中世の遺構が第Ⅲ層上面まで残存しているが、西側隣接地での遺構検出面が 46.5 m前後であることと比較すると、少なくとも 0.6 m以上削られていると考えられる。また、面的な遺構検出はヘドロ除去後の標高 45.1 m前後でおこなった。このため、深い遺構以外は削平されたものと考えられる。

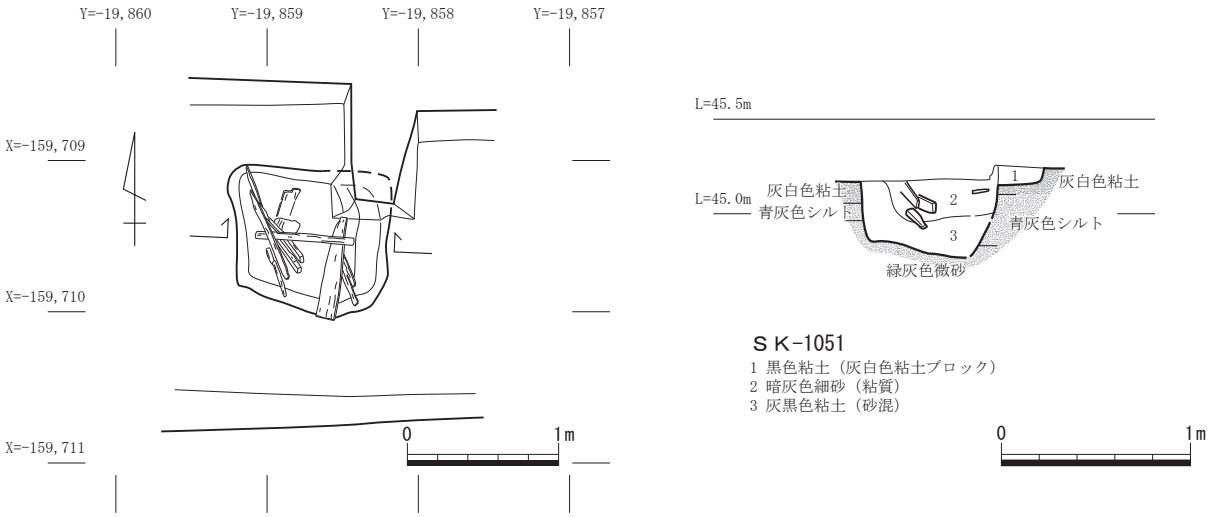
（２）遺構と遺物

古墳時代

ＳＲ -3101　第３トレンチ東側で検出した河跡状の遺構である。南西－北西方向の西肩および幅８m分を検出したが､調査区外に拡がるため幅は明らかでない。深さは 1.5 m以上を測る。遺物が出土していないため時期は明らかでないが、南東に隣接する第 32 次調査で同一とみられる河跡を確認しており、その想定時期が古墳時代であることから、本遺構も古墳時代のものと考えられる。

中・近世

ＳＫ -1051　第１トレンチ中央で検出した方形の土坑である。南北 0.9 m、東西１m、検出面からの深さ 0.5 mを測る。少量の瓦器片、多数の木材が出土した。木製品は矢板状のもの、両端を断面方形に加工した丸棒などがあり、井戸枠を構成していた部材とみられるが、本来の位置を留めていない。上半を大幅に削平された井戸とみられる。出土した瓦器片から、鎌倉時代頃の遺構と考えられる。



第 21 図　第１トレンチ　ＳＫ-1051 平面図（左：Ｓ＝1/50）及び断面図（右：Ｓ＝1/40）

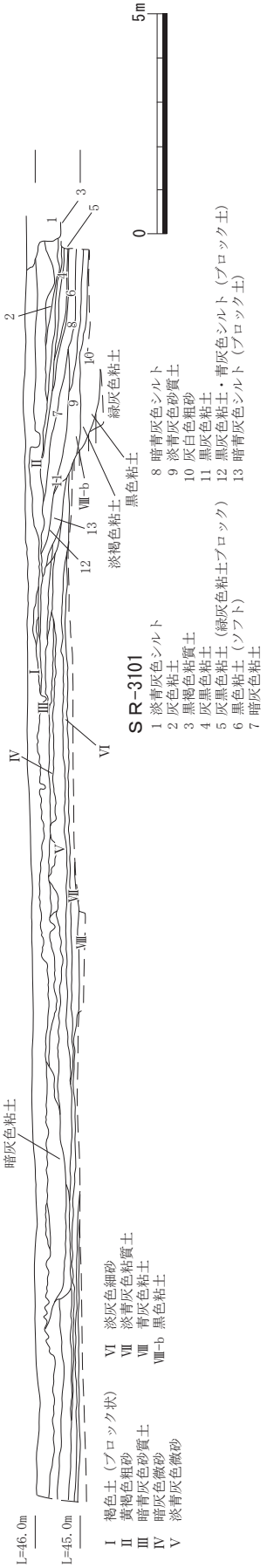
ＳＫ-1051からは、多数の木製品が出土した（第23･24図）。１は方形曲物（折敷）底板で、各辺の中央に側面の板を固定するための樺皮紐がつく。また、縁から４ｍｍ付近に側板の痕跡とみられる幅４ｍｍの変色部位がみられる。３は矢板状の板材で､上面に打撃を受けたとみられる潰れがみられる。６･７は形状が類似する用途不明木製品で、芯を外した角材から棒状に削り出しているとみられる。両端は一段削って断面方形状に加工しているが、６の一端は断面五角形状となっている。これらの木材の多くは本来井戸枠の構成部材であった可能性がある。

ＳＫ-2051　第２トレンチ北半で検出した方形の土坑である。0.7ｍ、南北1.1ｍ、東西0.7ｍ、深さ0.2ｍを測る。遺物は平瓦片２点が出土したのみで詳細な時期は不明であるが、中世末～近世の遺構とみられる。

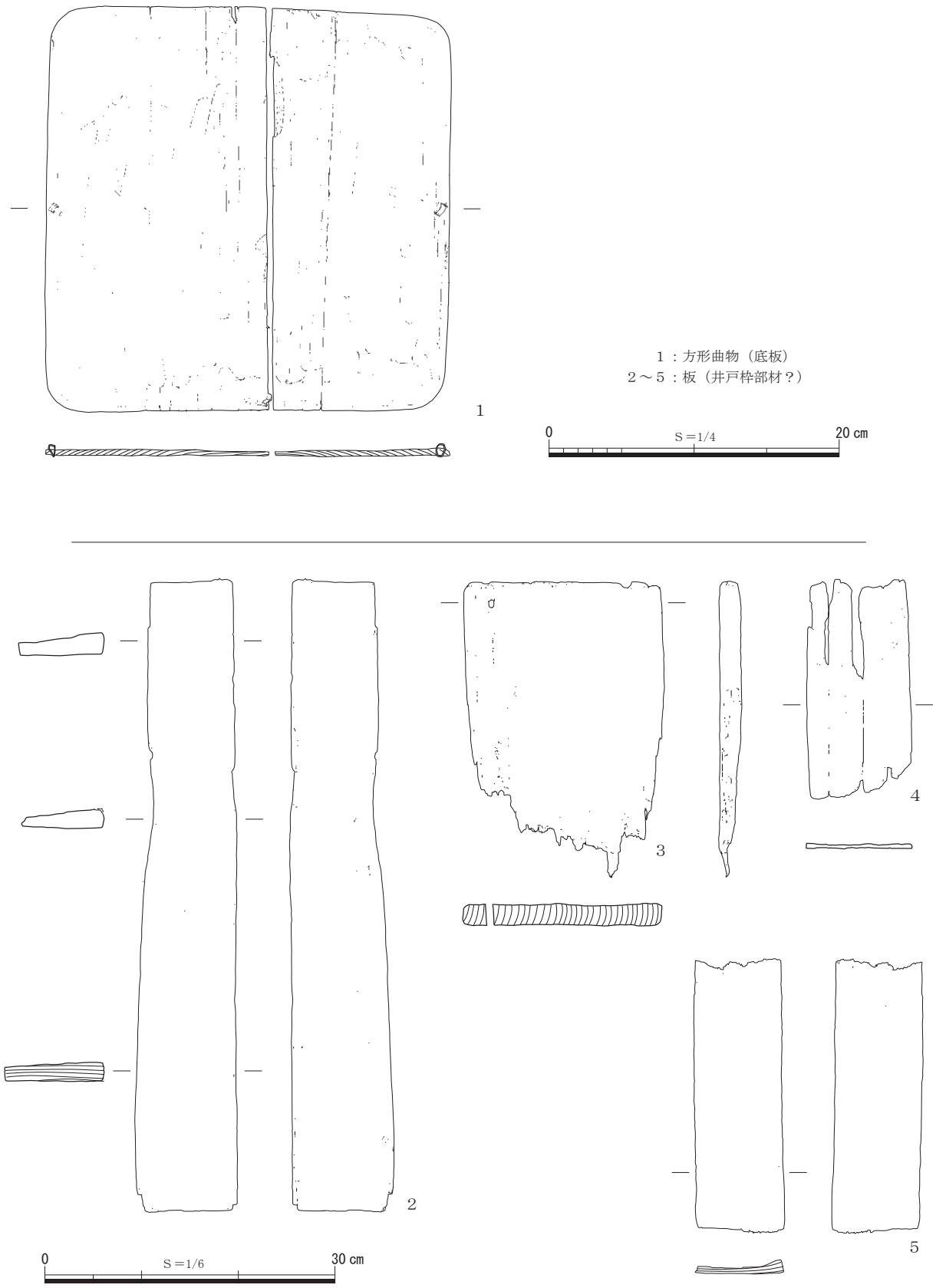
ＳＤ-3051　第３トレンチ西半の北壁で確認した溝状遺構である。幅６ｍ､深さ0.5ｍを測る。面的に遺構を確認できなかったため、溝の方向と時期は明らかでない。堆積土から、中世の遺構とみられる。

３．まとめ

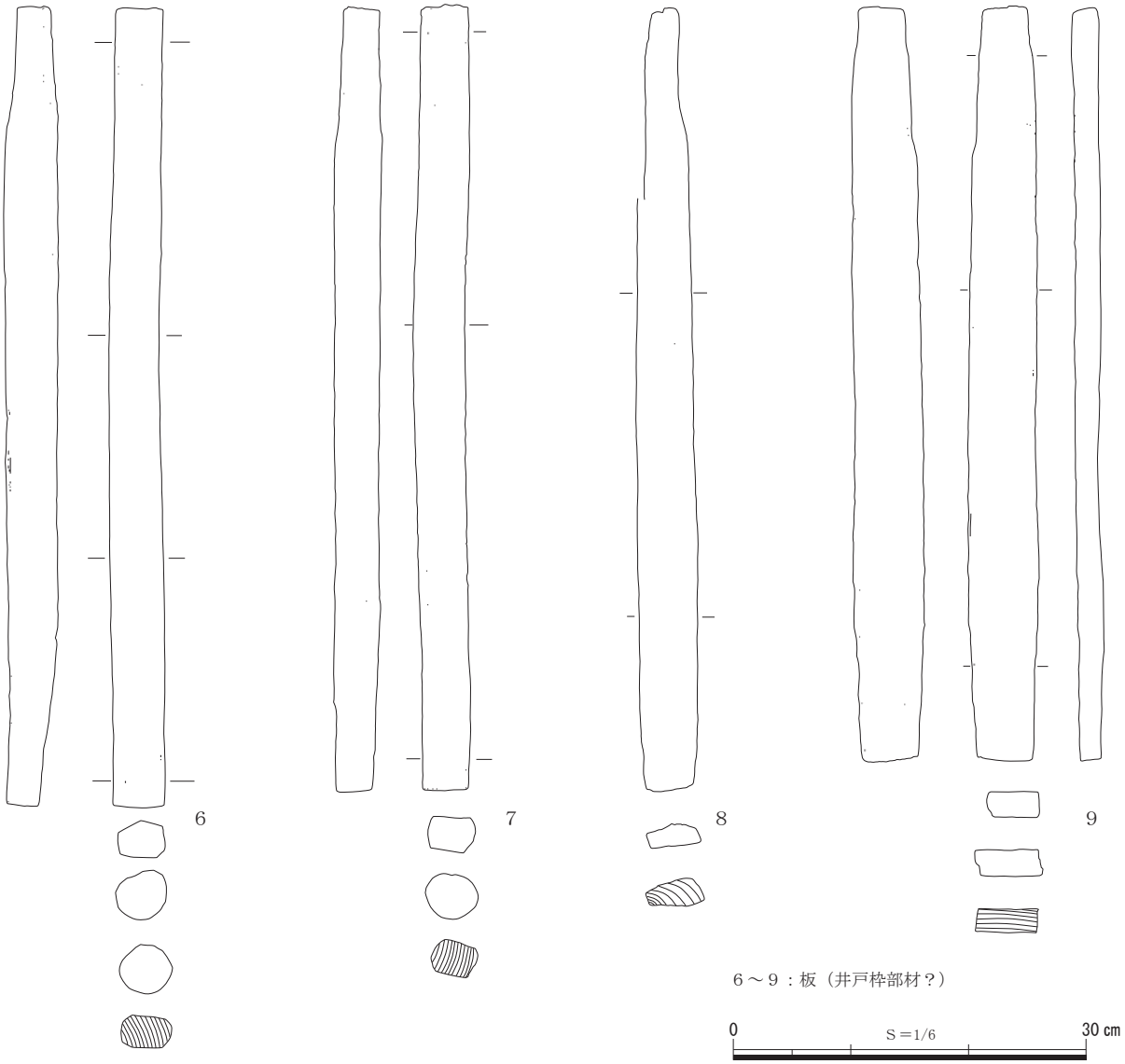
今回の調査では、鎌倉時代頃の井戸１基を検出したほかは顕著な遺構を確認することができなかった。これは、池を築造した際に本来の遺構面から大きく削平されたためと考えられる。なお、橿原考古学研究所が池南東部で実施した第32次調査では井戸５基などの中世遺構を確認していることと比較すると相対的に遺構密度が低くなっているようである。



第22図　第３トレンチ北壁断面図（Ｓ＝1/150）



第 23 図　ＳＫ-1051 出土木製品 1



第 24 図　ＳＫ-1051 出土木製品２

第 10 表　木製品一覧表

図版番号	製品名	備考	樹種	全長	幅	厚さ	遺構名	層位	処理方法
第23図-１	方形曲物	底板	ヒノキ	27.9	(27.9)	0.5	ＳＫ-1051	第３層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第23図-２	板	井戸枠部材？	ヒノキ	65.4	10.6	2.0	ＳＫ-1051	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第23図-３	板	井戸枠部材？	ヒノキ	(30.5)	20.9	2.2	ＳＫ-1051	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第23図-４	板	井戸枠部材？	コウヤマキ	(22.6)	(10.9)	0.5	ＳＫ-1051	第４層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第23図-５	板	井戸枠部材？	コウヤマキ	(28.3)	9.0	1.6	ＳＫ-1051	第３層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第24図-６	用途不明品	井戸枠部材？	ヒノキ	68.3	4.6	4.3	ＳＫ-1051	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第24図-７	用途不明品	井戸枠部材？	ヒノキ	67.0	4.5	3.8	ＳＫ-1051	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第24図-８	板	井戸枠部材？	コウヤマキ	66.6	4.7	2.2	ＳＫ-1051	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済
第24図-９	板	井戸枠部材？	ヒノキ	64.2	5.8	2.3	ＳＫ-1051	第２層	令和２年度 高級アルコール法処理済

※法量はｃｍ、欠損は（）

写真 3-1　第１トレンチ全景（東から）

写真 3-2　SK-1051 出土状況

写真 3-3　SK-2051 層序（南から）

写真 3-4　第３トレンチ全景（東から）

写真 3-5　第３トレンチ西半層序（南から）

写真 3-6　SR-3101 層序（南から）

４．保津・宮古遺跡　試掘調査（S-201802）・第 51 次調査

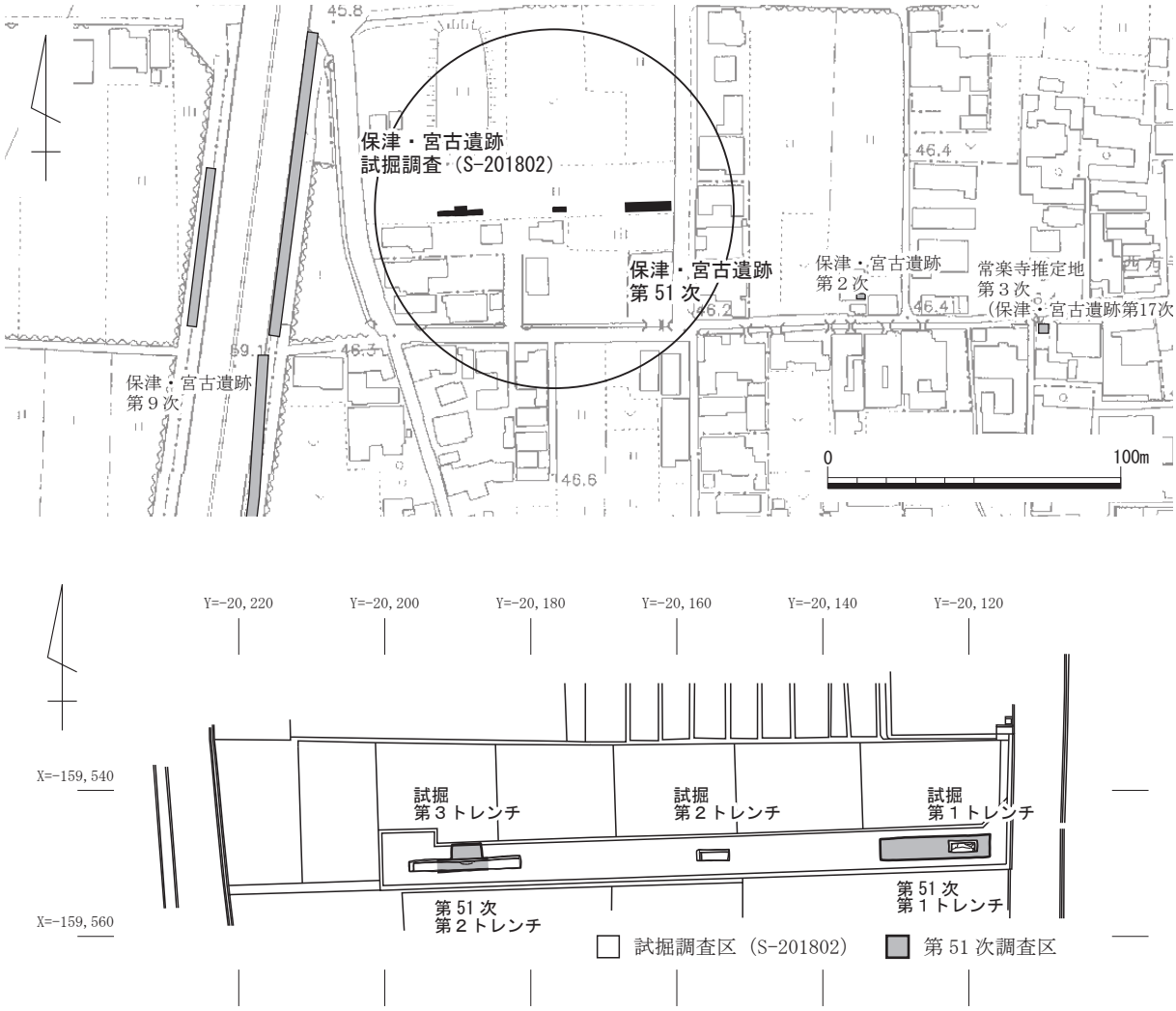
１．遺跡・既調査の概要

保津･宮古遺跡は、奈良盆地の中央、標高 47 m前後の沖積地に立地する。これまでの調査で、縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。

今回の調査は、保津・宮古遺跡の北端で計画された宅地分譲に対しておこなわれたものである。遺跡北端での開発であり、近接して実施した第２次調査で顕著な遺構・遺物が確認できなかったことから、まず試掘調査（S-201802）を実施して遺構の分布を確認し、遺構が確認できた東端付近について発掘調査を実施した。

２．調査の成果

調査地の現状は水田である。ここでは、本調査対応となった敷地東部の層序を示す。



第 25 図　調査地位置図（上：S＝1/2,500、下：S＝1/1,000）

（１）層序

Ⅰ：暗灰色土〔検出標高 45.85 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：暗青灰色粘質土〔45.7 m〕、Ⅲ：褐灰色土〔45.6 m〕、Ⅳ：黄褐色粘質土〔45.4 m〕、Ⅴ：黒褐色粘土（ハード）〔45.25 m〕、Ⅵ：黄褐色粘質土〔45.1 m〕、Ⅶ：緑灰色シルト〔45.0 m〕

第Ⅰ・Ⅱ層は水田耕土・床土、第Ⅲ層は近世遺物包含層である。第Ⅳ層以下は地山とみられる。調査では、第Ⅲ層までを重機により除去し、古代～中世の遺構検出をおこなった。

（２）遺構と遺物

試掘調査（S-201802）の成果

試掘調査では、まず４×1.5ｍの調査区を対象地東端（試掘第１トレンチ）・中央（試掘第２トレンチ）・西端（試掘第３トレンチ）の３ヶ所に設定し、試掘第３トレンチについては全体が時期不明の河跡状の堆積であったため、延長 15.5 ｍまで調査区を拡張した。

試掘第１トレンチ

水田面下 0.5 ｍ前後で土坑状の遺構を北西端で１基、ピットを調査区東端・北東端で計２基確認した。古墳時代後期～古代頃の遺物が出土しており、この地区周辺については本調査が必要と判断した。

試掘第２トレンチ

水田面下 0.5 ｍで地山に相当する黄褐色粘質土層を確認したが、顕著な遺構を確認することができなかった。なお、出土遺物には６～７世紀頃の須恵器・土師器等があり、付近に当該時期の遺構が存在する可能性は残る。

試掘第３トレンチ

水田面下 0.5 ｍで、暗灰褐色砂質土の拡がりを確認した。筋違道の側溝である可能性を考慮して試掘調査範囲の拡張をおこなったが、結果としては自然河道であることが判明した。ただし、最終堆積が黒褐色砂質土であり、遺物を含む可能性が考えられたため、念のため本調査時に北側への拡張と確認のための掘り下げをおこなうこととなった。なお、検出面では東西方向の小溝群４条を確認しているが、試掘調査であるため遺構掘削はおこなっていない。

第 51 次調査の成果

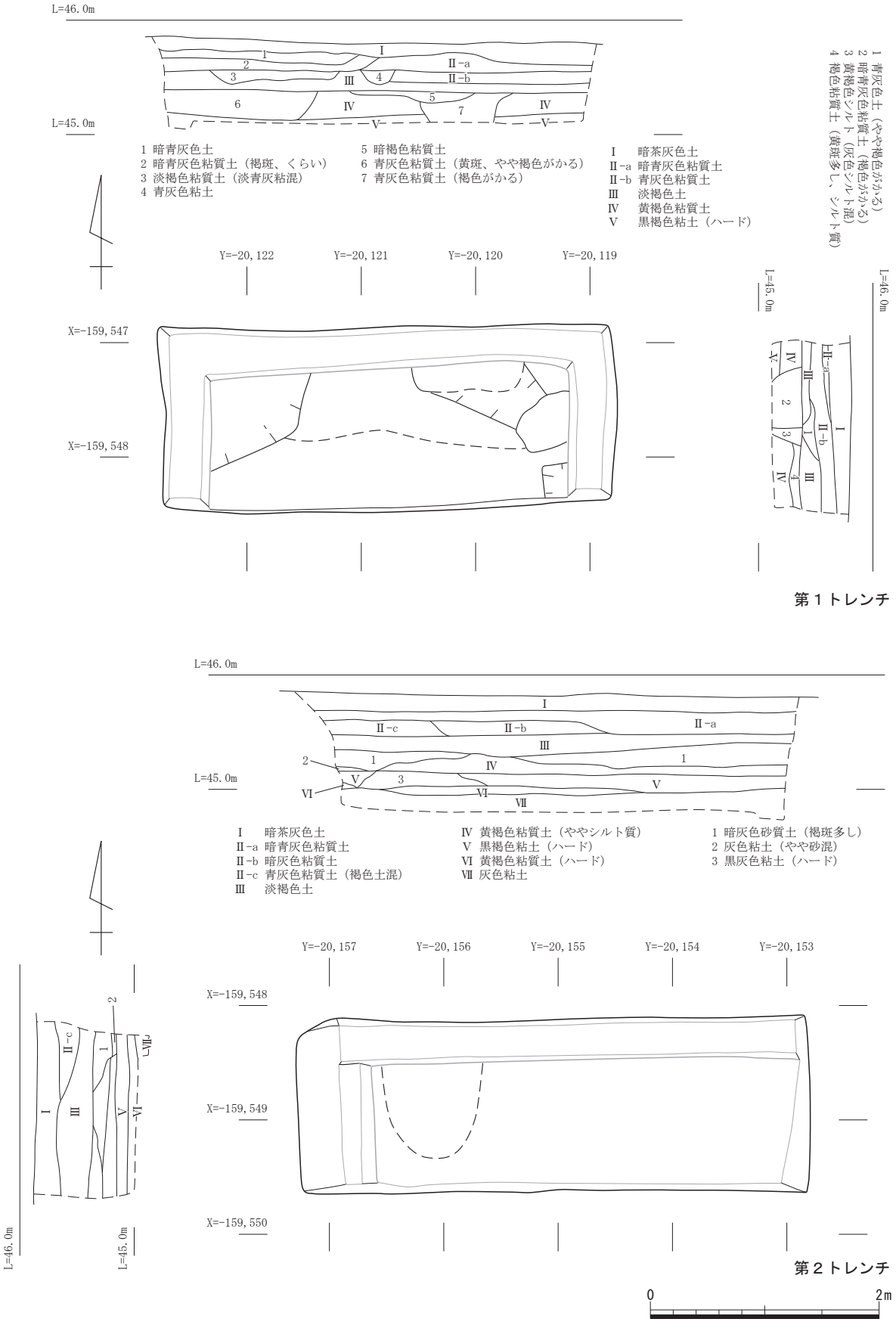
上記試掘調査の成果に基づき、本調査では東側の第１トレンチ（東西 15 ×幅３ｍ）、西側の第２トレンチ（東西４×南北 3.5 ｍ）で調査をおこなった。第１トレンチは試掘第１トレンチを含む範囲とし、第２トレンチは試掘第３トレンチの一部を北側へ拡張する形で設定した。

弥生時代以前

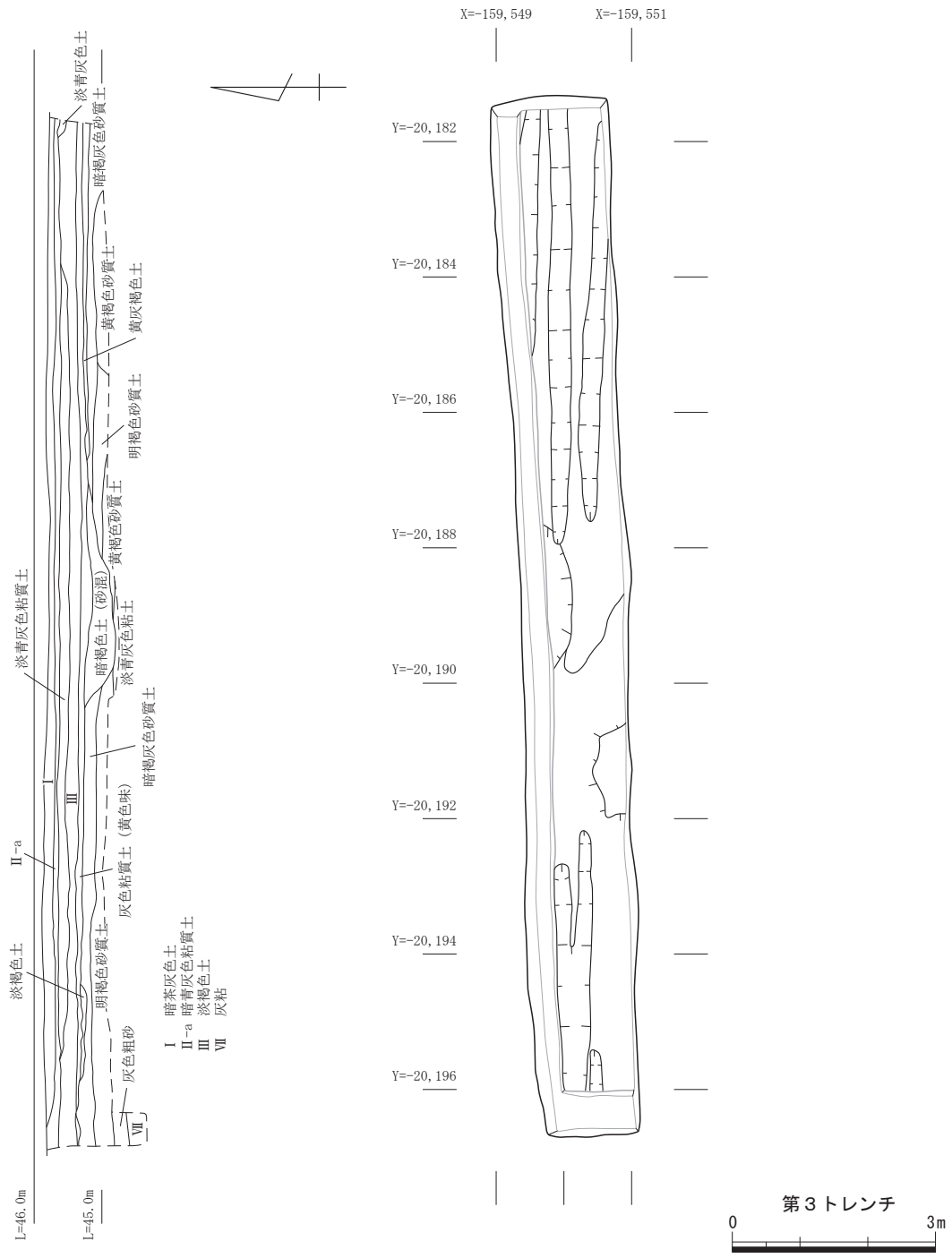
ＳＲ -2101　第２トレンチで確認した河跡状の堆積について、性格と時期を確認するために拡張をおこなった。ただし、遺物が出土しなかったため、時期は確認できなかった。

古墳時代～古代

ＳＫ -1101　第１トレンチ北東部で検出した、直径１ｍ前後の円形の土坑である。深さ 0.5



第 26 図　試掘調査第１・２トレンチ　遺構平面図および断面図（Ｓ＝1/50）



第 27 図　試掘調査　第３トレンチ　遺構平面図および北壁断面図（Ｓ＝1/100）

ｍ前後を測る。出土遺物には、黒色土器、瓦器等がある。平安時代後期頃の遺構となる可能性があるが、詳細な時期は明らかでない。

ＳＫ-1102　第１トレンチ南東部で検出した、東西 1.2 ｍの浅い方形の土坑である。深さ 0.1 ｍを測る。顕著な遺物が出土していないため、詳細な時期は明らかでない。堆積土から、古代頃の遺構とみられる。

Pit-1101 ～ 1103　第１トレンチ内で３基の柱穴状の遺構を確認した。Pit-1101 は直径 0.5 ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。古代頃の須恵器壷・土師器釜小片等が出土した。試掘調査で出土し

た古墳時代後期～古代頃の土師器甕把手部も本遺構に伴うものとみられる。Pit-1103 は後述するＳＤ-1051 下面で確認したため上面 0.1ｍ程度が失われているが、残存部で直径 0.5ｍ、深さ 0.1ｍを測る。遺物が出土していないため時期は明らかでない。Pit-1102 は直径 0.2ｍ、深さ 0.2ｍを測る。遺物が出土していないため、詳細な時期は明らかでない。

中・近世

ＳＤ-1051　第１トレンチ中央～西端で検出した溝状遺構である。南肩を延長 10.5ｍにわたり検出したが、調査区東半で北側に屈曲するとみられる。試掘時にはこのコーナー部を確認して土坑と誤認していた。溝の深さは 0.2ｍを測る。東西方向の溝は幅２ｍ前後とみられる。土師器・瓦質土器等が出土しており、いずれも小片であるため詳細な時期は明らかでないものの、室町時代前後の遺構と考えられる。

小溝群　第１トレンチでは、幅 0.3ｍ、深さ 0.1ｍ前後の東西方向の小溝２条を確認した。また、第２トレンチで試掘第３トレンチ相当の小溝２条を調査した。幅 0.3ｍ、深さ 0.1ｍ前後を測る。遺物が僅少であるため詳細な時期は明らかでないが、近世頃の遺構となる可能性が考えられる。

３．まとめ

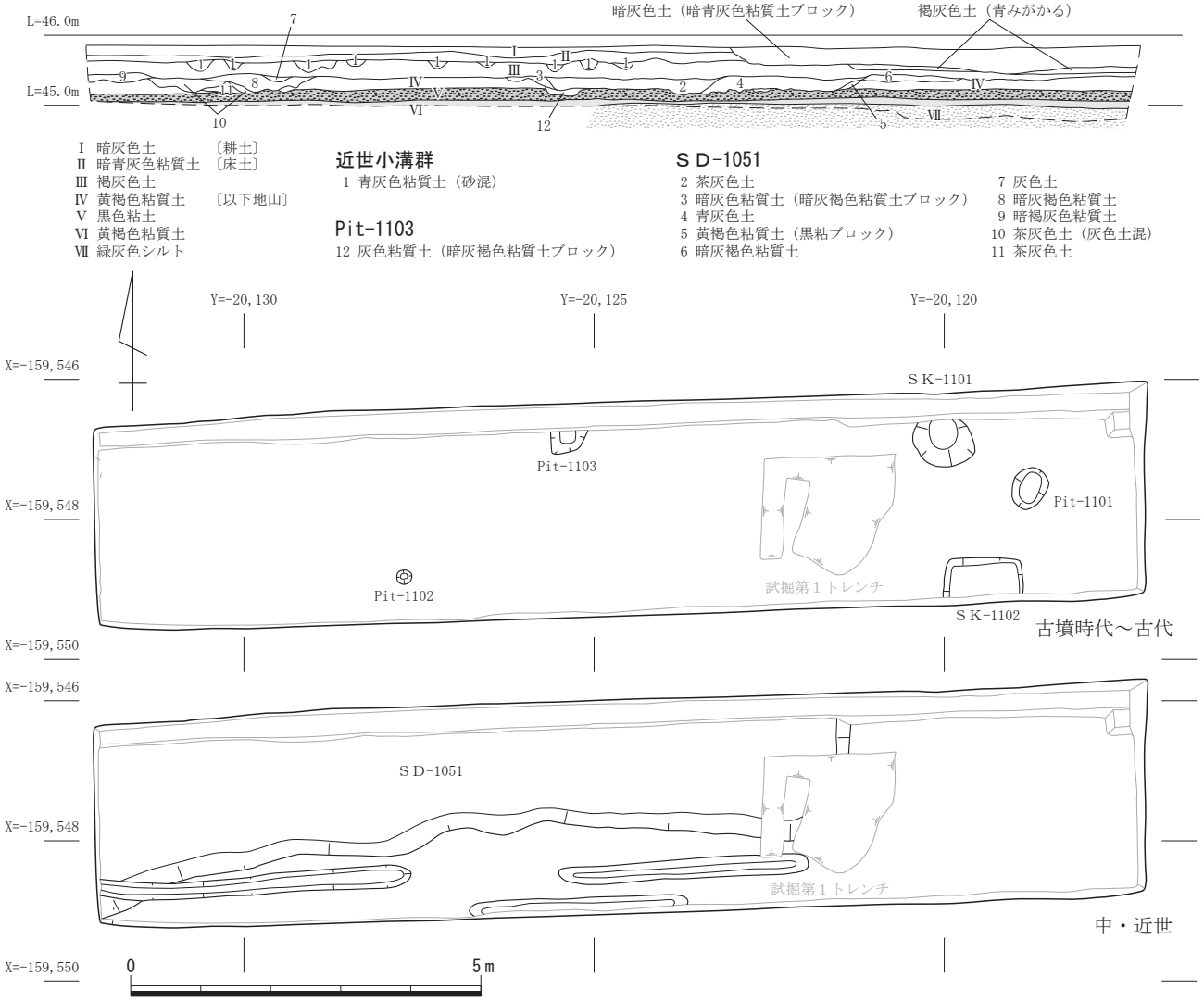
今回の調査では、開発地の東端で遺構を確認したものの、全体的には遺構密度が低い地区であることを確認した。

なお、第１トレンチで検出したＳＤ-1051 は、開発地の北側に隣接して島畑状の方形の土地を囲んでいた可能性がある。一方、試掘第２トレンチでは顕著な遺構が確認できなかったこともあり、今後の開発に対して注意していく必要がある。

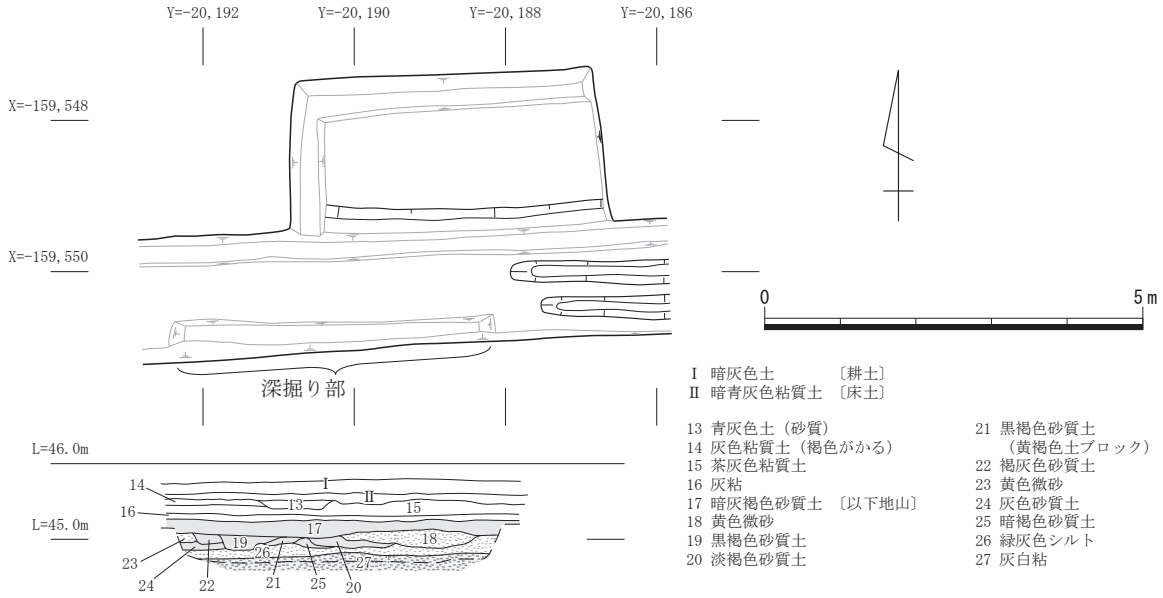
試掘第３トレンチ（本調査第２トレンチ）で確認した粗砂堆積は、上面堆積が黒褐色砂質土で中世よりは古い堆積土とみられる。河跡本体の所属時期は不明であるが、基本的に弥生時代またはそれ以前のものであろう。

写真 4-1　第１トレンチ全景（東から）

写真 4-2　第２トレンチ全景（南西から）



第 28 図　第 51 次調査　第１トレンチ平面図および北壁断面図（Ｓ＝1/100）



第 29 図　第 51 次調査　第２トレンチ平面図および南壁深掘り部断面図（Ｓ＝1/100）

５.十六面・薬王寺遺跡　第 37 次調査

１．既調査の概要

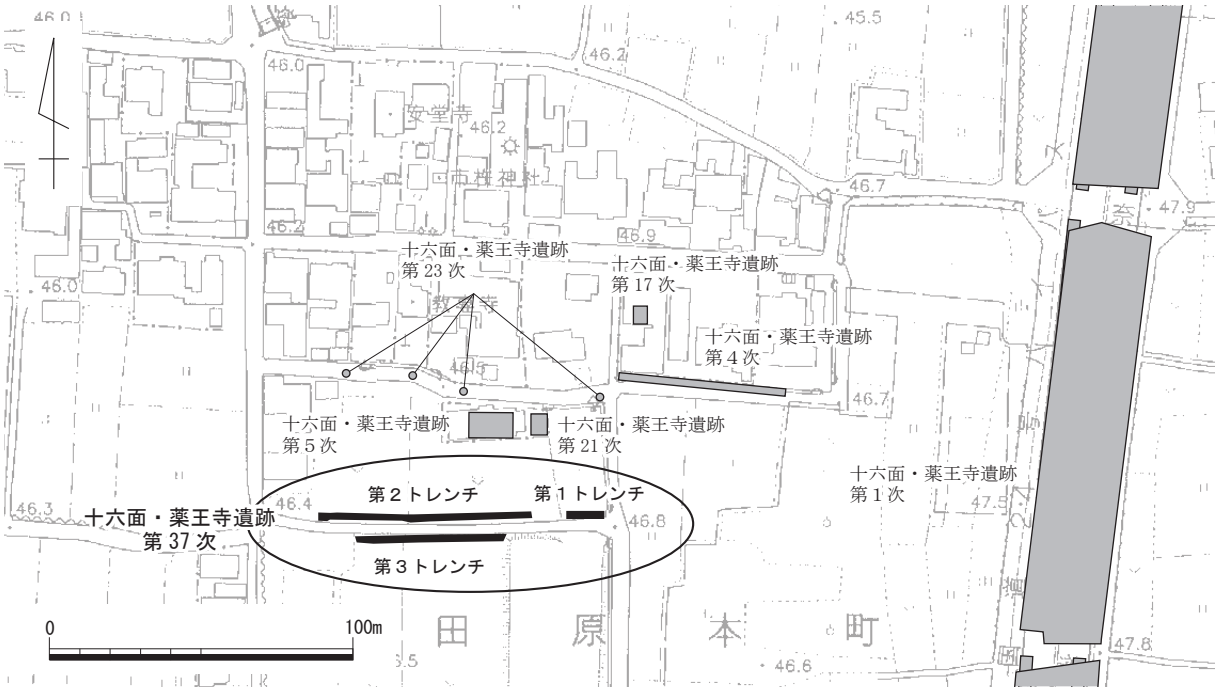
十六面・薬王寺遺跡は、田原本町西部に所在する、弥生～古墳時代の集落遺跡、古代の水田跡、中世の居館跡の複合遺跡である。近年は店舗建築に伴う十六面地区での大規模調査（第 30・31 次）で古墳時代の玉作関連遺物が出土するなど、古墳時代の様相が徐々に明らかになってきている。本調査地周辺では、北に 30 mほど離れた地点で第５・21 次調査を実施している。第５次調査では、製塩土器や琥珀玉などの玉製品が出土した。また、東に約 100 m離れた、京奈和自動車道に伴う発掘調査（第１次）では、古墳時代後期の製塩土器や馬骨などが出土し、馬飼集団の存在が推定されている。古墳時代中～後期の集落の範囲を明らかにすることが課題のひとつとなっていた。

第 37 次調査は、町道の拡幅工事に伴い、擁壁が設置される部分に第１～３トレンチを設定して調査を実施した。第１・２トレンチは北側の擁壁部分で、第１トレンチは東側の南北２×東西 13 m、第２トレンチは西側の南北 1.5 ～ 2.4 ×東西 70 m、第３トレンチは南側擁壁部分で南北 2.2 ×東西 54 mである。

２．調査の成果

（１）層序

Ⅰ：褐灰色土〔検出標高 46.9 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：褐灰色土〔46.7 m〕、Ⅲ：灰褐色砂質土〔46.6 m〕、Ⅳ:灰色砂質土〔46.5 m〕、Ⅴ:黄褐色微砂〔46.4 m〕、Ⅵ:暗褐色粘質土〔46.3



第 30 図　調査地位置図（Ｓ＝1/2,500）

m〕、Ⅶ：暗灰褐色粘質土〔46.2 m〕、Ⅷ：黄色微砂〔以下地山、46.1 m〕、Ⅸ：淡緑灰色シルト（ハード）〔45.5 m〕

第Ⅰ層は現代の耕作に伴う耕土、第Ⅳ層が中世遺物包含層、第Ⅵ層が古墳時代中～後期遺物包含層である。調査に際しては、第Ⅵ層上面まで重機で除去し、以下を人力で掘削した。

（２）遺構と遺物

第１トレンチ

古墳時代

ＳＫ-1152　第１トレンチ東部で南半を検出した、直径 1.2 m、深さ 0.5 mの円形の土坑である。ＳＫ-1152 埋没後に、後述するＳＤ-1151・1101 が掘削されているため、土坑上部は削平されており、本来深さ 0.7 m程度だったと推定される。土坑は垂直に掘削されており、最下層は地山由来の淡緑灰色シルトのブロック土を含む黒灰色粘土で、湧水のため崩落した堆積土と推定される。状況から井戸と考えられる。遺物が僅少であるため時期は不明である。

Pit-1151　第１トレンチ西部北側で南半を検出した、直径 0.5 m、深さ 0.4 m以上の小穴である。埋没後、ＳＤ-1104 が掘削され、西半が削平されている。ほぼ垂直に掘削されていることから、柱穴と考えられるが、対となる小穴は Pit-1152 以外に確認できていない。時期の詳細は不明だが、切り合い関係から古墳時代後期以前とみられる。

Pit-1152　第１トレンチ西部南側で北半を検出した、直径 0.8 m、深さ 1.0 mの小穴である。また、北に幅 0.36 m、長さ 1.25 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mの小溝がとりついている。この小溝は、Pit-1152 に近づくにつれて深くなっていることから、立柱時の柱運搬痕の可能性がある。ほぼ垂直に掘削されている点、埋没後、ＳＤ-1104 が掘削されたことにより東半が削平されている点が Pit-1151 と共通することから、同時期の柱穴と考えられる。

ＳＤ-1151　第１トレンチ東部で西肩を検出した北北東－南南西方向の溝で、幅 1.15 m以上、深さ 0.3 m以上である。ＳＤ-1101 の西に隣接して並走していることから、ＳＤ-1101 の前身となる溝だったと推定される。時期は古墳時代後期頃である。

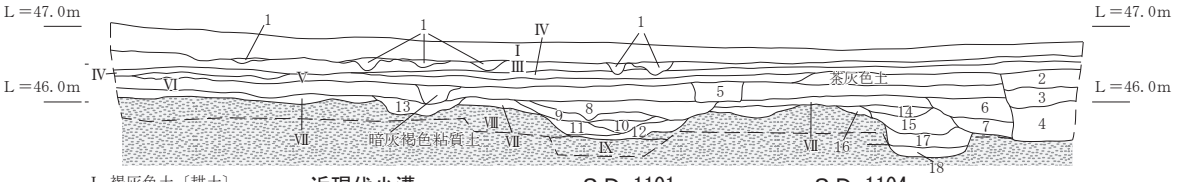
ＳＤ-1101　第１トレンチ東端で西肩を検出した北北東－南南西方向の大溝で、幅 2.0 m以上、深さ 0.5 m以上である。遺構の切り合いから、第１トレンチは、ＳＫ-1152 →ＳＤ-1151 →ＳＤ-1101 という変遷をたどる。時期は古墳時代後期である。

ＳＤ-1102　第１トレンチ中央部で検出した、幅 0.4 m、深さ 0.17 mの小溝である。南端部分を調査し、北端部は調査区北側に伸びていくため未調査である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ-1103　第１トレンチ中央部で検出した、幅 2.8 m、深さ 0.5 mのほぼ南北方向の大溝である。調査区北壁断面の観察では、東肩に２段のテラスを持つ。時期は古墳時代後期である。

ＳＤ-1104　第１トレンチ西部で検出した、北東－南西方向の溝で、幅 0.8 m、深さ 0.2 mである。時期は古墳時代後期である。

ＳＤ-1105　第１トレンチ西端で東肩を検出した、ほぼ南北の溝で、幅 0.6 m以上、深さ 0.1 mの浅い溝である。土師器・須恵器等の小片が出土したが、遺物が僅少なため時期は不明である。



Ⅰ 褐灰色土〔耕土〕
Ⅲ 灰褐色砂質土
Ⅳ 灰色砂質土
Ⅴ 黄褐色微砂
Ⅵ 暗褐色粘質土
Ⅶ 暗灰褐色粘質土
Ⅷ 黄色微砂〔以下、地山〕
Ⅸ 淡緑灰色シルト（ハード）

近現代小溝
1 淡青灰色砂質土

ＳＫ-1001
2 灰褐色土（暗褐色土ブロック）
3 灰色粘土（褐色粗砂混じり）
4 青灰色粘土（砂混じり）

ＳＤ-1051
5 灰色シルト（暗褐色土ブロック）

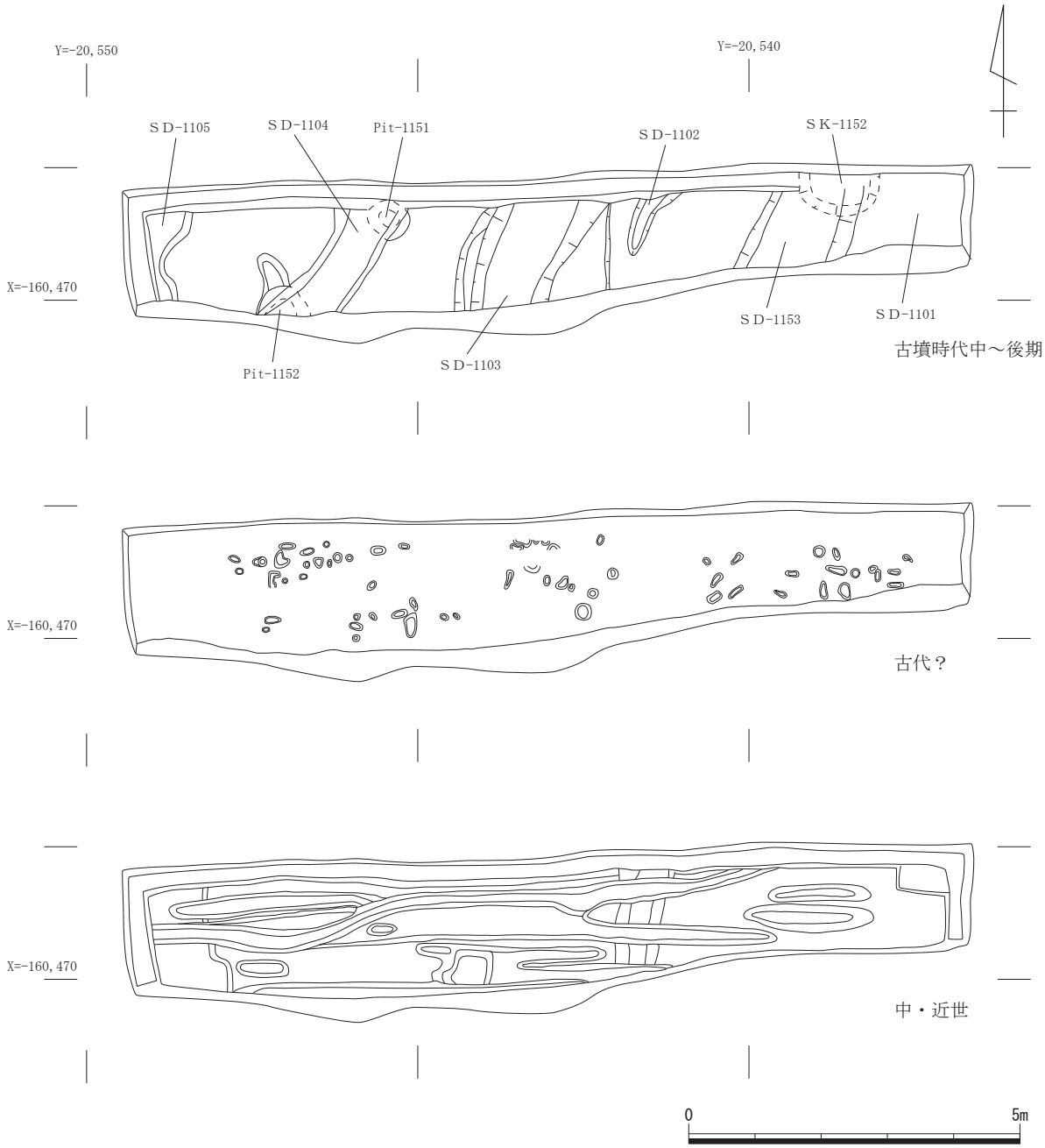
ＳＤ-1101
6 暗灰色粘質シルト
7 黒灰色粘質シルト

ＳＤ-1103
8 暗灰色土（炭・灰多く含む）
9 灰粘（黄色微砂ブロック）
10 灰色土
11 暗灰色シルト
12 暗灰色シルト（砂混じり）

ＳＤ-1104
13 黒灰色粘質土

ＳＤ-1106
14 灰白色粗砂
15 灰色粘土
16 灰褐色粘質土

ＳＫ-1152
17 黒灰色粘土
18 黒灰色粘土（淡緑灰色シルトブロック）



第 31 図　第１トレンチ平面図及び北壁断面図（Ｓ＝1/100）

古代？

足跡群　第１トレンチ全面に人の足跡が検出された。調査地の地形から埋没谷や湿地だったとは考えにくく、水稲耕作に伴う足跡と考えられる。時期は判然としないが、古代頃と考えたい。

中・近世

小溝群　主に東西の小溝を検出した。幅 0.4 m程度、深さ 0.1 m程度である。また、調査区中央部やや東寄りで幅 0.6 m、深さ 0.3 mの南北方向の小溝を１条検出した。南北の小溝は、東西の小溝に切られていることから、かつて現在と異なる地割だったと推定される。

第２トレンチ

古墳時代前期

ＳＤ -2102　第２トレンチ東部で検出した、幅 0.6 m、深さ 0.2 mの、ほぼ南北の溝である。北壁付近でＳＤ -2101 に切られている。出土遺物から、時期は古墳時代前期である。

古墳時代中～後期

ＳＫ -2101　第２トレンチ中央部で検出した楕円形の土坑で、長軸 0.8 m、短軸 0.6 m、深さ 0.2 mである。遺物は、土師器・須恵器のほか円筒埴輪片が出土した。出土遺物から、時期は古墳時代後期である。

ＳＫ -2102　第２トレンチ中央部で検出した大型の円形土坑で、径 2.7 m、深さ 0.4 mである。南半は調査区外のため北半のみを調査した。ＳＫ -2102 からは、TK10 頃の坏をはじめとした須恵器が出土した。時期は古墳時代後期である。

ＳＫ -2103　第２トレンチ中央部で検出した不整形土坑で、東西 1.6 m、南北 1.1 m以上である。南半は調査区外のため、北半のみ調査した。出土遺物から、時期は古墳時代後期である。

ＳＫ -2104　第２トレンチ中央部で検出した円形土坑で、径 1.8 m、深さ 0.3 mである。南半は調査区外のため、北半のみ調査した。出土遺物から、時期は古墳時代後期である。

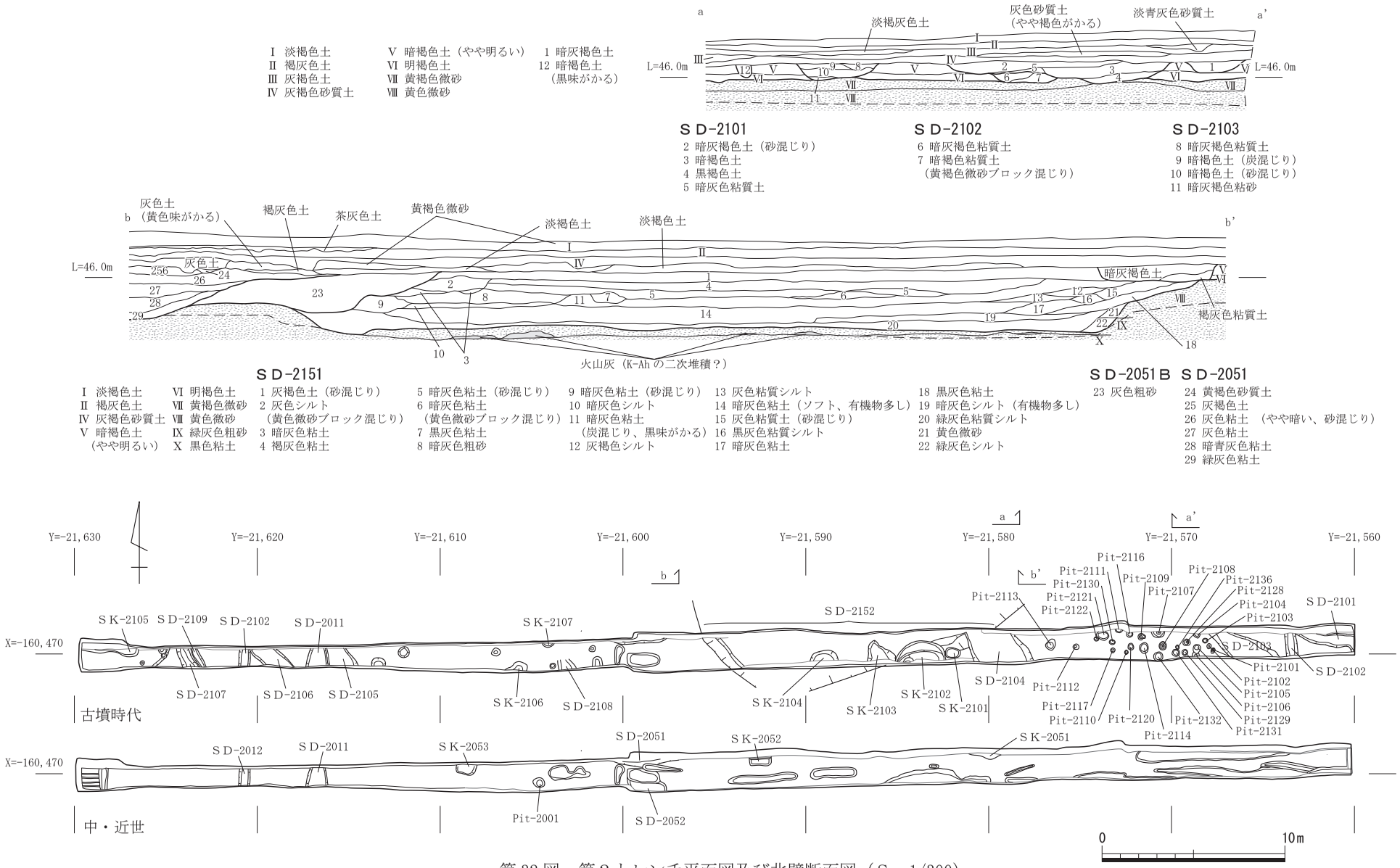
ＳＫ -2105　第２トレンチ西端で検出した不整形土坑で、東西 1.4 m、深さ 0.2 mである。北半は調査区外のため、南半のみ調査した。出土遺物から、時期は古墳時代後期である。

ＳＫ -2106　第２トレンチ西部で検出した楕円形土坑で、長軸 0.5 m以上、深さ 0.2 mである。南半は調査区外のため、北半のみ調査した。遺物が僅少で時期は不明である。

ＳＫ -2107　第２トレンチ西部で検出した円形土坑で、径 0.6 m、深さ 0.1 mである。北半は調査区外のため、南半のみ調査した。遺物は、土師器高坏等が出土した。出土遺物から、時期は古墳時代中期である。

ＳＤ -2152　第２トレンチ中央～西部で検出した、幅 1.6 m以上、深さ 1.1 mの大溝で、弧状に伸びる溝の南肩を検出したと思われる。弥生時代後期前半（大和第Ⅵ－２様式？）の記号が描かれた長頸壷が出土したことから、弥生時代後期の遺構と考えられるが、上層から須恵器も出土しており、埋没後古墳時代まで凹みとなっていたと推定される。

ＳＤ -2101　第２トレンチ東端で検出した、幅 0.7 m、深さ 0.15 mのほぼ南北の蛇行する溝である。ＳＤ -2102 を切っている。出土遺物から、時期は古墳時代中期である。



第32図　第２トレンチ平面図及び北壁断面図（Ｓ＝1/300）

ＳＤ-2103　第２トレンチ東部で検出した、幅 2.8 m、深さ 0.3 mの、北西－南東の大溝である。北にいくにつれて幅を少しずつ減じていき、北壁付近では幅 2.0 m程度となる。出土遺物としては、土師器･須恵器が多数出土したほか、製塩土器片が多数出土した。出土遺物から、時期は古墳時代後期（ＴＫ-10）である。

ＳＤ-2104　第２トレンチ中央部で検出した北北西－南南東方向の大溝で、幅2.6 m、深さ0.4 mである。出土遺物から、時期は古墳時代後期である。

ＳＤ-2105　第２トレンチ西部で検出した北北西－南南東方向の溝で、幅 1.5 m、深さ 0.2 mである。最上層に炭が混じっていた。土師器・須恵器等が出土した。出土遺物から、時期は古墳時代後期（ＴＫ-10）である。

ＳＤ-2106　第２トレンチ西部で検出した北西－南東方向の溝で、幅 1.2 m、深さ 0.1 mである。遺物は僅少であるが、古墳時代中期頃の遺構と考えられる。

ＳＤ-2107　第２トレンチ西部で検出した北西－南東方向の溝で、幅 0.6 m、深さ 0.2 mである。東に隣接するＳＤ-2109 に並行する。ミニチュア土師器壺などが出土した。出土遺物から、時期は古墳時代後期である。

ＳＤ-2108　第２トレンチ西部で検出した南北方向の溝で、幅 0.9 m、深さ 0.15 mである。北半は調査区外のため、南半のみ調査した。出土遺物から、時期は古墳時代後期である。

ＳＤ-2109　第２トレンチ西部で検出した北西－南東方向の小溝で、幅 0.3 m、深さ 0.1 mである。遺物が出土していないため時期は明らかでない。

中・近世

ＳＫ-2051　第２トレンチ東部で検出した不整形土坑で、東西 1.7 m、深さ 0.3 mである。北半は調査区外のため、南半のみ調査した。出土遺物から、時期は鎌倉時代とみられる。

ＳＫ-2052　第２トレンチ東部で検出した方形土坑で、東西 1.2 m、深さ 0.4 mである。北半は調査区外のため、南半のみ調査した。埋土は３層に分層でき、第２層は淡黄灰色シルトに黒灰色粘土ブロックが混ざっており、人為的な埋め戻しが想定される。出土遺物から、時期は中世である。

ＳＫ-2053　第２トレンチ東部で検出した方形土坑で、一辺 1.8 m、深さ 0.2 mである。北半は調査区外のため、南半のみ調査した。遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

Pit-2001　第２トレンチ西部で検出した、長軸 0.6 m、短軸 0.5 m、深さ 0.1 mの小穴である。出土遺物から、時期は中世である。

ＳＤ-2051　第２トレンチ中央で検出した東西方向の溝で、深さ 1.0 m以上である。南肩を検出したが、北肩など遺構の大部分は調査区外であり、規模は判然としない。瓦器小皿などⅡ型式の瓦器が出土したことから、鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＤ-2052　第２トレンチ中央で検出した東西方向の溝で、東西 2.1 m、南北 1.2 m以上、深さ 0.3 mである。瓦器小皿などⅡ段階の瓦器が出土したことから、鎌倉時代の遺構と考えられる。

小溝群　第２トレンチ全体で検出した耕作に伴う素掘小溝である。東西方向の小溝が多いが、中央部や西部には南北方向の小溝がみられる。西端部で南北方向の小溝が東西方向の小溝を切ることから、地割が東西方向から南北方向へ変化したと考えられる。

第３トレンチ

古墳時代前期

ＳＫ-3107　第３トレンチ東部で検出した円形土坑で、径 1.1. m、深さ 1.0 mである。出土遺物から、古墳時代前期の遺構と考えられる。

ＳＫ-3109　第３トレンチ東部で検出した円形土坑で、径 0.9. m、深さ 0.6 mである。最上層で布留式甕が出土した。古墳時代前期後半の遺構と考えられる。

Pit-3101 ～ 3126　第３トレンチ中央～東部で検出した小穴群である。このうち、Pit-3102・3103・3108・3112・3111 が掘立柱建物を構成すると考えられる。詳細な時期は不明。

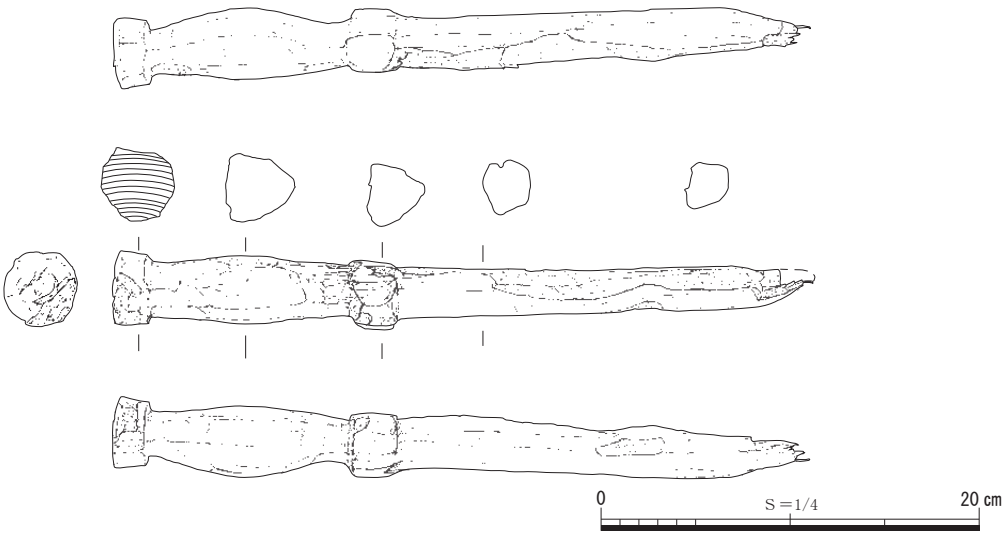
ＳＤ-3151　第３トレンチ西端で検出した、東西方向の溝で、幅 0.3 m以上、深さ 0.1 mである。北肩は調査区外のため、全幅は不明である。大部分をＳＫ-3101 に切られており、東端を検出した。遺物が出土しなかったため時期は不明である。

古墳時代中・後期

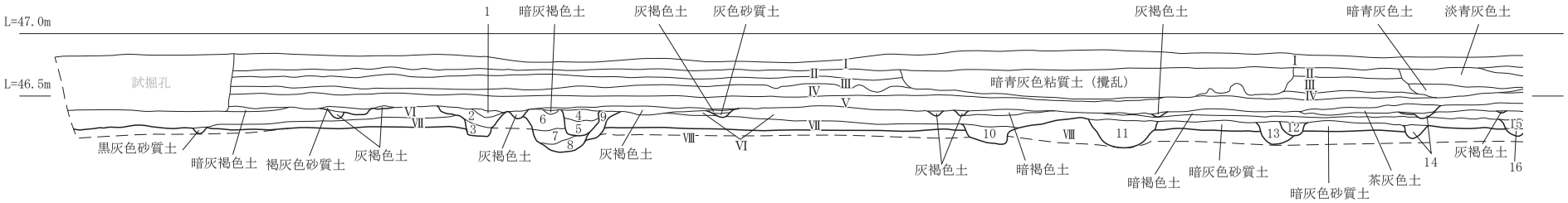
ＳＫ-3101　第３トレンチ西端で検出した土坑で、東西 1.3 m以上、深さ 0.2 mである。東肩のみ検出したため、全体形や規模は不明である。出土遺物から、時期は古墳時代後期末～古代頃である。

ＳＫ-3103　第３トレンチ西部で検出した円形土坑で、直径 0.7 m、深さ 0.8 mである。ほぼ垂直の掘り方をもつ。土坑から刀剣形木製品（第 33 図）が出土した。時期は古墳時代後期である。

ＳＫ-3104　第３トレンチ西部で検出した円形土坑で、直径 1.2 m、深さ 0.2 mである。北半は調査区外のため、南半のみ調査した。遺物が僅少であるため、時期は明らかでない。



第 33 図　ＳＫ-3103 出土 刀剣形木製品



Ⅰ 暗灰色土（クラッシャーラン混じり）
Ⅱ 淡褐色土
Ⅲ 褐灰色土
Ⅳ 淡褐色土（やや砂質）
Ⅴ 茶灰色土
Ⅵ 暗褐色土
Ⅶ 暗灰褐色土
Ⅷ 黄褐色微砂 〔地山〕

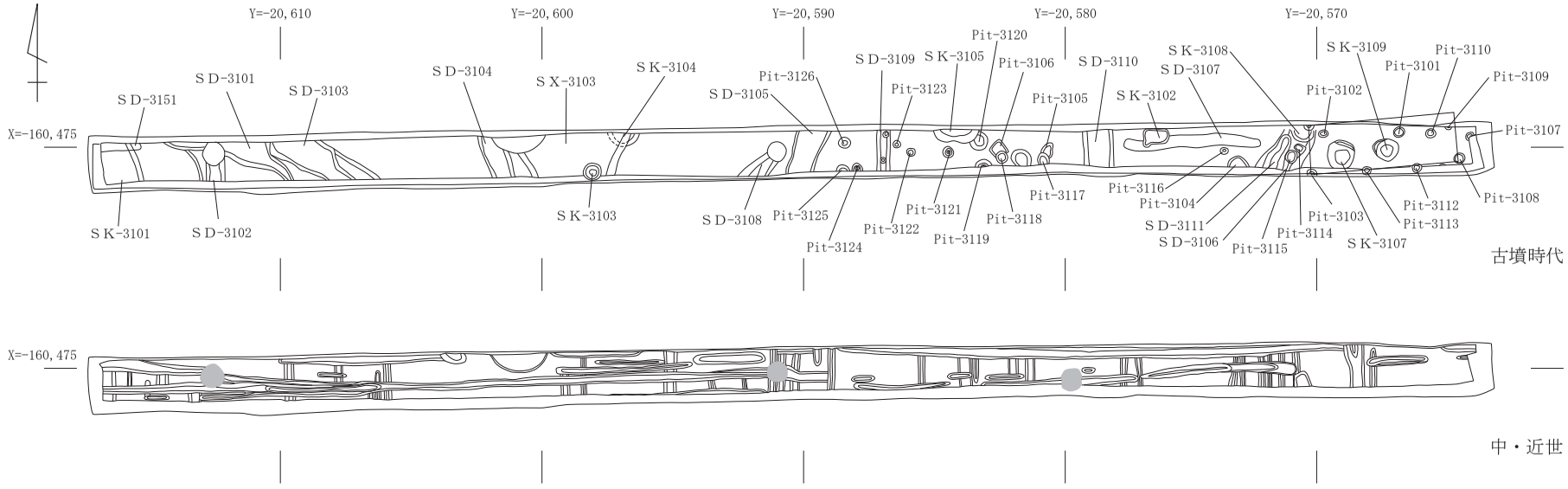
1 灰褐色土
（黄褐色微砂ブロック混じり）
2 暗赤褐色土
3 黒灰色粘質土
（黄褐色微砂ブロック混じり）

ＳＤ-3111
4 明褐色土
5 暗灰褐色土
（黄褐色微砂ブロック混じり）

ＳＤ-3106
6 暗灰褐色粘質土
7 黒灰色土
8 黒灰色粘土
9 暗褐灰色粘質土
（砂混じり）

ＳＤ-3110
10 暗灰色砂質土

11 暗灰褐色粘質土
12 灰褐色粘質土
13 褐灰色粘土
14 暗黄褐色土
15 暗灰褐色土
16 暗灰色粘土



第34図　第３トレンチ平面図及び南壁断面図（Ｓ＝1/250）

ＳＫ－3105　第３トレンチ中央部で検出した円形の土坑で、径 1.7 ｍ、深さ 0.1 ｍである。Pit-3020 を切る。出土遺物から、時期は古墳時代後期である。

ＳＫ－3108　第３トレンチ東部で検出した円形土坑で、径 0.8 ｍ、深さ 0.2 ｍである。Pit-3102 に切られている。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

ＳＤ－3101　第３トレンチ西部で検出した、北西－南東方向の溝である。幅は 1.2 ～ 0.3 ｍ、深さ 0.2 ｍで、南にすぼまる形をしている。出土遺物から、時期は古墳時代後期である。

ＳＤ－3102　第３トレンチ西部で検出した、南北方向の溝で、幅 1.1 ｍ以上、深さ 0.2 ｍである。北壁付近で斜行するＳＤ－3101 に切られる。出土遺物から、時期は古墳時代後期である。

ＳＤ－3103　第３トレンチ西部で検出した、北西－南東方向の溝で、幅 1.4 ｍ、深さ 0.2 ｍである。北壁付近でＳＤ－3101 に切られる。出土遺物から、時期は古墳時代後期である。

ＳＤ－3104　第３トレンチ西部で検出した、北北西－南南東方向の溝で、幅 0.95 ｍ、深さ 0.1 ｍである。北壁付近でＳＤ－3101 に切られる。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

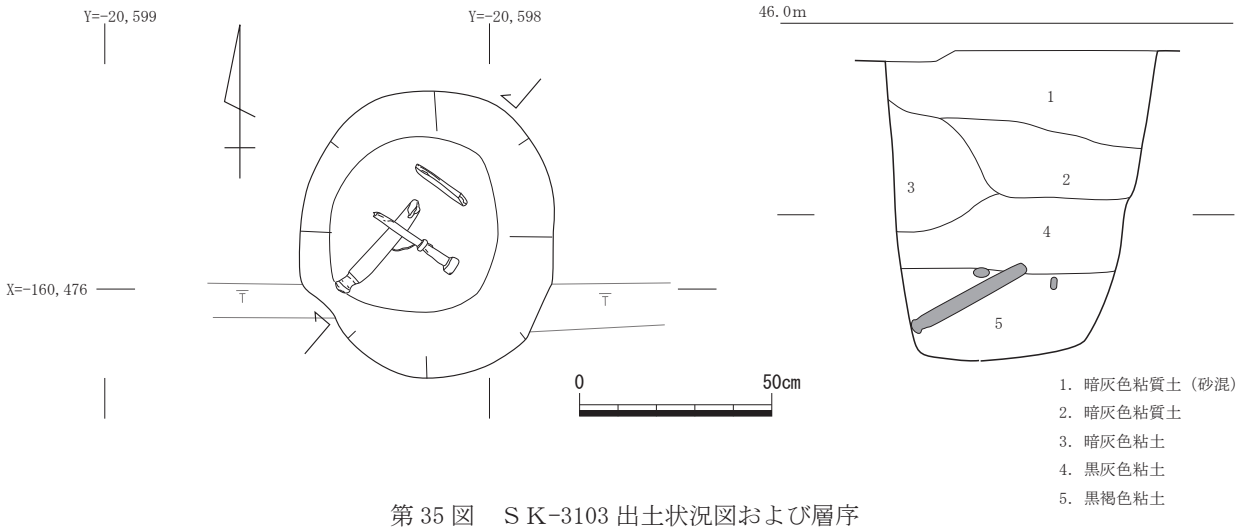
ＳＤ－3105　第３トレンチ中央部で検出した北北東－南南西方向の溝で、直径 1.25 ｍ、深さ 0.1 ｍである。出土遺物は小片のみであり、時期は明らかでない。

ＳＤ－3106　第３トレンチ東部で検出した北東－南西方向の小溝で、幅 1.3 ｍ、深さ 0.1 ｍである。ＳＤ－3106 埋没後、溝上に Pit-3102・3114・3115、ＳＤ－3111 が掘削されている。遺物が僅少であり、詳細な時期は不明。

ＳＤ－3107　第３トレンチ東部で検出した小溝で、幅 0.5 ｍ、長さ 5.2 ｍ、深さ 0.1 ｍである。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

ＳＤ－3108　第３トレンチ中央部で検出した北東－南西方向の溝で、直径 0.8 ｍ、深さ 0.2 ｍである。北端部分は後世の攪乱のため破壊されているが、それ以北には延長しないようである。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

ＳＤ－3109　第３トレンチ中央部で検出した北北東－南南西方向の小溝で、幅 0.5 ｍ、深さ 0.2 ｍである。なお、本遺構の掘削後、溝底で小穴２基を検出した。遺物が出土しなかったため、



第 35 図　ＳＫ-3103 出土状況図および層序

時期は不明である。

ＳＤ－3110　第３トレンチ東部で検出した南北方向の溝で、幅 1.1 ｍ、深さ 0.2 ｍである。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

ＳＤ－3111　第３トレンチ東部で検出した北北東－南南西方向の小溝で、幅 0.6 ｍ、深さ 0.2 ｍである。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

ＳＸ－3101　第３トレンチ西部で検出した、落ち込み状遺構である。幅 4.1 ～ 3.1 ｍ、深さ 0.1 ｍである。南壁付近でＳＫ－3103 に切られ、北壁付近でＳＫ－3104 を切る。形象埴輪片等が出土した。遺物から、時期は古墳時代後期である。

中・近世

小溝群　第３トレンチ全体で検出した。南北方向の小溝が東西方向の小溝に切られており、第３トレンチの土地の区割りが南北方向から東西方向へ変遷したと考えられる。

３．まとめ

全てのトレンチで、古墳時代集落に伴うとみられる遺構を検出した。特に、古墳時代中～後期の遺構が密に分布し、第３トレンチでは掘立柱建物を構成する可能性がある小穴群も確認できたことから、第５・21 次調査地から第 37 次調査地にかけて集落域が展開し、さらに南に拡大する可能性がある。この集落は、製塩土器、滑石製の双孔円板や未成品、臼玉が出土するなど、玉作と馬飼いをしていた可能性がある。今後の調査により集落の範囲の確定が期待される。

また、わずかながら弥生時代後期の土器も出土した。本調査では当該時期の遺構は確認していないが、古墳時代に破壊されたか、少なくとも周辺に弥生時代後期の遺構の存在が想定できる。当該調査地周辺では明瞭な弥生時代後期の遺構は確認できていないが、今後の調査の進展により、新たな弥生時代後期集落が発見される可能性は高いであろう。

写真 5-1　第１トレンチ古墳時代全景（東から）

写真 5-2　第１トレンチ古代全景（東から）

写真 5-3　第２トレンチ全景（西から）

写真 5-4　第３トレンチ全景（西から）

写真 5-5　SK-3109　上層土器出土状況（南から）

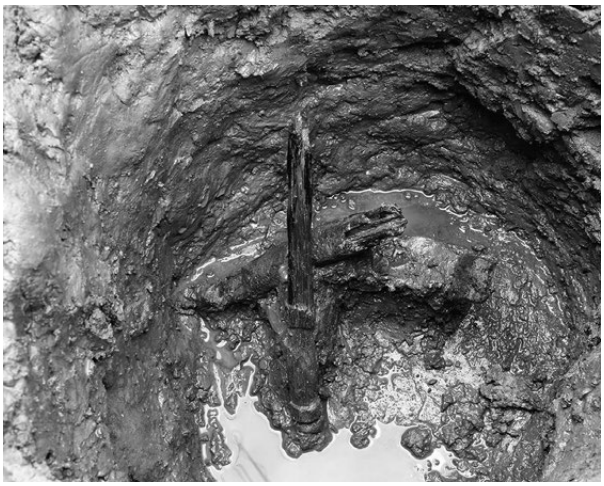


写真 5-6　SK-3103　剣形木製品出土状況

附　自然科学分析の成果

十六面・薬王寺遺跡第 37 次調査の動物遺存体

東海大学

丸山真史

６点の動物遺存体が出土しており、いずれも顎骨から遊離した歯牙である（表１）。ウマ４点、ウマと思われるもの１点、不明１点であり、細片化しているものが半数以上であり、歯種の特定は困難である。そのなかでも保存状態に恵まれた２点は、咬耗が進んでいない若齢馬と推定される。

十六面・薬王寺遺跡の既往の調査では、古墳時代中期の木製の鞍、ウマの骨や歯が出土している（青柳・丸山 2017）。特に祭祀関連の遺物が共伴する土坑から出土した馬骨は明瞭な解体痕を伴っており、食用になった可能性がある。また、奈良盆地でも比較的早い段階のウマであることも注目される。周辺には、唐古・鍵遺跡第 59 次調査でも祭祀に伴う馬骨の集積が出土しており、笹鉾山２号墳出土の馬形埴輪、馬牽き形埴輪の存在からも、古墳時代中期から後期にかけての当該地域が馬飼いとの関連が予想される地域である。

今回の出土資料は、既存の出土資料に加えて、十六面・薬王寺遺跡でのウマの分布を明らかにする意味で重要である。

第 11 表　十六面・薬王寺遺跡第 37 次調査の動物遺存体一覧表

	製品コード	大分類	小分類	部　位	部　分	左右	備　　考	遺構／位置	層位・土色	No.
1	JRY-037-05001B	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	－	細片多数、上顎？	SD-2052	第１層 褐灰色土	63
2	JRY-037-05006B	哺乳綱	不明	遊離歯		－	細片多数	SD-2152	第１層 褐灰色粘土	117
3	JRY-037-05005B	哺乳綱	ウマ？	遊離歯	臼歯	－	細片多数	第１トレンチ 543-548	暗灰褐色粘土	122
4	JRY-037-05002B	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	－	下顎？、H64mm 以上	第１トレンチ 538-543	暗灰褐色粘土	123
5	JRY-037-05003B	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎 P3/P4/W1	右	H63mm 以上、歯冠がやや開き気味で若齢個体	第２トレンチ	暗灰色土	192
6	JRY-037-05004B	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎 M2 ？	右	H70mm 以上	廃土	－	193

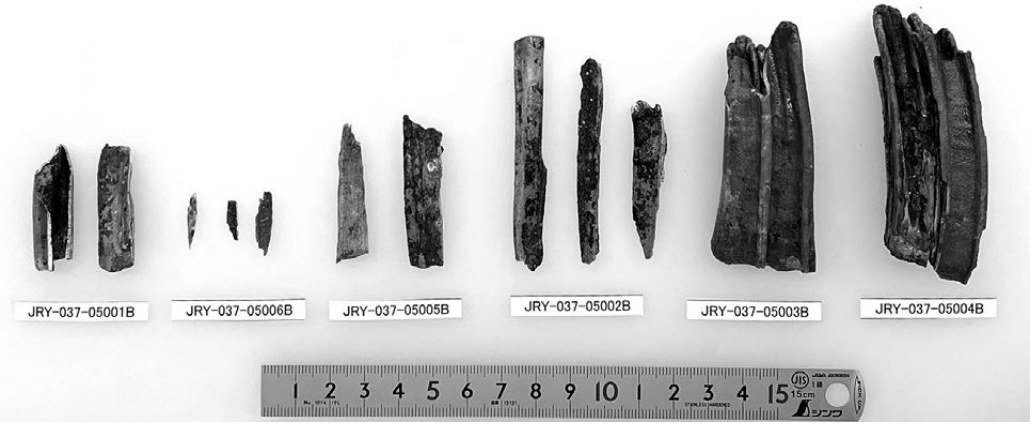


写真６　出土した動物遺存体

６.十六面・薬王寺遺跡　第 38 次調査

１．既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高 48 m前後の沖積地に立地する。これまでの調査で、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明している。

今回の調査は、遺跡南東端でのコンビニエンスストア看板設置工事に伴って実施した。建物の工事自体は基礎掘削が浅かったものの、看板部分の基礎が深い設計となっていたため、発掘調査での対応となった。特に、本工事の届け出が提出される直前に南側隣接地で試掘調査（S-201801）を実施した結果、遺跡範囲が当初の想定範囲よりも南東に拡がっていることが判明したため、本届出地についても遺構が拡がることが想定された。

２．調査の成果

調査地の現状は宅地である。事前にコンビニエンスストア造成に伴う盛土が厚さ１m前後おこなわれたが、それ以前は畑であった。

（１）層序

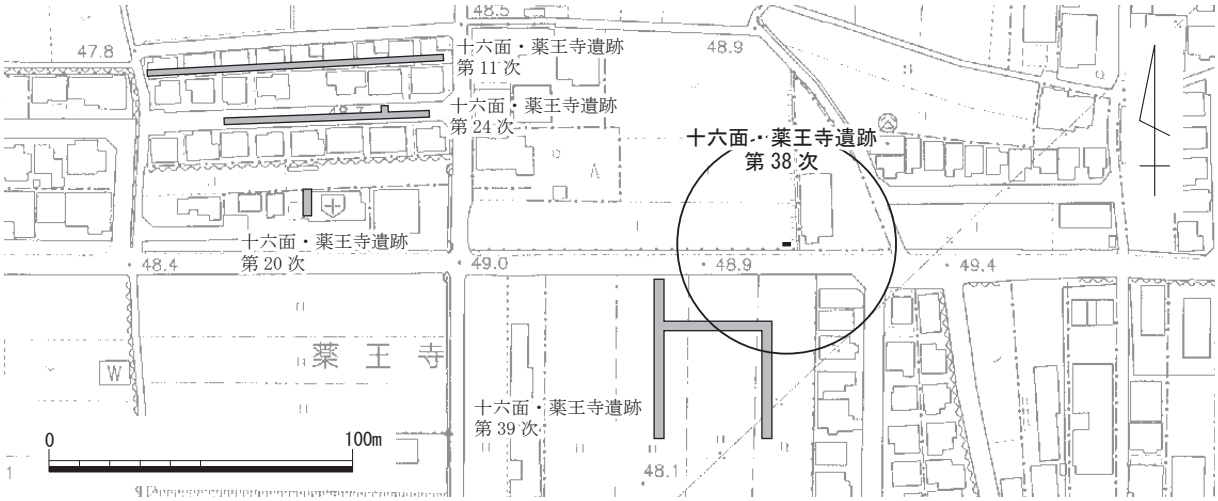
Ⅰ:クラッシャーラン〔検出標高 49.4 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ:暗青褐色土〔48.4 m〕、Ⅲ:青褐色粘質土〔48.25 m〕、Ⅳ:淡青褐色粘質土〔48.1 m〕、Ⅴ:淡灰褐色粘質土〔48.0 m〕、Ⅵ:黄褐色粘質土〔47.9 m〕、Ⅶ：暗褐色土〔47.8 m〕

第Ⅰ層は砕石混じりの客土による現代盛土、第Ⅱ・Ⅲ層は畑作にかかわる層である。第Ⅴ層は中世頃の遺物包含層、第Ⅵ層以下は地山とみられる。調査では、重機により第Ⅴ層まで除去し、第Ⅵ層上面で遺構検出をおこなった。

（２）遺構と遺物

中世

小溝群　調査区東側で検出した南北方向の小溝である。幅 0.4 m、深さ 0.2 mを測る。顕著

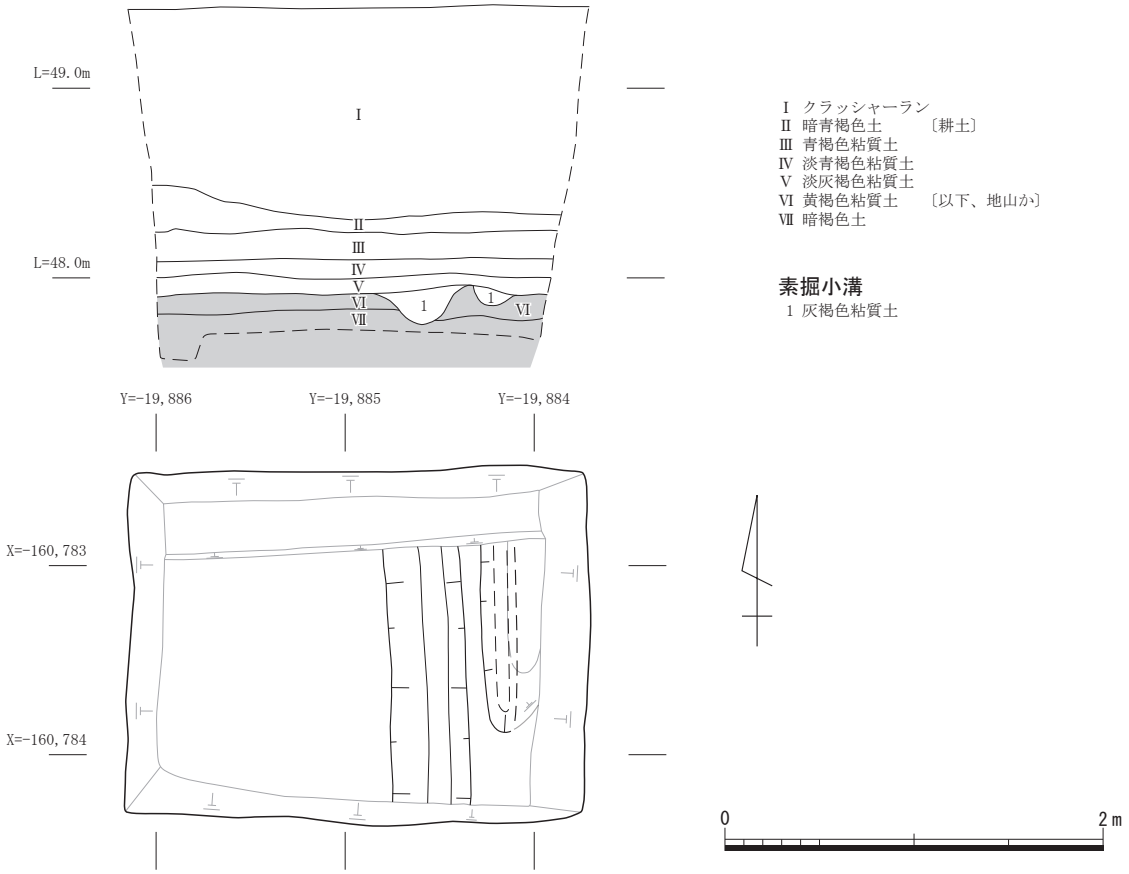


第 36 図　調査地位置図（Ｓ＝1/2,500）

な遺物が出土していないため、詳細な時期は明らかでない。

３．まとめ

今回の調査では、耕作に伴うとみられる小溝２条を確認したにとどまる。南側隣接地での試掘調査（S-201801）及び本調査（十六面・薬王寺遺跡 第 39 次調査）では、今回の調査地の南西 50 ｍまで遺構が拡がっていることを確認している。本調査区では顕著な遺構・遺物がみられなかったことから、南側隣接地の集落が本調査区に及んでいないことが確認できた。



第37図　調査区平面図および北壁断面図（Ｓ＝1/40）

写真7-1　調査区全景（南から）

写真7-2　調査区全景（西から）

７.十六面・薬王寺遺跡　試掘調査（S-201801）・第 39 次調査

１．遺跡・既調査の概要

今回の調査は、宅地造成に伴い実施した。周辺では過去に第６・11・24・27・28・38 次調査をおこなっている。第６・27・28 次調査では古墳時代前期の方形周溝墓を確認している。また、第 27 次調査では土坑や柱穴等も検出しており、集落が拡がっていたことを確認した。第 11 次調査では古墳時代初頭の河跡、円形周溝墓を確認し、第 24 次調査では古墳時代中期の木棺墓を確認した。第 38 次調査では顕著な遺構はなく、遺物も微量であったことから遺跡の拡がりが及んでないことを確認した。

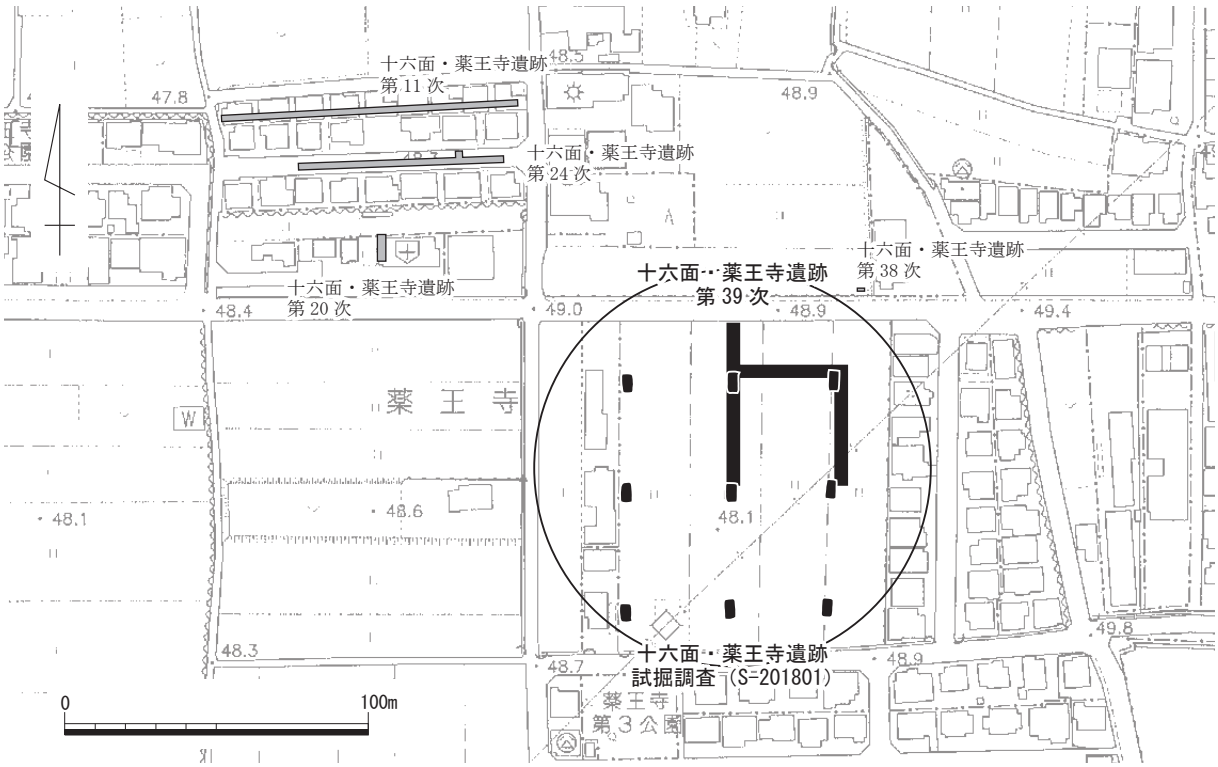
当地は遺跡の南東端に位置することから、まず遺跡の範囲確認のため試掘調査（S-201801）をおこない、遺構の拡がりが認められた範囲を本調査（第 39 次調査）で対応した。なお敷地西端については令和元年に第 41 次調査で対応している。

２．試掘調査（S-201801）の成果

（１）層序

ここでは､本調査対応とならなかった敷地南東端の試掘調査第３トレンチの基本層序を示し、本調査対応箇所の基本層序については第 39 次調査の基本層序として示す。

Ⅰ -a:暗褐灰色粘質土〔検出標高 48.6 m、以下数値のみ記す〕、Ⅰ -b:暗青褐色土〔48.5 m〕、Ⅱ：淡灰褐色土〔48.4 m〕、Ⅲ：灰褐色土〔48.3 m〕、Ⅳ：暗灰色粘土〔48.2 m〕、Ⅴ：灰褐



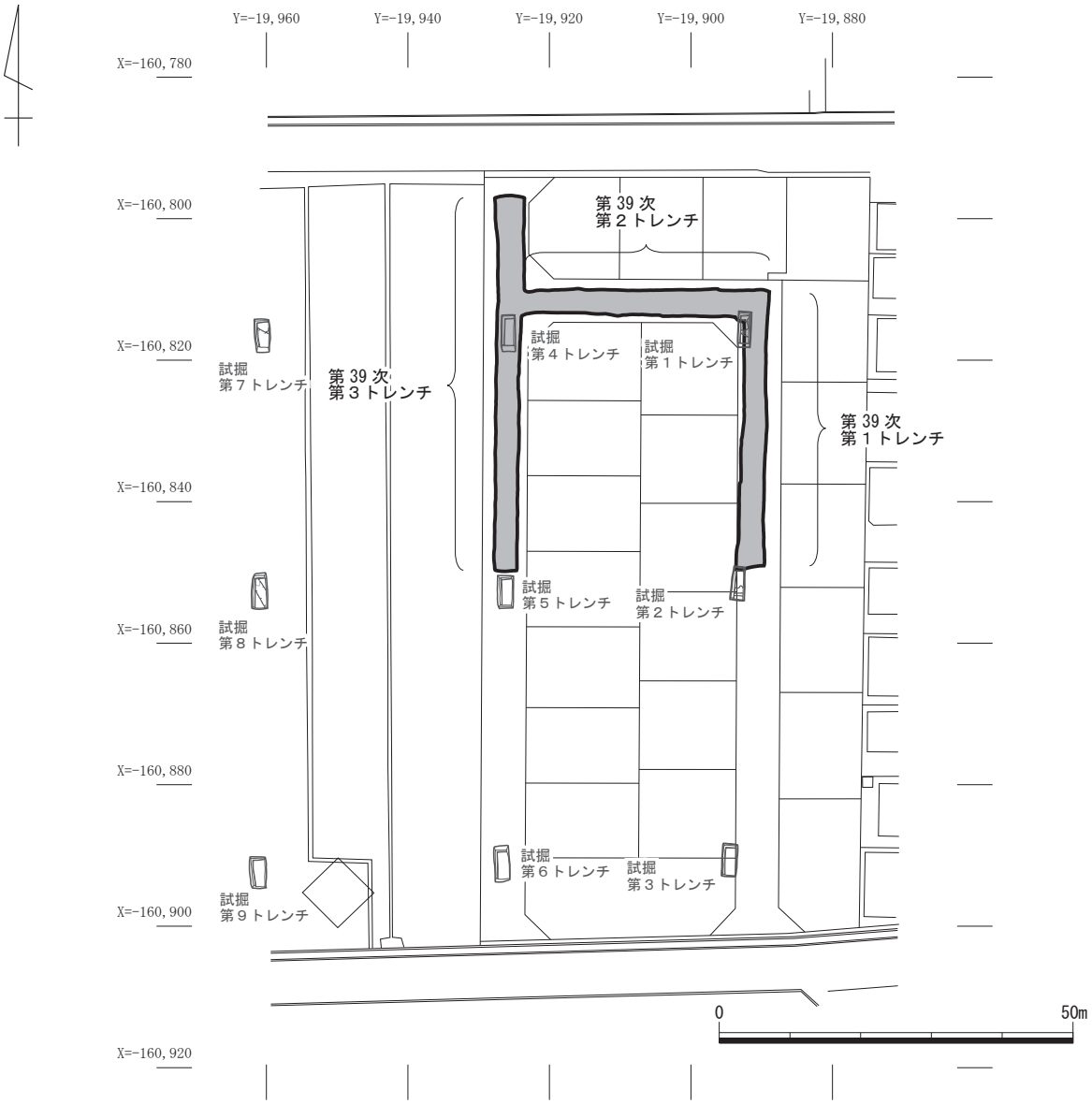
第 38 図　調査地位置図（Ｓ＝1/2,500）

色シルト〔48.1 m〕、Ⅵ：暗灰色粘土〔47.9 m〕、Ⅶ：黒灰色粘土〔47.75 m〕、Ⅷ：暗灰色粘土〔47.6 m〕、Ⅸ：淡青灰色シルト〔47.4 m〕

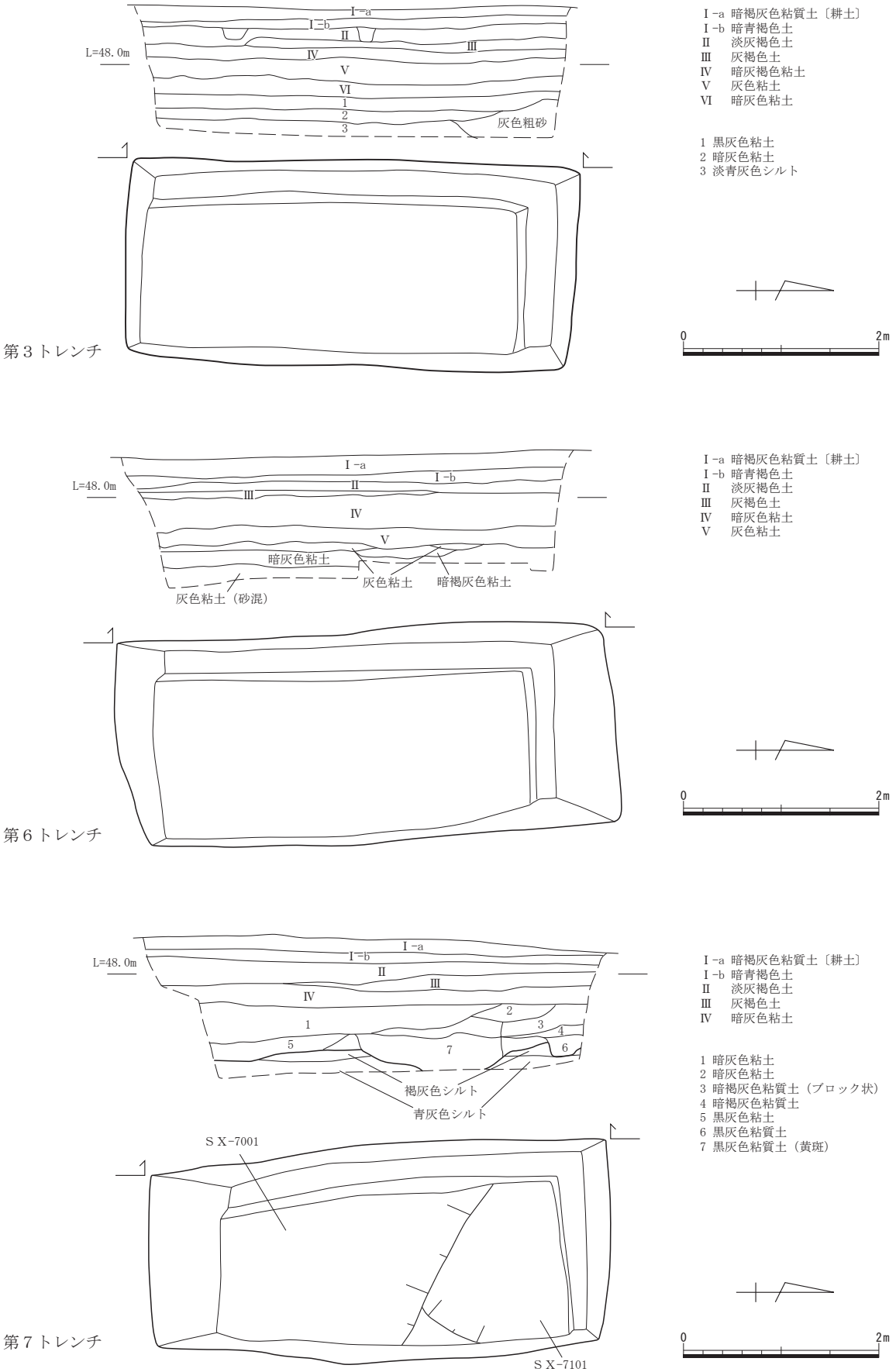
試掘調査では第Ⅰ～Ⅳ層までを重機で掘削して古墳時代－中世の遺構検出をおこなった。第Ⅰ-a 層は現代耕土層、第Ⅴ層以下は落ち込み状の堆積である。

（２）遺構と遺物

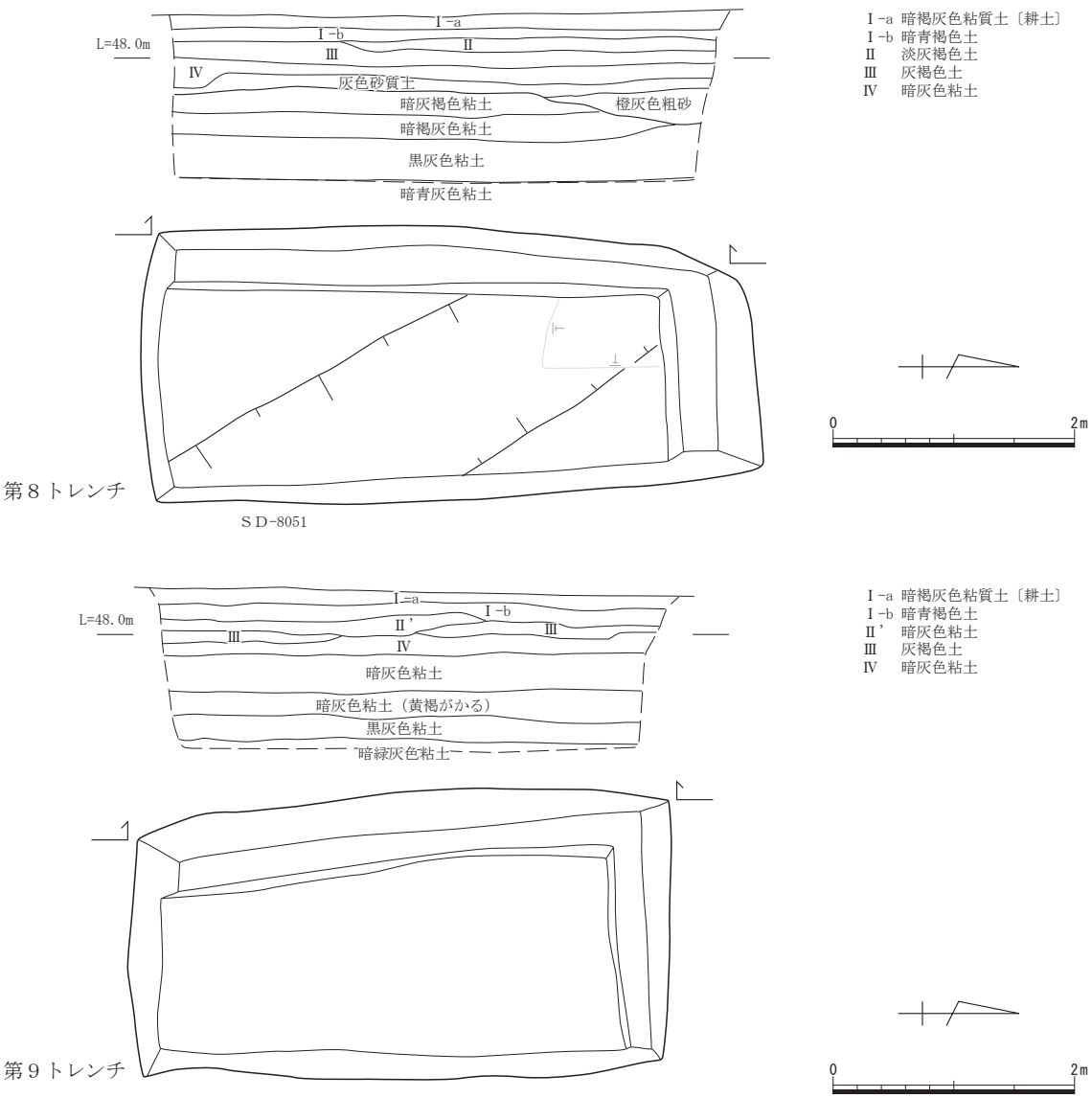
敷地内に２m×４mの調査区を９ヶ所設定した。北側の第１・４・７トレンチにおいて、遺構・遺物を確認し、敷地北半は遺構が拡がることが判明した。敷地南半に当たる第３・６・９トレンチでは遺構は確認できなかった。遺構検出面も下がっており、中世以前は南に落ち込む地形であったと思われ、集落域にならなかったと考えられる。この成果を受け、開発地北半を本調査で対応することとなった（第 39・41 次調査）。ここでは、本調査対象外となった地区の成果を中心に記す。



第 39 図　第 39 次調査　調査区位置図（Ｓ＝1/1,000）



第 40 図　試掘調査（S-201801）第３・６・７トレンチ遺構平面図及び西壁断面図（Ｓ＝1/60）



第 41 図　試掘調査（S-201801）第８・９トレンチ遺構平面図及び西壁断面図（Ｓ＝1/60）

古墳時代～古代？

落ち込み　第２・５・８トレンチを含む敷地南半は、全体が地形的に落ち込んでいることを確認した。第２トレンチでは深さ 0.9 ｍを測る。第３･第６トレンチでは深さを確認できなかった。遺物が僅少であるため時期は明らかでないが、ＳＤ -8051 よりも古い遺構とみられる。

古代

ＳＤ -8051　第８トレンチで検出した北西－南東方向の溝である。幅 1.3 ｍ､深さ 0.2 ～ 0.3 ｍを測る。堆積土は粗砂である。遺物が出土していないため時期は明らかでないが、古代頃の耕作に伴う水路の可能性がある。

中世

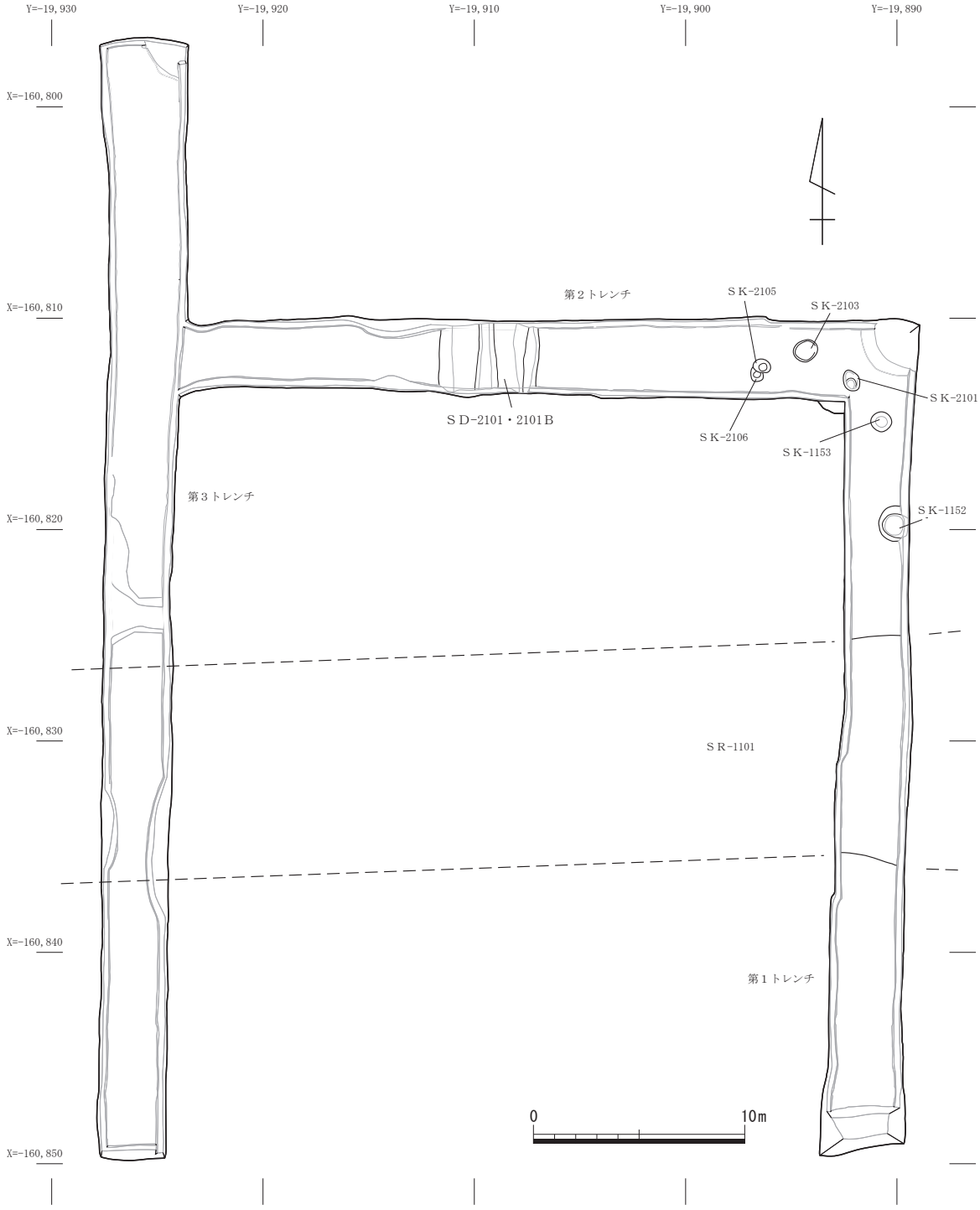
小溝群　第１・２トレンチで検出した南北方向及び東西方向の小溝である。幅 0.3 ｍ～ 0.4 ｍを測る。中世～近世の耕作に伴う遺構であると考えられる。

３．第 39 次調査の成果

試掘調査の結果、敷地北半において遺構・遺物を確認したため、この地区については共有道路部分にトレンチを設定し、本調査をおこなった。「ｈ」字型に調査区を設定し、東側南北部を第１トレンチ、東西部を第２トレンチ、西側南北部を第３トレンチとした。

（１）層序

第Ⅰ層：暗青褐色土〔検出標高 48.3 m、以下数値のみ記す〕、第Ⅱ層：淡茶灰色粘質土〔48.1 m〕、第Ⅱ’層：暗青褐色土〔47.9 m〕、第Ⅲ層：淡茶灰色粘質土〔47.8 m〕、第Ⅳ層：暗灰褐



第 42 図　第 39 次調査　弥生時代後期～古墳時代前期調査区平面図（Ｓ＝1/300）

色粘質土〔47.7 m〕

第Ⅰ～Ⅲ層を機械力で除去し、第Ⅳ層上面で遺構を検出した。第Ⅰ層は旧水田耕土である。

（２）遺構と遺物

弥生時代後期～古墳時代前期

ＳＫ-1152　第１トレンチ北半で検出した土坑である。径 1.7 m前後、深さ 0.9 mを測る。上層や下層では遺物があまり出なかったが、中層では高坏や小型器台等の破片が多数出土した。時期は古墳時代初頭で、集落内の井戸と考えられる。

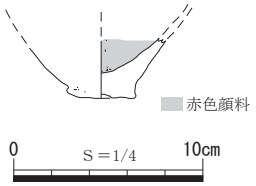
ＳＫ-1153　第１トレンチ北半で検出した土坑である。径 0.9 m、深さ 0.95 mを測る。中層から半完形の広口壷が出土した。上層及び下層では遺物は確認できなかった。時期は古墳時代初頭で、集落内の井戸と考えられる。

ＳＲ-1101　第１トレンチ中央付近で検出した東西方向に流れる河跡である。幅は約 10 m であるが、砂層が深さ１m弱まで続き、それ以下については未調査である。本遺構から西約 30 mの第３トレンチでも、ほぼ同様で砂層堆積を確認した。この河跡を境に北側には遺構が集中し、南側では顕著な遺構を確認しなかった。出土土器から時期は古墳時代初頭であると考えられる。

ＳＤ-2101・ＳＤ-2101 Ｂ　第２トレンチ中央で検出した大溝で、当初掘削の溝をＳＤ-2101、再掘削された溝をＳＤ-2101 Ｂとする。

ＳＤ-2101 Ｂは弥生時代後期後半の南北方向の大溝である。残存幅 4.3 m、残存深さ 0.8 m前後を測る。ミニチュア土器２点、異粘土で製作された土器数点などが出土しているほか、盆地東南部産等の搬入土器などが出土した。

ＳＤ-2101 は、弥生時代後期末～古墳時代初頭の大溝で、幅 4.8 m、深さ 0.6 ～ 0.7 mを測る。堆積土は粘土から粘質土の層が大半で、激しい流水はなかったと考えられる。ＳＤ-2101 の出土遺物は第 49 図に示した。１・２は広口壷である。１は口縁部が在地、胴部が盆地東南部の土で作られた異粘土土器である。胴部下半を欠損する。２は口縁端部にヘラによる刺突文を斜めに施す伊勢湾岸からの搬入土器である。３は二重口縁壷である。口縁部に竹管文・列点文、頸胴部界に直線文、胴部に列点文・竹管文・波状文を施す。４～６は甕である。外面タタキ、内面ハケ調整を施す。７～ 10 は高坏である。11 は台付小型丸底壷である。脚部を欠損する。また、11 は６に入れ子状態で出土した。12 は台付小型丸底鉢で、讃岐系である。13 は台付甕の脚部である。14・15 は鉢である。16・17 は手焙形土器である。17 は近江からの搬入土器である。なお、内面に赤色顔料が付着する土器１点が第５層から出土している（第 43 図）。これらの土器から、他地域との交流が窺える。



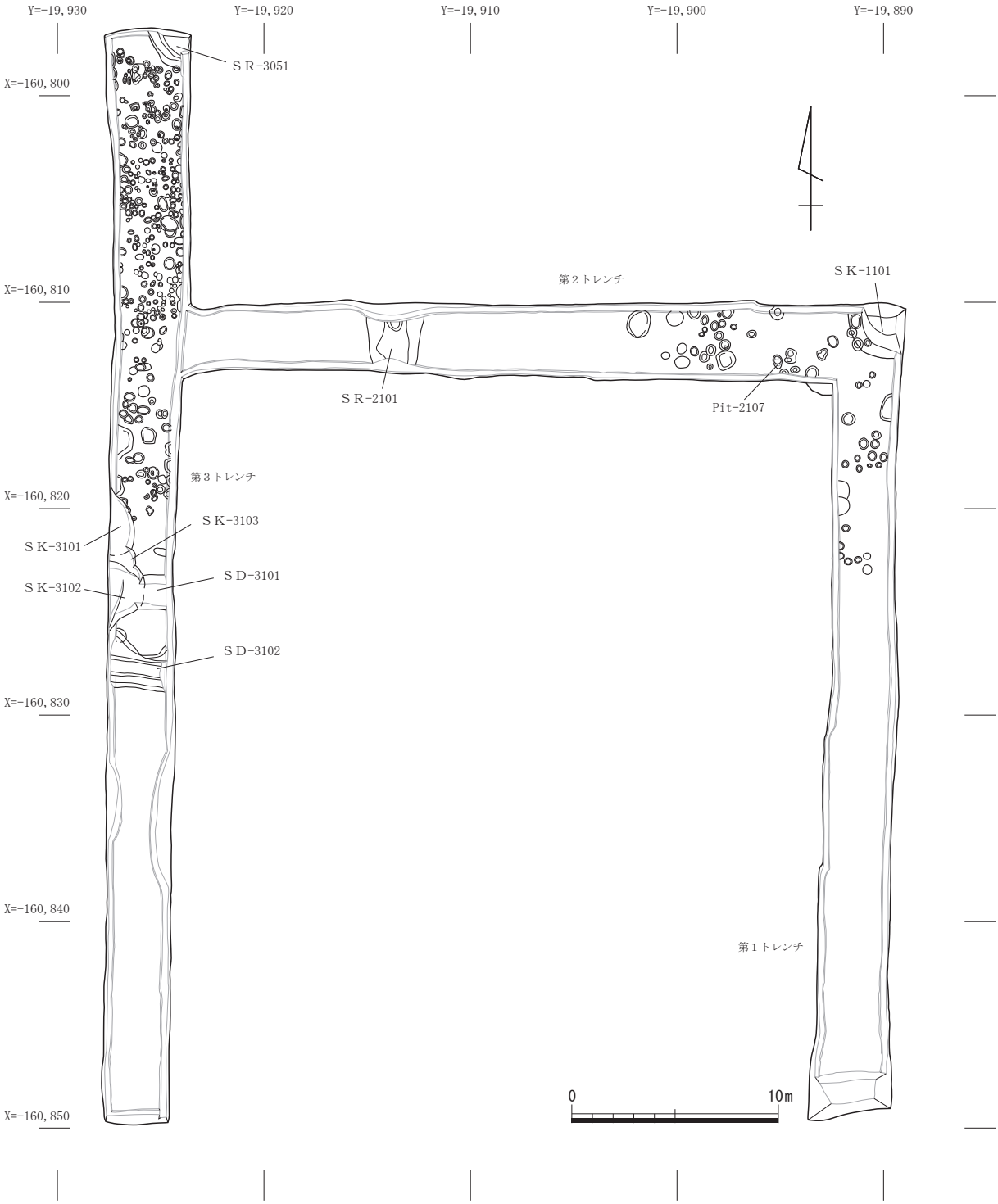
第 43 図　ＳＤ-2101 出土赤色顔料付着甕

ＳＫ-2101　第２トレンチ東部で検出した土坑である。径 0.9 m、深さ 0.35 mを測る。出土土器から古墳時代前期の遺構と考えられる。

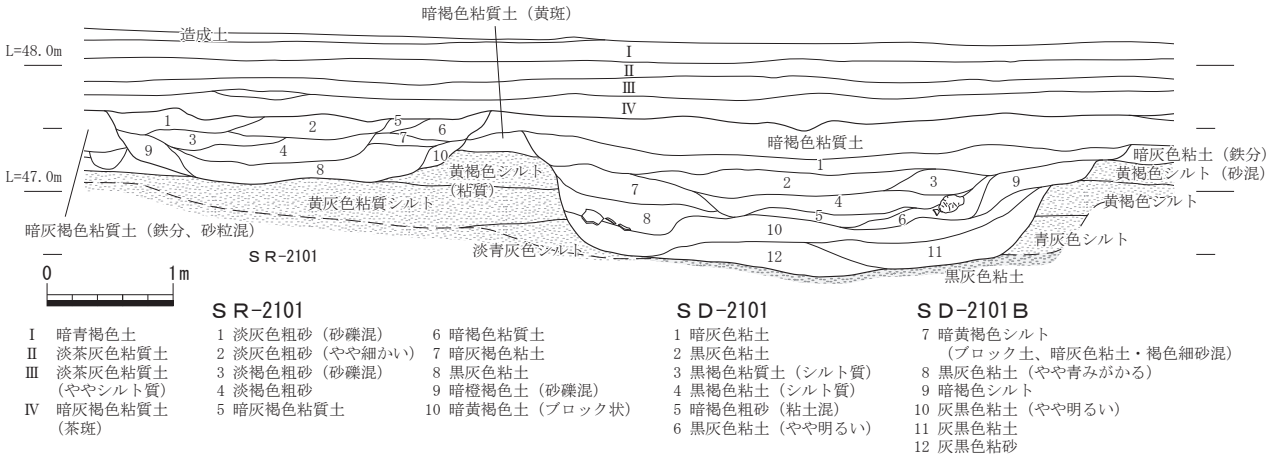
ＳＫ－2103　第２トレンチ東部で検出した土坑である。径１ｍ、深さ 0.25 ｍを測る。出土土器から古墳時代前期の遺構と考えられる。

ＳＫ－2105　第２トレンチ東部で検出した土坑である。径 0.7 ｍ、深さ 0.4 ｍを測る。出土土器から古墳時代前期の遺構と考えられる。

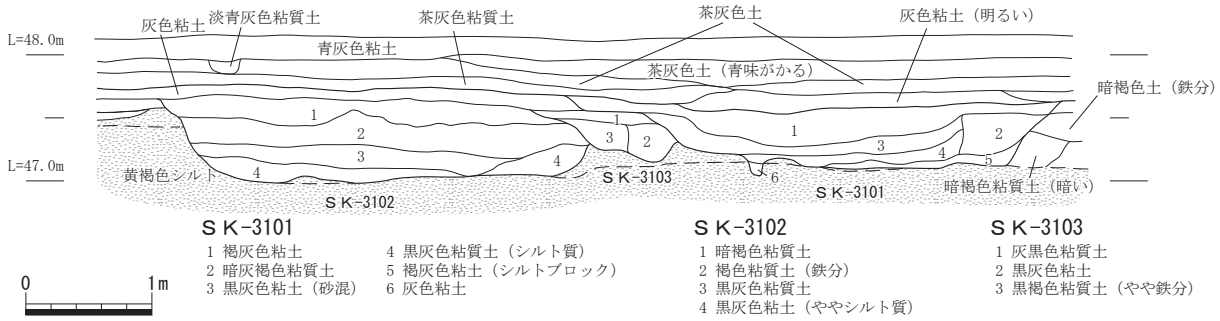
ＳＫ－2106　第２トレンチ東部で検出した土坑である。径 0.6 ｍ、深さ 0.3 ｍを測る。Ｓ



第 44 図　第 39 次調査　古墳時代中・後期調査区平面図（Ｓ＝1/300）



第 45 図　第２トレンチ　ＳＲ-2101・ＳＤ-2101・ＳＤ-2101Ｂ北壁断面図（Ｓ＝1/60）



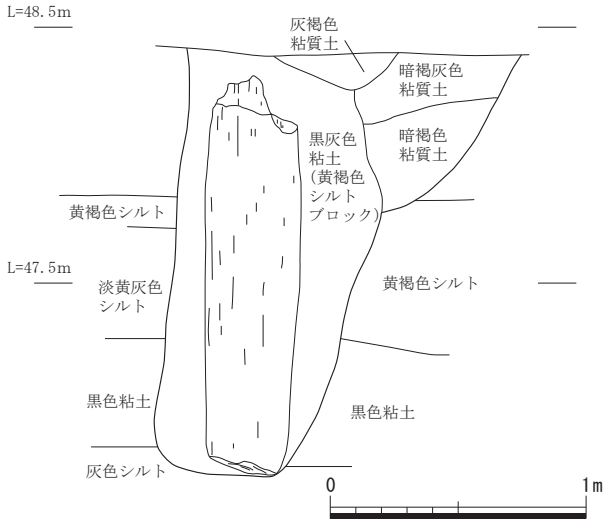
第 46 図　第３トレンチ　ＳＫ-3101・ＳＫ-3102・ＳＫ-3103 西壁断面図（Ｓ＝1/60）

Ｋ -2105 に切り負けるが、ほぼ同時期の遺構と考えられる。

古墳時代中・後期

ＳＲ -2101　　第２トレンチ中央で検出した南北方向の河跡である。幅３ｍ、深さ 0.5 ～ 0.6 ｍを測る。時期は出土土器から古墳時代後期である。

ＳＤ -3101　　第３トレンチ中央で検出した東西方向の溝である。幅 1.8 ｍ、深さ 0.5 ｍを測る。ＳＫ -3102 に切られる。



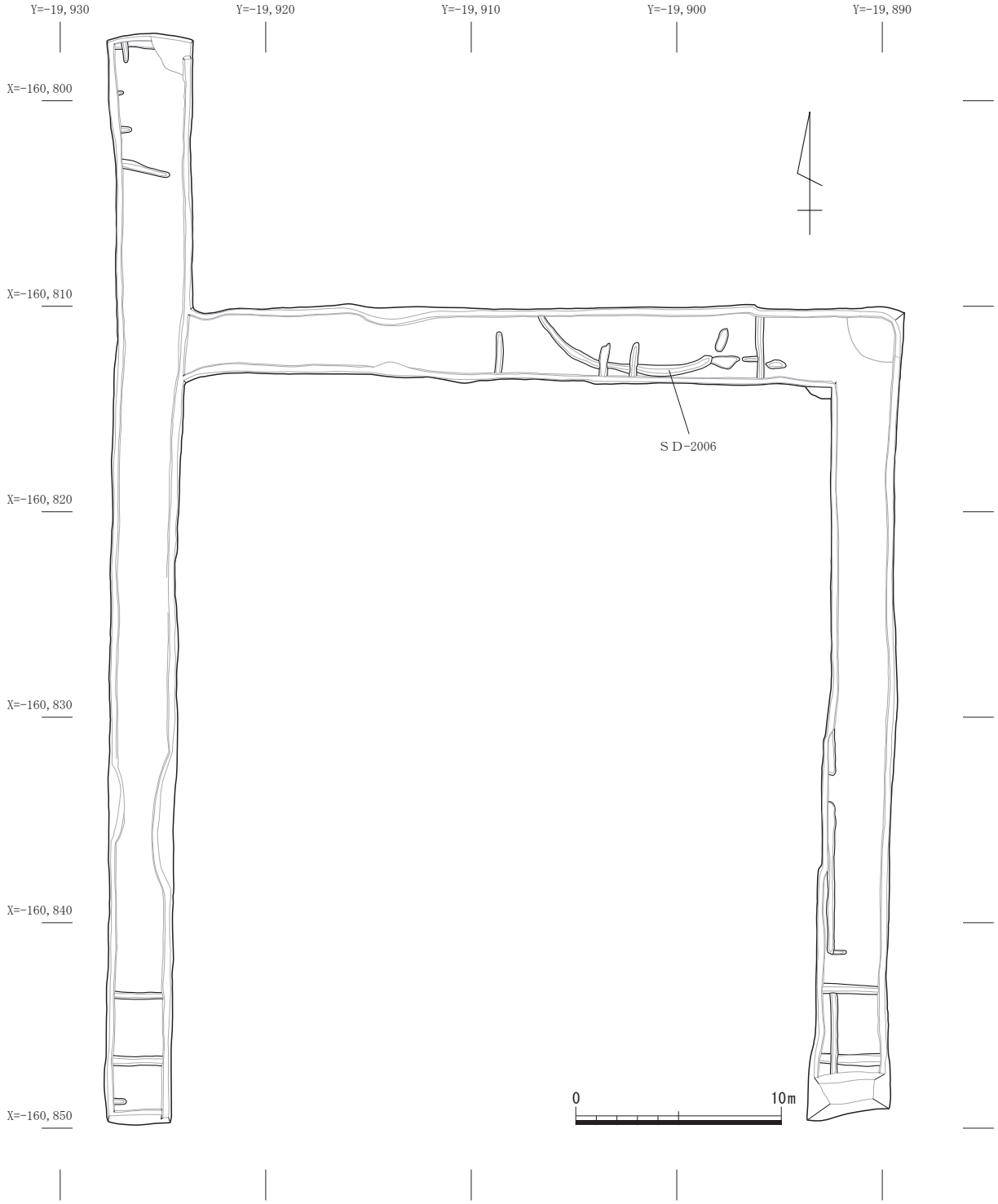
第 47 図　Pit-2107 柱出土状況図（Ｓ＝1/30）

写真 8-1　Pit-2107 柱出土状況（西から）

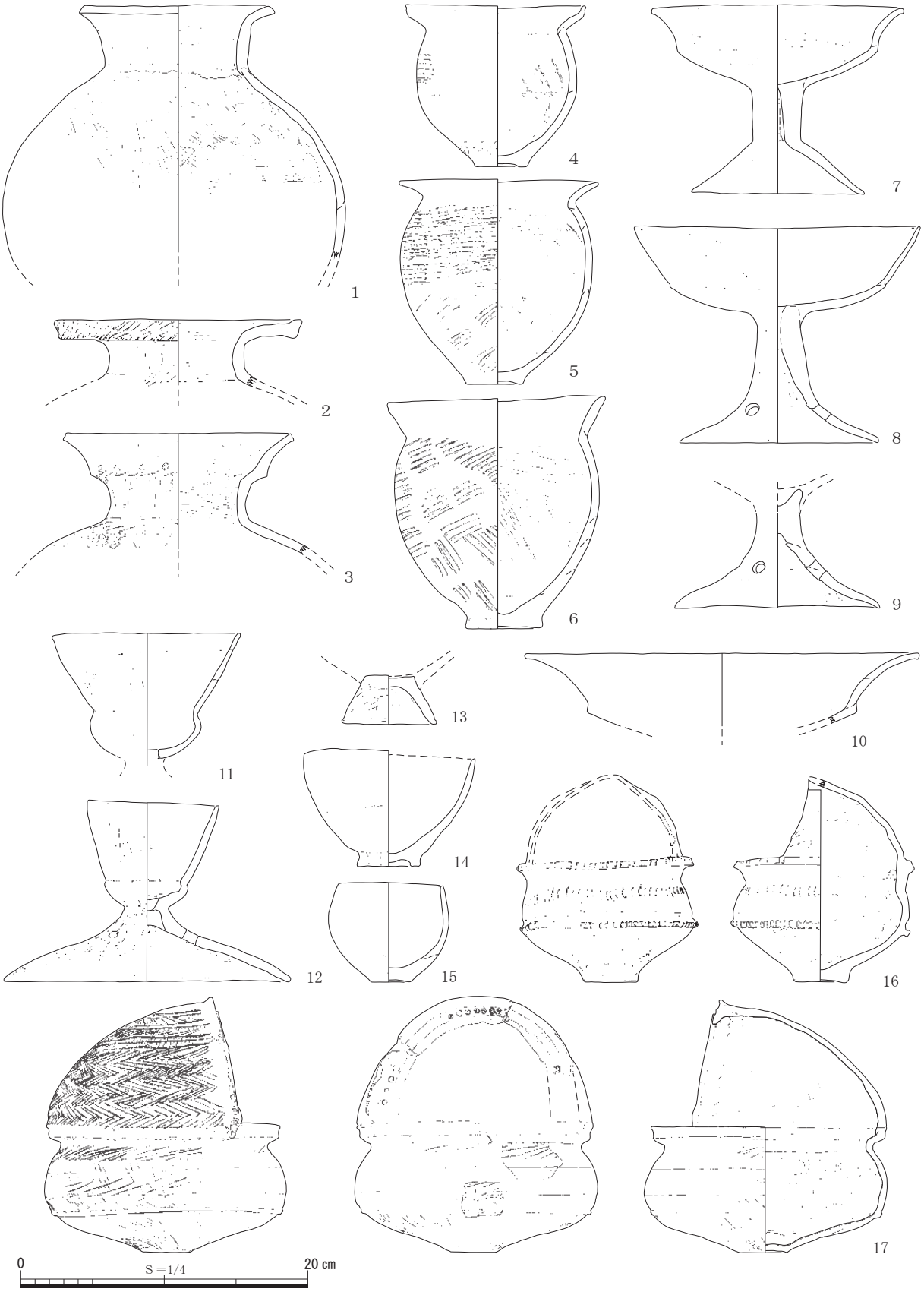
ＳＤ-3102　第３トレンチ中央で検出した東西方向の溝である。幅2.2ｍ、深さ0.5ｍを測る。時期は出土土器から古墳時代後期の遺構と考えられる。

ＳＫ-3101　第３トレンチ中央で検出した土坑である。調査区外に拡がるため正確な規模は不明。検出範囲では、幅４ｍ、深さ0.6ｍを測る。時期は出土土器から古墳時代後期の遺構と考えられる。

ＳＫ-3102　第３トレンチ中央で検出した土坑である。調査区外に拡がるため、正確な規模は不明であるが、検出範囲では、幅3.4ｍ、深さ0.6ｍを測る。主に古墳時代前期の遺物が



第48図　第39次調査　中世調査区平面図（Ｓ＝1/300）



1・2：広口壺
3：二重口縁壺
4～6：甕
7～10：高坏
11：台付小型丸底壺
12：台付小型丸底鉢
13：台付甕
14・15：鉢
16・17：手焙形土器

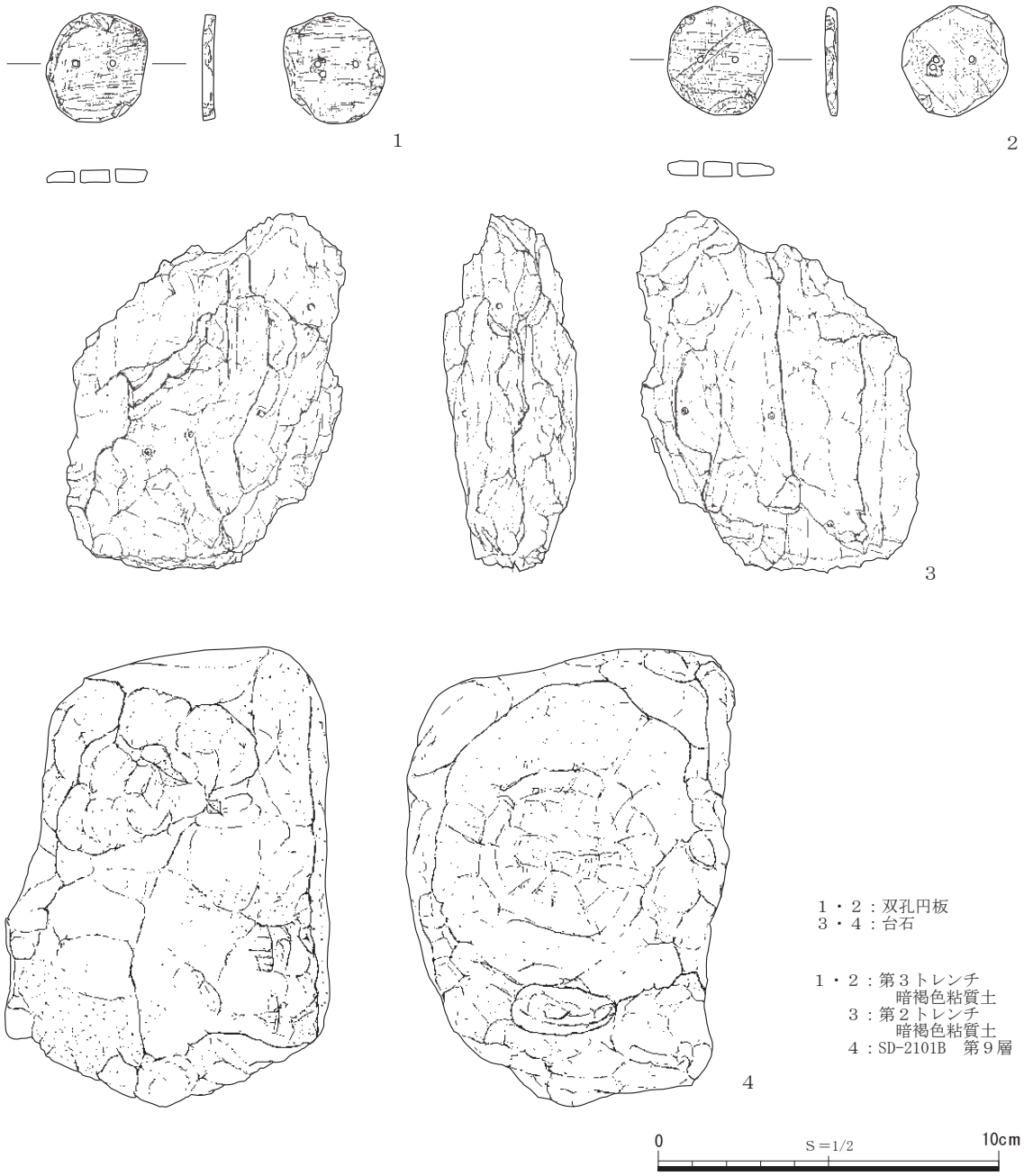
SD-2101　第２層：9
第３層：1・3～6・8・11・12・15～17
第４層：2・7・10
第５層：14
SD-2101B　第７層：13

第 49 図　ＳＤ-2101・ＳＤ-2101Ｂ出土土器

出土しているため、古墳時代前期頃の遺構と考えられるが、須恵器小片も混じる。後述のＳＫ-3103に切られる。

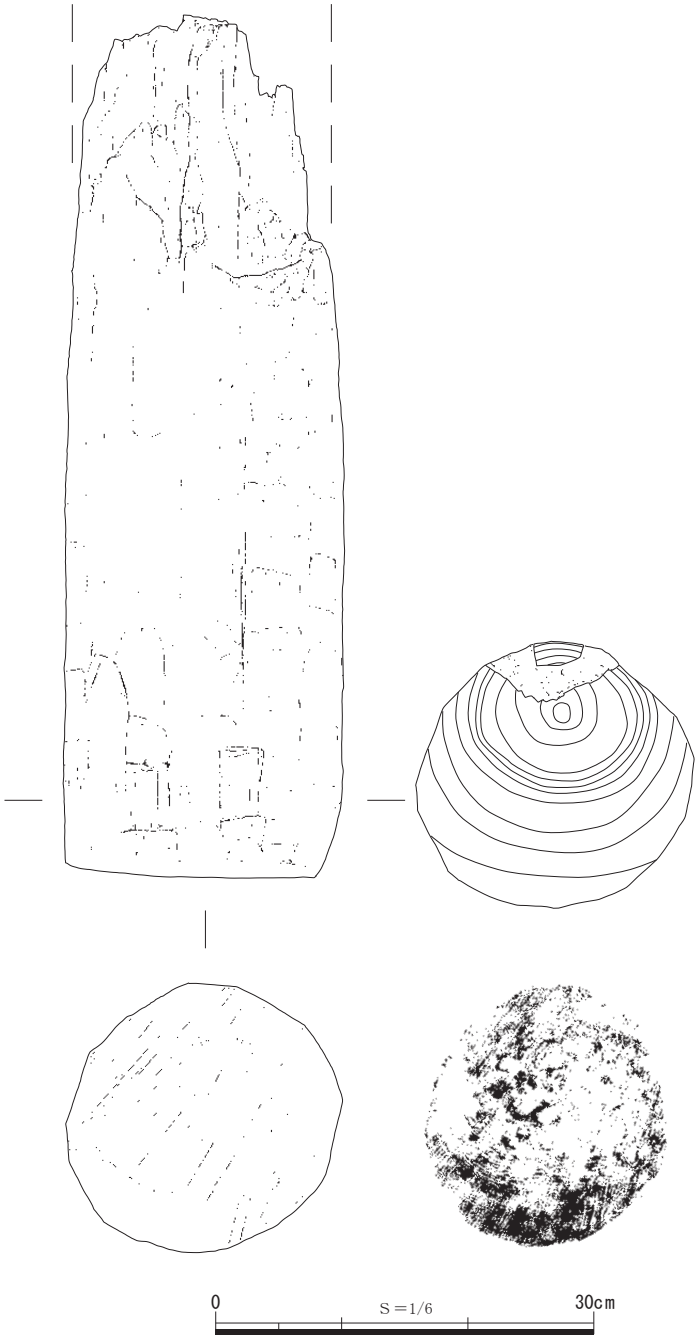
ＳＫ-3103　第３トレンチ北半で検出した土坑である。調査区外に広がるため、正確な規模は不明であるが、検出範囲では、幅１ｍ、深さ0.4ｍを測る。時期は遺物が僅少なため詳細は不明であるが、前述のＳＫ-3101に切られるため、古墳時代後期以前と考えられる。

ＳＲ-3051　第３トレンチ北東端で検出した河跡。調査区外に広がるため、幅は不明である。深さ0.6～0.7ｍを測る。遺物が僅少なため時期の特定が難しいが、須恵器片が出土していることから、古墳時代中期以降の遺構と考えられる。



第50図　出土遺物

ピット群　第１・３トレンチ北半及び第２トレンチで 200 基を超えるピットを検出した。遺構埋土の違いから、複数の時期に分かれる可能性がある。出土遺物は多くはないが、周辺遺構から弥生時代後期末～古墳時代後期頃の複数時期に分かれると考えられる。また、Pit-2107 からは径 22 ㎝、長さ 68.5 ㎝の柱が出土した（第 50 図）。ノコギリによる切断痕が残るため、古墳時代以降の遺構であると考えられるが、遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。



第 51 図　Pit-2107 出土柱

中世

小溝群　　調査区全体で検出した南北方向及び東西方向の小溝である。幅 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mを測る。中世～近世の耕作に伴う遺構であると考えられる。なお、ＳＤ -2006 は弧状に回っているが、その性格については不明である。

４．まとめ

当地は遺跡外であったが、弥生時代後期末～古墳時代後期頃にかけての土坑やピット群などを検出したことから、集落域が展開していたことが明らかとなった。第６・24・27・28 次調査で確認した墓域は、この集落に伴うものと考えられる。また、調査区北側に遺構が集中しており、ＳＲ -1101 から南側ではほぼ確認できなかった。調査区中央から南にかけて地形が落ち込んでいるため、集落域にはならなかったと考えられる。

また、令和元年５月に遺跡の異動届を県に提出し、遺跡範囲の拡張をおこなった。

写真 1-1　環濠から出土した弥生時代中期の小型土器（左）と後期の長頸壷（右）

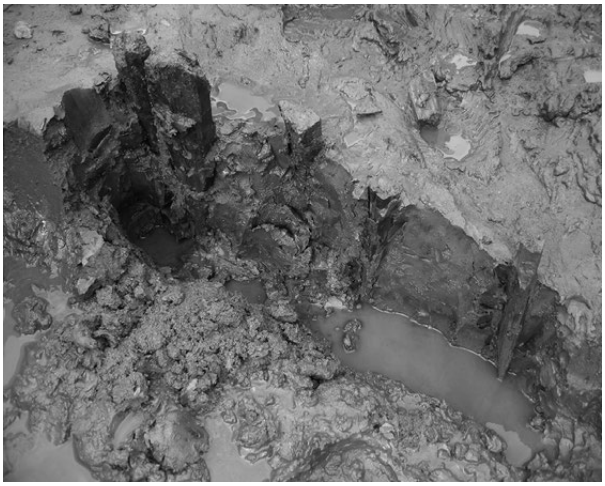


写真 1-2　ＳＤ-6152 杭列出土状況（西から）

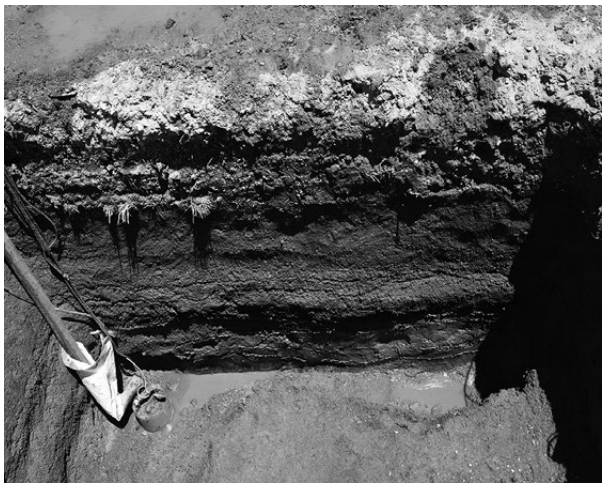


写真 1-3　第１トレンチ東壁断面（西から）

写真 1-4　第３トレンチ全景（南から）

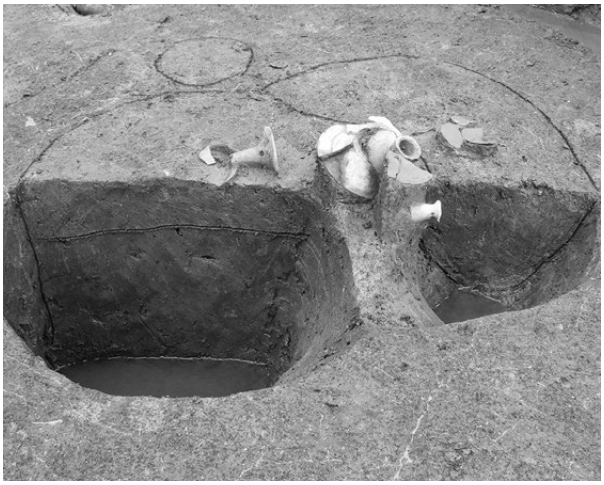


写真 10-1　Pit-2102・2103 層序と出土土器

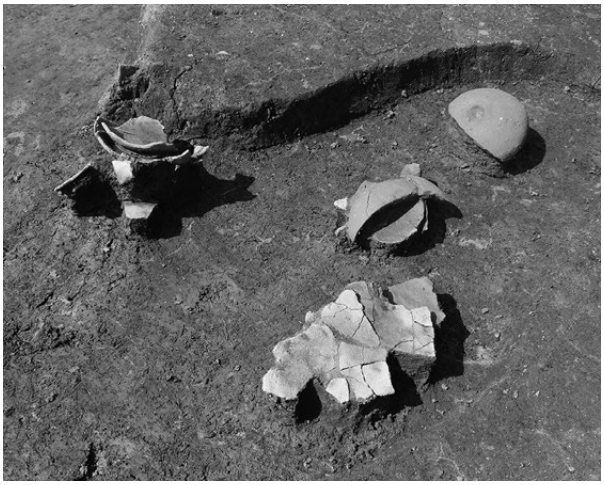


写真 10-2　古墳時代後期土器出土状況

写真 10-3　ＳＫ-1101 完掘状況（南から）

写真 10-4　ＳＫ-1152 完掘状況（東から）

写真 10-5　ＳＤ-2101 入れ子状で出土した土器

写真 10-6　ＳＫ-1153 出土状況

８．薬王寺東遺跡　第４次調査

１．既調査の概要

薬王寺東遺跡は標高約 48 mの沖積地に立地する。第４次調査は、宅地造成によって共有道路が設置される予定地に東西 19.7 ×南北 4.0 mの調査区を設定した。第４次調査地周辺では、南隣接地における試掘調査（平成８年度実施）で､弥生～古墳時代前期の河跡を検出している。また、北隣接地における第３次調査では、弥生～古墳時代前期ごろとみられる落ち込みを検出しており、本調査においても試掘調査で検出した河跡の延長を検出することが想定された。

２．調査の成果

（１）層序

Ⅰ：茶灰色土（暗青灰色粘土ブロック）〔検出標高 48.8 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：灰色砂質土〔48.4 m〕、Ⅲ：明褐色土〔48.2 m〕、Ⅳ：暗褐色土〔47.7 m〕、Ⅴ：黄褐色粘質土〔47.3 m〕、Ⅵ：暗灰色シルト〔47.2 m〕、Ⅶ：緑灰色粘砂〔47.1 m〕

第Ⅰ層の上に厚さ 0.4 m程度の改良土が盛土されている。第Ⅰ～Ⅲ層までを重機で除去し、以下を人力で掘削した。中世遺構を第Ⅳ層上面で、弥生時代の河跡（ＳＲ -101）を第Ⅴ層上面で検出した。第Ⅴ層以下は地山である。

（２）遺構と遺物

古墳時代

ＳＲ -101　　調査区の西端で検出した北北西－南南東方向の河跡である。東岸を検出した。西岸は調査区外のため規模は不明だが、幅３m以上、深さ 0.4 mである。東岸から 0.5 ～ 1.3 mにテラスがあるが、人為的な遺構ではなく河跡と考えられる。出土遺物は僅少だったが、布留式の甕片が出土したことから、古墳時代前期の遺構と考えられる。

中・近世

ＳＫ -51　　調査区の北東端で検出した円形土坑で､井戸と考えられる｡全体の 1/4 を検出した。直径 3.2 m、深さ 0.9 mである。遺物の出土は僅少であったが、後述するＳＫ -54 より上層の第Ⅳ層上面から掘りこまれていることから、他の土坑より新しい土坑と考えられる。

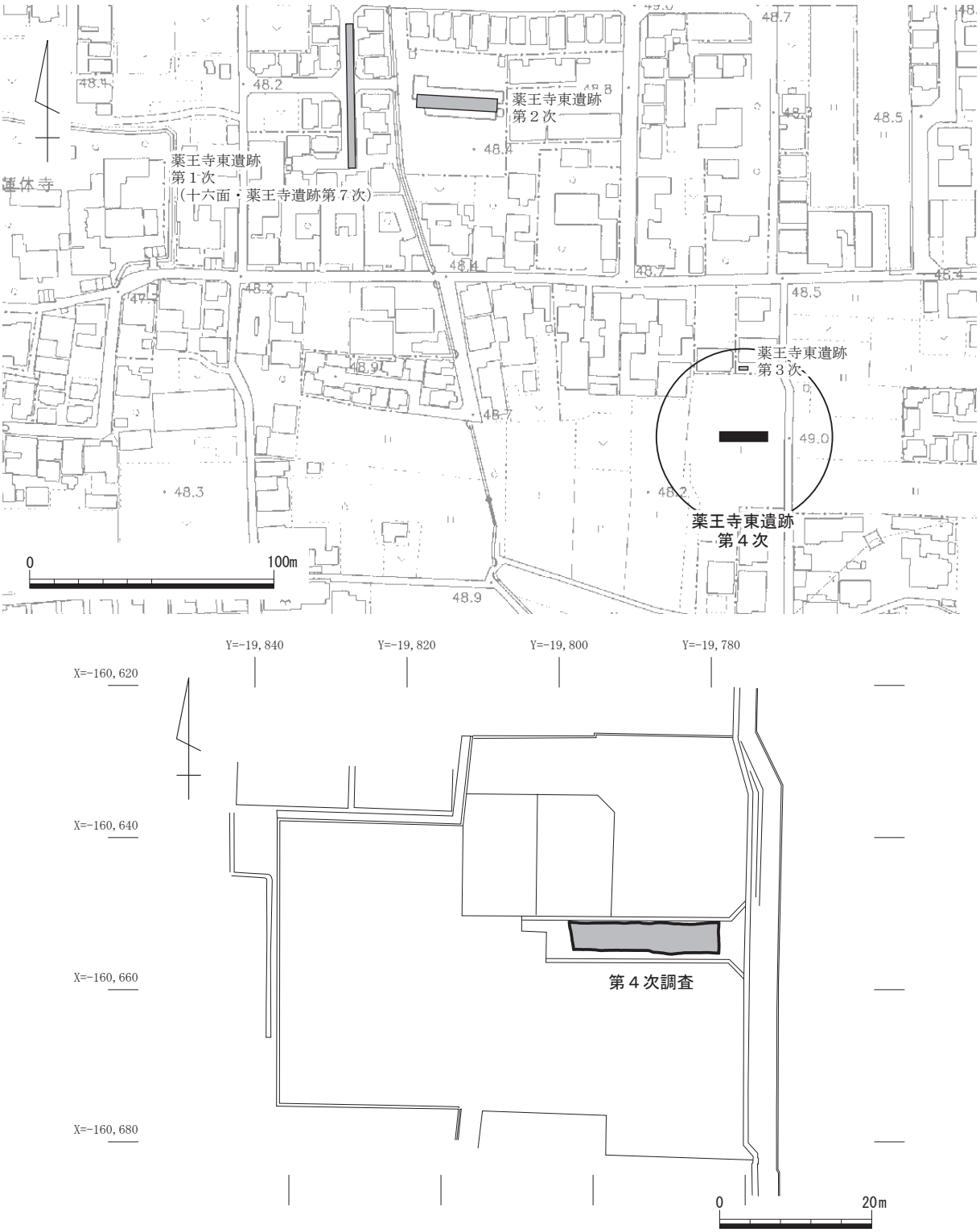
ＳＫ -52　　調査区の東部で検出した長軸 0.7 m以上、短軸 0.7 m、深さ 0.2 mの楕円形土坑である。遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明だが、埋土が灰褐色土だったことから中～近世の遺構と考えられる。

ＳＫ -53　　調査区の中央で検出した直径 1.2 m､深さ 1.0 mの円形土坑で､井戸と考えられる。遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明だが、埋土の最上層が灰褐色土だったことから中～近世の遺構と考えられる。

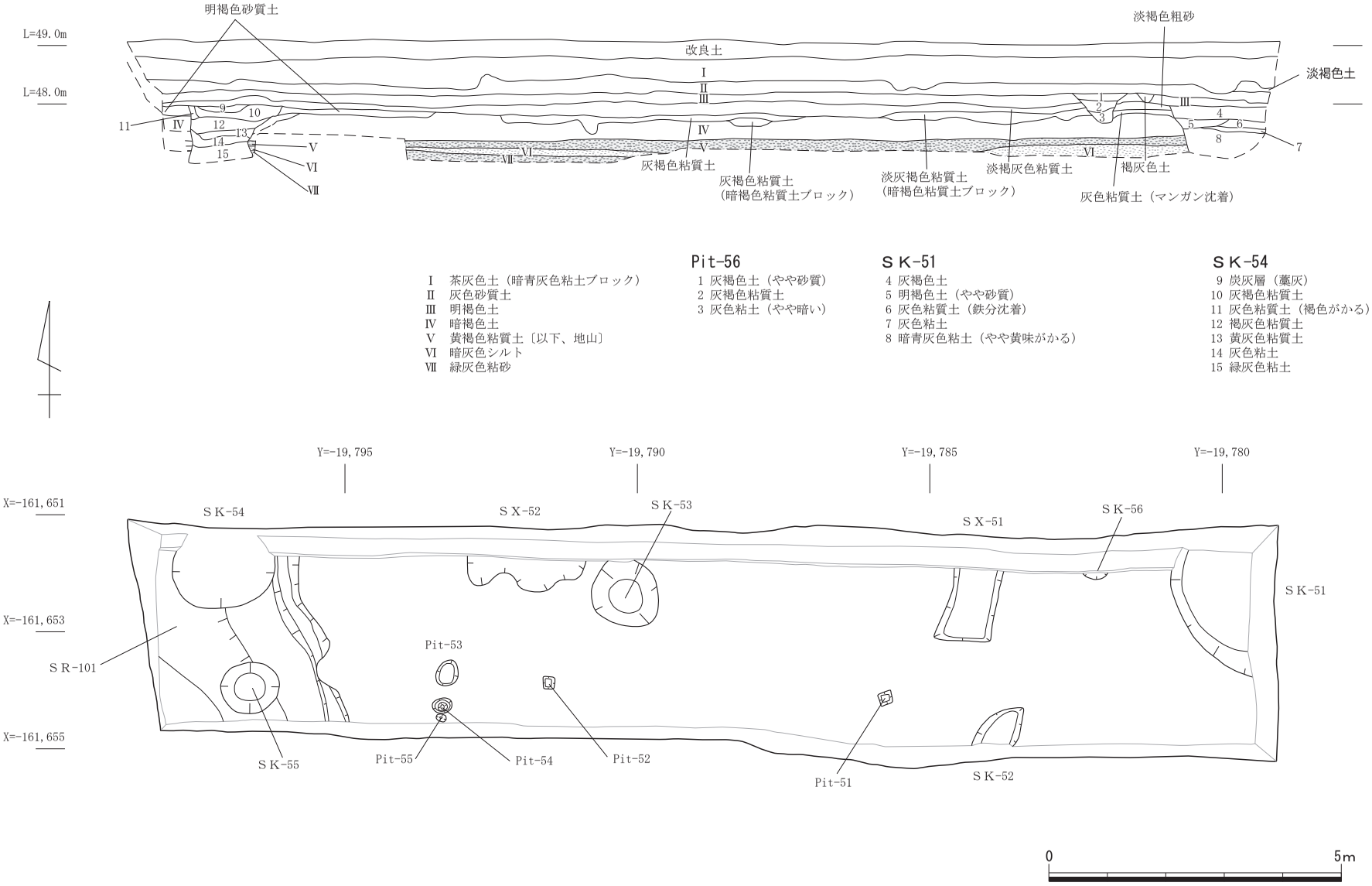
ＳＫ -54　　調査区の西端で検出した直径 1.75 m、深さ 1.0 m以上の円形土坑で、井戸と考

えられる。壁面崩落の危険があったため、途中で掘削を中止した。遺物の出土は僅少だが、埋土が灰褐色粘質土だったことから中〜近世の遺構と考えられる。当遺構の最終埋没段階に藁灰が投棄されていた。

ＳＫ-55　調査区の西端で検出した、直径1.0ｍ、深さ1.1ｍの円形土坑で、井戸と考えられる。第Ⅰ・Ⅱ段階の瓦器埦、瓦器小皿、土師器羽釜が一括投棄された状態で出土した（第55図）。



第52図　調査地位置図（上：Ｓ＝1/2,500、下：Ｓ＝1/800）



第 53 図　調査区平面図及び北壁断面図（Ｓ＝1/100）

出土遺物から、11 世紀後半～ 12 世紀初頭頃の遺構と考えられる。

ＳＫ -56　調査区の東部で検出した直径 1.0 m、深さ 0.5 mの円形土坑である。本調査では、遺構の底面を検出した。遺物の出土はなかったが、第Ⅲ層上面から掘りこまれていることから、近世の遺構と考えられる。

Pit-51　調査区の中央やや東寄りで検出した一辺 0.2 m、深さ 0.2 mの方形の小穴である。遺物の出土は僅少だが、埋土が灰褐色粘質土だったことから中～近世の遺構と考えられる。

Pit-52　調査区の中央やや西寄りで検出した一辺 0.2 m、深さ 0.1 mの方形の小穴である。遺物の出土はなかったが、埋土が灰褐色粘質土だったことから中～近世の遺構と考えられる。

Pit-53　調査区西半で検出した長軸 0.45 m、短軸 0.3 m、深さ 0.05 mの卵形の小穴である。遺物の出土はなかったが、埋土が灰褐色粘質土だったことから中～近世の遺構と考えられる。

Pit-54　調査区西半で検出した直径 0.35 m、深さ 0.17 mの円形の小穴である。遺物の出土はなかったが、埋土が灰褐色粘質土だったことから中～近世の遺構と考えられる。

Pit-55　調査区西半で検出した長軸 0.15 m、短軸 0.1 m、深さ 0.6 mの円形の小穴である。遺物の出土はなかったが、埋土が灰褐色粘質土だったことから中～近世の遺構と考えられる。

ＳＸ -51　調査区北端東部で検出した幅１m前後、深さ 0.1 m前後の遺構である。検出時の平面形は長方形状であるが、後述する SX-52 と同様の性格の不整形の落ち込み状の遺構とみられる。北側は調査区外に拡がるため正確な規模は不明。堆積土が灰色粘質土だったことから、中～近世の遺構と考えられる。

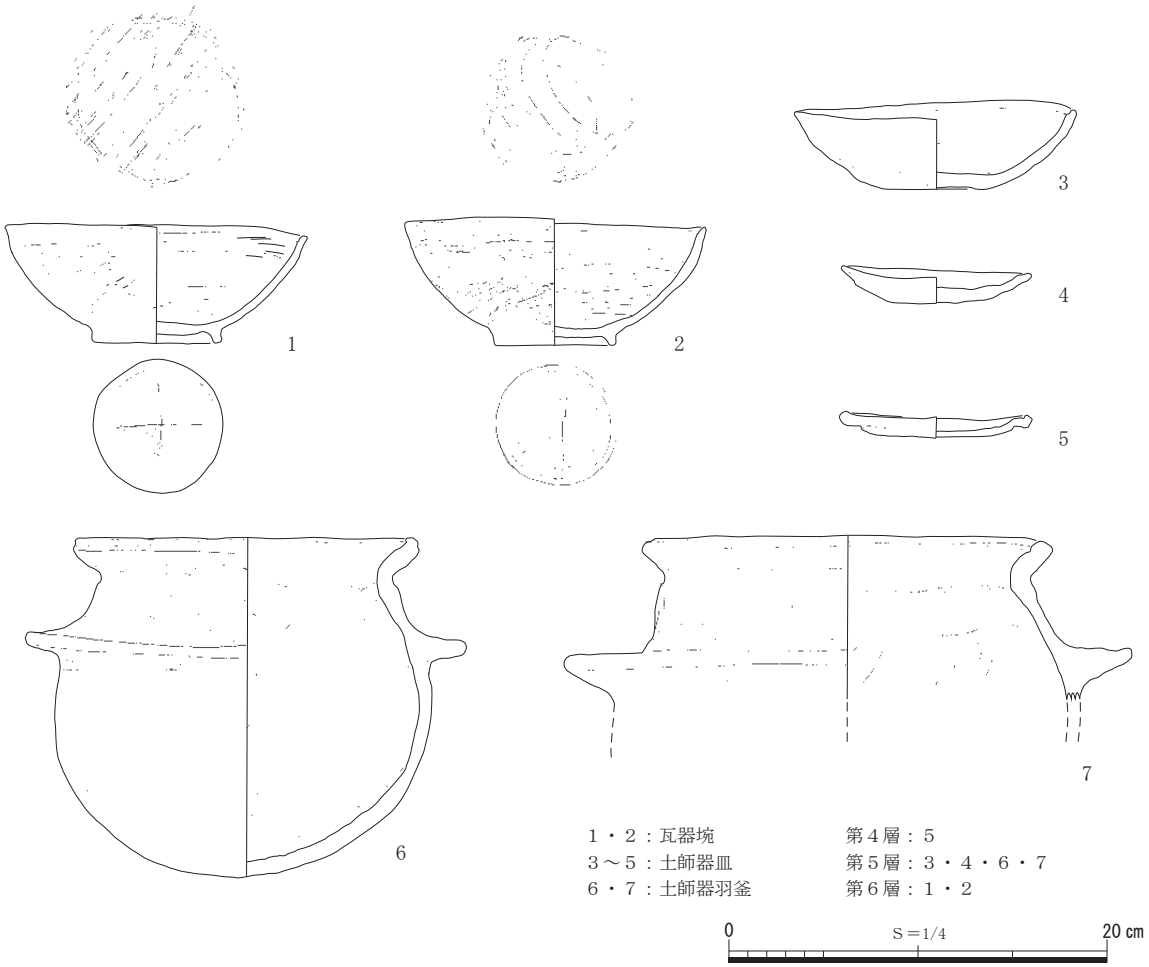
ＳＸ -52　調査区の北端西側で検出した東西２m、深さ 0.2 mの不整形の遺構である。調査区外に拡がるため正確な規模は不明。堆積土が灰褐色粘質土であることから中～近世の遺構と考えられる。

第 54 図　調査地周辺小字図（Ｓ＝1/4,000）

３．まとめ

本調査では、布留式期にさかのぼる可能性がある河跡（ＳＲ -101）を検出した。これは、平成８年度に実施した試掘調査で検出された河跡と同一のものと考えられる。また、周辺の調査では中世の生活遺構は希薄だったが、本調査では、井戸を複数検出した。調査地の小字は「卒都波堂」であり、周辺に「石仏」「東阿弥陀」「北阿弥陀」「神宮」などがみえ、寺院等の存在が推定される。また、鎌倉時代の『永楽寺氏人結衆等田地売券案』〔弘長３（1263)〕に書かれ

ている永楽寺・笛堂に関連すると考えられる小字名「笛ノ垣内」「北笛ノ垣内」「東笛ノ田」が本調査地の南にあり、現在では廃寺となっている「永楽寺」関連の施設が展開していた可能性が高い。



第 55 図　ＳＫ-55 出土土器

写真11-1　調査区全景（東から）

写真11-2　ＳＫ-55出土状況

９．薬王寺南遺跡　第３次調査

１．既調査の概要

薬王寺南遺跡は、田原本町の中央部、標高 49 m前後の沖積地に立地する。遺跡の中を筋違道が通り、西側には十六面・薬王寺遺跡、北側には薬王寺東遺跡が隣接する。これら周辺の調査では古墳時代～中世の遺構を検出している。昨年度に実施した薬王寺南遺跡　第２次調査では弥生時代後期の土坑や溝等を検出した。しかし、本遺跡は調査数が少なく調査面積も小さいため、遺跡の内容はまだ不明な点が多い。

今回、遺跡南東部で個人住宅の建築に伴い、東西３×幅２ｍの調査区を設定した。

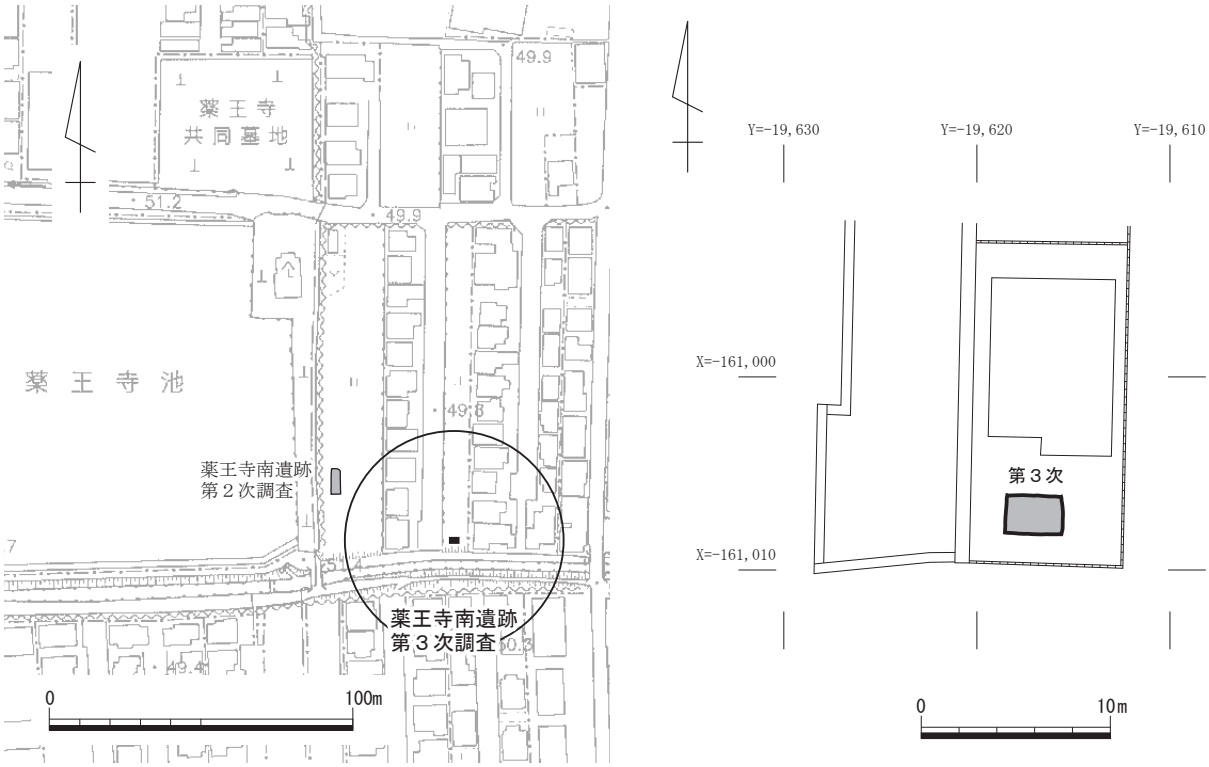
２．調査の成果

調査の結果、遺構は検出できなかった。全体が粘土堆積であり、調査区全体が地形的な落ち込みの中にあたると考えられる。遺物も出土しなかった。

（１）層序

Ⅰ：淡褐色砂〔検出標高 49.95 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：暗青灰色粘質土〔49.6 m〕、Ⅲ：暗褐色土〔49.4 m〕、Ⅳ-1:暗青灰色粘土（黒みがかる）〔49.3 m〕、Ⅳ-2:暗青灰色粘土〔49.1 m〕、Ⅴ：灰色粘土〔48.9 m〕、Ⅵ：淡黄灰色粘土（ややしまる）〔48.8 m〕

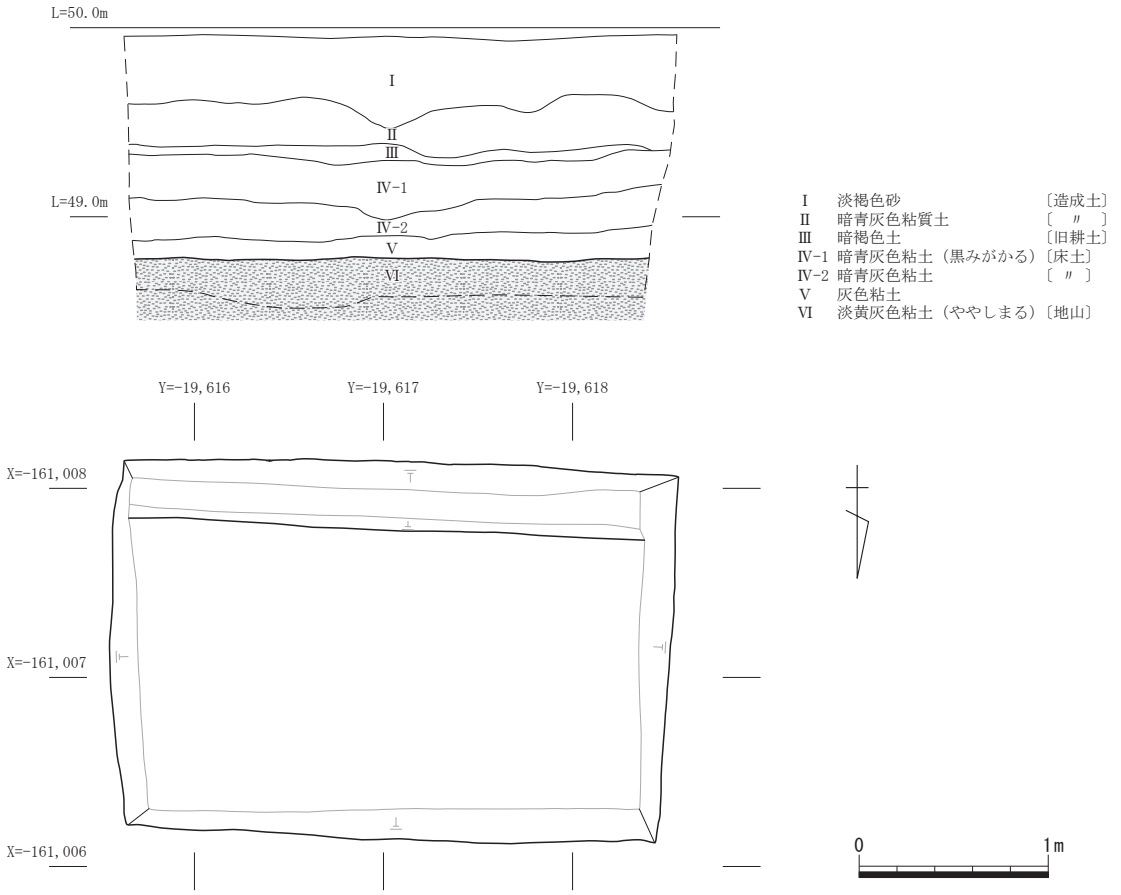
第Ⅰ・Ⅱ層は造成土、第Ⅲ層は旧水田耕土、第Ⅳ-1・2 層は旧水田床土、第Ⅵ層は地山である。



第 56 図　調査地位置図（左：S＝1/2,500、右：S＝1/400）

３．まとめ

今回の調査では、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。西に約 40 m離れた第２次調査では弥生時代後期の土坑や溝等を検出しており、本調査区とは様相が異なるため、第２次調査地と第３次調査地の間に生活域の境界が存在する可能性が考えられる。今後、遺跡範囲や集落域について調査を進めていく必要がある。



第 57 図　調査区平面図および南壁断面図（Ｓ＝1/40）

写真 12-1　完掘状況（西から）

写真 12-2　埋め戻し後（北西から）

10. 西竹田遺跡　第５次調査

１．既調査の概要

西竹田遺跡は、田原本町の西部、標高 46 m前後の沖積地に立地する。付近には、古墳時代中・後期や古代の集落、古代頃の水田跡、中世居館跡等を検出している十六面・薬王寺遺跡、古墳時代前期の竪穴住居と中・近世の屋敷地を検出している金剛寺遺跡等が分布する。

西竹田遺跡は、飛鳥川の東に隣接する現西竹田集落周辺に位置する。この西竹田集落は環濠集落の痕跡を残す近世以来の集落で、中世にさかのぼる可能性も考えられる。

第１～４次調査は現西竹田集落内を中心に実施してきた。また、試掘調査もおこなっており、鎌倉時代・室町時代・江戸時代の集落遺構を検出している。遺跡北東端でおこなった第４次調査では、方墳の可能性がある古墳時代中期の溝、平安時代の井戸等を検出している。

今回、西竹田遺跡西端で宅地造成に伴い、東側共用道路部分（第１トレンチ）と西側擁壁部分（第２トレンチ）に調査区を設定した。第１トレンチは南北 58 ×幅 3.5 m、第２トレンチは南北 61 ×幅 1.2 mである。

２．調査の成果

調査地は水田であったが、調査区周辺を除き工事に伴う造成土が盛られていた。

（１）層序

ここでは第１トレンチの層序を示す。

Ⅰ:暗青灰色粘土〔検出標高 44.75 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ:暗青灰色粘質土〔44.7 m〕、Ⅲ:淡褐色土〔44.6 m〕、Ⅳ：暗褐色粘質土〔44.3 m〕

第Ⅰ・Ⅱ層は水田耕土・床土、第Ⅲ層は中世遺物包含層、第Ⅳ層は古墳時代遺物包含層である。調査では、第Ⅳ層上面までを重機により掘削し、遺構の検出をおこなった。

（２）遺構と遺物

第１トレンチ

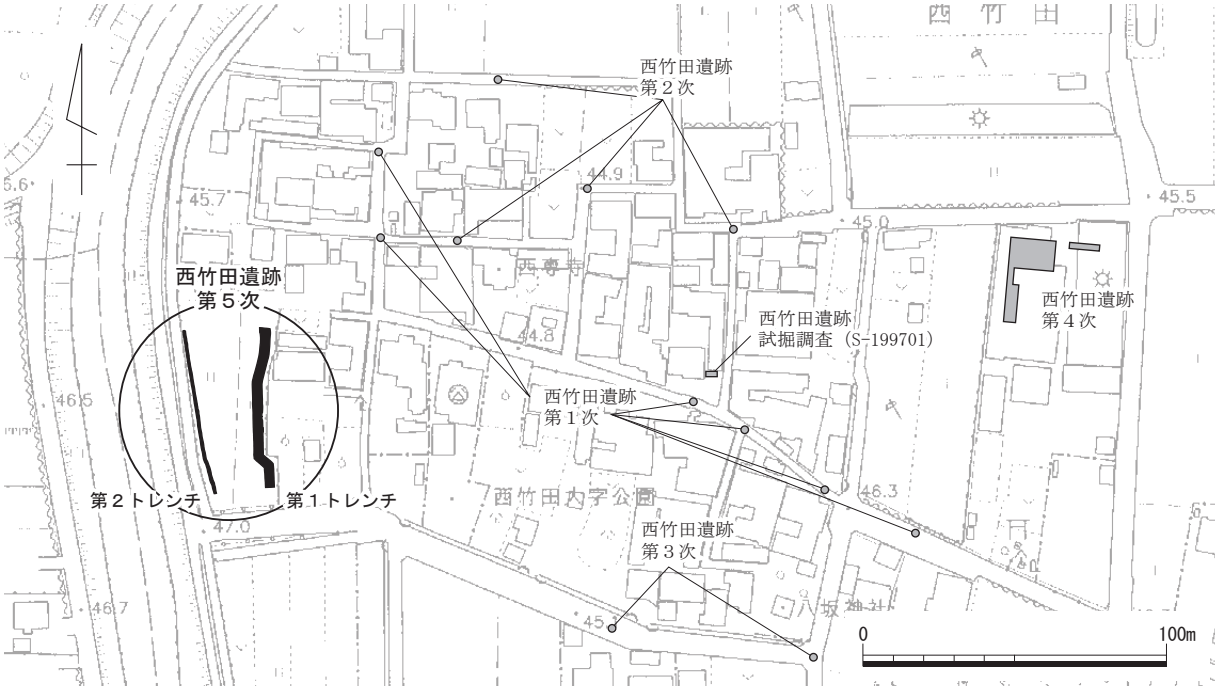
弥生時代

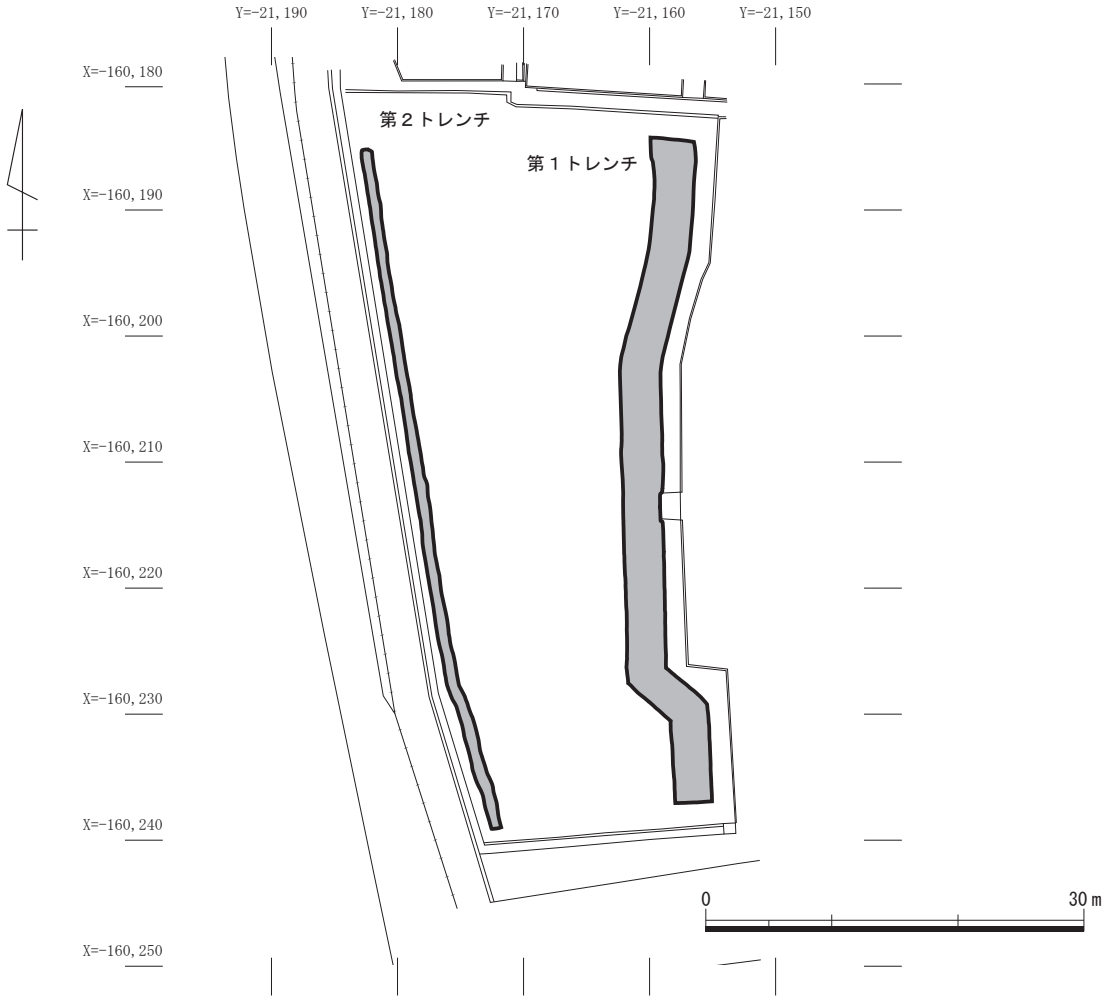
ＳＤ-1101　調査区中央で検出した北西－南東方向の溝である。幅 1.2 m、深さ 0.2 mを測る。時期は弥生時代とみられる。

ＳＫ-1102　調査区南端で検出した不定形の土坑である。東半は調査区外となる。長軸 1.7 m、短軸 1.6 m、深さ 0.25 mを測る。遺物は僅少であるが、弥生土器小片が出土した。

古墳時代前期

ＳＫ-1103　調査区南端で検出した平面円形の井戸である。断面は漏斗状を呈し、上面で径 1.7 m、深さ 1.2 mを測る。中層から、ほぼ完形品の壷を含む庄内式の土器がまとまって出土した（第 63 図）。１・２は直口壷である。１は口縁部を欠くが、ほぼ完形である。底部はやや





第 58 図　調査地位置図（上：S＝1/2,500、下：S＝1/600）

尖り気味の丸底を呈する。２は小形品で、胴部上半と最大径付近は赤みがかった褐色の胎土、その間の胴部中央は白っぽい胎土であり、異なる粘土の混和が進んでいないものを用いている。また、最大径付近を中心とした胴部、底部底面には格子目状の圧痕が残っており、布圧痕の可能性がある。胴部中央に径２㎜の小円孔があるが、人為的なものか判断できない。３は甕口縁～胴部上端部の破片である。調整は、外面がタタキ、内面がケズリである。４・５は高坏である。４の頂部には放射状の刻みを施し、その中心部は径３㎜の小孔が残る。５の脚接合部の中央には、径３㎜の小孔が残る。６は小型器台である。坏部と脚部は穴が貫通する。時期は古墳時代初頭である。

中・近世

ＳＤ-1054　調査区全域で南北方向の大溝を検出した。北端と南端は東へ直角に屈曲しており、何らかの施設を囲む溝であったとみられる。南北方向溝は東半が調査区外となる。南端東西溝では幅 4.1 ｍ、深さ 1.1 ｍを測るが、北端東西溝では幅 1.9 ｍ、深さ 0.3 ｍとなる。北半と南半で漸次的に規模が変わるが、理由は明らかでない。時期は平安～鎌倉時代である。

ＳＤ-1053　調査区中央で検出した東西方向の大溝である。断面は逆台形を呈し、幅 2.2 ｍ、深さ 0.9 ｍを測る。前述のＳＤ-1054 が埋没した後に掘削された。時期は平安～鎌倉時代である。

ＳＫ-1051　調査区北端で検出した平面不正方形の井戸である。長軸 1.5 ｍ、短軸 1.2 ｍを測る。安全の為、深さ 1.5 ｍで掘削を止めている。前述のＳＤ-1054 が埋没した後に掘削された。時期は鎌倉～室町時代である。

ＳＫ-1052　調査区中央で検出した平面円形の土坑である。断面は逆台形を呈し、径 1.8 ｍ、深さ 0.9 ｍを測る。前述のＳＤ-1054 が埋没した後に掘削された。時期は鎌倉時代である。

ＳＫ-1053　ＳＫ-1052 の西側で隣接して検出した平面楕円形の土坑である。長軸 1.5 ｍ、短軸 0.6 ｍ、深さ 0.1 ｍを測る。土師器皿１点が出土した。前述のＳＤ-1054 が埋没した後に掘削された。上記の土師器皿から、時期は鎌倉時代であろう。

ＳＫ-1054　調査区北端で検出した平面円形の土坑である。断面はほぼ長方形を呈し、長軸 2.1 ｍ、短軸 1.7 ｍ、深さ 0.8 ｍを測る。前述のＳＤ-1054 が埋没した後に掘削された。時期は鎌倉時代である。

第２トレンチ

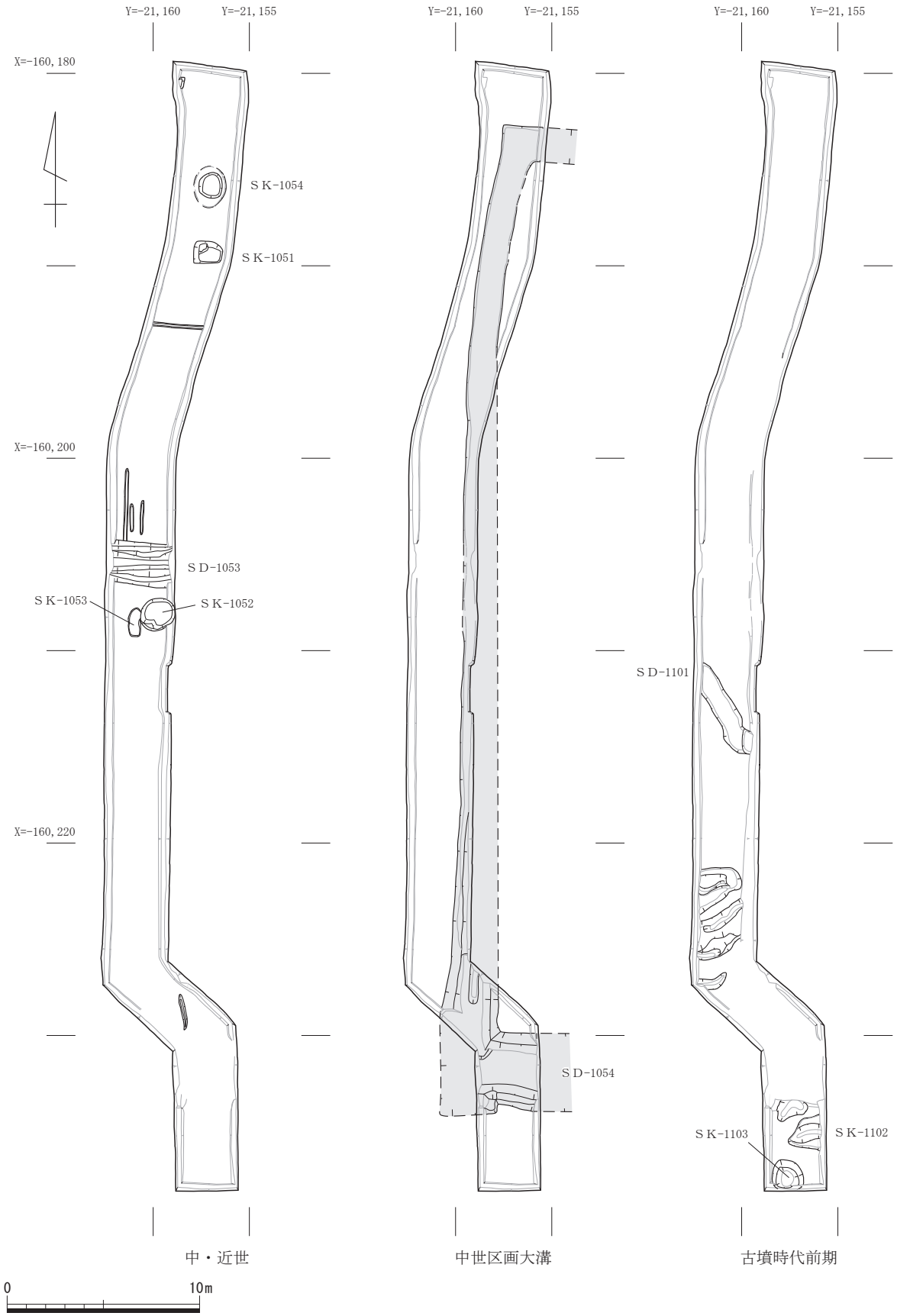
時期不明

ＳＲ-2101　調査区南端で検出した南東－北西方向の河跡である。調査区が狭小なため正確な規模は不明だが、推定幅 7.0 ｍ、深さ 1.1 ｍ以上を測る。

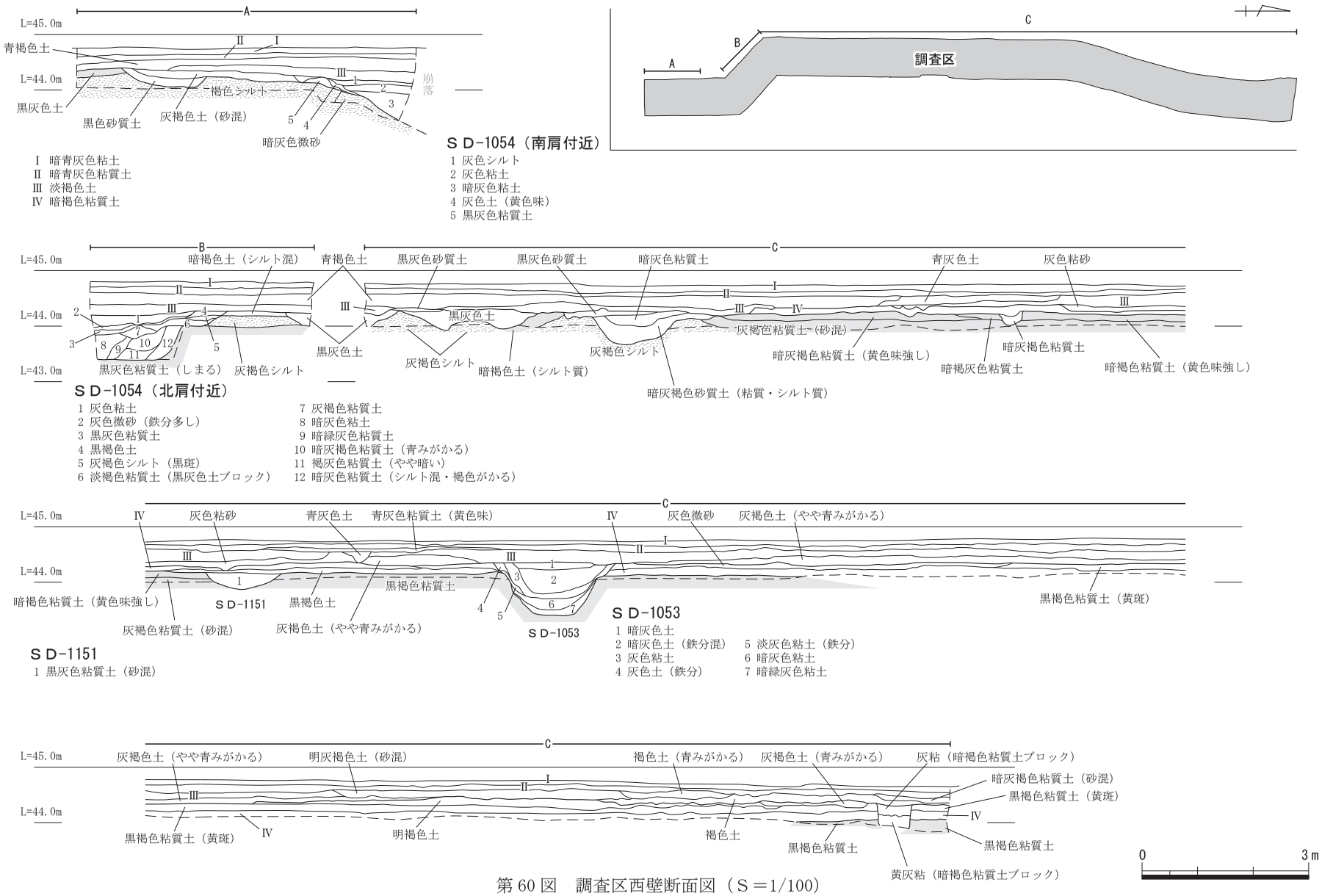
弥生時代～古代

ＳＤ-2101　調査区北半で検出した北北東－南南西方向の大溝である。幅 2.5 ｍ、深さ 0.85 ｍを測る。時期は弥生時代後期～古墳時代初頭である。

ＳＤ-2102　調査区南半で検出した東西方向の溝である。幅 0.5 ｍ、深さ 0.1 ｍを測る。時期は弥生時代～古代頃である。

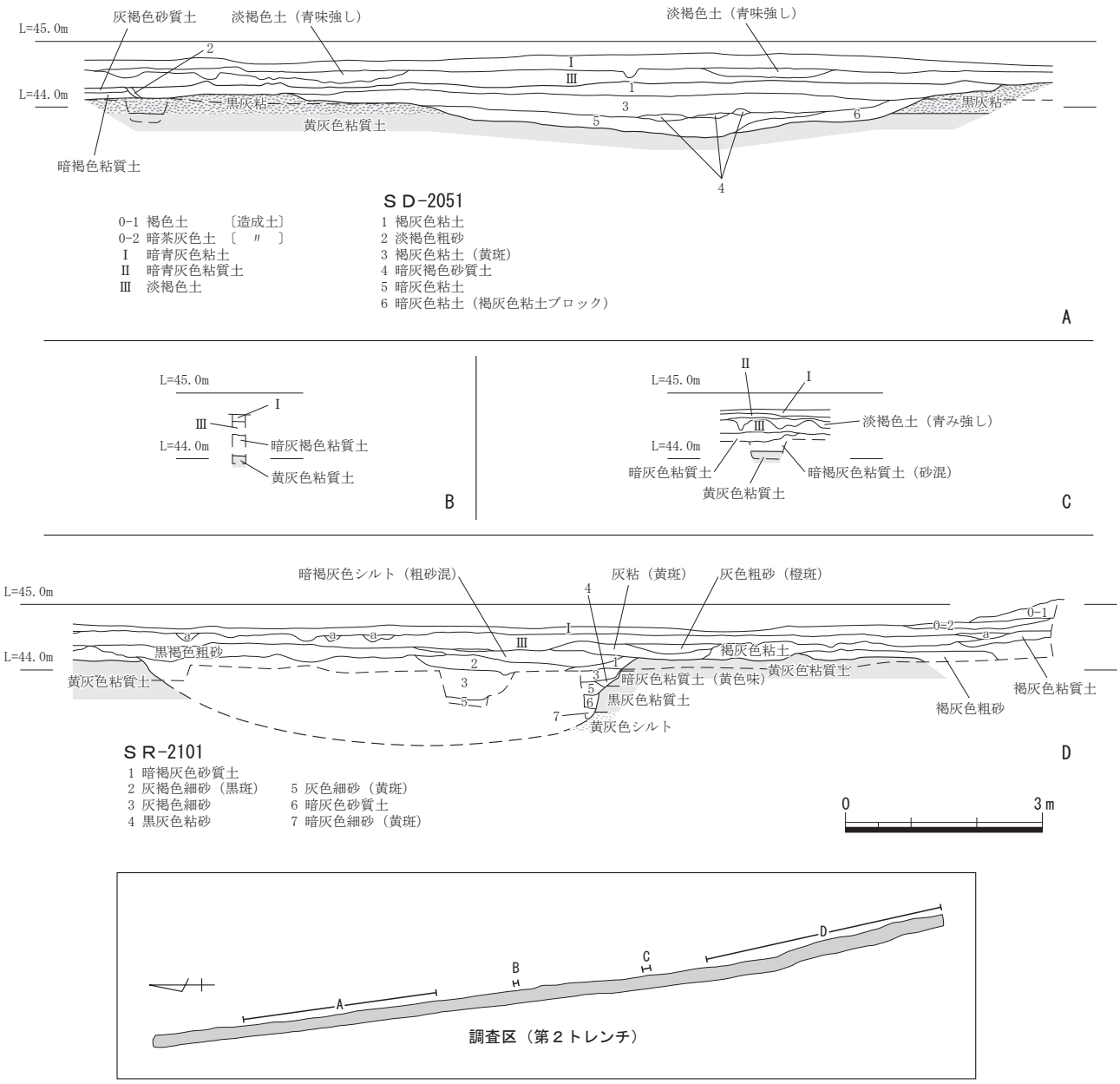


第 59 図　第 1 トレンチ　調査区平面図（S＝1/300）



第 60 図　調査区西壁断面図（Ｓ＝1/100）

第 61 図　第２トレンチ調査区平面図（Ｓ＝1/300）



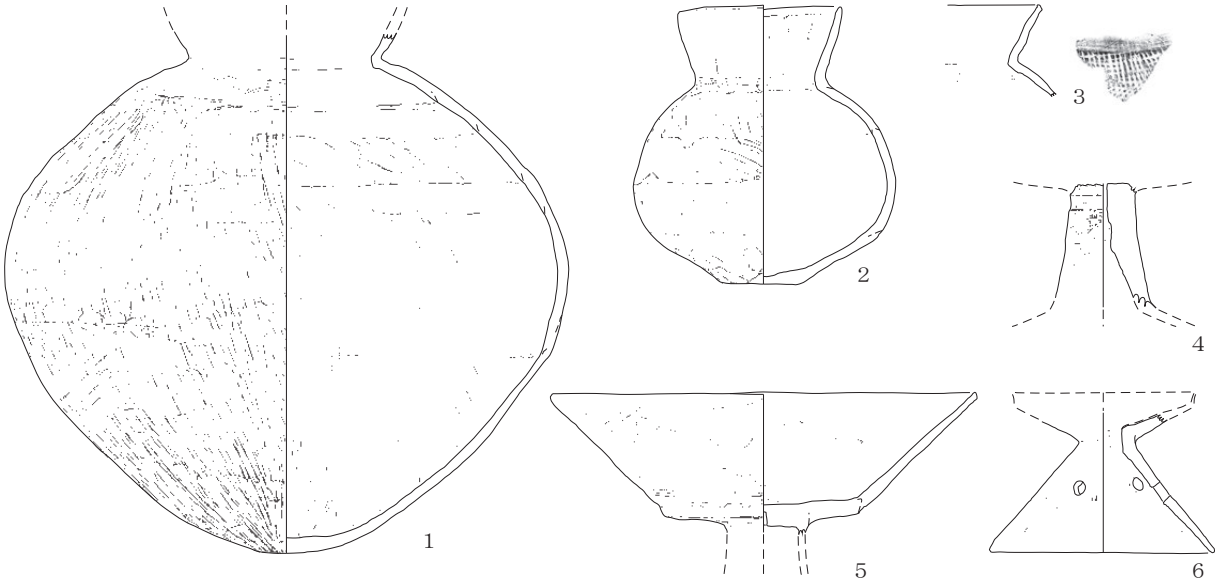
第 62 図　第２トレンチ　東壁断面図（Ｓ＝1/100）

３．まとめ

今回の調査では、弥生時代～古墳時代初頭・中世の遺構を確認した。

古墳時代初頭の井戸から土器が一括出土した。これまで、当該時期の遺構は西竹田遺跡ではほとんど検出しておらず、集落の解明に向けた貴重な成果である。また、本調査地から東へ 250 m程離れた第４次調査地では、古墳時代中期の方墳を検出しており、土地利用の変遷についても考えていく必要がある。

中世では、大溝や土坑を検出した。特にＳＤ-1054については、調査地が小字「道仙寺」であり、また東側に「垣内」「中垣内」といった小字が隣接することから、屋敷地や寺院を囲む溝であった可能性が考えられる。



1～3：直口壷　　第2層：3
4・5：高坏　　第4層：1・2・4～6
6：小型器台

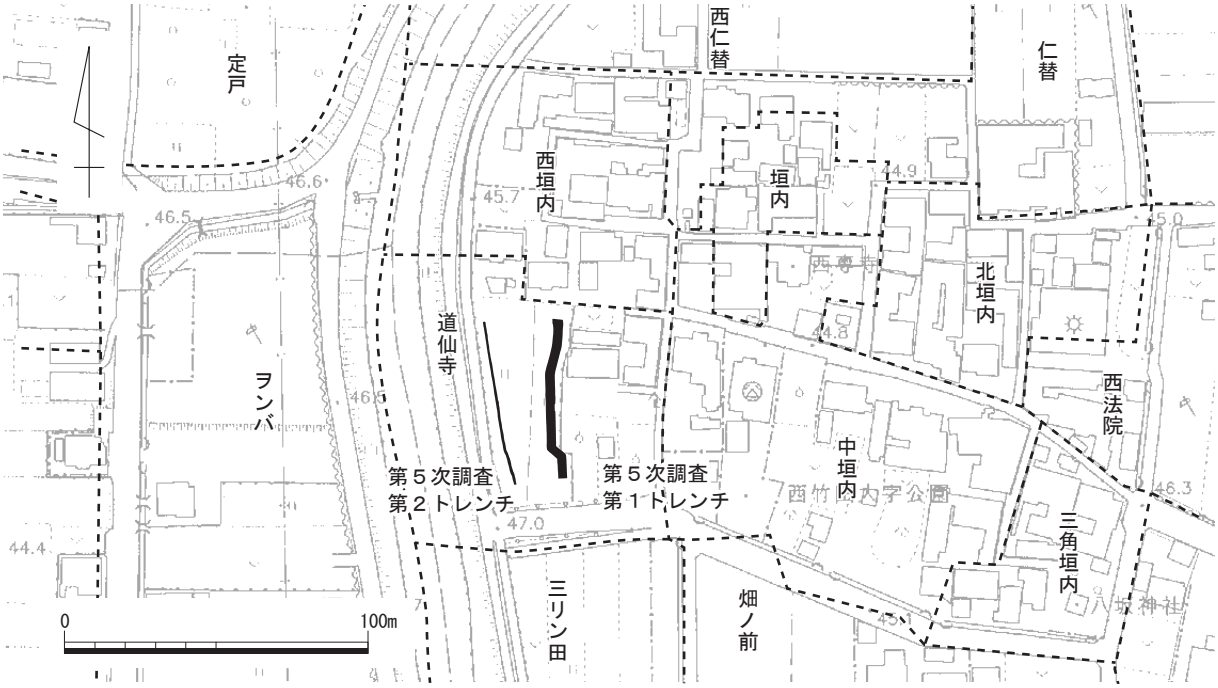
0　S＝1/4　20 cm

第 63 図　ＳＫ-1103 出土遺物

写真 13-1　ＳＫ -1103　出土状況（北から）

写真 13-2　ＳＫ -1103　出土土器

第２トレンチ南端では、時期不明の河跡を検出した。詳細は不明であるが、調査地西側に現飛鳥川があることから、飛鳥川の旧流路となる可能性もある。



第 64 図　調査地周辺小字図（Ｓ＝1/2, 500）

写真 14-1　第１トレンチ　完掘状況（南から）

写真 14-2　ＳＤ-1054　完掘状況（北西から）

写真 14-3　第２トレンチ　完掘状況（南から）

写真 14-4　ＳＤ-2151　完掘状況（北から）

11．佐味遺跡　第５次調査

１．既調査の概要

佐味遺跡は、田原本町の西部、標高 46 m前後の沖積地に立地する。これまでの調査で、弥生時代中期の集落や方形周溝墓、古代の建物跡、中世の居館跡等が確認されている。特に室町～戦国時代には、箸尾氏配下の佐味氏が拠点としていた「佐味城」が付近にあったとされる。

遺跡東部で実施した第４次調査では、弥生時代中期の集落とその南端を区画する溝を検出し、当該時期の集落域を初めて確認した。「中佐味」の東隣接地である小字「アテノ木」南端で実施した第２次調査では、屋敷地南端を囲うとみられる室町時代後期頃の溝を検出している。ただし、史料に見える佐味城との関連は明らかでない。

今回、佐味遺跡北端で農道改良工事に伴い、農道部分に南北 64 ×幅３ｍの調査区を設定した。

２．調査の成果

調査地は小字「アテノ木」の東辺部に当たり、第２次調査の調査成果に見られる溝と同様に中世の屋敷地を囲む溝が検出されると予想された。

（１）層序

Ⅰ：暗青灰色粘質土〔検出標高 48.3 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：暗青灰色土（黄斑）〔48.15 m〕、Ⅲ：褐色土（青みがかる）〔48.05 m〕、Ⅳ：褐灰色土（やや粘質）、〔47.9 m〕、Ⅴ：灰褐色土〔48.8 m〕、Ⅵ:暗褐色土（ハード、灰色粘土混）〔48.7 m〕、Ⅶ:黒灰色粘土（黄斑）〔48.6 m〕、Ⅷ:暗灰褐色粘土〔48.3 m〕、Ⅸ:淡黄褐色粘質土〔48.15 m〕、Ⅹ:黄褐色シルト〔47.88 m〕、Ⅺ：黒灰色粗砂〔47.7 m〕

第Ⅰ・Ⅱ層は水田耕土・床土、第Ⅴ層は中世遺物包含層、第Ⅸ層以下は地山である。調査では、第Ⅵ層上面までを重機により掘削し、遺構の検出をおこなった。

（２）遺構と遺物

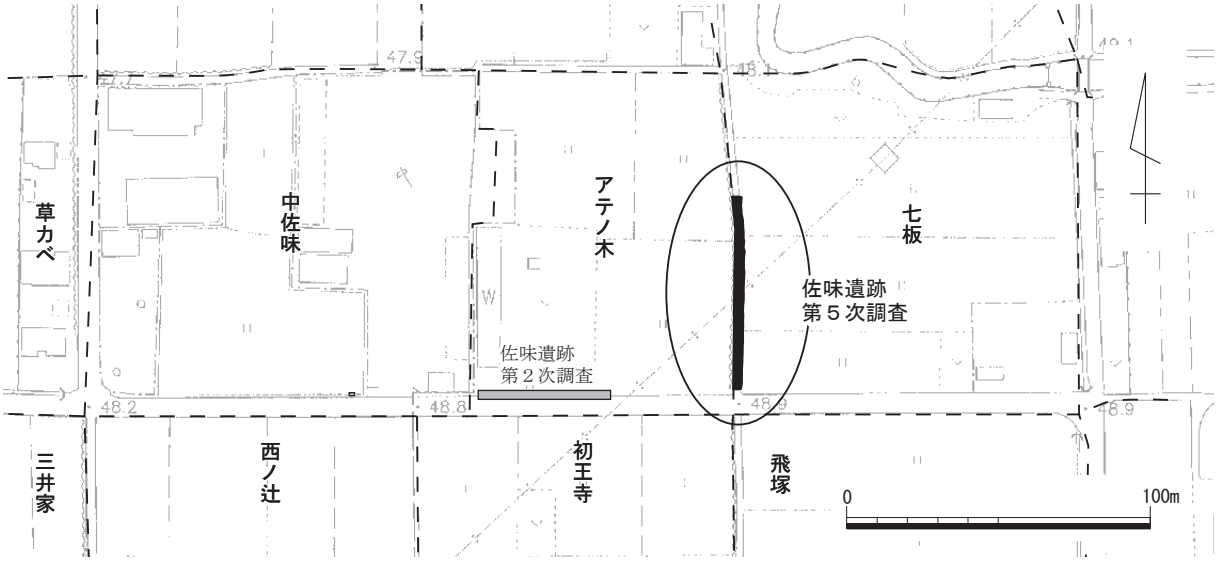
古代？

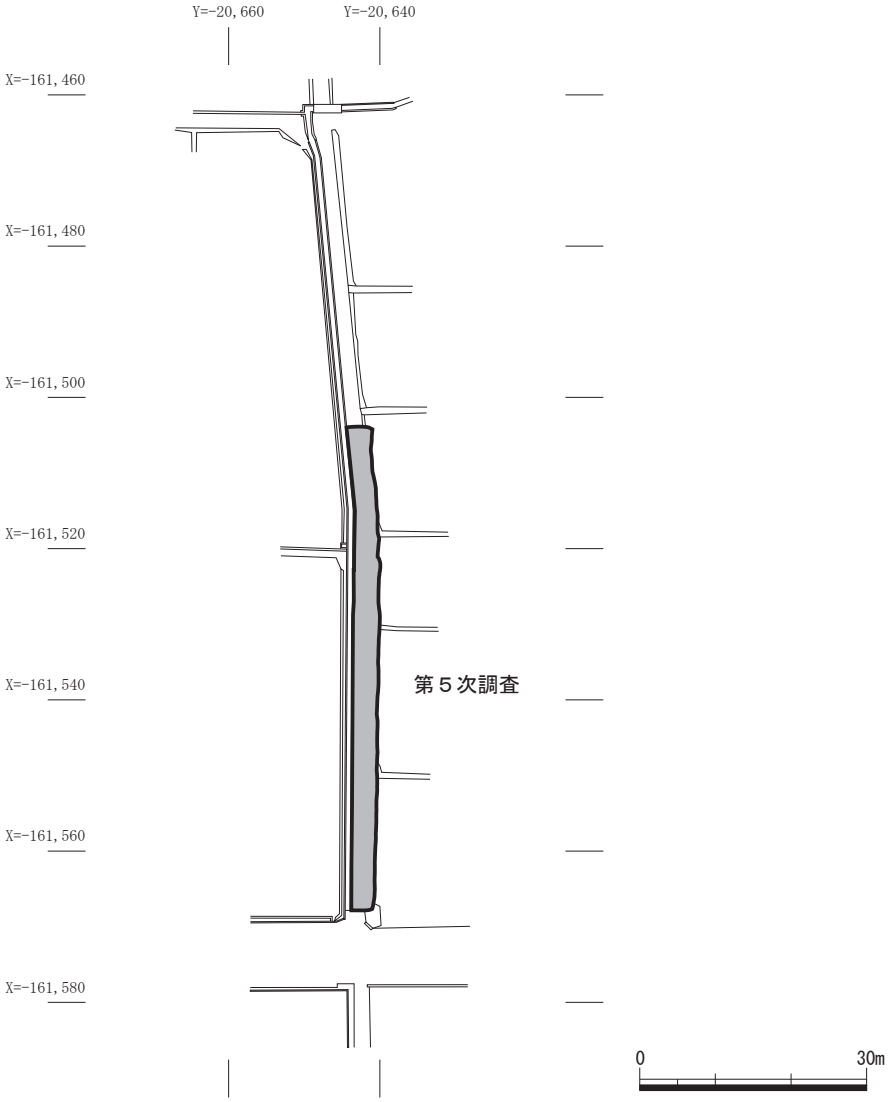
ＳＤ-151　調査区中央で検出した東南東－西北西方向の溝である。後述するＳＤ-62 により上面は削平されており、検出時で幅 1.7 m、深さ 0.5 mを測る。遺物が僅少で、詳細な時期は不明である。

ＳＫ-151・152　調査区中央で検出した円形の土坑である。ＳＤ-151 と同様に上面は削平されており、検出時でＳＫ-151 は径 1.5 m、深さ 0.13 mを測る。ＳＫ-152 は大部分がＳＤ-55 に切り負けており、わずかに東縁を残すのみで規模は不明、深さ 0.2 mを測る。遺物が僅少で、詳細な時期は不明である。

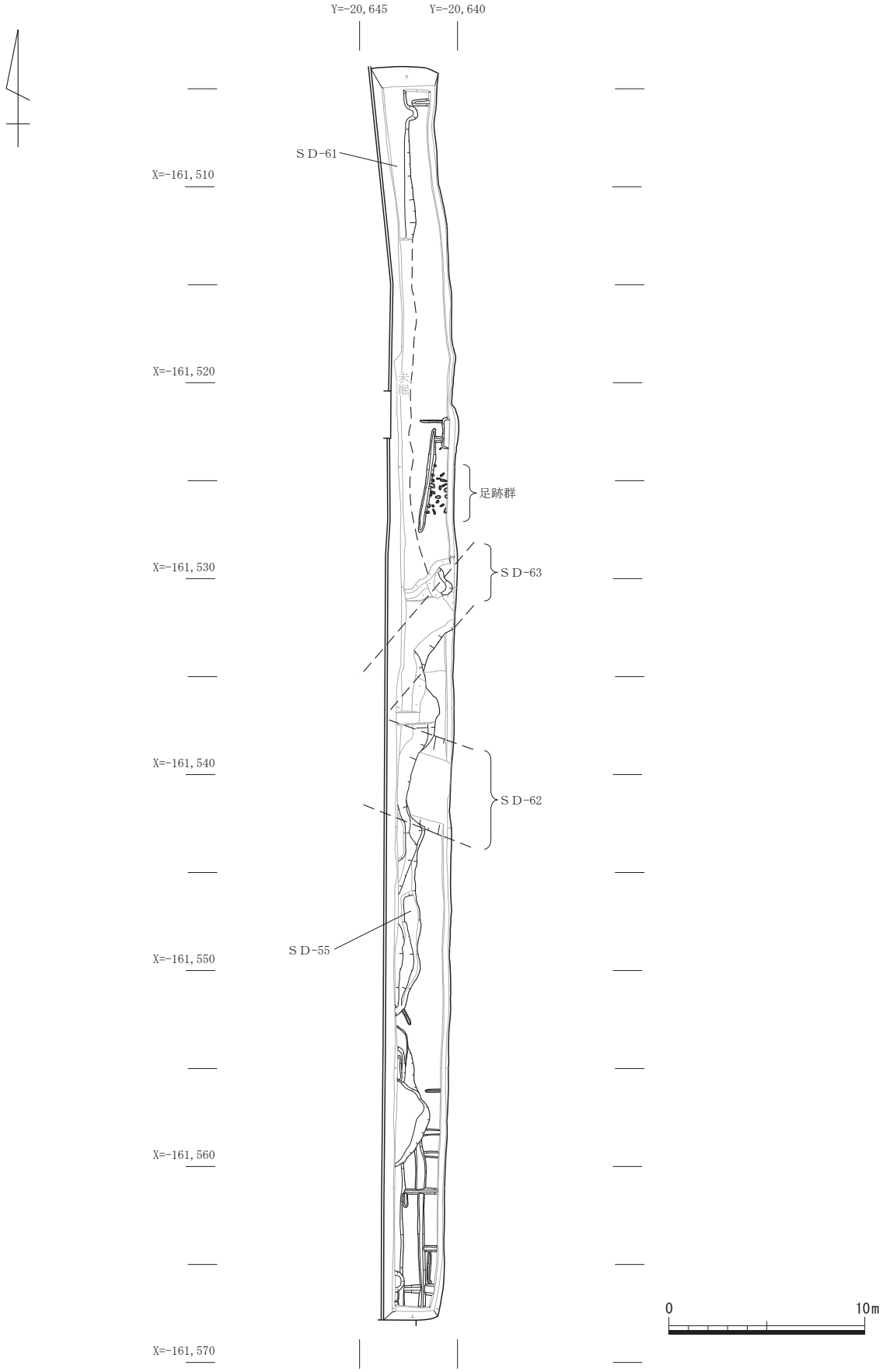
中世

ＳＤ-55・61　調査区西端を南北に縦断する大溝である。後述するＳＤ-63 で北半と南半に

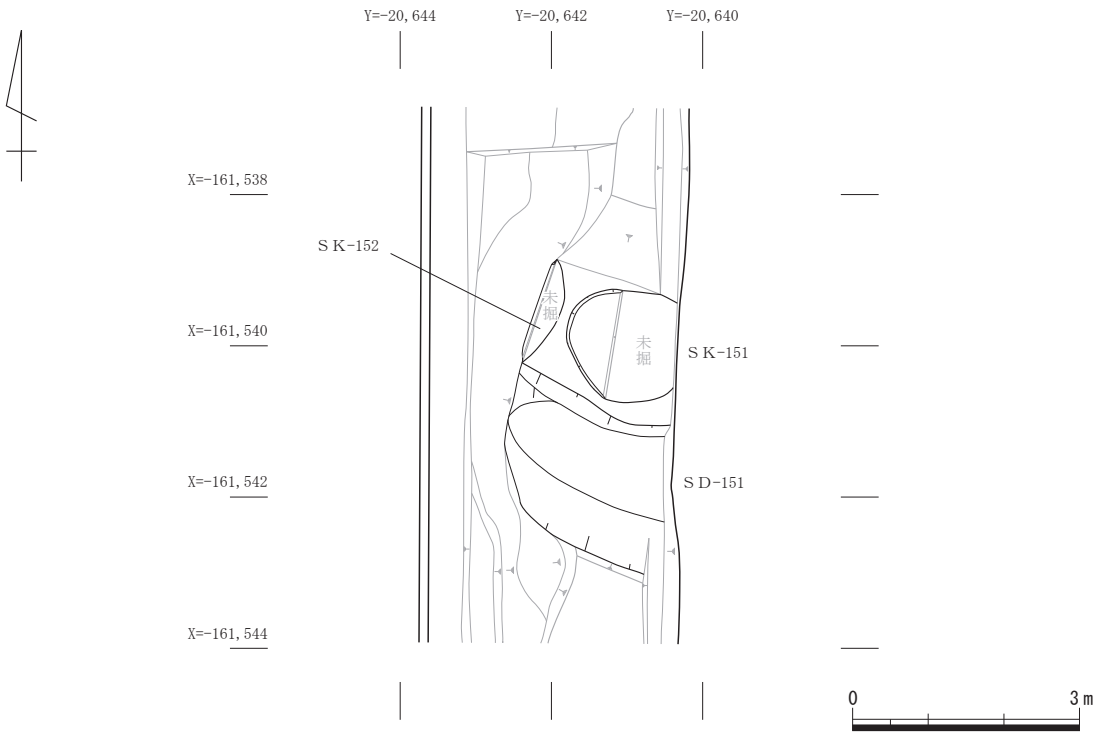




第 65 図　調査地位置図（上：S＝1/2,500、下：S＝1/1,000）



第 66 図　調査区平面図（中世）（Ｓ＝1/300）



第 67 図　調査区平面図（古代？）（Ｓ＝1/100）

分断されており、調査時は別の遺構と認識していたが、位置関係や規模から同一の遺構であろう。東肩のみの検出であり正確な規模は不明だが、幅 1.5 m以上、深さ 1.0 mを測る。ＳＤ -55 中層から石製硯 1 点が出土した（第 69 図）。硯は平面楕円形で、残存長 10 ㎝、残存幅 6.5 ㎝である。縁を欠損するが、ほぼ全体が残る。陸の中央部は明瞭な擦痕が残るとともに大きくくぼんでおり、長く使用されたことをうかがわせる。時期は、鎌倉時代末～室町時代とみられる。

ＳＤ -62　調査区中央で検出した東南東－西北西方向の大溝である。幅 4.6 m、深さ 0.6 m を測る。中世頃の鋳造に用いたとみられる送風管の基部片が出土した。時期は中世である。

ＳＤ -63　調査区中央で検出した、南西－北東方向の溝である。幅 2.0 m、深さ 0.75 mを測る。ＳＤ -55・61 を切る。この溝を境に、北側の地形が低くなる。時期は中世である。

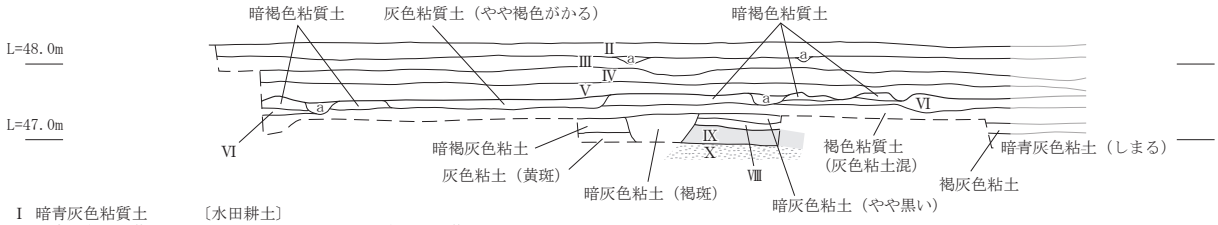
足跡群　調査区中央北寄りで検出した。人のものが多数を占めるが、牛か馬とみられる動物の足跡も存在する。詳細な時期は不明だが、切り合い関係から、後述の小溝群が埋没した後のものである。

小溝群　調査区全体で中世の耕作に伴うとみられる南北および東西方向の小溝を検出した。

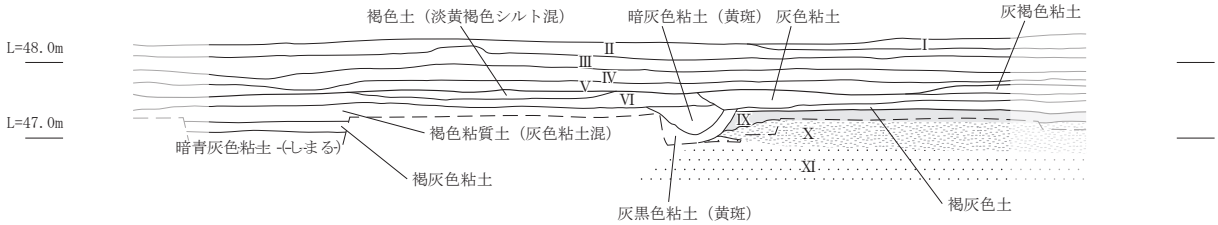
３．まとめ

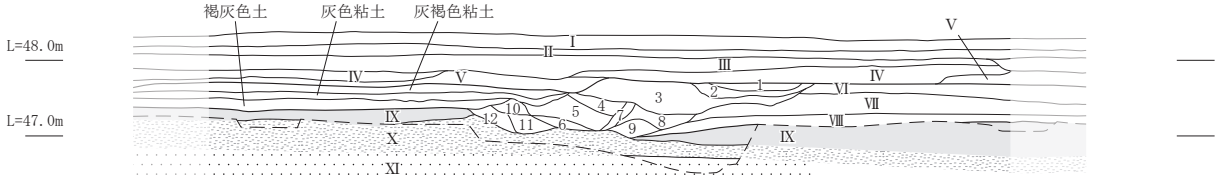
今回の調査では、中世の遺構を中心に検出した。

ＳＤ -55 からは石製の硯が出土しており、その形態から室町時代頃の硯とみられる。権力者層との関りが考えられ、付近に在地有力者層が居住していた可能性がある。これらの溝自体は、第２次調査で検出した溝とは時期が一致しないものの、規模や位置を併せて考えると、本調査区西側の小字「アテノ木」に存在した中世居館を囲む溝であった可能性がある。第２次調査の



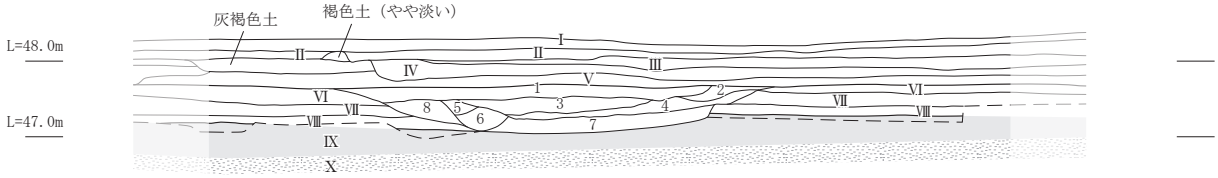
Ⅰ 暗青灰色粘質土 〔水田耕土〕
Ⅱ 暗青灰色土（黄斑） 〔水田床土〕
Ⅲ 褐色土（青みがかる）
Ⅳ 褐灰色土（やや粘質）
Ⅴ 灰褐色土
Ⅵ 暗褐色土（ハード、灰色粘土混）
Ⅶ 黒灰色粘土（黄斑）
Ⅷ 暗灰褐色粘土（黄斑）
Ⅸ 淡黄褐色粘質土 〔以下、地山〕
Ⅹ 黄褐色シルト
Ⅺ 黒灰色粗砂
a 淡灰褐色粘質土





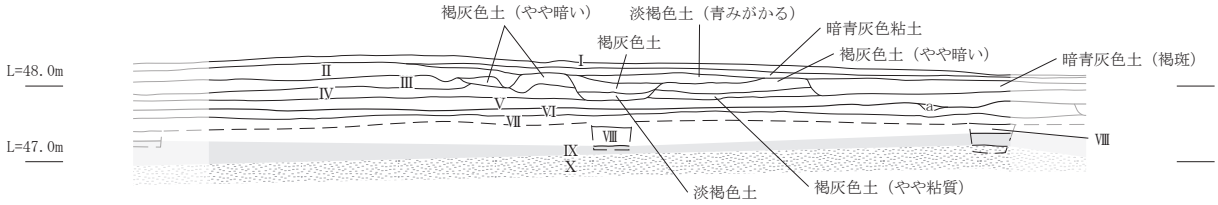
ＳＤ-63

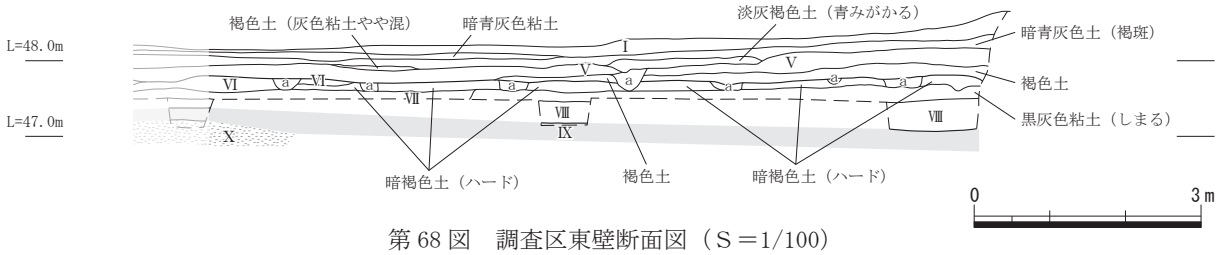
1 褐色土
2 灰褐色土
3 褐灰色粘土
4 灰褐色粘質土
5 灰色粘土（やや褐色がかる）
6 暗灰色粘土（黄斑）
7 褐灰色土
8 灰褐色粘土（粗砂混）
9 暗褐色土
10 暗灰色粘土（黄色味）
11 暗褐色粘質土（シルト混）
12 灰色粘土（やや褐色がかる、やや暗い）



ＳＤ-62

1 褐色粘質土（シルト混、黒褐色土混）
2 褐灰色シルト
3 褐灰色粘土
4 灰色粘土（黄褐色土混）
5 灰色粘土（黄褐色シルト混）
6 暗灰色粘土（淡い、黄斑）
7 暗灰色粘土
8 暗褐色粘土

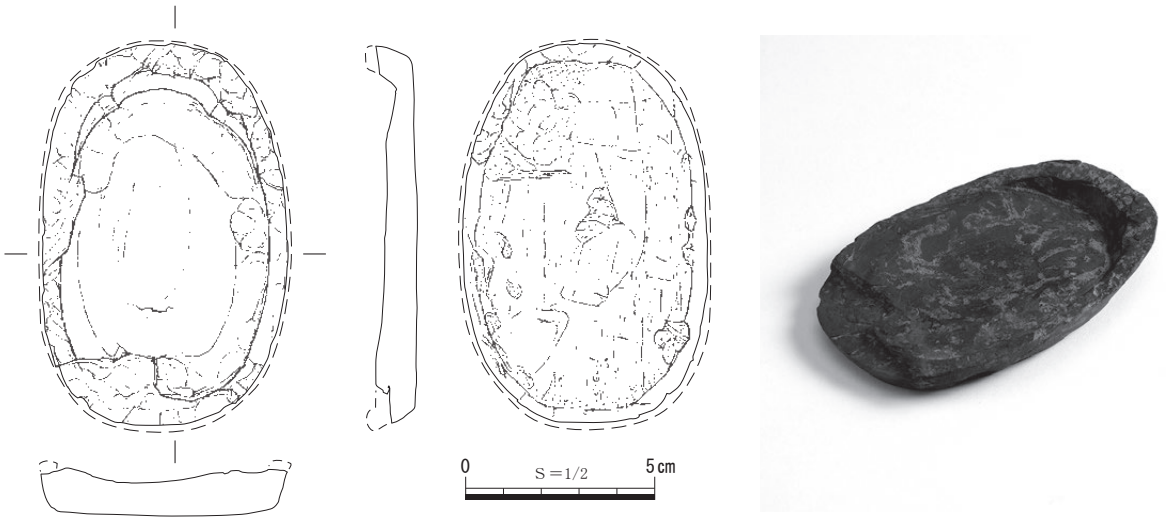




第 68 図　調査区東壁断面図（Ｓ＝1/100）

溝より古い段階の溝であろう。

中世以前については、遺構・遺物が少なく詳細は不明である。南側約 200 mの第４次調査では弥生時代中期の集落跡を検出しているが、本調査地までは拡がっていなかったようである。



第 69 図　ＳＤ−55 出土 石製硯

写真 15−1　中世完掘状況（南から）

写真 15−2　中世完掘状況（北から）

写真 15−3　足跡群（北東から）

写真 15−4　硯出土状況（南から）

12. 東井上遺跡　第３次調査

１．既調査の概要

東井上遺跡は、田原本町の東部、標高 53 ～ 54 m程度の沖積地に立地し、東に初瀬川が北流している。東井上遺跡第１次調査では、弥生時代後期の竪穴住居を検出しており、本調査では、弥生時代の集落遺構が拡がる範囲の確認が課題となった。

第３次調査は、下水道工事に伴う埋設物試掘調査に併せて実施し、第１～４トレンチの４つの調査区を設定した。

２．調査の成果

（１）層序

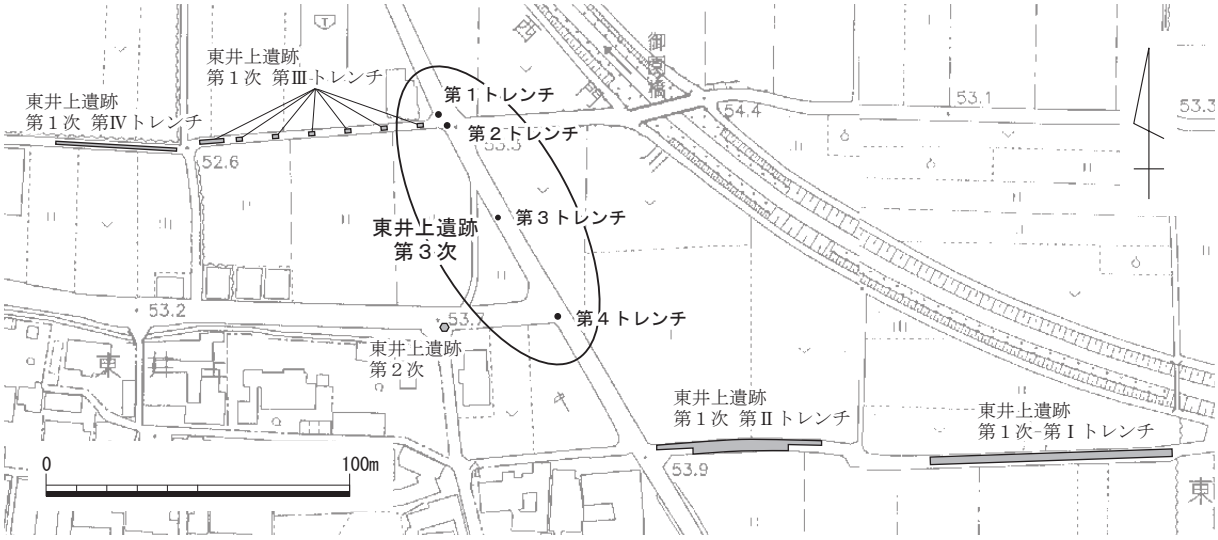
基本層序とした、第４トレンチの層序を記述する。

Ⅰ:アスファルト〔検出標高 53.9 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ:クラッシャーラン〔53.8 m〕、Ⅲ:暗灰色粘質土（灰色砂混じり）〔53.5 m〕、Ⅳ:淡緑灰色土（締まる）〔53.3 m〕、Ⅴ:暗灰色土（やや砂質、２㎝、大礫１％）〔53.1 m〕、Ⅵ：暗緑灰色粘質土〔53.0 m〕、Ⅶ：灰色粘質土〔52.8 m〕、Ⅷ：黄褐色粘質土（灰色がかる）〔52.6 m〕、Ⅸ：黄褐色粘質土〔52.4 m〕

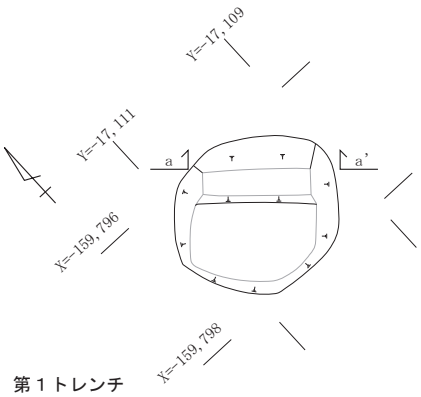
第Ⅰ～Ⅵ層は、現代道路造成に伴う盛土と推定される無遺物層である。第Ⅶ層は中世遺物包含層で、第Ⅷ層以下が地山である。調査では、第Ⅷ層上面まで重機で掘削し、以下を人力で掘削した。

（２）遺構と遺物

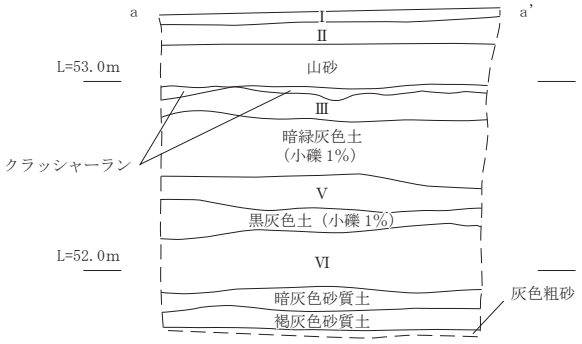
小溝群　第３トレンチで２条検出した北西－南東方向の小溝である。幅は 0.6 m以上、深さ 0.4 m。条理地割と異なる走向を示すが、これは初瀬川の走向に規制されたものと推測される。



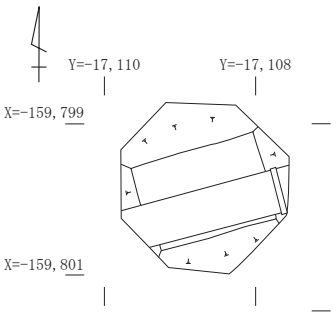
第 70 図　調査地位置図（Ｓ＝1/2,500）



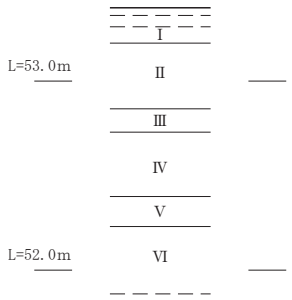
第１トレンチ



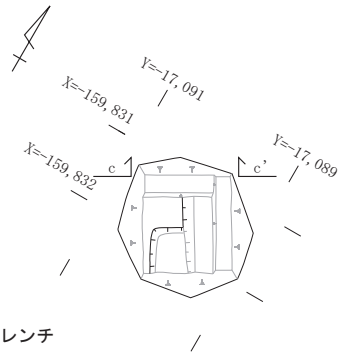
第１トレンチ　北東壁断面図



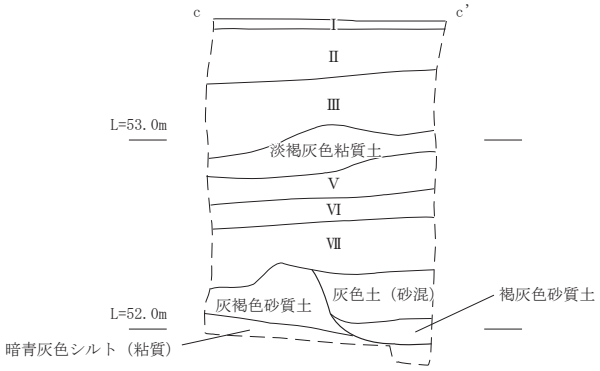
第２トレンチ



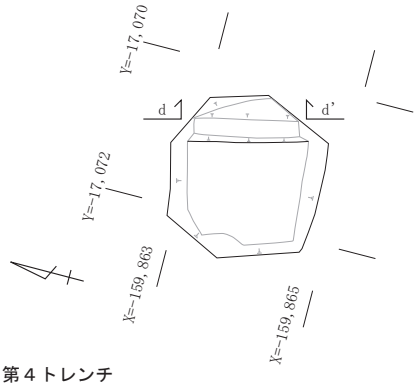
第２トレンチ　柱状図



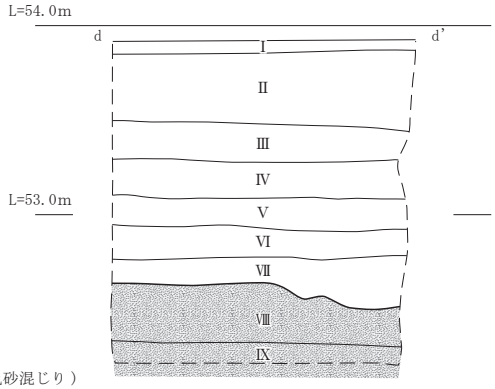
第３トレンチ



第３トレンチ　北西壁断面図



第４トレンチ



第４トレンチ　東壁断面図

Ⅰ アスファルト
Ⅱ クラッシャーラン
Ⅲ 暗灰色粘質土（灰色砂混じり）
Ⅳ 淡緑灰色土（締まる）
Ⅴ 暗灰色土（やや砂質、２㎝大礫１％）
Ⅵ 暗緑灰色粘質土
Ⅶ 灰色粘質土　〔中世遺物包含層〕
Ⅷ 黄褐色粘質土（灰色がかる）
Ⅸ 黄褐色粘質土

0　3m

0　1m

第71図　遺構平面図（Ｓ＝1/100）および断面図・柱状図（Ｓ＝1/40）

３．まとめ

今回の調査では、弥生時代の集落遺構を検出することはできなかった。これは点的な調査に起因する可能性もあるが、弥生土器をはじめとして遺物がほとんど出土しなかったことから、集落域から外れていたと考えたい。

写真 16-1　第１トレンチ平面（西から）

写真 16-2　第１トレンチ北東壁断面（南西から）

写真 16-3　第２トレンチ掘削状況（南西から）

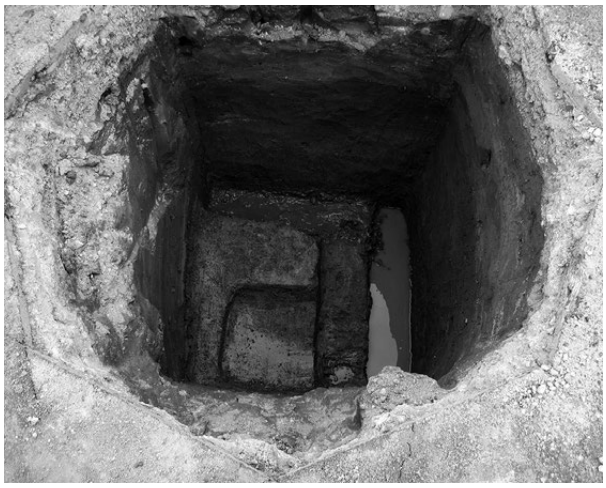


写真 16-4　第３トレンチ小溝完掘状況（南西から）

写真 16-5　第３トレンチ北西壁断面（南東から）

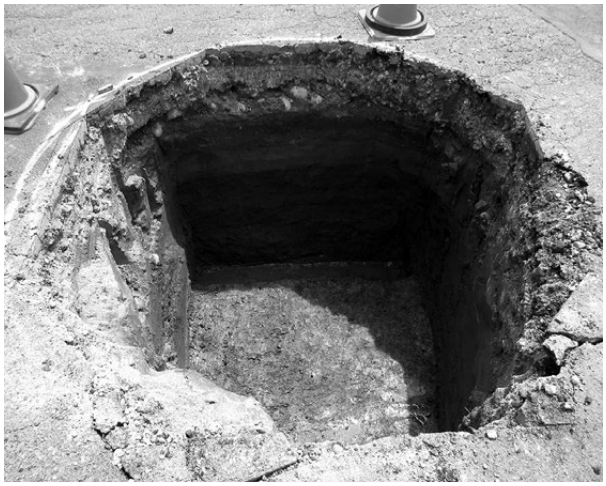


写真 16-6　第４トレンチ平面（西から）

13. 千代遺跡　第９次調査

１．既調査の概要

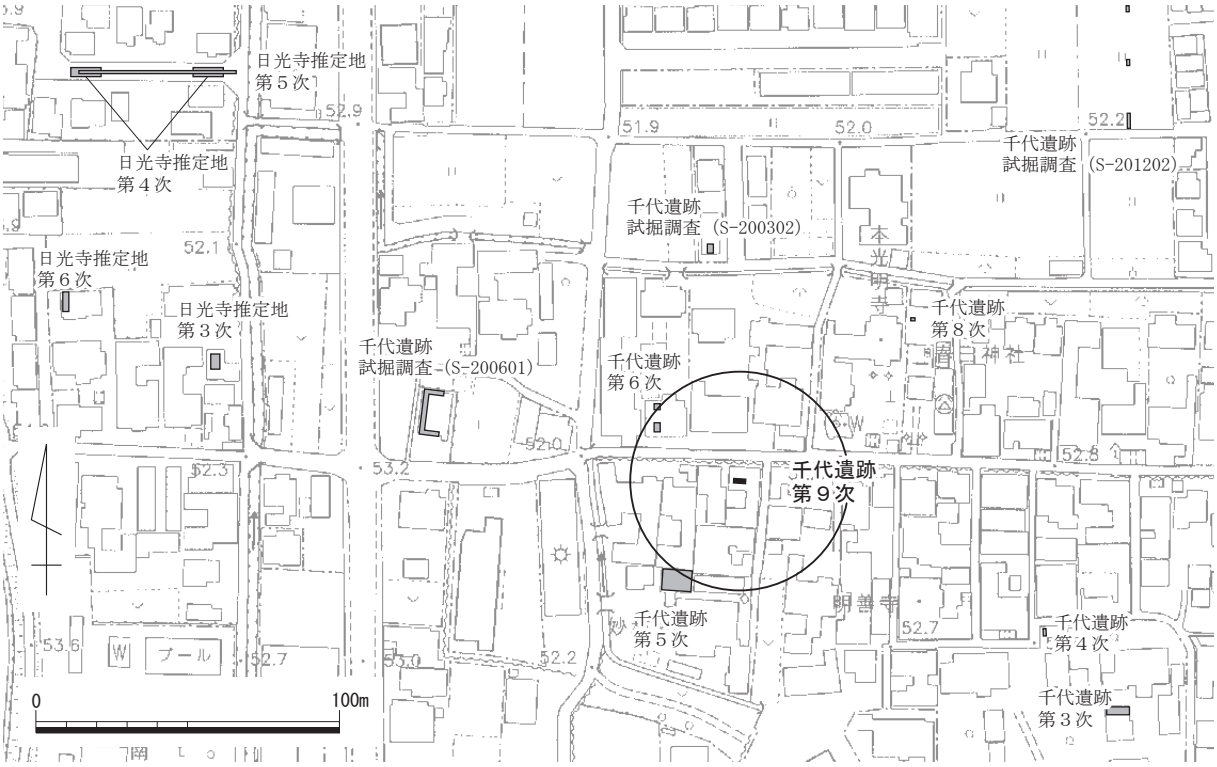
千代遺跡は、標高 53 m前後の沖積地に立地する。西部の中～近世の八条環濠集落跡と、東部の遺物散布地からなる複合遺跡である。現在の八条集落内では、第３～６・８次調査が実施されており、中～近世の八条集落の様相は徐々に明らかになってきているが、個人住宅の建築に伴う小規模調査が多いことから、全体像は不明な部分も多い。第９次調査は、八条集落内部での個人住宅の建築に伴い、建物の北半となる部分で東西４×南北 1.5 mの調査区を設定した。近隣の調査成果等から、第９次調査でも中～近世集落が検出されることが予測された。

２．調査の成果

（１）層序

Ⅰ：灰褐色土〔検出標高 52.9 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ-a：淡褐色土（ソフト）〔52.7 m〕、Ⅱ-b：淡灰褐色土〔52.7 m〕、Ⅲ：茶灰色土（ソフト）〔52.5 m〕、Ⅳ：褐灰色土（焼土・炭混じり）〔52.4 m〕、Ⅴ：黄灰色土〔52.0 m〕、Ⅵ：灰色粘質土〔51.9 m〕、Ⅶ：黄褐色粘質土〔51.8 m〕

第Ⅰ～Ⅱ層は近・現代の盛土、第Ⅶ層以下は地山である。第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に炭・焼土層を挟むことから、小規模な火災等による整地層が存在すると考えられる。第Ⅰ層～炭・焼土層を重機で除去し、第Ⅲ層上面で近世遺構を調査した。近世遺構を調査したのち、人力で第Ⅳ



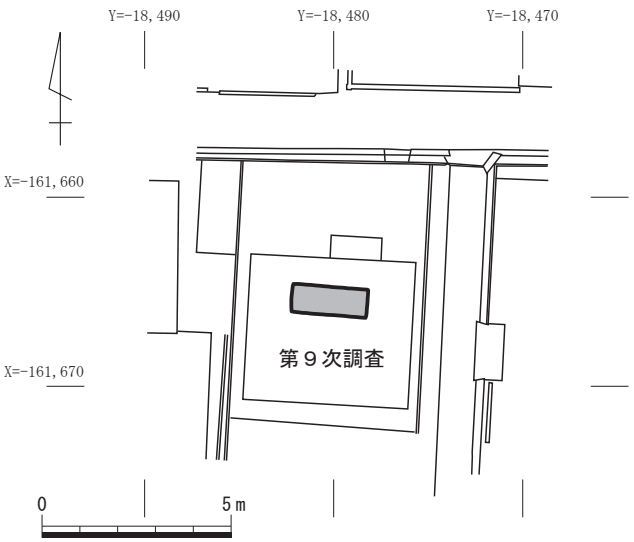
第 72 図　調査地位置図（S＝1/2,500）

層を除去し、中世遺構を検出した。また、第Ⅶ層上面を検出面とする第３遺構面があることを断面で確認したが、掘削深度からこれ以上の調査は危険と判断した。

（２）遺構と遺物

中世

ＳＤ-51　調査区東半で西肩を検出した南北方向の溝で、幅 1.8 m以上、深さ 0.45 mである。出土遺物は 13 ～ 15 世紀頃の土師器・瓦器があり、15 世紀頃の遺構と考えられる。



第 73 図　調査地位置図（Ｓ＝1/200）

ＳＤ-52　調査区中央で検出した南北方向の溝で、幅 0.5 m、深さ 0.2 mである。出土遺物は僅少であるが、中世後期の遺構と考えられる。

ＳＤ-53　調査区西半で東肩を検出した南北方向の溝で、幅 0.9 m以上、深さ 0.35 mである。出土遺物から、14 ～ 15 世紀頃の遺構と考えられる。ＳＤ-51 ～ 53 は、町屋に伴う遺構と考えたいが、性格が判然としない。埋土も粘質土～粘土と、流水があったとは考えにくく、中世八条環濠集落成立以前の遺構と考えるのが妥当かもしれない。

Pit-51　調査区中央で検出した直径 0.4 m、深さ 0.3 mの小穴である。出土遺物は中世の土師器・瓦器で、15 世紀頃の遺構と考えられる。

Pit-52　調査区中央で検出した東西 0.3 m、深さ 0.3 mの小穴で、南半は調査区外である。出土遺物は僅少で、詳細な時期は不明である。

Pit-53　調査区南西隅で検出した直径 0.4 m、深さ 0.6 mの小穴で、南半は調査区外である。ＳＤ-53 を掘削後に検出できたことから、ＳＤ-53 よりさかのぼる可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

近世

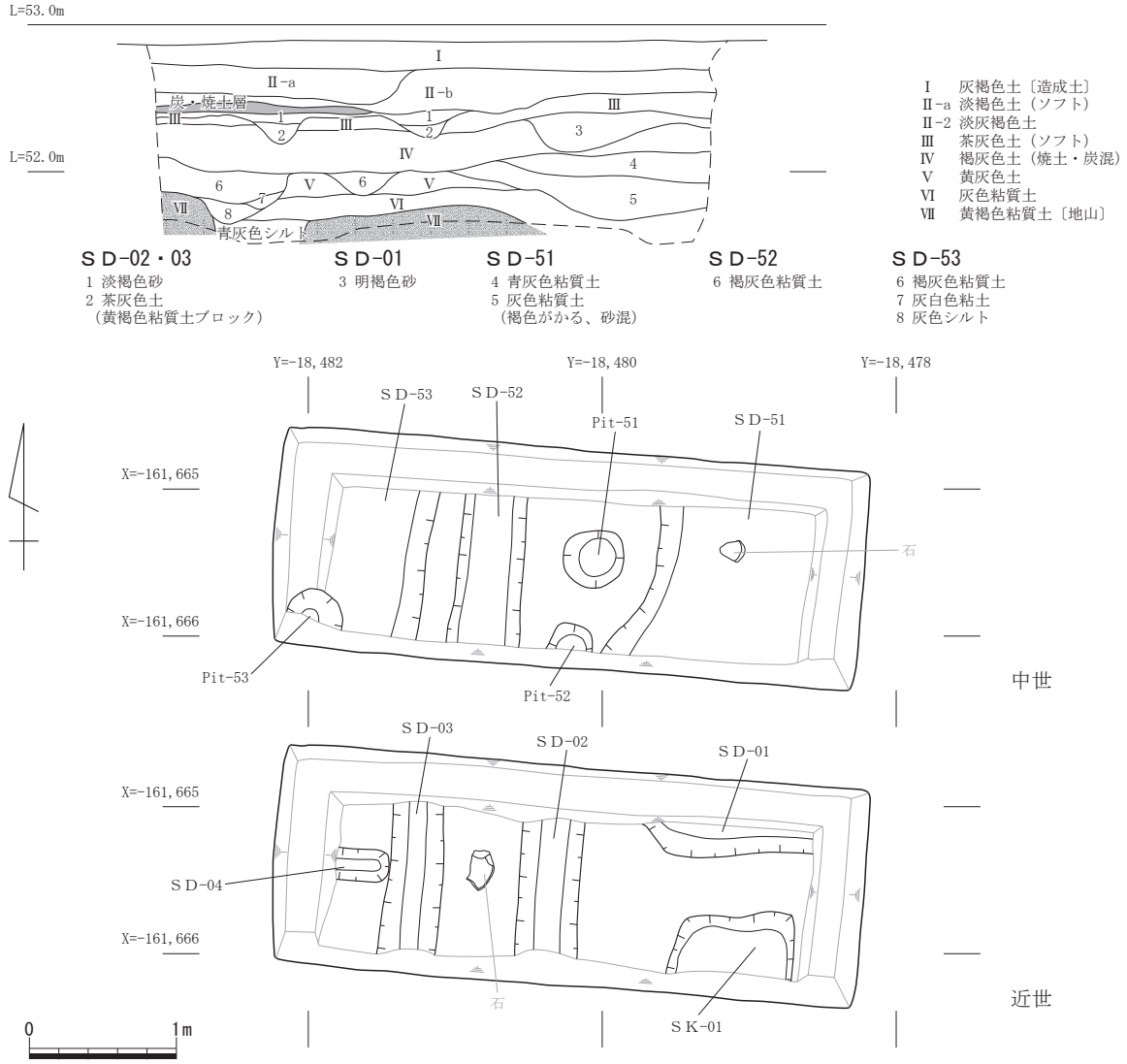
ＳＫ-01　調査区南東隅で北半を検出した方形土坑で、一辺 0.8 m、深さ 0.1 mである。出土遺物から、18 世紀頃の遺構とみられる。

ＳＤ-01～04　ＳＤ-01･04が東西方向、ＳＤ-02･03が南北方向の小溝である。いずれも幅0.5 m程度、深さ 0.2 m程度である。いずれも粗砂が堆積しているのが特徴である。近隣の調査成果から、農耕に伴う小溝とは考えられず、町屋建築に伴う雨水を浸透させて外に排水するための小溝と推定される。出土遺物は僅少であるが、18 世紀頃の遺構と考えられる。

３．まとめ

本調査では、近世八条環濠集落内の町屋に関わる遺構を検出した。特に、ＳＤ-01 ～ 04 は雨水を浸透させて敷地外に排出するための溝と考えられる。一方で、中世遺構として検出した

ＳＤ -51 ～ 53 は性格が不明である。敷地境界とは合致しないことから、他の性格を考慮する必要がある。



第74図　調査区平面図及び北壁断面図（Ｓ＝1/50）

写真17-1　近世全景（西から）

写真17-2　中世全景（西から）

14. 平野氏陣屋跡　第 15 次調査

１．既調査の概要

平野氏陣屋跡は奈良盆地の中央、標高 49 m前後の沖積地に立地する。田原本町の中央を南北に流れる寺川の西岸にあたり、中世には豪族・田原本氏が字奥垣内・奥城屋敷にて武装化した居館を形成した。

近世になり、田原本に所領を得た平野長泰は、教行寺に寺内町の経営を任せる。長泰の子、長勝は教行寺を退去させ、その一方で田原本氏の環濠集落跡に陣屋や家臣団の屋敷地を造営する。明治維新を迎えた後、田原本藩や田原本町となっても、この地には行政機関が据え置かれた。

今回、遺跡南西部で防火水槽の設置工事に伴い、調査を実施した。

２．調査の成果

調査地では、明治時代以降に木造の警察署が建設され、その後建て直された警察庁舎は、図書館や自治体公民館に利用されてきた。工事ではこの建物を解体し、地下構造物を撤去した上で防火水槽を設置する工程であったため、建物解体後の基礎構造物が残っている段階で調査をおこなった。そのため、基礎のコンクリートが格子状に残存しており、調査区を８つに分け、北側東よりＡ～Ｄ区、南側東よりＥ～Ｈ区とした。

（１）層序

現代建物の基礎工事により、上層は全体的に大きく攪乱を受けていた。また、調査区を分割した境界が基礎のコンクリート構造物であり、その周囲は攪乱の影響が大きい。各調査区で確認した層序は地山より上では整然としておらず、掘削や埋め戻しが繰り返しおこなわれていたとみられる。

ここではＡ区の層序を示す。

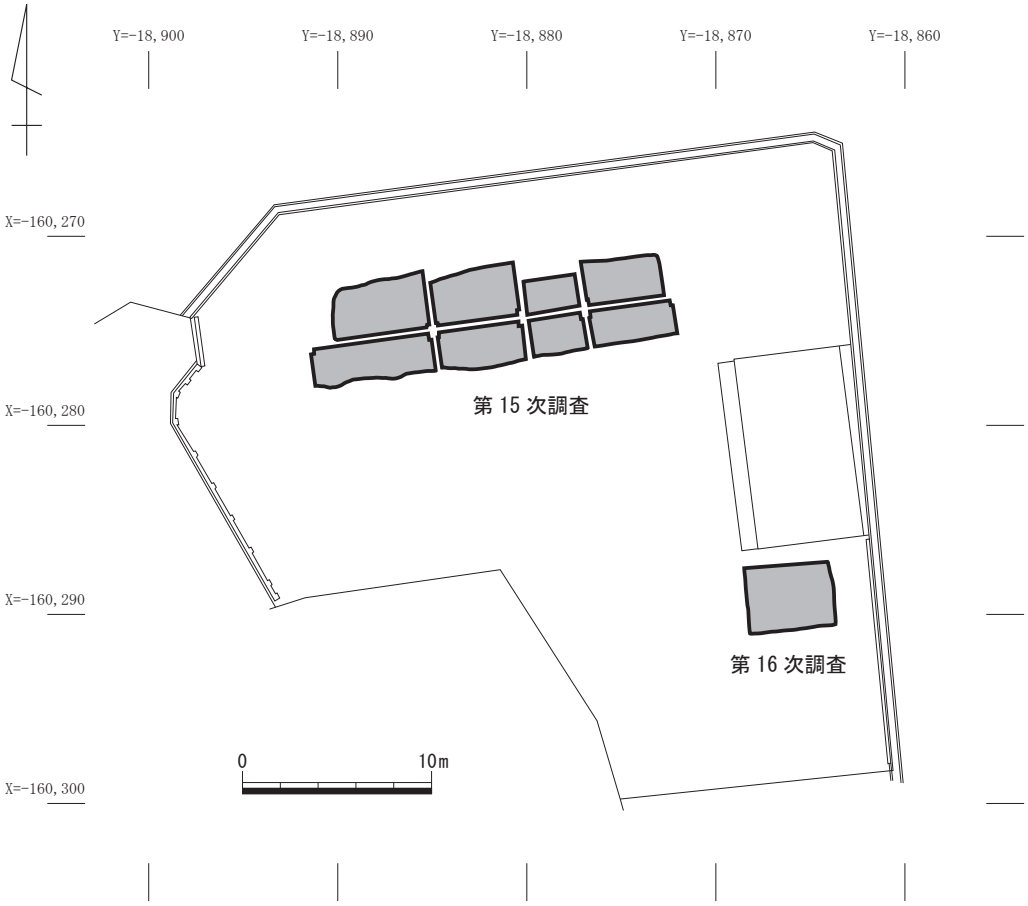
Ⅰ:褐灰色土（ガラ多く含む）〔検出標高 49.6 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ:灰褐色土〔49.2 m〕、Ⅲ-a:暗灰色土（砂混）〔49.0 m〕、Ⅲ-b:灰褐色シルト〔48.8 m〕、Ⅳ:淡褐色シルト〔48.6 m〕、Ⅴ:灰褐色シルト〔48.4 m〕、Ⅵ:黄褐色粘質土（しまる）〔48.25 m〕、Ⅶ:黄褐色粘質土（しまる、黄色味強し）〔48.0 m〕、Ⅷ:黒色粘土〔47.6 m〕

第Ⅰ・Ⅱ層は近代造成土、第Ⅲ層は中・近世の造成土とみられる。第Ⅳ層上面が中世遺構検出面、第Ⅵ層以下は地山である。

（２）遺構と遺物

各調査区で、現代建物の基礎攪乱を確認した。また、その攪乱に切られる形で、栗石を充填した南北方向の溝状遺構をＡ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｈ区で確認した。Ｅ区では東西方向でも検出している。現代建物に先行する警察庁舎の基礎とみられる。

Ｂ・Ｃ・Ｆ・Ｇ・Ｈ区ではほぼ全面が近世以降の建物基礎の影響を受けており、主に小溝や



第75図　調査地位置図（上：S＝1/2,500、下：S＝1/400）

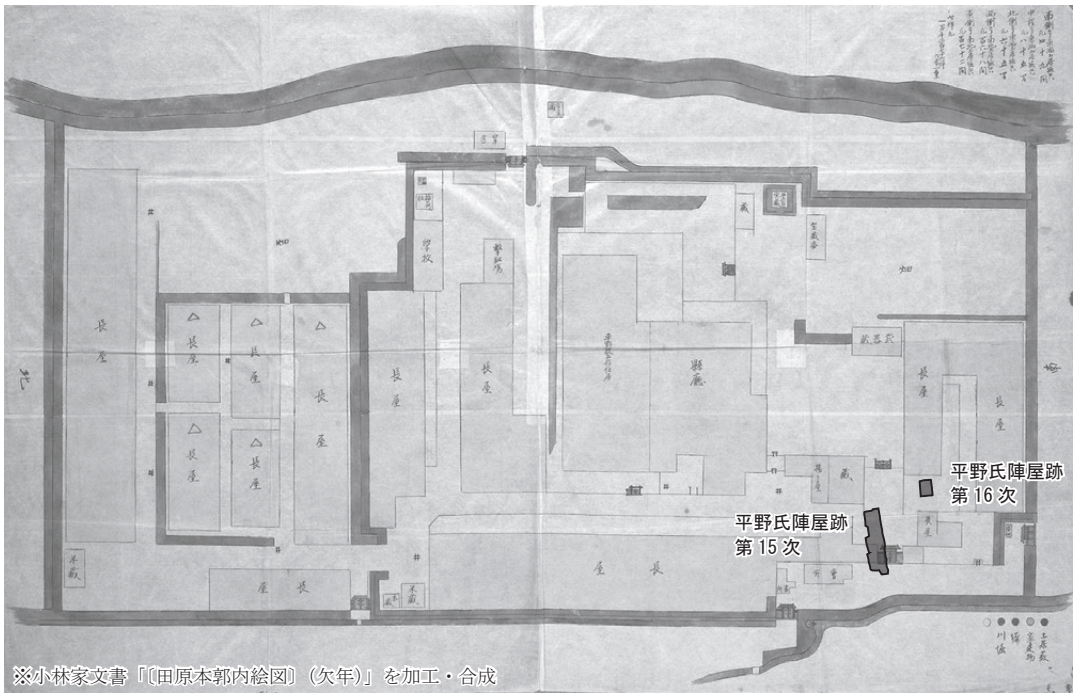


写真 18　明治期絵図と第 15・16 次調査地推定位置（左が北）

小穴をわずかに検出した程度で顕著な遺構はみられなかった。ここではＡ・Ｄ・Ｅ区で検出された遺構について記述する。

中世

ＳＫ -51　　Ａ区北端で検出した、円形土坑である。径 1.0 m、深さ 0.2 m。後述するＳＫ -52 の堆積の１段階である可能性がある。遺物より、鎌倉時代頃の遺構と考えられる。

ＳＫ -52　　Ａ区北端で検出した井戸である。径約 2.5 m、深さは 1.9 mまで確認したが、崩落の危険があったためそれ以下は掘削していない。断面はほぼ筒状で、途中で段をもち、下部は狭まる。鎌倉時代頃の遺物が出土した。遺物より、13 世紀頃の遺構と考えられる。

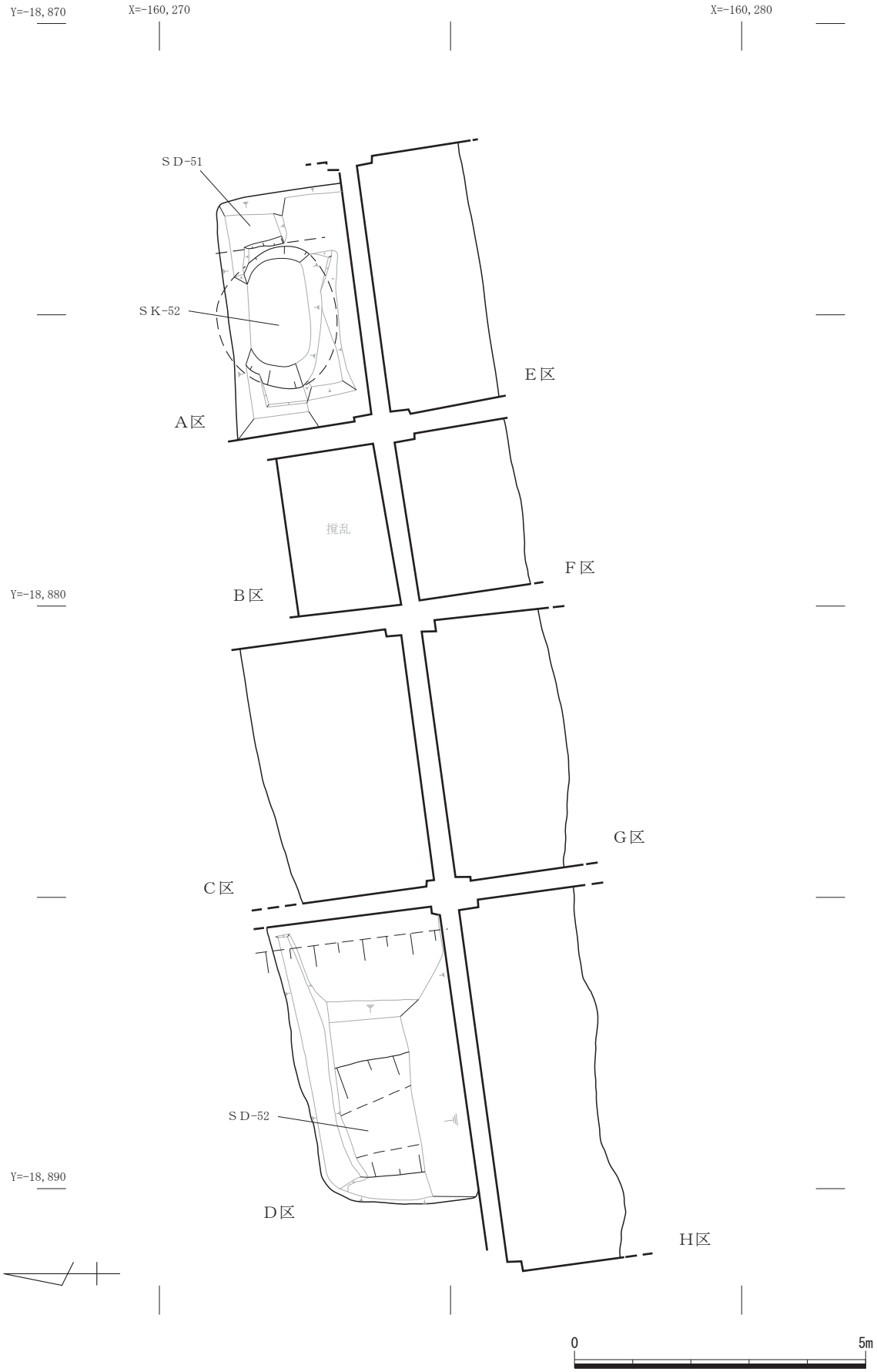
ＳＤ -51　　Ａ区東端で検出した、南北方向の溝である。西肩のみの検出で規模は不明だが、検出した部分で幅 0.5 m、深さ 0.2 mである。鎌倉時代頃の土師器・瓦器が出土した。遺物より、13 世紀頃の遺構と考えられる。

ＳＤ -52　　Ｄ区西端で検出した、南北方向の大溝である。上面を後世に削られており、壁面で東肩を確認したが、規模は明らかでない。検出した部分で、幅 2.0 m、深さ 0.4 mである。遺物は僅少であるが、室町時代頃の遺構と考えられる。

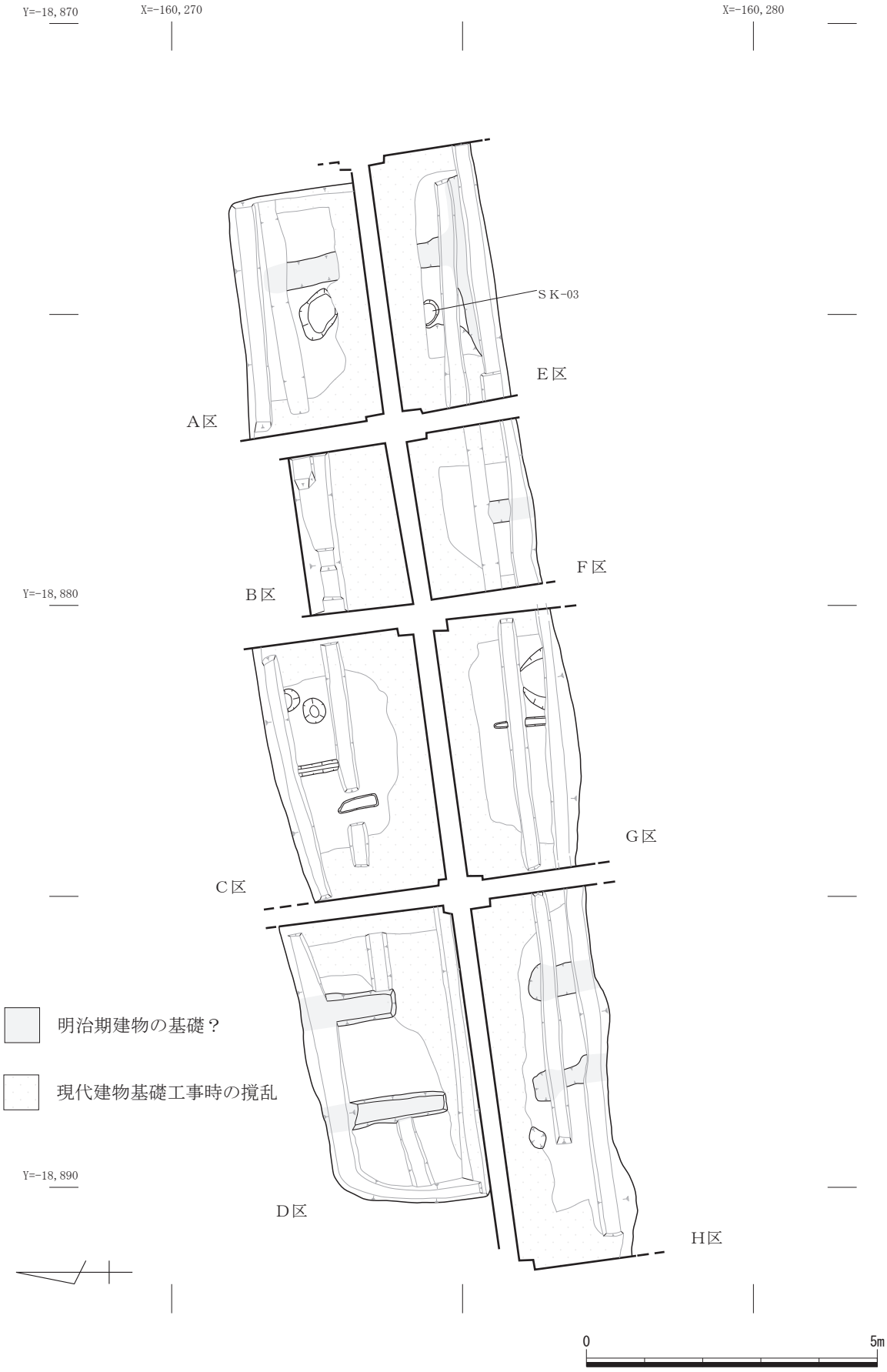
近世

ＳＫ -03　　Ｅ区中央で検出した、円形土坑である。北半および上面を現代建物の基礎に削られる。径 0.9 m、深さ 0.06 mである。瓦質の甕が出土した。出土遺物より、時期は 15 世紀頃と考えられる。

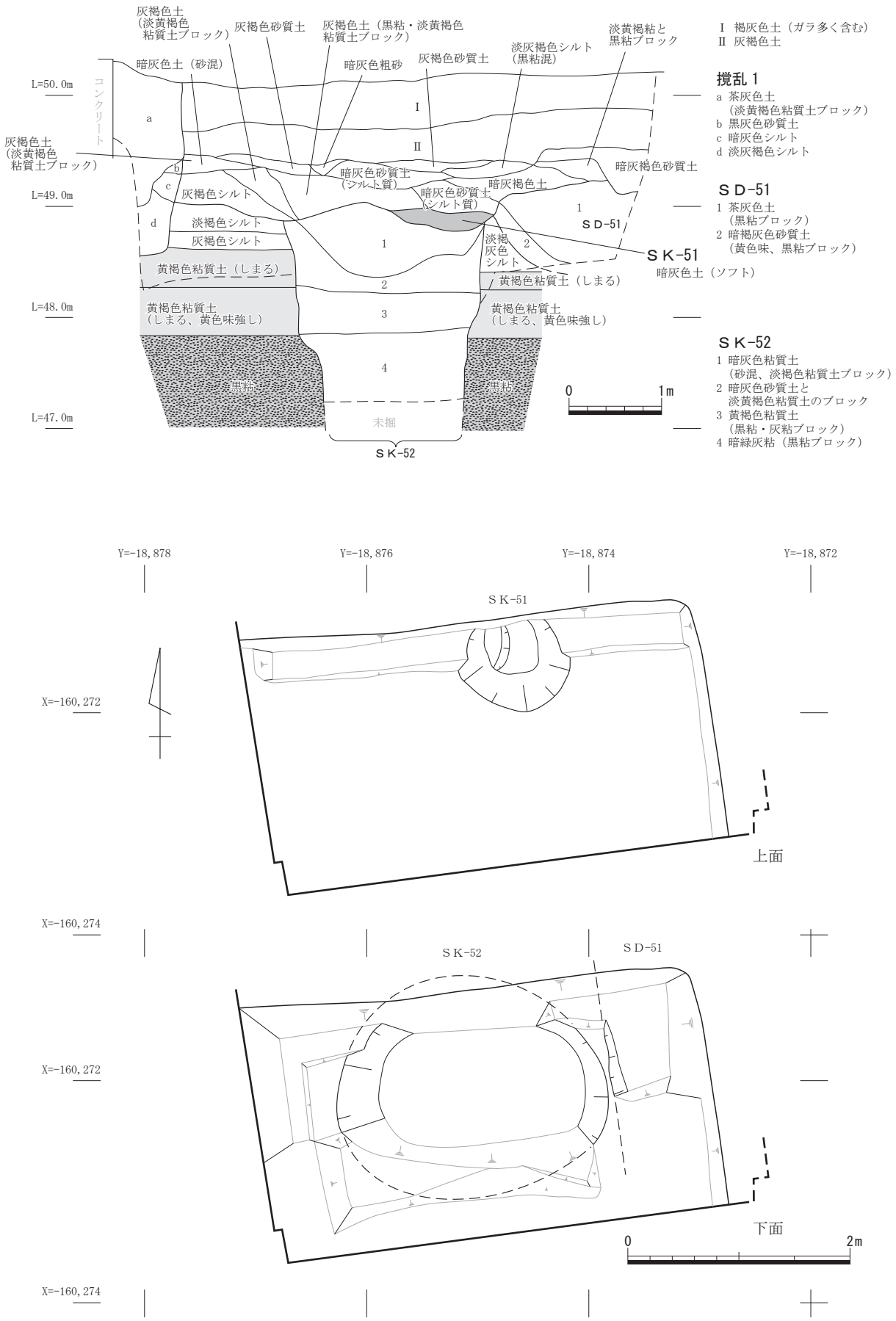
ＳＤ -21　　Ｄ区のほぼ全面が「Ｌ」字に屈曲する溝の中であった。Ｄ区南端で東西方向溝の北肩を検出し、東端で北方向に屈曲する。上面を後世に削られており、壁面で東肩を確認したが規模は明らかでない。検出した部分で、幅 0.8 m、深さ 0.9 mである。南肩は隣接するＨ区



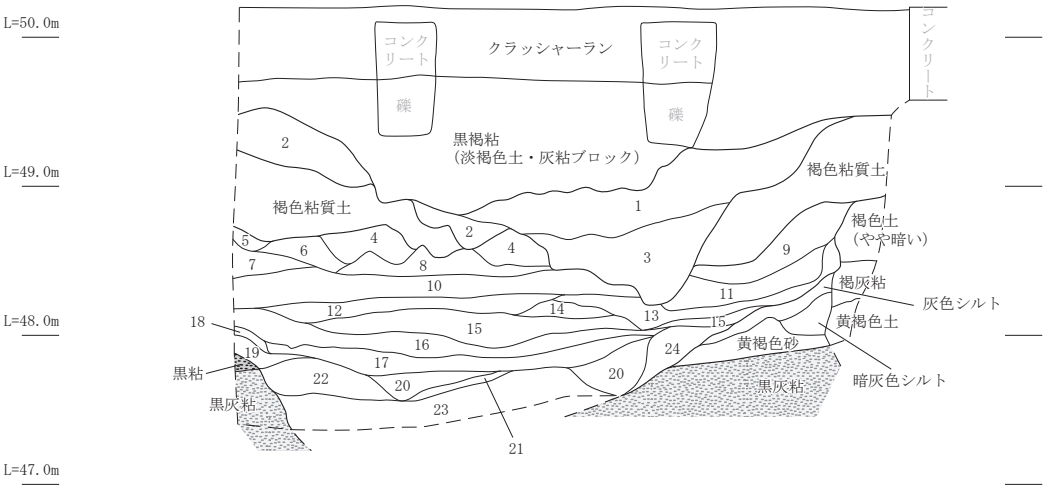
第 76 図　調査区全体配置図（中世）（S＝1/100）



第 77 図　調査区全体配置図（近・現代）（S＝1/100）



第 78 図　Ａ区　北壁断面図（上：Ｓ＝1/60）および遺構平面図（中世）（下：Ｓ＝1/50）



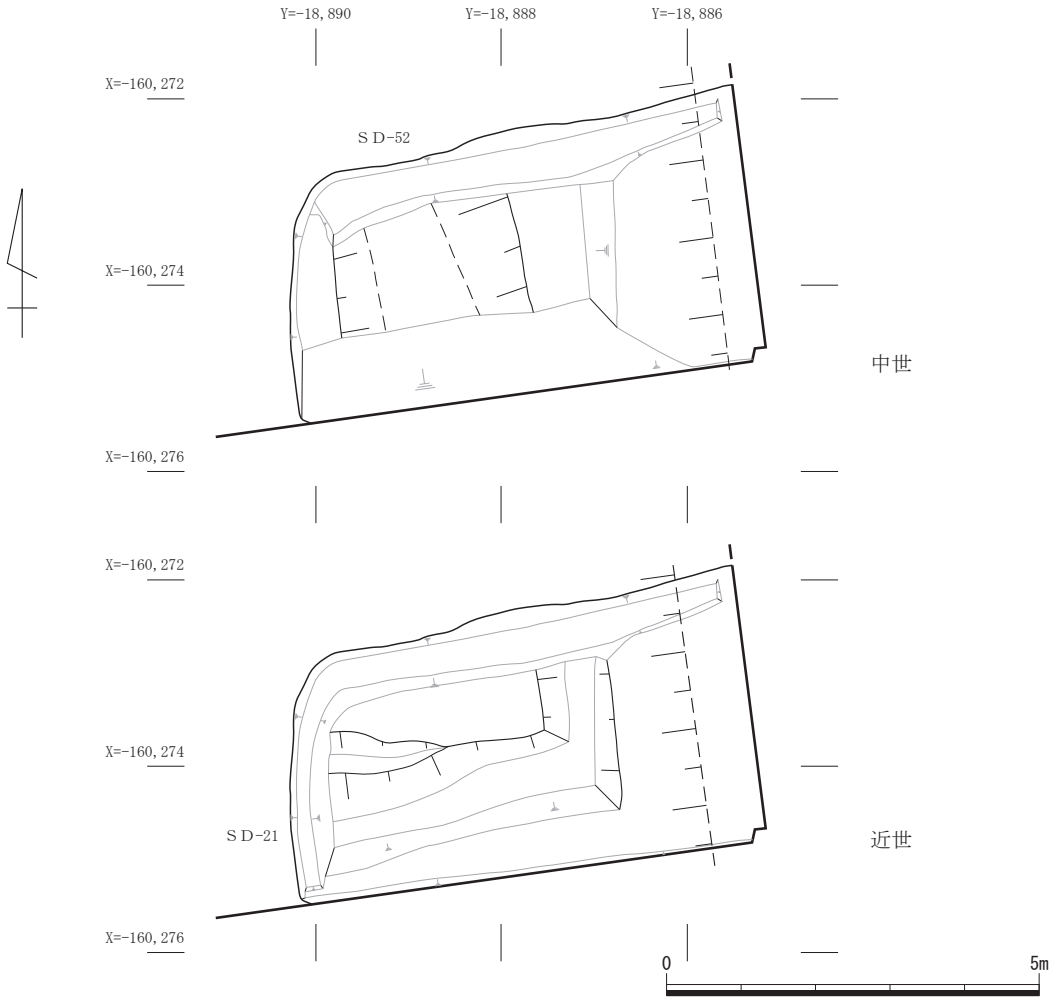
ＳＤ-21

1 明褐色粘土（黒褐色粘土・灰色粘土ブロック）
2 暗灰褐色土（黒褐色粘土ブロック）
3 黒褐色粘土（明褐色粘土ブロック）

ＳＤ-52

4 褐灰色粘土
5 灰褐色砂質土（やや粘質）
6 灰色粘土（ややシルト質）
7 褐灰色砂質土
8 灰色粘土
9 暗灰色土
10 暗青灰色シルト
11 淡緑灰色粘質土
12 灰緑色シルト
13 灰色シルト（やや青みがかる）
14 緑灰色粘土
15 灰緑色粘土
16 暗緑灰色粘土
17 黒灰色粘土
18 灰色粘土
19 黄褐色砂
20 暗灰色粘土
21 灰緑色粘土
22 灰色粘土（暗灰色中粒砂混）
23 灰黒色粘土（灰色粘土ブロック）
24 緑灰色粘土

0　1m



第 79 図　Ｄ区　北壁断面図（上：Ｓ＝1/50）および遺構平面図（下：Ｓ＝1/80）

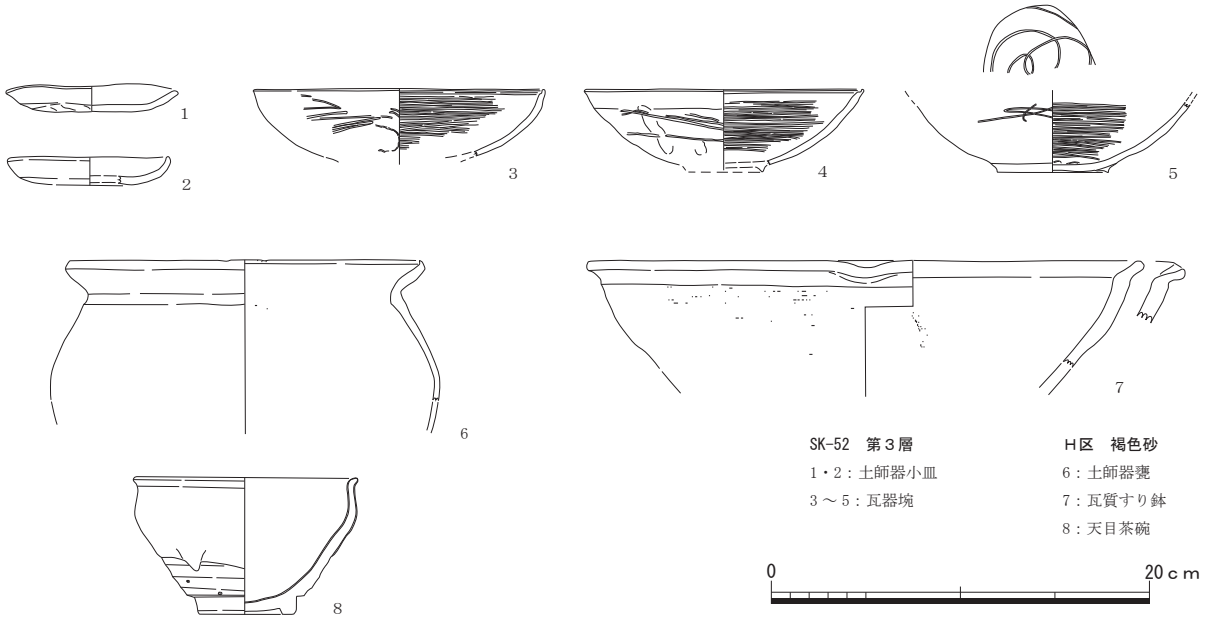
に拡がるが、後世の攪乱を受けており確認できなかった。陣屋の南西隅付近を巡る水路の可能性がある。遺物は僅少であるが、中世末～近世の遺構と考えられる。

３．まとめ

今回の調査では、中近世～近代の遺構を検出した。

工事時に解体された現代建物以前に建てられた、最初期の警察庁舎の基礎を確認した。幅 0.5 m、深さ 0.2 m程の南北および東西方向溝に拳大の栗石を充填しており、約 1.8 m間隔で掘削されていたとみられる。

また、近世の陣屋に関わるとみられる溝（ＳＤ -21）を検出した。本調査地は陣屋敷地の南西出入口付近にあたるとみられる。幕末～明治期の絵図にＳＤ -21 に該当する水路などは見られないため、それ以前に掘削された可能性があり、陣屋の造営を考える上で重要な成果である。



第 80 図　出土遺物

写真 19-1　明治時代の遺構検出状況（西から）

写真 19-2　Ｅ区　SK-03 遺物出土状況

写真 19-3　完掘状況（西から）

写真 19-4　Ａ区　ＳＤ-21 完掘状況（南東から）

写真 19-5　Ｄ区　ＳＤ－52 完掘状況（西南西から）

写真 19-6　Ａ区　ＳＫ－52 完掘状況（南西から）

15. 平野氏陣屋跡　第 16 次調査

１．既調査の概要

今回の調査は、自治会集会所の増築に伴って実施した。既存建物の南側に屋外階段を増設する工事で、基礎が遺構面に至る設計であるため発掘調査での対応となった

２．調査の成果

（１）層序

Ⅰ：灰色砂礫土〔検出標高 50.25 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：暗褐色土〔50.0 m〕、Ⅲ：茶灰色粘質土〔49.8 m〕、Ⅳ：淡青褐色粘質土〔49.4 m〕、Ⅴ-1：灰褐色粘質土〔49.2 m〕、Ⅴ-2：暗灰褐色粘質土〔49.15 m〕、Ⅵ：淡茶灰色粘質土〔48.9 m〕

第Ⅰ層は現代盛土、第Ⅱ層は近世以降の整地層である。第Ⅲ・Ⅳ層は近世前半の陣屋造営に関係するとみられる造成層、第Ⅴ層は中世頃の堆積で、遺物包含層とみられるが、遺構堆積土である可能性も考えられる。第Ⅵ層は地山とみられる。

調査では、重機により第Ⅲ層上面まで除去し、遺構検出をおこなったのち、第Ⅲ層を人力で掘削して第Ⅳ層上面で第２遺構面の確認をおこなった。

（２）遺構と遺物

中世

ＳＸ-51　調査区全体に拡がる灰褐色粘質土の堆積層である。深さ 0.3 m前後を測る。鎌倉時代前後の土器片が含まれることから、13 世紀前後に形成された遺物包含層または遺構堆積層と考えられる。面的な調査をおこなっていないため、遺構の詳細は不明である。

近世前半

ＳＸ-21　調査区中央で検出した、直径 1.6 mの円形の土坑である。約 0.7 mまで掘削したが、遺構の深さは確認できなかった。桶状の井戸枠の上端を確認しており、桶枠の井戸であった可能性が高い。掘削した範囲では顕著な遺物が出土していないため、詳細な時期は明らかでない。

近世後半～近代

ＳＤ-01　調査区北半で検出した、東西方向の小溝である。幅 0.5 m、深さ 0.3 m前後を測る。溝内は砂質土が堆積しており、上層には近代頃とみられる陶磁器片が含まれていた。屋敷地内の排水に関わる遺構とみられる。

ＳＤ-02　調査区西半で検出した、南北方向の小溝である。幅 0.2 m前後、深さ 0.1 m前後を測る。遺物はみられないが、ＳＤ-01 に切られることから、近世後半頃の遺構とみられる。

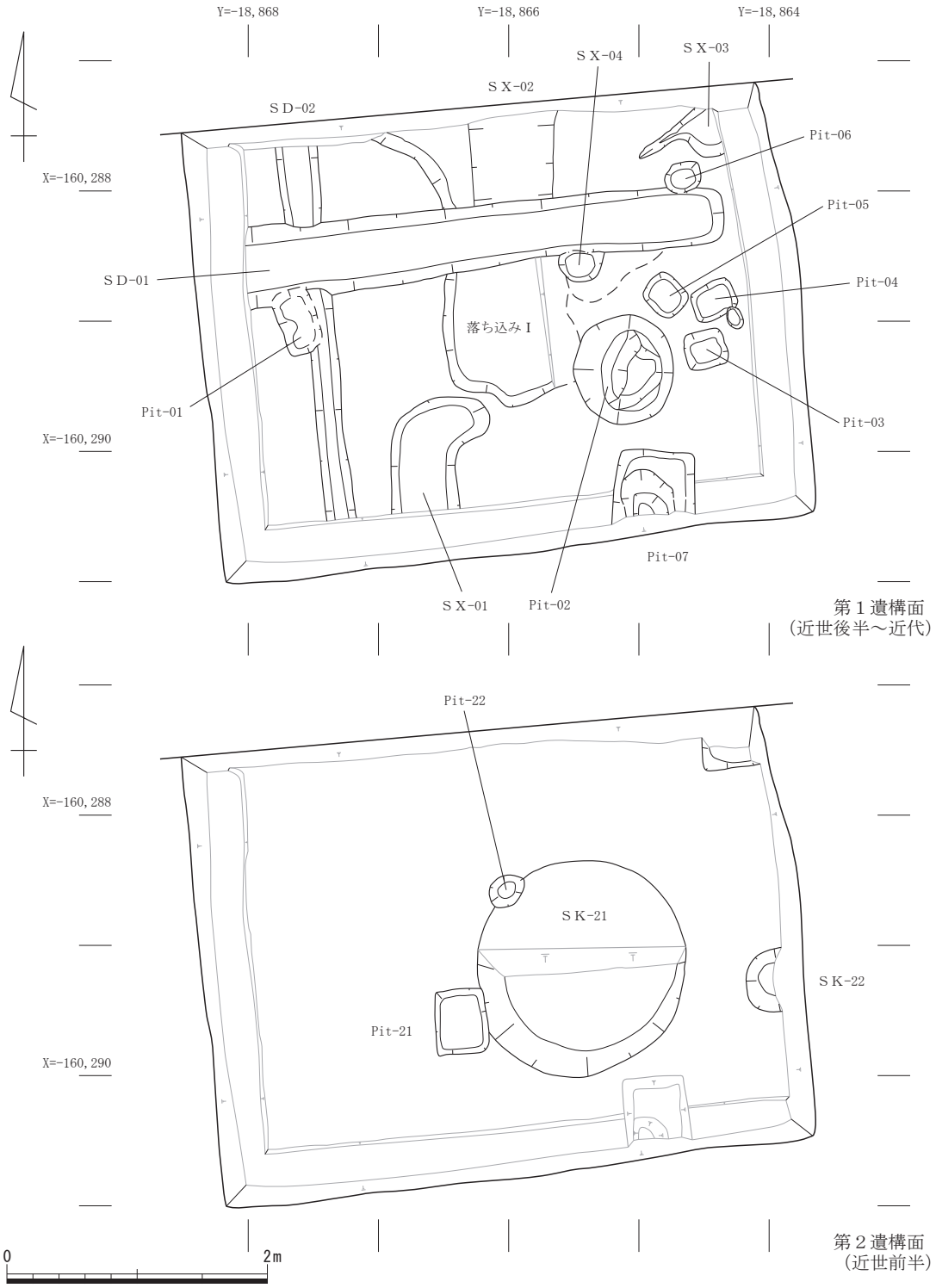
ＳＸ-01　調査区南西部で検出した不定形の土坑状の遺構である。東西 0.7 m前後、南北 1.2 m以上、深さ 0.1 m前後を測る。

ＳＸ-02　調査区中央北で検出した遺構である。溝となる可能性もあるが、極めて浅い堆積

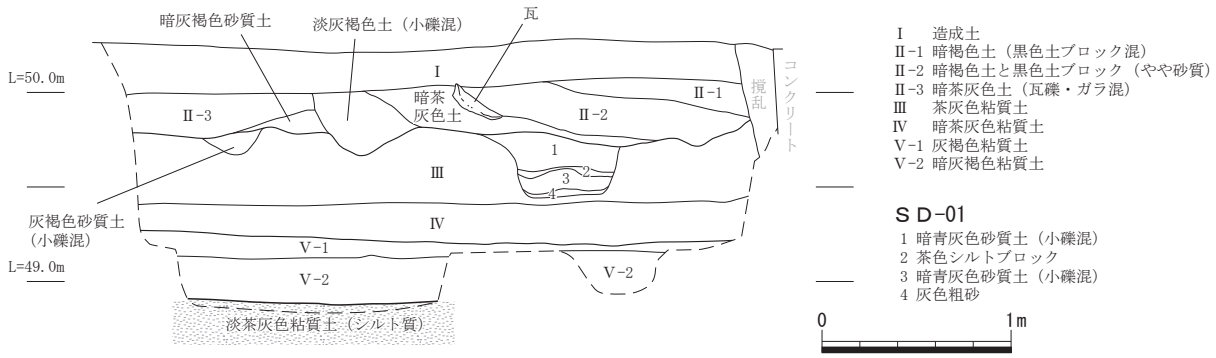
であるため性格は不明である。幅 0.6 m、深さ 0.05 mを測る。近世末頃の遺構とみられる。

ＳＸ -04　調査区東半で検出した不定形の遺構である。瓦が多数出土したことから、瓦埋め立てのために掘削した土坑となる可能性がある。ＳＤ -01 に切られる。近世後半頃の遺構と考えられる。

落ち込みⅠ　調査区中央で検出した不定形の土坑状の遺構である。前述のＳＫ -21 の埋没後



第 81 図　調査区平面図（Ｓ＝1/50）



第 82 図　西壁断面図（Ｓ＝1/40）

にできた窪みが落ち込み状になったものと考えられる。近世末頃の遺構であろう。

柱穴群　　調査区内で 10 基の柱穴を検出した。５基は円形で、最大の Pit-02 は直径 0.8 m、深さ 0.5 m、５基は方形で、最大の Pit-07 は東西 0.65 m、深さ 0.7 mを測る。埋土内には平瓦が多く、礎石の代用とみられるものも含まれる。他の柱穴は直径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.3 m 前後を測る。出土遺物は僅少だが、遺構面から近世後半の遺構と考えられる。

３．まとめ

今回の調査では、狭小な調査区にも関わらず、近世の屋敷地に関わる遺構を多数確認することができた。近世の絵図では、調査地は陣屋南西部に設けられた大手口の櫓門があった地区に相当すると考えられる。櫓門に対応するような大型の柱跡は確認できていないが、排水用の小溝や多数の柱穴を検出したことから、関連する構造物が建てられていた可能性が高い。今後の調査により、陣屋の大手口の構造について解明していく必要がある。

また、陣屋築造以前の灰褐色粘質土堆積を確認することができた。東側隣接地の調査では、鎌倉時代頃の土坑から瓦器・土師器が多数出土しており、楽田寺に関わる遺構が拡がっていた可能性が考えられている。今回の調査地でも鎌倉時代前後の遺物が多数出土していることから、楽田寺に関連する遺構が本地区にも広がっていた可能性が高い。

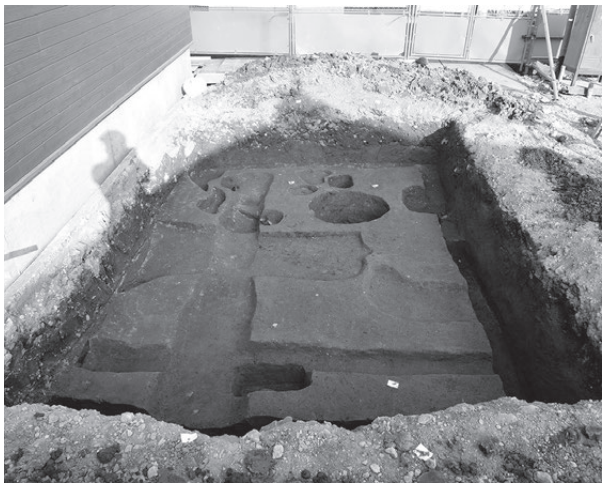


写真 20-1　第１遺構面　調査状況（西から）

写真 20-2　第２遺構面　調査状況（西から）

16. 宮森遺跡　試掘調査（S-201803）

１．既調査の概要

遺跡南西端において、農道の拡幅工事に伴う調査に先立つ試掘調査を実施した。第１～３トレンチを南北 4.0 ×南北 0.8 m、第４トレンチを南北 1.0 ×東西 0.8 mとして４つの調査区を設定した。調査地周辺では、矢部南遺跡第２次調査がおこなわれており、大和第Ⅲ様式期の方形周溝墓が検出されている。この墓域の東限の確認が期待された。

２．調査の成果

（１）層序

調査前は里道の法面および水田であった。

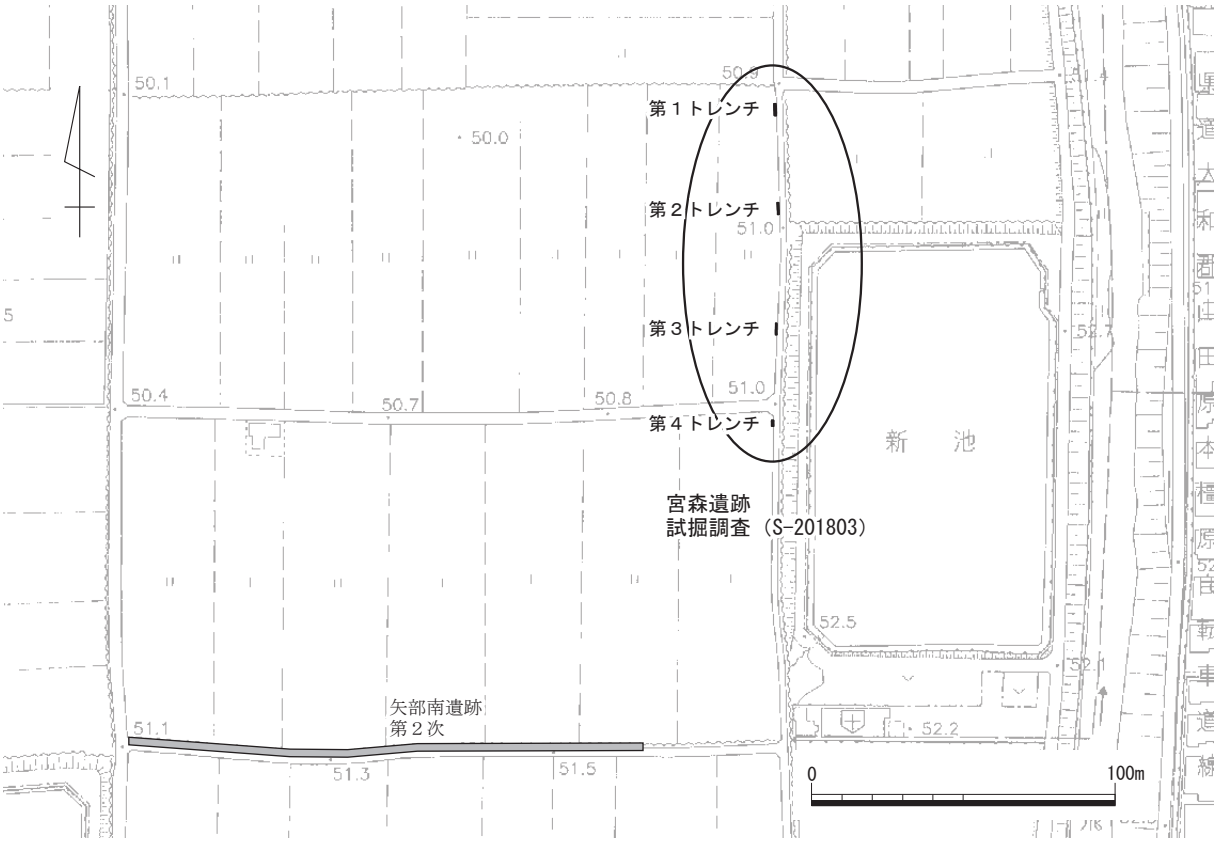
Ⅰ：暗灰色粘質土〔検出標高 50.6 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：暗青灰色土〔50.4 m〕、Ⅲ：茶灰色土〔50.3 m〕、Ⅳ:灰色粘土（暗褐色土ブロック）〔50.1 m〕、Ⅴ:黄褐色粘質土〔49.9 m〕

第Ⅰ層は水田耕土、第Ⅴ層は地山である。人力で第Ⅰ～Ⅳ層を除去して調査をおこなった。

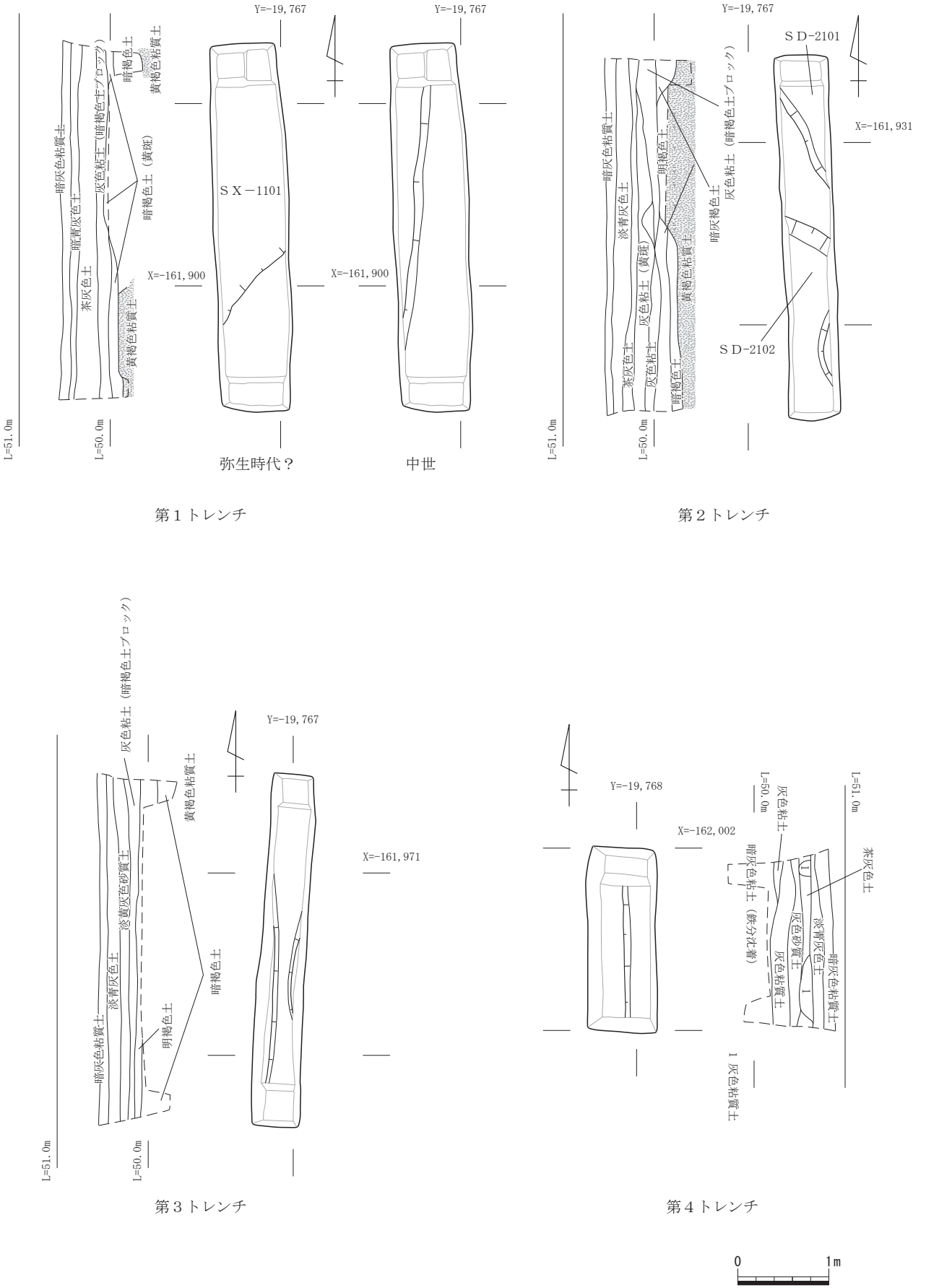
（２）遺構と遺物

弥生時代～古代

ＳＸ -1101　第１トレンチ中央やや南寄りで南肩を検出した落ち込みである。深さは 0.3 m



第 83 図　調査地位置図（Ｓ＝1/2,500）



第84図　第１～４トレンチ　平面図及び西・東壁断面図（Ｓ＝1/60）

である。遺物は出土しなかったが、埋土が暗褐色土だったことから、弥生時代～古代の遺構と考えられる。

ＳＤ-2101　第２トレンチ北端で南肩を検出した北西－南東方向の溝状遺構である。深さは0.2ｍ以上である。出土遺物が僅少のため、時期は不明である。

ＳＤ-2102　第２トレンチ南半で検出した深さ0.25ｍの溝状遺構である。北肩と東肩の一部を検出したのみであることから、不整形の土坑となる可能性も考えられる。時期は大和第Ⅵ様式である。

中・近世

小溝群　第１・３・４トレンチで検出した南北方向の小溝群である。深さは0.1ｍ程度である。埋土が灰色粘土であり、中～近世の耕作に伴うものであろう。

３．まとめ

今回の調査では、第１・２トレンチで弥生時代の遺構を検出した。試掘調査の結果から、工区北半について次年度に本調査で対応した（宮森遺跡第２次調査）。

写真21-1　第１トレンチ（南から）

写真21-2　第２トレンチ（南から）

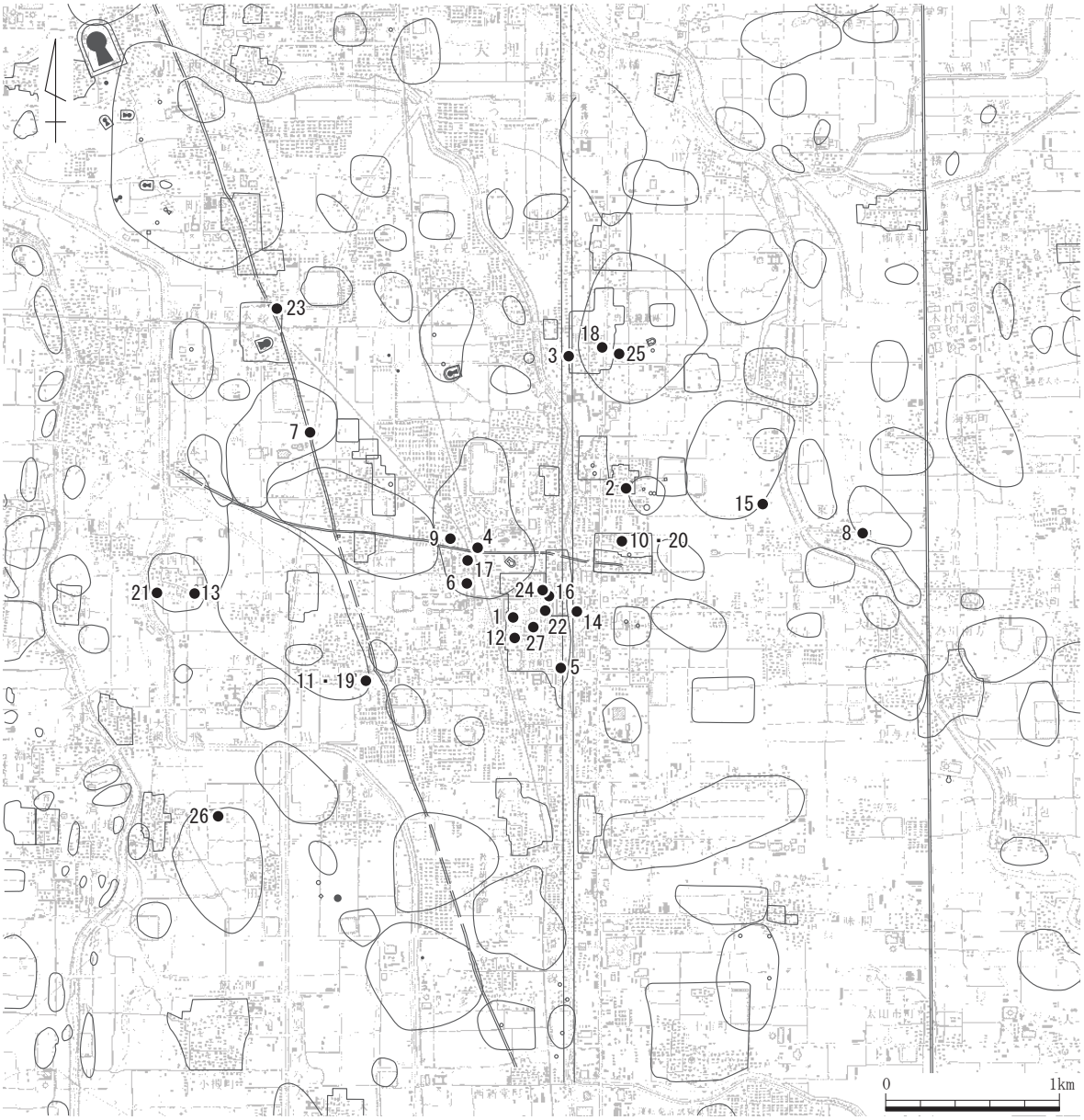
写真21-3　第３トレンチ（南から）

写真21-4　第４トレンチ（南から）

（２）工事立会の概要

2018 年度に実施した工事立会は 27 件である（第９表）。公共上下水道工事に伴う工事立会が２件、個人住宅建築等に関わる工事立会が９件、民間開発に伴う工事立会が 16 件である。

対象となった遺跡は、寺内町遺跡が多く、次いで羽子田遺跡、唐古・鍵遺跡と続く。例年に比して唐古・鍵遺跡の比率が下がっているが、唐古・鍵遺跡史跡公園や道の駅「レスティ唐古・鍵」が開園し、昨年度までの整備や工事に伴う立会分が無くなったことが一因と思われる。



第85図　田原本町の遺跡と工事立会地点（Ｓ＝1/40,000）

第 12 表　2018 年度　工事立会一覧

	遺 跡 名	立 会 地	原 因 者	工事の目的	立会者	立会日	内 容
1	寺内町 （R-201801）	田原本町小字茶町584番	宗教法人　浮照寺	施設（トイレ）の増設	柴田 西岡	2018. 4.26 ・ 5.18	敷地整備、およびベタ基礎掘削時に立会。既設建物基礎の一部で煉瓦が敷かれていた。遺物なし。
2	小阪安田前 （R-201802）	田原本町大字小阪 小字安田前313番1	個人	上下水道工事	柴田 渡瀬	2018. 5 16 ・ 6.22	掘削時に立会。上水道工事はGL-0.8m程度の掘削で、遺構面には達しない。下水道工事はGL-1.66m程度の掘削で、-1.25mで遺構面となるが、遺構・遺物は確認できなかった。

	遺 跡 名	立 会 地	原 因 者	工事の目的	立会者	立会日	内 容
3	唐古南氏居館跡推定地 下ツ道 （R-201803）	田原本町大字鍵小字垣内 356番20	個人	個人住宅の建築	柴田	2018. 5.24	工事立会時に基礎工事が完了していた。
4	羽子田 羽子田26号墳 羽子田27号墳 （R-201804）	田原本町大字新町 小字エブナ218番	個人	社宅の建築に伴う 雨水桝の設置	柴田	2018. 6. 1	0.2mの盛土上から1.0m程度の掘削。-0.6mで中世遺物包含層を確認。遺構・遺物なし。
5	寺内町 （R-201805）	田原本町小字南町413番	不明	擁壁の設置	柴田 渡瀬	2018. 6.22	未届工事を確認したため立会。基礎改良工事部分はコンクリートが入っており、詳細不明。遺物なし。
6	羽子田 （R-201806）	田原本町小字有田285番10	個人	個人住宅の建築	柴田	2018. 7.17	砕石杭工事時に立会。遺構・遺物不明。
7	宮古北 筋違道 （R-201807）	田原本町大字宮古 小字下高田543番1	個人	個人住宅の建築	清水	2018. 7.19	発掘調査対応のところ無連絡で擁壁工事を開始していたため立会。GL-0.7m程度の掘削で、-0.5m前後で一部が遺構面になるとみられる。河跡状遺構を確認したが、時期は不明。遺物なし。
8	東井上 （R-201808）	田原本町大字東井上 小字ミソノ 149番2　南西側道路外・ 205番1　南側道路	田原本町 （下水道課）	下水道工事	柴田 西岡	2018. 7.24 ～ 8. 3	GL-0.8～0.9m前後から粗砂層となる箇所があり、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器等が出土。集落を囲む水路跡か。
9	羽子田 羽子田30号墳 （R-201809）	田原本町大字新町 小字池ノ内81番35	㈱ルーフホーム	分譲住宅の建築	柴田 渡瀬	2018. 8.16	柱状改良工事時に立会。湿式の為、詳細不明。遺構・遺物不明。
10	阪手北 （R-201810）	田原本町大字阪手小字林昭 208番8	個人	個人住宅の建築	西岡	2018.10. 1	柱状改良工事時に立会。湿式の為、詳細不明。遺構・遺物不明。
11	十六面・薬王寺 （R-201811）	田原本町大字薬王寺 小字大筒121番1	㈱ローソン	コンビニエンス ストアの建築に伴う 汚水桝の設置	西岡	2018.10. 4	人孔部掘削時に立会。GL-1.6m程度の掘削で、-0.6m前後で弥生時代末～古墳時代の遺物包含層。土器片２点が出土。-1.2m以下は地山か。遺構なし。
12	寺内町 （R-201812）	田原本町小字茶町558番1外	個人	個人住宅の建築	清水	2018.10.11 ・10.17	柱状改良工事時に立会。GL-0.2mから近世～近代遺物包含層、-0.8m以下は溝・河跡とみられる。後日ベタ基礎掘削時に再度立会。GL-0.2m程度の掘削で、現代整地層内にとどまる。遺構・遺物なし。
13	西竹田 （R-201813）	田原本町大字西竹田 小字的場205番1	関西電力㈱	地際陥没復旧	柴田	2018.10.12	GL-0.7m程度の掘削で、道路造成土内にとどまる。遺構・遺物なし。
14	下ツ道 （R-201814）	田原本町大字阪手 小字南ノ垣内526番	㈱大匠建設	宅地造成に伴う 擁壁設置工事	清水 西岡	2018.10.16	無連絡で工事をおこなっているところを確認した為立会。擁壁基礎の掘削で、一部は既にコンクリートが流されていた。GL-0.6m程度の掘削で、遺構面にはおよばない。瓦器埦片１点を表採。遺構なし。
15	法貴寺斎宮前 （R-201815）	田原本町大字西井上 小字神光寺190番1・199番1 ・200番　西側道路	田原本町 （下水道課）	下水道工事	清水 柴田 渡瀬	2018.10.18 ～11. 2	人孔部および管埋設の掘削時に立会。工区は遺跡範囲の内外にまたがる。GL-1.5～2.1mの掘削で、範囲内では-1.5～1.9mで遺物包含層にあたる。遺構・遺物なし。
16	平野氏陣屋跡 （R-201816）	田原本町小字奥垣内762番	個人	建物外部階段増設 工事に伴う 仮設水道等設置	西岡	2018.10.19	平野氏陣屋跡第16次調査の原因工事に伴う水道等設置工事に立会。GL-0.46m程度の掘削で、遺構面にはおよばない。遺構・遺物なし。
17	羽子田 （R-201817）	田原本町小字瓜田402番1	不明	庭の造成工事	柴田	2018.11. 2	未届工事を確認したため立会。擁壁部の掘削はGL-0.3m程度で、造成土内にとどまる。遺構・遺物なし。
18	唐古・鍵 唐古南氏居館跡推定地 （R-201818）	田原本町大字鍵小字垣内 281番5	医療法人 樞の木会	保育園の建築	西岡	2018.11. 6	布基礎工事時に立会。GL-0.4m程度の掘削で、造成土内にとどまる。遺構・遺物なし。
19	十六面・薬王寺 （R-201819）	田原本町大字薬王寺 小字大筒121番1・116番	㈱ローソン	コンビニエンス ストアの建築 および排水管の埋設	柴田 清水	2018.11. 9 ・11.19	R-201811の工事立会と同一原因であるが、未届であった為別途立会。店舗建築の布基礎はGL-0.3m程度の掘削で造成土内にとどまる。後日の管埋設工事は、西側最深部でGL-0.9m程度の掘削で、東に向けて浅くなる。西半では弥生時代～古墳時代の遺物包含層を確認し、当該時期の土器片２点が出土した。遺構なし。
20	阪手北 （R-201820）	田原本町大字阪手小字林昭 208番5	個人	個人住宅の建築	西岡	2018.11.13	柱状改良工事時に立会。GL-0.5mで旧水田とみられる粘土、-2.0mからは粗砂層。面積狭小の為詳細は不明。遺構・遺物なし。
21	西竹田 （R-201821）	田原本町大字西竹田 小字道仙寺180番2 南側道路	関西電力㈱	電柱の設置	清水	2018.12.15	電柱設置杭掘削時に立会。GL-0.9mで旧地表面、-1.1m以下が近世溝の可能性がある粘質土で集落南辺の環濠の可能性がある。-1.7m以下は地山とみられる。遺物なし。
22	寺内町 （R-201822）	田原本町小字味間町 512番・513番・514番2	一建設㈱	分譲住宅の建築に 伴う擁壁工事	柴田	2019. 1.18	擁壁基礎掘削時に立会。GL-0.2m程度の掘削で、造成土内にとどまる。遺構・遺物なし。
23	黒田（法楽寺跡） （R-201823）	田原本町大字黒田 小字堂ノ北443番5・443番7	㈱T&K Office	児童福祉施設の建築	柴田	2019. 1.29	擁壁基礎掘削時に立会。GL-0.2m程度の掘削で、造成土内にとどまる。遺構・遺物なし。
24	寺内町 （R-201824）	田原本町小字八幡町712番	個人	個人住宅の建築	柴田	2019. 3. 2	柱状改良工事時に立会。湿式の為、詳細不明。遺構・遺物不明。
25	唐古・鍵 （R-201825）	田原本町大字鍵小字上塚 255番4	個人	青空資材置場の造成	柴田	2019. 3. 9	擁壁基礎掘削時に立会。GL-0.15mで中近世遺物包含層、-0.3mで中世遺構面直上となった為、掘削を-0.25mでとどめるよう設計変更を依頼。素掘小溝２条を確認したほか、弥生土器・瓦器・石器等が出土した。
26	佐味 （R-201826）	田原本町大字佐味 小字中佐味187番・198番1・ 199番1	平野クレーン 工業㈱	青空資材置場の造成	柴田	2019. 3.12 ・ 4. 3	一連の工事立会の為、年度を跨ぐがまとめて報告する。擁壁基礎掘削時に立会。GL-0.3～0.4m程度の掘削で、-0.2m前後で中近世の遺物包含層を確認。掘削はこの包含層内にとどまる。遺構・遺物なし。
27	寺内町 （R-201827）	田原本町小字本町622番2	個人	個人住宅の建築	柴田	2019. 3.27	基礎掘削時に立会。柱状改良工事と造成が完了していた為、遺構・遺物は確認できなかった。

３．文化財資料の整理・保管

（１）埋蔵文化財の整理・保管

平成 30 年度の発掘調査と試掘調査、工事立会に伴い保管した埋蔵文化財は、遺物コンテナ 135 箱とナイロン袋である。遺物量は前年度に比較し 50 箱程度多い。これは十六面・薬王寺遺跡第 37 次調査と第 39 次調査が弥生時代から古墳時代の集落部分にあたったため、80 箱の遺物量となったためである。それらを除くと遺物量は例年通りの少量である。平成 30 年度の内訳は下表のとおりである。

第 13 表　埋蔵文化財保管数

調査番号	遺跡名	調査次数	遺物明細	遺物量	
				現場後	洗浄後（土器・瓦）
H30-01	西竹田遺跡	第５次調査	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・瓦・木製品・石器等	４箱	３箱
H30-03	唐古・鍵遺跡	第124次調査	弥生土器・土師器・瓦器・木製品・石器・獣骨等	12箱	３箱
H30-04	東井上遺跡	第３次調査	弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器等	１袋（中）	１袋（F）
H30-05	平野氏陣屋跡	第15次調査	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・輸入磁器・近世陶磁器等	６箱	５箱
H30-06	十六面・薬王寺遺跡	第37次調査	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・近世陶磁器・木製品・石器・金属器等	31箱	16箱
H30-07	平野氏陣屋跡	第16次調査	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・輸入磁器・近世陶磁器・瓦等	２箱	２箱
H30-08	十六面・薬王寺遺跡	第38次調査	土師器等	１袋（小）	１袋（D）
H30-09	保津・宮古遺跡	第50次調査	土師器・瓦器・近世陶磁器・瓦・木製品・石製品等	２箱	１袋（G）
H30-10	千代遺跡	第９次調査	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・近世陶磁器・瓦・銭貨等	３箱	１箱
H30-11	佐味遺跡	第５次調査	土師器・須恵器・瓦器・石器・石製品・土製品等	１箱	1/3箱
H30-12	唐古・鍵遺跡	第125次調査	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・近世陶磁器・瓦・石器・獣骨等	17箱	11箱
H30-13	唐古・鍵遺跡	第126次調査	弥生土器等	２袋（小）	１袋（E）
H30-14	薬王寺東遺跡	第４次調査	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・近世陶磁器・瓦等	４箱	２箱
H30-15	十六面・薬王寺遺跡	第39次調査	弥生土器・土師器・須恵器・木製品・石製品等	49箱	38箱
H30-16	保津・宮古遺跡	第51次調査	土師器・須恵器・近世陶磁器・瓦等	１箱	１袋（中）
S-201801	十六面・薬王寺遺跡	試掘調査	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器等	１箱	１箱
S-201802	保津・宮古遺跡	試掘調査	土師器・須恵器・瓦等	１箱	１袋（H）
S-201803	宮森遺跡	試掘調査	弥生土器・須恵器・瓦器・近世陶磁器等	１箱	１袋（H）
R-201808	東井上遺跡	工事立会	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦	２袋（小）	１袋（中）
R-201811	十六面・薬王寺遺跡	工事立会	弥生土器	２点	１袋（D）
R-201819	十六面・薬王寺遺跡	工事立会	弥生土器	２点	１袋（C）
R-201825	唐古・鍵遺跡	工事立会	弥生土器・瓦器・石器等	１袋（中）	１袋（G）

※遺物量の表記の箱とは、長さ56cm・幅36cm・深さ15cmの容量を標準として換算している。
　また、袋（小・中・大）はナイロン袋、袋（アルファベット）はチャック付袋の大きさを表している（A:小→G:大）。

第 14 表　土器以外の遺物とサンプルの保管数量（該当次数のみ）

調査番号	遺跡名	調査次数	土製品	焼土塊	木製品	石製品	金属器	銭貨	木	石	獣骨・貝	種子	炭化米
H30-01	西竹田遺跡	第５次調査	－	－	1	18	－	－	1	15	－	5	－
H30-03	唐古・鍵遺跡	第124次調査	2	－	59	39	－	－	16+②	5	11+④	238+⑫	24
H30-04	東井上遺跡	第３次調査	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
H30-05	平野氏陣屋跡	第15次調査	2	2	6	7	4	1	1	5	1	3	2
H30-06	十六面・薬王寺遺跡	第37次調査	3	50	13	22	1	－	10	31	10	10+①	13
H30-07	平野氏陣屋跡	第16次調査	－	8	－	－	－	－	－	11	－	－	－
H30-09	保津・宮古遺跡	第50次調査	－	－	21	1	－	－	2	1	－	－	－
H30-10	千代遺跡	第9次調査	4	27	－	5	3	5	－	11	－	－	1
H30-11	佐味遺跡	第５次調査	1	1	－	7	－	－	－	2	－	2	－
H30-12	唐古・鍵遺跡	第125次調査	5	10	2	422	1	－	－	8	35+①	49+②	5
H30-14	薬王寺東遺跡	第４次調査	－	5	4	2	－	－	－	5	－	9	2
H30-15	十六面・薬王寺遺跡	第39次調査	－	26	15	20	－	－	7	14	1	49+①	5
H30-16	保津・宮古遺跡	第51次調査	－	－	1	－	－	－	－	1	－	－	－
S-201801	十六面・薬王寺遺跡	試掘調査	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－
R-201825	唐古・鍵遺跡	工事立会	－	－	－	6	－	－	－	－	－	①	－
計			18	129	122	551	9	6	37+②	109	58+⑤	365+⑰	52

※点数の丸囲み数字は、20点以上を１件としてカウントしたものである。

第 15 表　Pickup した土器・埴輪類の数量（該当次数のみ）

調査番号	遺跡名	調査次数	編年土器	搬入土器	絵画土器	記号土器	文様土器	特殊土器	土器製作	縄文土器	古墳時代土器	古代土器	中世土器	近世土器	円筒埴輪	形象埴輪	瓦
H30-01	西竹田遺跡	第５次調査	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－
H30-03	唐古・鍵遺跡	第124次調査	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
H30-05	平野氏陣屋跡	第15次調査	－	－	－	－	－	2	1	－	－	－	－	－	－	－	1
H30-06	十六面・薬王寺遺跡	第37次調査	－	4	－	2	－	63	1	－	－	－	－	－	－	1	－
H30-07	平野氏陣屋跡	第16次調査	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
H30-10	千代遺跡	第９次調査	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
H30-12	唐古・鍵遺跡	第125次調査	－	17	－	－	1	3	－	－	－	－	－	－	－	－	1
H30-14	薬王寺東遺跡	第４次調査	－	－	－	1	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－	－
H30-15	十六面・薬王寺遺跡	第39次調査	1	8	－	－	－	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－
S-201801	十六面・薬王寺遺跡	試掘調査	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－
R-201808	東井上遺跡	工事立会	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
計			1	30	0	4	1	92	4	1	0	0	0	0	0	1	6

再整理事業分　再整理事業では、既に収納している土器を再整理し、重要と思われる遺物を Pickup するとともに、再収納することにより遺物箱を減らすことを目的としている。平成 30 年度では唐古・鍵遺跡第 48 次調査分 86 箱を 29 年度から継続して整理し、完了した。これらの整理によって、下記の遺物を Pickup した。今回の再整理で注目されるのは、大和第Ⅳ－１様式の土器溜まり状の遺構（ＳＸ－1102）から絵画土器や記号土器を含む半完形土器が確認できたことである。

第 16 表　再整理事業に伴い Pickup した遺物数量（該当次数のみ）

遺　跡　名	調査次数	弥生土器	搬入土器	絵画土器	記号土器	文様土器	異形土器	ミニチュア土器	その他特殊土器	赤色顔料等内蔵	土器製作使用痕跡	土製品	焼土塊
唐古・鍵遺跡	第48次調査	17	35	10	11	11	5	7	6	5	29	17	16

（２）木製品の樹種同定と保存処理

平成 30 年度は、一般社団法人　文化財科学研究センターに委託して、唐古・鍵遺跡　第 118・124 次調査、保津・宮古遺跡　第 50 次調査等の木製品の樹種同定 72 点を実施した。また一般社団法人　文化財科学研究センター・㈱イビソクへの委託や町直営事業として、唐古・鍵遺跡他の出土木製品 72 点を保存処理した。

第 17 表　樹種同定一覧表

No.	遺　跡　名	次数	製品コード	製品名	遺構名	層位	結果（学名／和名）		同定機関
1	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00001W	組合せ鋤未成品	SD-5101	第4層	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	文化財科学研究センター
2	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00002W	用途不明品	SX-6101	第1層	*Castanopsis cuspidata* Schottky	ツブラジイ	文化財科学研究センター
3	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00003W	用途不明品	SX-6101	第1層	*Prunus jamasakura* Sieb. ex Koidz.	ヤマザクラ	文化財科学研究センター
4	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00004W	用途不明品	SD-6151	第2層	*Machilus thunbergii* Sieb.et Zucc.	タブノキ	文化財科学研究センター
5	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00005W	用途不明品	SX-6101	第1層	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	文化財科学研究センター
6	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00006W	角杭	SD-6152	第2層	*Aphananthe aspera* Planch.	ムクノキ	文化財科学研究センター
7	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00007W	角杭	SD-6152	第2層	*Aphananthe aspera* Planch.	ムクノキ	文化財科学研究センター
8	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00008W	角杭	SD-6152	第2層	*Aphananthe aspera* Planch.	ムクノキ	文化財科学研究センター

No.	遺　跡　名	次数	製品コード	製品名	遺構名	層位	結果（学名／和名）		同定機関
9	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00009W	角杭	SD-6152	第2層	*Aphananthe aspera* Planch.	ムクノキ	文化財科学研究センター
10	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00010W	角杭	SD-6152	第2層	*Aphananthe aspera* Planch.	ムクノキ	文化財科学研究センター
11	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00011W	丸太杭	SD-6152	第2層	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節	文化財科学研究センター
12	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00012W	角杭	SD-6152	第2層	*Aphananthe aspera* Planch.	ムクノキ	文化財科学研究センター
13	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00013W	角杭	SD-6152	第2層	*Aphananthe aspera* Planch.	ムクノキ	文化財科学研究センター
14	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00014W	穂摘具	SD-6152	第1層	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ	文化財科学研究センター
15	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00015W	穂摘具	SD-6152	第1層	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節	文化財科学研究センター
16	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00016W	用途不明品	SD-6152	第2層	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ	文化財科学研究センター
17	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-10005W	板A	SX-6101	第1層	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	文化財科学研究センター
18	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-10013W	板B	SX-6101	第1層	*Castanopsis cuspidata* Schottky	ツブラジイ	文化財科学研究センター
19	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-10014W	板B	SX-6101	第1層	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	文化財科学研究センター
20	唐古・鍵遺跡	119	KRK-119-00001W	農具柄	SD-1101C	第14層	*Aphananthe aspera* Planch.	ムクノキ	文化財科学研究センター
21	保津・宮古遺跡	50	HTM-050-00001W	用途不明品	SK-1051	第2層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
22	保津・宮古遺跡	50	HTM-050-00002W	用途不明品	SK-1051	第2層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
23	保津・宮古遺跡	50	HTM-050-00003W	方形曲物底板	SK-1051	第3層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
24	保津・宮古遺跡	50	HTM-050-10001W	板A	SK-1051	第2層	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	文化財科学研究センター
25	保津・宮古遺跡	50	HTM-050-10002W	板A	SK-1051	第2層	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	文化財科学研究センター
26	保津・宮古遺跡	50	HTM-050-00009W	用途不明品	SK-1051	第2層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
27	保津・宮古遺跡	50	HTM-050-00010W	用途不明品	SK-1051	第2層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
28	保津・宮古遺跡	50	HTM-050-00011W	用途不明品	SK-1051	第2層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
29	保津・宮古遺跡	50	HTM-050-10006W-1	板A	SK-1051	第2層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
30	保津・宮古遺跡	50	HTM-050-10007W	板A	SK-1051	第3層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
31	保津・宮古遺跡	50	HTM-050-10008W	板A	SK-1051	第3層	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	文化財科学研究センター
32	保津・宮古遺跡	50	HTM-050-10009W	板A	SK-1051	第3層	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	文化財科学研究センター
33	黒田大塚古墳	2	KDO-002-10001W	板A	SD-3101	第4層	*Chamaecyparis pisifera* Endl.	サワラ	文化財科学研究センター
34	黒田大塚古墳	3	KDO-003-00001W	用途不明品	SD-1101	第4層	Cupressaceae	ヒノキ科	文化財科学研究センター
35	黒田大塚古墳	1	KDO-001-10001W	板A	SD-1101	第5層	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	文化財科学研究センター
36	小阪里中遺跡	1	KSS-001-00005W	用途不明品	SD-102	第1層	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	文化財科学研究センター
37	小阪里中遺跡	1	KSS-001-00003W	用途不明品	SD-102	第2層	*Abies*	モミ属	文化財科学研究センター
38	小阪里中遺跡	1	KSS-001-00029W	丸太杭？	SK-03	第2層	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	文化財科学研究センター
39	小阪里中遺跡	1	KSS-001-10003W	棒B	SD-102	第1（下）層	*Podocarpus*	マキ属	文化財科学研究センター
40	小阪里中遺跡	1	KSS-001-10002W	棒B	SD-102	第1層	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	文化財科学研究センター
41	笹鉾山古墳群	1	SHK-001-00021W	用途不明品	SD-102S	第3-b層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
42	笹鉾山古墳群	1	SHK-001-00012W	鳥形木製品	SD-102S	第3-b層	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	文化財科学研究センター
43	唐古・鍵遺跡	13	KRK-013-00089W	柱？	SD-102		*Abies*	モミ属	文化財科学研究センター
44	笹鉾山古墳群	1	SHK-001-10002W	板B	SD-102S	第3層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
45	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-10008W	棒B	SX-6101	第1層	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ	文化財科学研究センター
46	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00034W	用途不明品	SD-71	第4層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
47	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00040W	用途不明品	SD-71	第3層	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	文化財科学研究センター
48	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00046W	円形曲物底板	SK-27	第6層	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	文化財科学研究センター
49	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00047W	円形曲物底板	SK-27	第6層	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	文化財科学研究センター
50	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00049W	不明建築材	SD-71	第4層	*Magnolia*	モクレン属	文化財科学研究センター

No.	遺　跡　名	次数	製品コード	製品名	遺構名	層位	結果（学名／和名）		同定機関
51	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00051W	円形曲物底板	SK-27	第6（下）層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
52	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-10003W	棒A	SD-6152	第2層	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.	カヤ	文化財科学研究センター
53	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00018W	用途不明品	SR-5152	第3（下）層	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	文化財科学研究センター
54	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00064W	丸太杭	SD-71	第3層	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ	文化財科学研究センター
55	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-10009W	板B	SX-6101	第1層	*Castanopsis cuspidata* Schottky	ツブラジイ	文化財科学研究センター
56	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-10010W	棒B	SX-6101	第1層	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ	文化財科学研究センター
57	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-10011W	板B	SD-6152	第1層	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ	文化財科学研究センター
58	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00070W	丸太杭			*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
59	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00071W	井戸構成部材	SK-27	第7（下）層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
60	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00072W	井戸構成部材	SK-27	第7（下）層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
61	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00073W	井戸構成部材	SK-27	第7（下）層	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	文化財科学研究センター
62	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00076W	丸太杭	SD-71	第4層	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.	アカマツ	文化財科学研究センター
63	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00079W	井戸構成部材	SK-27	第7（下）層	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	文化財科学研究センター
64	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-10008W	板A	SD-71	第4層	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	文化財科学研究センター
65	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-10023W	板A	SD-71	第6-b層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
66	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-10012W	棒B	SD-5101	第4層	*Aphananthe aspera* Planch.	ムクノキ	文化財科学研究センター
67	唐古・鍵遺跡	124	KRK-124-00017W	用途不明品	SR-5152	第3（下）層	bark	樹皮	文化財科学研究センター
68	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00059W	円形曲物底板	SD-71	第5層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
69	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00060W	円形曲物底板	SD-71	第5層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター
70	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00065W	井戸構成部材	SK-27	第7（下）層	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	文化財科学研究センター
71	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00067W	円形曲物底板	SD-71	第4層	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	文化財科学研究センター
72	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00069W	井戸構成部材	SK-27	第7（下）層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	文化財科学研究センター

第 18 表　保存処理木製品一覧表

No.	遺跡名	次数	製品コード	製品名	樹種	台帳No.	遺構名	層位	取上番号	保存処理機関	保存処理方法
1	羽子田遺跡	19	HGT-019-10017W	棒B	ヒサカキ属	75	SK-101	第5層	W-543	町	ラクチトール含浸法
2	黒田大塚古墳	1	KDO-001-00009W	用途不明品	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	216	SD-4101	第3層	W-301	イビソク	PEG含浸法
3	寺内町遺跡	8	JNC-008-00003W	円形曲物（井戸枠）	未同定	52	SK-51	第10層	W-1004	町	PEG含浸法
4	小阪里中遺跡	1	KSS-001-00004W	一木鋤	未同定	155	SD-102	第2層	W-203	町	PEG・凍結乾燥法
5	小阪里中遺跡	1	KSS-001-00022W	柱（祭祀具）	ヒノキ科ヒノキ属	153	SD-102	第2層		町	PEG・凍結乾燥法
6	小阪里中遺跡	1	KSS-001-00023W	柱（祭祀具）	ヒノキ科ヒノキ属	153	SD-102	第2層		町	PEG・凍結乾燥法
7	小阪里中遺跡	1	KSS-001-00024W	柱（祭祀具）	ヒノキ科ヒノキ属	153	SD-102	第2層		町	PEG・凍結乾燥法
8	小阪里中遺跡	1	KSS-001-00025W	柱（祭祀具）	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	153	SD-102	第2層		町	PEG・凍結乾燥法
9	小阪里中遺跡	1	KSS-001-00026W	柱（祭祀具）	ヒノキ科ヒノキ属	153	SD-102	第2層		町	PEG・凍結乾燥法
10	小阪里中遺跡	1	KSS-001-00027W	柱（祭祀具）	ヒノキ科ヒノキ属	153	SD-102	第2層		町	PEG・凍結乾燥法
11	唐古・鍵遺跡	59	KRK-059-00046W	角杭	コナラ属アカガシ亜属	216	SK-1101	第5層	W-502	町	PEG・凍結乾燥法
12	唐古・鍵遺跡	61	KRK-061-00088W-2	有頭棒	未同定	1555	SD-151BN	第8（下）層	W-866	町	PEG・凍結乾燥法
13	唐古・鍵遺跡	66	KRK-066-00003W	柱	ヤナギ科ヤナギ属	74	SR-201	第9層		イビソク	PEG含浸法
14	唐古・鍵遺跡	66	KRK-066-00011W	漆椀	未同定	2	SD-01	第1層		町	PEG・凍結乾燥法
15	唐古・鍵遺跡	66	KRK-066-00065W	用途不明品	マツ科マツ属[二葉松類]	2	SD-01	第1層		文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
16	唐古・鍵遺跡	66	KRK-066-00070W	漆椀	未同定	30	SD-01	第1～2層		町	PEG・凍結乾燥法

No.	遺跡名	次数	製品コード	製品名	樹種	台帳No.	遺構名	層位	取上番号	保存処理機関	保存処理方法
17	唐古・鍵遺跡	69	KRK-069-00030W	柱	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	848	SD-1109	第6層	W-604	イビソク	PEG含浸法
18	唐古・鍵遺跡	69	KRK-069-00041W	柱	クワ科クワ属	548	SD-1109	第5（下）層	W-5505	イビソク	PEG含浸法
19	唐古・鍵遺跡	69	KRK-069-00050W	不明建築材	マツ科モミ属	1003	SD-1109	第6層	W-674	イビソク	PEG含浸法
20	唐古・鍵遺跡	115	KRK-115-10069W	棒B	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	179	SD-102C	第8層	W-809	町	ラクチトール含浸法
21	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00020W	円形曲物底板	ヒノキ科ヒノキ属	222	SK-27	第3層	W-301	文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
22	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00021W	井戸構成部材	スギ科スギ属スギ	231	SK-27	第7（下）層	W-756	文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
23	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00022W	井戸構成部材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	231	SK-27	第7（下）層	W-759	文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
24	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00023W	用途不明品	ヒノキ科ヒノキ属	231	SK-27	第7（下）層	W-760	文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
25	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00024W	円形曲物底板	スギ科スギ属スギ	77	SD-64	第4層		文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
26	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00025W	桶	スギ科スギ属スギ	144	SD-70	第4層		文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
27	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00027W	用途不明品	ヒノキ科ヒノキ属	58	SD-71			文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
28	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00028W	曲物	ヒノキ科ヒノキ属	58	SD-71			文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
29	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00029W	円形曲物底板	ヒノキ科ヒノキ属	89	SD-71	第2層		文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
30	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00042W	漆椀	未同定	96	SD-71	第4層		町	PEG・凍結乾燥法
31	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00044W	漆椀	未同定	106	SD-71	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
32	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00045W	漆椀	未同定	112	SD-71	第5層		町	PEG・凍結乾燥法
33	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00052W	漆椀	未同定	132	SD-71	第5層		町	PEG・凍結乾燥法
34	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00053W	漆椀	未同定	143	SD-71	第6-b層		町	PEG・凍結乾燥法
35	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00054W	木錘	クスノキ科クスノキ属	138	SD-71	第6-b層		文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
36	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00055W	鍬	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	138	SD-71	第6-b層		文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
37	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00057W	鍬	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	132	SD-71	第5層		文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
38	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00059W	円形曲物底板	ヒノキ	129	SD-71	第5層		文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
39	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00060W	円形曲物底板	ヒノキ	129	SD-71	第5層		文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
40	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00065W	井戸構成部材	スギ	220	SK-27	第7（下）層	W-751	文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
41	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00067W	円形曲物底板	コウヤマキ	97	SD-71	第4層		文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
42	唐古・鍵遺跡	118	KRK-118-00069W	井戸構成部材	ヒノキ	220	SK-27	第7（下）層	W-755	文化財科学研究センター	トレハロース含浸法
43	唐古・鍵遺跡	121	KRK-121-10001W	棒A	ミカン科キハダ属キハダ	67	SD-104	第7層	W-701	町	ラクチトール含浸法
44	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00001W	用途不明品	ヒノキ	23	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
45	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00002W	用途不明品	スギ	27	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
46	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00003W	用途不明品	未同定	27	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
47	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00004W	用途不明品	スギ	26	SD-1001	第2-b層		町	PEG・凍結乾燥法
48	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00015W	桶底板	未同定	27	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
49	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00016W	桶底板	未同定	27	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
50	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00020W	漆箱	未同定	34	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
51	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00022W	漆箱	未同定	26	SD-1001	第2-b層		町	PEG・凍結乾燥法
52	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00050W	用途不明品	未同定	35	SD-1001	第4層		町	PEG・凍結乾燥法
53	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00052W	用途不明品	未同定	35	SD-1001	第4層		町	PEG・凍結乾燥法
54	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00057W	用途不明品	未同定	35	SD-1001	第4層		町	PEG・凍結乾燥法
55	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00058W	用途不明品	未同定	34	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
56	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00059W	用途不明品	未同定	34	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
57	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00061W	用途不明品	未同定	27	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
58	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00066W	用途不明品	スギ	27	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法

No.	遺跡名	次数	製品コード	製品名	樹種	台帳No.	遺構名	層位	取上番号	保存処理機関	保存処理方法
59	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00067W	用途不明品	スギ	27	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
60	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00068W	用途不明品	ヒノキ	27	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
61	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00069W	用途不明品	マツ属複維管束亜属	27	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
62	平野氏陣屋跡	7	HRJ-007-00073W	用途不明品	未同定	27	SD-1001	第3層		町	PEG・凍結乾燥法
63	保津・宮古遺跡	22	HTM-022-00011W	柱	ヒノキ	296	Pit-4108	第1層	W-101	イビソク	PEG含浸法
64	保津・宮古遺跡	22	HTM-022-00012W	柱	ヒノキ	258	Pit-4103	第1層	W-101	イビソク	PEG含浸法
65	保津・宮古遺跡	27	HTM-027-00009W	棒杭	マツ属複維管束亜属	83	SK-51	第8層	W-806	町	ラクチトール含浸法
66	保津・宮古遺跡	27	HTM-027-00010W	不明建築材	マツ属複維管束亜属	88	SK-51	第8層	W-823	町	ラクチトール含浸法
67	保津・宮古遺跡	27	HTM-027-10001W	板B	コナラ属クヌギ節	65	SK-51	第8層	W-803	町	ラクチトール含浸法
68	保津・宮古遺跡	47	HTM-047-00001W	柱	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	19	Pit-105	第2層	W-201	イビソク	PEG含浸法
69	保津・宮古遺跡	47	HTM-047-00002W	柱	ヒノキ科ヒノキ属	22	Pit-107	第2層	W-201	イビソク	PEG含浸法
70	保津・宮古遺跡	47	HTM-047-00003W	礎板	ヒノキ科ヒノキ属	21	Pit-106	第2層	W-201	イビソク	PEG含浸法
71	保津・宮古遺跡	47	HTM-047-00004W	礎板	ヒノキ科ヒノキ属	21	Pit-106	第2層	W-202	イビソク	PEG含浸法
72	保津・宮古遺跡	47	HTM-047-00005W	礎板	ヒノキ科ヒノキ属	21	Pit-106	第2層	W-203	イビソク	PEG含浸法

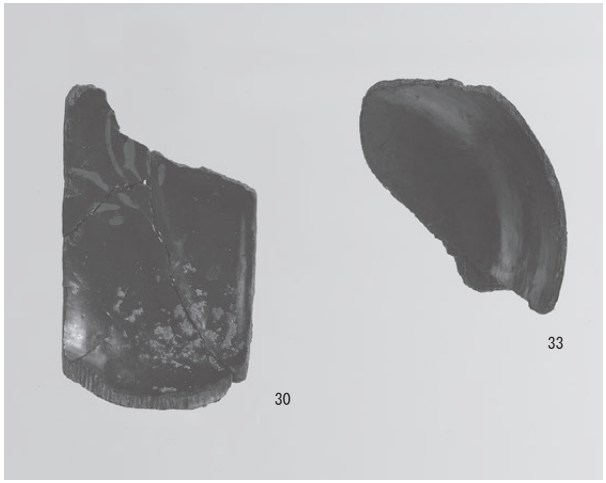


写真 22-1　唐古・鍵遺跡第 118 次調査
漆器椀（処理後）

写真 22-2　唐古・鍵遺跡第 118 次調査
木製鋤（処理後）

（３）図面・写真の保管と資料撮影、写真のデジタル化

発掘調査に伴う現場写真と図面の点数については、下表のとおりである。

写真撮影は、企画展用の遺物、保存処理用木製品等の遺物の撮影をおこなった。

また、過去に撮影収蔵している唐古・鍵遺跡の出土品のカラーポジフィルムについてデジタル化をおこなった。

第 19 表　図面・写真の保管数量

調査番号	遺　跡　名	調査次数	図　面		35mm（モノクロネガ）		デジタル	
			現場	遺物	シート数	コマ数	コンパクト	一眼
H30-01	西竹田遺跡	第５次調査	27	3	6	203	182	213
H30-02	薬王寺南遺跡	第３次調査	4	0	1	11	18	9
H30-03	唐古・鍵遺跡	第124次調査	27	18	5	181	265	355
H30-04	東井上遺跡	第３次調査	5	0	1	31	27	27
H30-05	平野氏陣屋跡	第15次調査	11	0	4	130	141	124
H30-06	十六面・薬王寺遺跡	第37次調査	37	2	11	396	672	442
H30-07	平野氏陣屋跡	第16次調査	6	0	2	70	71	97
H30-08	十六面・薬王寺遺跡	第38次調査	2	0	0	0	28	0
H30-09	保津・宮古遺跡	第50次調査	14	6	5	150	117	183
H30-10	千代遺跡	第９次調査	2	0	1	18	22	14
H30-11	佐味遺跡	第５次調査	11	0	0	0	176	182
H30-12	唐古・鍵遺跡	第125次調査	14	7	4	120	211	179
H30-13	唐古・鍵遺跡	第126次調査	3	0	0	0	17	10
H30-14	薬王寺東遺跡	第４次調査	11	0	3	73	59	79
H30-15	十六面・薬王寺遺跡	第39次調査	45	6	12	351	493	555
H30-16	保津・宮古遺跡	第51次調査	6	0	2	37	32	45
S-201801	十六面・薬王寺遺跡	試掘調査	11	0	0	0	76	81
S-201802	保津・宮古遺跡	試掘調査	8	0	2	37	25	31
S-201803	宮森遺跡	試掘調査	7	0	3	66	54	60
計			251	42	62	1,874	2,686	2,686

第 20 表　写真撮影一覧

種類	資料名・内容	仕　様	カット数	媒　体	備　考
考古資料	唐古・鍵遺跡　土器・木製品・埴輪・馬骨	デジタル645RAW デジタル35mmRAW	20 3	DVD-R　１枚	秋季企画展用
	佐味遺跡　第４次調査　石器・木製品 唐古・鍵遺跡　第118次調査　木製品ほか	デジタル645RAW	24	DVD-R　１枚	報告用
	唐古・鍵遺跡　木製品ほか	デジタル645RAW	10	DVD-R　１枚	保存処理用
	唐古・鍵遺跡　第124次調査　木製品	デジタル645RAW デジタル35mmRAW	9 2	DVD-R　１枚	報告用
	保津・宮古遺跡　第50次調査　木製品 十六面・薬王寺遺跡　第39次調査　柱	デジタル645RAW	4	DVD-R　１枚	報告用
	唐古・鍵遺跡　土器 寺内町遺跡　犬形土人形 佐味遺跡　硯ほか	デジタル645RAW	21	DVD-R　１枚	春季企画展用

第 21 表　デジタル化一覧

内　　容	カラーポジ（４×５）	カラーポジ（６×６）	成　果　品
唐古・鍵遺跡　卜骨・骨製品・青銅器鋳造関連遺物	22枚	27枚	DVD-R　１枚

Ⅱ．唐古・鍵考古学ミュージアムと唐古・鍵遺跡史跡公園

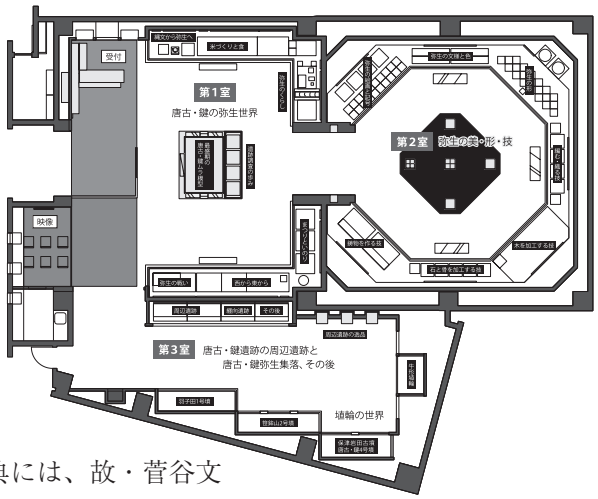
１．唐古・鍵考古学ミュージアム

【リニューアルオープン式典】

（１）リニューアルオープン

唐古・鍵考古学ミュージアムは田原本青垣生涯学習センター内にある展示施設として、平成16年11月に開館した。平成28年度には、施設の位置づけを田原本町埋蔵文化財センターの分室とし、平成29～30年にかけてリニューアルのため一時休館し、同年６月に再開館した。リニューアルの概要や方針、展示構成等は『田原本町文化財調査年報26』を参照されたい。

【唐古・鍵考古学ミュージアム展示配置】



平成16年11月24日
　唐古・鍵考古学ミュージアム開館
平成29年 ９月 １日
　一時休館、展示リニューアル工事施工
平成30年 ５月31日
　リニューアルオープン式典・内覧会
平成30年 ６月 １日
　一般公開

平成30年５月31日のリニューアルオープン式典には、故・菅谷文則 奈良県立橿原考古学研究所所長（当時）をはじめ、田原本町の議会議員、教育委員、文化財保護審議会委員、社会教育委員等計42名を招き、実施した。

（２）田原本ギャラリー　今回の逸品

第３室の一部を「田原本ギャラリー」として、町内の遺跡から出土した埋蔵文化財や、その他有形文化財を不定期に入れ替えながら展示公開している。平成30年度は以下の展示をおこなった。

この展示品の解説パネルは、唐古・鍵考古学ミュージアムのホームページでPDFファイルとして公開し、バックナンバーも同じページで公開している。

【田原本ギャラリー展示品】

	展示品	展示期間
第12回	水字貝を描いた盾形埴輪	平成30年６月１日～

【水字貝を描いた盾形埴輪】

（３）企画展「唐古･鍵遺跡の重要文化財～新指定品の紹介～」

内　容：田原本町が所有する弥生時代の大規模集落跡である唐古・鍵遺跡の出土品は、遺物箱にして約13,000箱にもなる。この度、この膨大な遺物の中から、各種材質のもの1,921点が国重要文化財に指定された。その一部を紹介する。

期　間：６月１日～７月８日（33日間）

入館者：2,033名（企画展のみ）

【企画展チラシ】

【展示構成と主要展示品】

（Ⅰ）土器（展示ケース①～⑤、⑭）

（Ⅱ）土製品（展示ケース⑭）

（Ⅲ）木器・木製品（展示ケース⑥～⑧）

（Ⅳ）石器・石製品（展示ケース⑨、⑩）

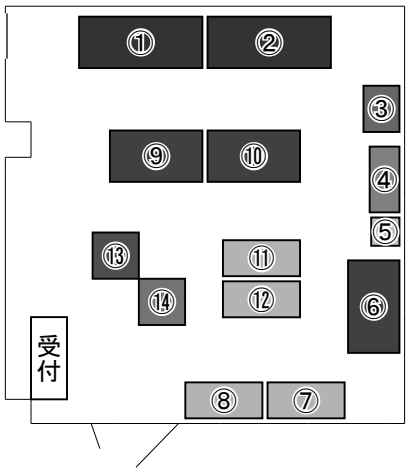
（Ⅴ）鋳造関連遺物（展示ケース⑪、⑬）

（Ⅵ）金属製品（展示ケース⑬）

（Ⅶ）ガラス製品（展示ケース⑬）

（Ⅷ）骨角牙製品（展示ケース⑫）

【展示ケースの配置】



【展示風景】

【展示品一覧】

遺跡名	種別	遺物名	点数
唐古・鍵遺跡	土器	編年土器９、搬入土器９、絵画土器10、記号土器５、土器文様４、小型土器６、異形土器３、鳥形土器１、異粘土使用土器１、被熱土器１	49
	土製品	分銅形１、銅鐸形２、瓢形１、鳥形２、紡錘車２、土錘１、土弾１、不明土製品３、焼成粘土塊１	14
	木器・木製品	斧柄・斧柄未成品２、平鍬未成品１、組合せ鋤未成品１、穂摘具１、盤１、匙・匙未成品２、合子１、高坏未成品１、蓋未成品１、部材１、用途不明品６	18
	石器・石製品	打製石鏃20、石剣５、石戈２、石小刀５、石錘５、スクレイパー２、石匙２、サヌカイト原石１、大型直縁刃石器１、石鍬１、石庖丁・石庖丁未成品10、磨製石斧13、磨石・敲石・凹石６、石鎚１、石鋸・玉砥石３、砥石２、石棒２、用途不明品１	82
	鋳造関連遺物	石製銅鐸鋳型１、土製銅鐸鋳型外枠３、土製武器鋳型外枠２、高坏形土製品２、送風管２	10
	金属製品	銅鏡２、銅鏃２、有孔円板１	5
	ガラス製品	小玉５	5
	骨角牙製品	刺突具２、針２、ヘラ１、紡錘車１、柄１、鹿角素材１、卜骨２、猪下顎骨穿孔品１	11
展示点数計			194

【関連イベント】

	内　容	日時・場所	参加人数
講 演 会 ・ シンポジウム	「出土品が語る弥生世界」	６月10日　午前10時30分～午後４時30分 弥生の里ホール（田原本青垣生涯学習センター）	311人

（４）リニューアル記念シンポジウム

唐古・鍵考古学ミュージアムのリニューアル及び唐古・鍵遺跡出土品の国重要文化財指定を記念して、講演会及びシンポジウムを開催した。

【シンポジウムプログラム】

10：30～10：35　開会挨拶　　田原本町長　森章浩

10：35～12：00　特別講演「弥生人の心を探る」
　辰巳和弘 氏（元同志社大学　教授）

12：00～13：00　休　憩

13：00～13：40　基調報告「東海の至宝～愛知県朝日遺跡の出土品」
　宮腰健司 氏（愛知県埋蔵文化財センター　副センター長）

13：40～14：20　基調報告「北陸の至宝～石川県八日市地方遺跡の出土品」
　下濱貴子 氏（小松市埋蔵文化財センター　参事）

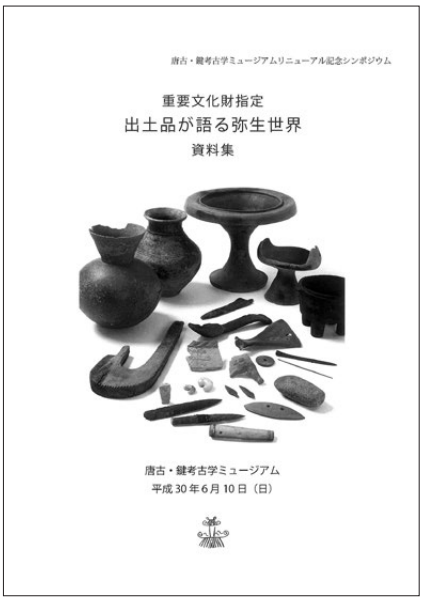
14：20～15：00　基調報告「大和の至宝～唐古・鍵遺跡の出土品」
　藤田三郎（唐古・鍵考古学ミュージアム　チーフプロデューサー）

15：00～15：15　休　憩

15：15～16：30　シンポジウム「出土品が語る弥生世界」

コーディネーター　寺澤　薫 氏（桜井市纒向学研究センター　所長）
辰巳和弘 氏
宮腰健司 氏
下濱貴子 氏
藤田三郎

16：30　閉会



【シンポジウム資料集】

【講演会（辰巳和弘 氏）】

【シンポジウム】

（５）秋季企画展「古墳時代黎明―唐古・鍵弥生ムラのその後―」

内　容：弥生時代最大級の唐古・鍵ムラが衰退すると同時に纒向遺跡が誕生する。大和弥生社会の終焉と古墳時代の始まりを考える上で、唐古・鍵ムラの状況がどうであったか、そして その後、弥生集落廃絶後の古墳時代の唐古・鍵遺跡の様相を探る。

期　間：12月27日～12月２日（32日間）

入館者：1,834名（企画展のみ）

【秋季企画展チラシ】

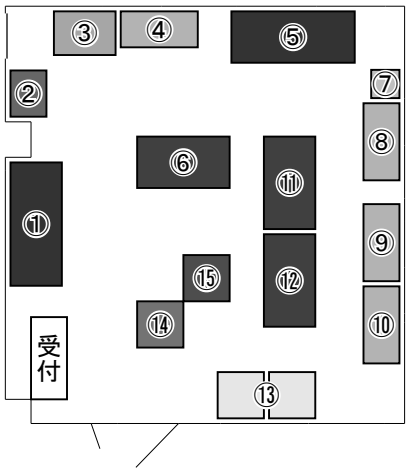
【展示構成と主要展示品】

（Ⅰ）弥生時代から古墳時代へ継続する集落（展示ケース①～④）

（Ⅱ）新たな古墳時代集落の展開（展示ケース⑤～⑧）

（Ⅲ）古墳の築造（展示ケース⑥・⑨～⑮）

【展示ケースの配置】



【展示風景】

【展示品一覧】

遺跡名	遺物名	点数
唐古・鍵遺跡	弥生土器3、古墳時代土器（土師器18、須恵器1）、搬入土器（盆地東南部3、山陰5、吉備1、讃岐1、丹後1、紀伊1、近江1、伊勢湾岸1、東海2）、製塩土器33、田下駄1、木錘4、手網枠1、木製腰掛1、滑石製他臼玉13、滑石製他勾玉3、子持ち勾玉1、双孔円板2、馬骨1	98
唐古・鍵古墳群	古墳時代土器（土師器2、須恵器4）、陶質土器1、円筒埴輪12、形象埴輪（家形8、蓋形3、盾形7、人物形16、馬形6、鶏形1、不明4）、鳥形木製品1、笠形木製品1	66
展示点数計		164

【関連イベント】

	内　容	日時・場所	参加人数
公園関連ウォーク	藤田　三郎（田原本町教育委員会事務局文化財保存課　主幹） 「史跡公園をウォーク　公園を散策しながら古墳時代の唐古・鍵遺跡を案内します」	11月17・18日　①午前11時～12時 ②午後３時～４時 唐古・鍵遺跡史跡公園	34人
講演会	青柳　泰介 氏（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　学芸係長） 「古墳時代の唐古・鍵遺跡を考える～倭飼部の実態を求めて～」	11月23日　午後２時～４時 研修室（田原本青垣生涯学習センター）	78人

（６）講座

一般向けの夏季講座として、以下を開催した。当講座で参加者が作成した土器は、11月に唐古・鍵遺跡史跡公園で実施した「弥生のムラまつり」内の「弥生土器コンテスト」に出品された。

【講座】

	内　容	日時・場所	参加人数
弥生土器講座	藤田　三郎（田原本町教育委員会事務局文化財保存課　主幹） 第１回　「弥生土器とは」 第２回～「弥生土器をつくろう」	８月16・21・22日 ９月６・７日　午前10時～12時 視聴覚室・陶芸室（田原本青垣生涯学習センター）	延べ30人

（７）入館者数

平成30年度における常設展の入館者数は10,168人、企画展の入館者は3,867人である。リニューアル前の平成29年度は常設展の開館日あたりの人数24.5人／日に対し、リニューアル後の30年度は40.0人／日であり、増加している。入館者数に関しての詳細は下記表のとおりである。

【常設展月別入館者数】

月	開館日数	有料入館者					無料入館者						合計	
		一般		高大生		小計	中学生以下		身障者	招待者	その他	小計		
６月	26	873	71	30	0	903	175	18	36	12	921	1,144	2,047	89
７月	26	379	0	23	0	402	101	0	35	6	115	257	659	0
８月	27	0	0	0	0	0	390	52	0	0	1,358	1,748	1,748	52
９月	26	736	403	40	0	776	40	0	18	3	93	154	930	403
10月	26	724	244	17	2	741	30	0	13	3	152	198	939	246
11月	26	470	128	10	0	480	294	0	5	1	965	1,265	1,745	128
12月	23	208	0	7	0	215	33	0	5	0	57	95	310	0
１月	23	273	73	20	0	293	16	0	8	0	134	158	451	73
２月	24	261	26	6	0	267	69	9	10	2	131	212	479	35
３月	27	527	198	15	0	542	161	115	12	0	145	318	860	313
合計	254	4,451	1,143	168	2	4,619	1,309	194	142	27	4,071	5,549	10,168	1,339

※４・５月はリニューアルのため閉館、網掛けは団体入館者数（内数）

【無料入館日に伴う入館者数】

内　容	開始日	終了日	日　数	人数		計
				常設展	企画展	
夏季無料入館	８月１日	８月31日	27	1,748	－	1,748
田原本町文化祭	11月２日	11月４日	3	676	588	1,264
関西文化の日	11月17日	11月18日	2	316	252	568
成人の日	１月14日	１月14日	1	5	－	5
合　計			33	2,745	840	3,585

【企画展入館者数】

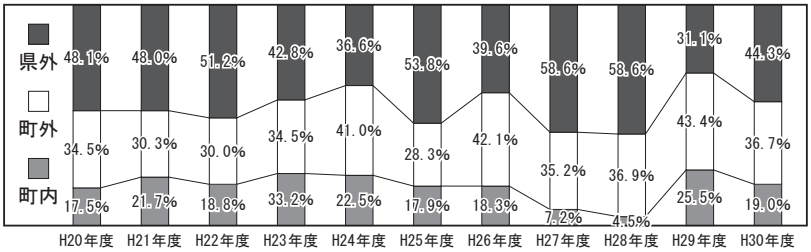
	開館日数	有料入館者					無料入館者						合計	
		一般		高大生		小計	中学生以下		身障者	招待者	その他	小計		
企画展	33	925	51	34	0	959	105	4	50	9	910	1,074	2,033	55
秋季	32	524	58	14	0	538	302	0	12	2	980	1,296	1,834	58
合計	65	1,449	109	48	0	1,497	407	4	62	11	1,890	2,370	3,867	113

※網掛けは団体入館者数（内数）

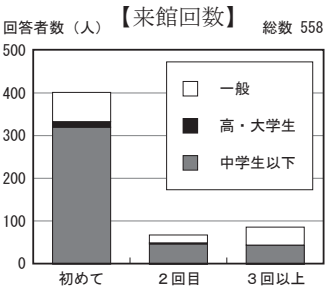
（8）入館者アンケート

常設展の入館者に対するアンケートを実施した。回答総数は565件、回答率は約６％であった。詳細は次のとおりである。

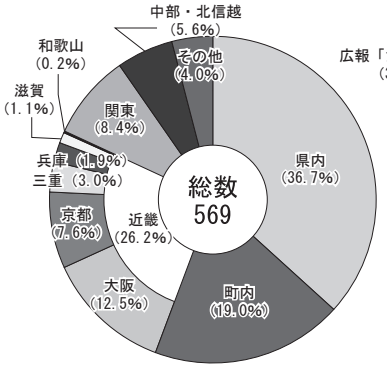
【居住地別　入館者年度推移】



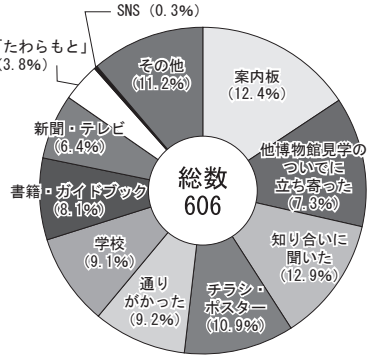
【来館回数】



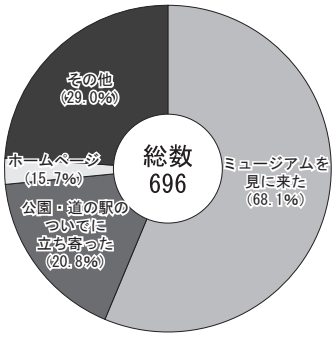
【入館者の居住地内訳】



【ミュージアムを知った理由】



【来館目的】



（9）視察・研修・学校等からの利用

下記のとおり視察・研修・学校利用があった。

【視察・研修・学校等からの来館】

視察・研修

来館日	来館者（団体）	人数	来館日	来館者（団体）	人数
６月３日	鳥取史談会	13名	10月11日	吉野町教育委員会OB会	12名
６月13日	新生奈良研究会	14名	10月14日	ならけんじん会	26名
６月13日	文化財保護指導委員	3名	10月20日	よっかいち人権大学あすてっぷ2018	66名
６月13日	小学校社会科教師会	11名	11月10日	群馬県立博物館友の会	26名
６月14日	唐古・鍵考古学ミュージアム展示ボランティアガイド研修	31名	11月16日	健康福祉課	13名
６月19日	安満人倶楽部	25名	11月21日	生駒小学校校長	2名
６月28日	木歴ゆう交会	13名	11月24日	参議院議員	3名
７月27日	古講座	9名	１月23日	河合町郷土を学ぶ会	73名
８月１日	奈良県立橿原考古学研究所学芸員研修	10名	２月10日	加茂遺跡クラブ	11名
８月１日	天理西中学校教諭研修	3名	２月15日	OHP田原本	23名
８月７日	田原本町立北中学校教員	※	２月21日	桜井市	10名
８月10日	大和郡山市教育研修会 中学校社会科部会	8名	３月２日	㈱日経カルチャー	20名
８月16日	土器づくり研修（唐古・鍵考古学ミュージアム夏季講座）	14名	３月８日	守山市立埋蔵文化財センター友の会	29名
８月18日	奈良経済同友会	11名	３月23日	NPO法人古代ヤマトの郷づくり塾	30名
８月24日	田原本町教育委員会新任教育研修	5名	３月26日	田原本小学校新任教諭研修	3名
９月19日	かんおんじ市民大学	29名	３月28日	田原本町観光ボランティアガイドの会	49名
				計	595名

※ 人数不明

学校

来館日	来館者（団体）	人数	来館日	来館者（団体）	人数
６月３日	天理大学	10名	10月13日	立命館大学	9名
６月20日	奈良教育大学	7名	10月19日	菊里高等学校	44名
７月12日	帝塚山大学文学部	4名	11月15日	奈良女子大学	3名
７月18日	韓国 釜山大学	2名	１月24日	奈良県立大学	33名
８月３日	芝中学校 芝高等学校	10名	２月９日	橿原中学校	11名
８月30日	香芝高校	8名	２月21日	比治山大学日本語文化研修	13名
９月１日	明治大学	10名	３月１日	近畿大学附属小学校	121名
				計	285名

（10）ホームページ

平成29年度にホームページを刷新し、「唐古･鍵総合サイト」において唐古･鍵遺跡の概要、唐古･鍵遺跡史跡公園と唐古・鍵考古学ミュージアムの情報を掲載することとした。平成30年度の唐古・鍵考古学ミュージアムのホームページへのアクセス数は33,501件で、前年度比15,852件の増であった。

【唐古・鍵総合サイト】

２．唐古・鍵遺跡史跡公園

（１）施設概要・開園

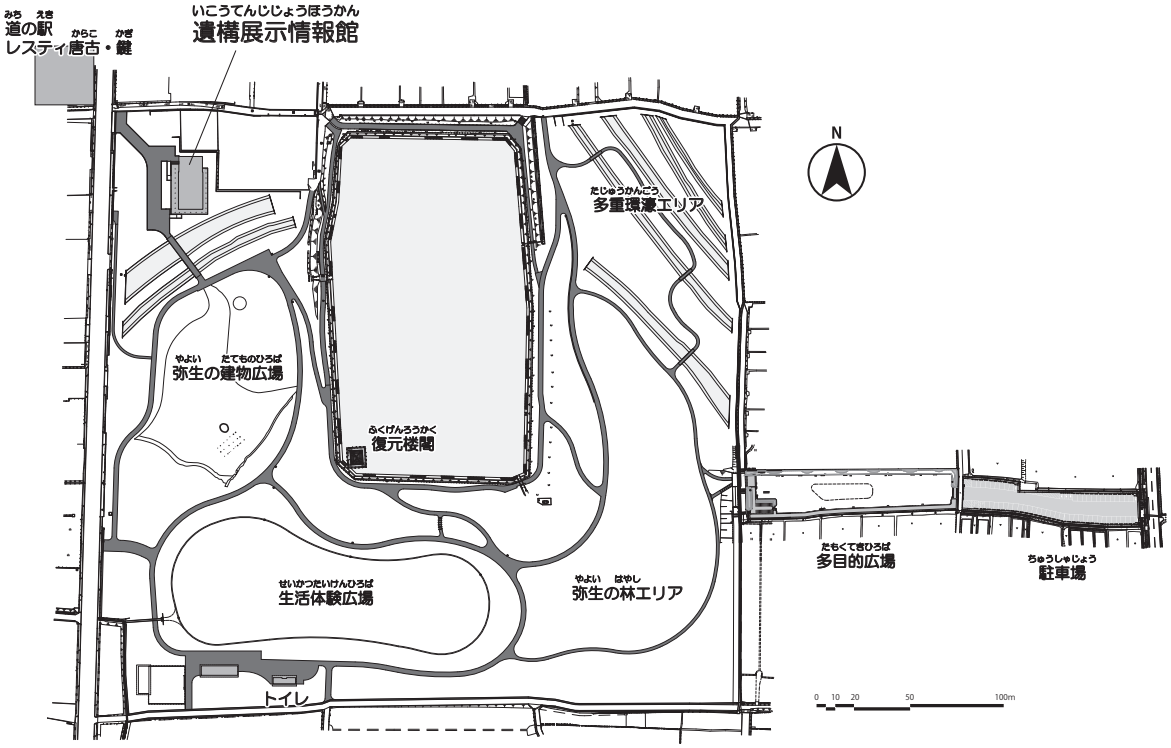
平成８年度、唐古・鍵遺跡の中心部約10haが国史跡に指定された。この史跡地の保存と活用のため、田原本町では平成21年度から29年度まで史跡公園整備事業を実施した。

平成29年度には、「唐古・鍵遺跡史跡公園条例」を制定し指定管理者制度を導入することとして、その選定をおこなった。

平成30年４月16日、国道を挟んで隣接する道の駅「レスティ唐古・鍵」とともに、竣工式及び竣工祝賀式を挙行した。式には、国会議員（代理）、奈良県知事・教育長、近隣市町長、町議会議員、町附属機関委員、地元代表者、施工業者など各関係者約140人を招いた。

史跡公園の開園日は平成30年４月17日である。

施設名称	唐古・鍵遺跡史跡公園	面積	107,799.60㎡
所在地	奈良県磯城郡田原本町大字唐古50番地の2		
主な施設	遺構展示情報館、休憩所、復元楼閣、屋外遺構展示施設、弥生の建物広場、生活体験広場、多重環濠エリア、弥生の林エリア、多目的広場		
指定管理者	京阪園芸株式会社（大阪府枚方市）（平成30～令和４年度）		
開園時間	午前９時～午後５時		
休園日	毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は開園し、その次の平日）、年末年始（12月28日～１月４日）		
電話番号	0744-34-5500	ＦＡＸ番号	0744-34-5511
ＨＰ	https://karako-kagi.com		



【公園ゾーニング図】

【竣工祝賀会】

【公園内覧会】

（２）公園利用・イベント

平成30年度に史跡公園及び道の駅で実施した一般向けイベントは32件であった。これらは町・ボランティア・指定管理者、民間会社の主催・共催による。イベント及び参加人数一覧は下記のとおり。

【イベント一覧】

日　付	内　容	実施・参加団体					一　般 参加数 （人）	場所／備考
		町	公　園 ボラン ティア	支援隊	指　定 管理者	その他		
４月28・29日	勾玉づくり・火おこし体験	○	○	○			83	
５月５日	弥生ものづくり体験 （勾玉・銅鐸・鏡つくり）				○		117	
５月12日	勾玉づくり	○	○				8	
５月27日	パワースポット 芝生YOGA&ピラティス					○	100	
６月９日	勾玉づくり	○	○				21	
７月14日	ひょうたんアート	○	○	○			3	
７月21・22日	夏祭り （土笛・勾玉・火おこし）	○	○	○	○		562	
８月４日	親子で星を見る会	○					50	
８月５日	奈良県防災総合訓練	○					50	
８月11日	土器づくり	○	○	○			20	道の駅
８月18日	植物入門セミナー				○		5	道の駅
８月25日	弥生の林で虫と遊ぼう		○		○		31	
９月16日	開業10周年イベント					○	180	
９月８日	土器づくり	○	○				16	
９月９日	考古学入門セミナー				○		9	道の駅
９月29日	植物を楽しむセミナー				○		18	道の駅
10月13日	勾玉づくり	○	○				4	
11月８日	勾玉づくり			○			12	
11月17・18日	弥生のムラまつり In　唐古・鍵	○	○	○	○		4,160	
11月22日	勾玉づくり			○			18	
11月23～26日	音楽イベント					○	100	
12月２日	ヤマトウォーク					○	200	
12月26日	植物入門セミナー				○		6	道の駅
１月12日	ひょうたんアートづくり	○	○				3	
１月13日	親子で星を見る会	○					50	
１月19日	植物入門セミナー				○		8	道の駅
２月２日	植物を楽しむセミナー				○		16	道の駅
２月９日	マスコットづくり	○	○				14	道の駅
３月２日	考古学入門セミナー				○		11	道の駅
３月９日	あじろあみ	○	○				9	道の駅
３月31日	春をさがそう！草花あそび	○	○				10	
３月26日～（４月７日）	桜まつり				○		－	次年度 にて報告
一般向けイベント計		16	14	7	12	4	5,894	
５月９日	狂犬病予防注射	○					40	健康福祉課
７月15日	俳句発表会					○	12	個人
８月21日	赤米炊飯			○			20	支援隊
３月14日	ボランティア活動					○	250	ちゅうしん
12月８日	ミュージックビデオ撮影					○	4	個人
２月20日	フォトコンテスト						85	

・弥生のムラまつり　In　唐古・鍵

史跡公園における秋の主要イベントとして、「弥生のムラまつり　In　唐古・鍵」を開催した。近隣市町やボランティア等による体験ものづくりワークショップ、大道芸ショーやコンサート等を実施した。また、「弥生わらアートコンテスト」「弥生土器コンテスト」も併せて実施し、作品展示をおこなった。２日間で延べ4,160人の来場があった。

イベント名：弥生のムラまつり　In　唐古・鍵

共　催：田原本町教育委員会・京阪園芸（株）　／　協　賛：奈良交通（株）

開催日：平成30年11月17・18日

【ムラまつり　パンフレット】

【コンテスト一覧】

コンテスト名	応　募 作品数	受　賞 作品数	審査員	共　催	協　賛
弥生わらアートコンテスト	9	9	井原縁（奈良県立大学） 寺澤薫（桜井市纒向学研究センター）	田原本町教育委員会 京阪園芸㈱	奈良交通㈱
弥生土器コンテスト	23	6	深澤芳樹（奈良文化財研究所） 平井明　（陶芸家）		

【ムラまつり　メインステージ】

【ムラまつり　ブースエリア】

【ムラまつり　ブース】

【わらアート入賞作品】

（３）公園来園者

遺構展示情報館の来館者数、午前10時・午後２時に園内の来園者数と駐車場台数を計測した。

月	遺構展示情報館 来館者（人）	来園者 （人）	駐車場台数 （台）
４月	12,637	4,780	1,621
５月	11,134	4,964	936
６月	5,911	2,053	272
７月	2,686	715	71
８月	2,944	879	96
９月	3,367	1,362	212

月	遺構展示情報館 来館者（人）	来園者 （人）	駐車場台数 （台）
10月	3,314	1,703	303
11月	6,121	5,423	620
12月	1,353	1,025	159
１月	1,388	1,119	199
２月	1,373	1,300	274
３月	2,194	1,805	344
計	54,422	27,128	5,107

（４）AR唐古・鍵

唐古・鍵遺跡史跡公園において、来園者に現代から弥生時代へ「タイムスリップ」の疑似体験を通して遺跡に対する理解を深め、満足度の向上に資することを目的として、ＡＲ（拡張現実）技術を活用したアプリケーションを制作した。プロポーザル方式により業者選定をおこない、平成31年２月27日にリリースした。

史跡公園の「弥生の建物広場」は、過去の調査で弥生時代の大型建物が確認された場所である。この大型建物を黒田龍二氏（神戸大学大学院教授）監修のもとＣＧで復元し、現地で画面を通して見ることができる。この他､史跡公園内の発掘ポイント巡りや、機器内蔵カメラの顔認証による弥生人への変身などのコンテンツがある。また、古代鏡を模したカバーを付けたiPadに本アプリをプリインストールし、史跡公園事務所で貸出ししている。

なお、制作にあたっては地方創生推進交付金を活用した。

【AR唐古・鍵チラシ】

【ＡＲ唐古・鍵】

アプリケーション	スマートフォン／タブレット用アプリケーション
アプリケーション名	ＡＲ唐古・鍵遺跡～よみがえる弥生のムラ～
対応ＯＳ	iOS、Android
開発者	株式会社ジーン

【QRコード】

App Store　Google Play

（５）フォトコンテスト

史跡公園を題材にフォトコンテストを実施した。応募作品85点から17点を受賞作品とし、表彰式をおこなった。式ののち、道の駅において作品展示をおこなった。

【フォトコンテスト詳細】

コンテスト名	唐古・鍵遺跡フォトコンテスト
共　　催	田原本町・京阪園芸㈱・奈良交通㈱
協　　賛	リコーイメージング㈱・㈱堀内カラー ㈱トミカラー
募集期間	平成30年11月１日～平成31年２月20日
作品テーマ	史跡公園での四季折々の風景・人などを 対象にした作品
審　査　員	中村一郎（奈良文化財研究所） 佐藤右文（文化財写真家）
応募作品数	85
受賞作品数	17
表彰式開催日	平成31年３月19日
作品展示期間	平成31年３月19日～（４月21日）
場　　所	レスティ唐古・鍵３階　展望室

【フォトコンテスト入賞作品】

３．ボランティア活動

（１）史跡公園ボランティア

史跡公園で活躍するボランティアを平成28年度から募集し、研修を重ねて活動を開始した。

開園した平成30年度は計43人にご登録いただき、以下の３グループに分かれて活動した。月１回程度、各グループで定例会を開いている。

・ガイドグループ（15人）

史跡公園内をガイドするグループ。活動実績は以下のとおり。

		４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	計
ガイド対応	団体数	7	16	9	6	7	9	15	11	5	9	5	8	100
	人数※	60	77	39	6	14	358	318	208	43	137	55	222	1,537
対応ボランティアのべ人数		7	29	11	19	7	37	25	17	5	14	7	19	197

※ガイドを受けた人数は概数

・ものづくりグループ（13人）

各種ものづくり体験イベントを開催するグループ。イベント内容は２．（２）参照。

・自然観察グループ（15人）

園内の樹木に銘板を作成・貼り付けや、昆虫観察イベント開催などをおこなう。

（２）唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

唐古・鍵遺跡を総合的に支援する任意ボランティア団体として、平成16年に設立された。主な活動は、史跡公園とミュージアムをまたぐ総括的な説明ガイドや、町内小学校の総合的な学習の支援とその教材整備、町文化祭などでのブース運営をとおした唐古・鍵遺跡のアピールなどがある。また、自主的な学びの場として「弥生勉強会」の実施、各地遺跡の現地見学などをおこなっている。

（３）ミュージアムボランティア

・ガイドボランティア

展示品解説ボランティアは、リニューアルオープン以降も実施している。年度ごとの更新とし、平成30年度のガイド登録人数は39人である。基本的に月２回の午前10時から午後４時（冬季の12月～２月は午前10時30分から午後３時30分）までとし、常駐２人体制とした。また、団体客等の多数来館の場合には臨時的に応援ガイドで対応することとしている。

【展示ボランティアガイド実績】

	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	合計
ガイドを受けた来館者数※1	422	179	317	590	416	434	115	239	165	463	3,340※2
対応ボランティアのべ人数	44	47	51	48	49	39	37	43	43	53	454

※１　ガイドを受けた人数は概数　　※２　ガイド人数／入館者の割合＝32.8%

・企画展受付ボランティア

秋季企画展の開催にあたり、ボランティアを募集し受付をおこなっていただいた。秋季企画展は32日間の会期中に延べ63人に参加いただいた。

Ⅲ．文化財の保護と活用

１．遺跡・文化財の保護

（１）国指定文化財

・唐古・鍵遺跡出土品

平成30年度において、唐古･鍵遺跡第３次調査から第115次調査の出土品のうち、主要な遺物1,917点及び附４点が国の重要文化財指定を受けた。

奈良県唐古（からこ）・鍵（かぎ）遺跡出土品　田原本町（田原本町埋蔵文化財センター保管）

本件は、奈良県田原本町に所在する唐古・鍵遺跡から出土した、弥生時代から古墳時代初頭にかけての出土品一括である。

遺跡は奈良盆地のほぼ中央、海抜47 ～ 49メートルの沖積低地に立地する。遺跡の存在は古くから知られ、昭和11 ～ 12年、国道の敷設にかかる採土地となった唐古池が調査された。その主要な出土品は重要文化財に指定されている（京都大学・奈良県所蔵）。その後奈良県立橿原考古学研究所、田原本町教育委員会によって、継続的に発掘調査が行われ、当遺跡は多重の環濠を有する集落跡で、弥生時代前期初頭に形成され、同中期から後期にかけて繁栄し、古墳時代前期に至って環濠が埋没・廃絶したことが判明している。

本件は、昭和52年度（第３次調査）から平成26年度（第115次調査）までの調査で出土した主要な遺物1,917点及び附４点で構成される。その内訳は、土器・土製品803点、木器・木製品203点、石器・石製品633点、鋳造関連遺物135点、金属製品19点、ガラス製品34点、骨角牙製品83点、繊維製品残欠７点、稲穂束残欠１点及び附とした炭化食物４点である。

土器には、弥生時代前期から後期までの編年の基準となる土器、絵画土器、記号土器、搬入土器を含む。絵画土器は楼閣や高床倉庫、人物、鹿などが描かれ、当時の精神文化を窺うことができる。

木器・木製品は農工具のほか、合子や高杯などの容器、盾や弓、戈や矛の武器・祭器など多彩である。石器･石製品は、農工具類や調理具、武器などで構成され、鞘入りの石剣や柄付き石戈など、希有な資料も含まれる。また、褐鉄鉱容器に内蔵された高品位の硬玉勾玉（２点）は、宝器としての勾玉の扱われ方を良く示す。

鋳造関連遺物は、唐古・鍵遺跡を特徴づける遺物で、石製の銅鐸鋳型残欠のほか、銅鐸や武器の土製鋳型外枠、送風管、高坏形土製品など各種の遺物がある。

これらは、当時の生業や交流、精神文化に関わる資料に加えて、青銅製品の鋳造など最先端の生産技術を復元するうえで重要な内容を持ち、その学術的価値はきわめて高い。

※文化庁文化財部2018「新指定の文化財」『月刊　文化財』657号より
「唐古・鍵遺跡」の項を抜粋・加筆・算用数字に修正

【指定品の一部】

・絹本著色融通念仏縁起絵　保存修理事業

田原本町矢部に所在する安楽寺の所蔵、国指定重要文化財「絹本著色融通念仏縁起絵」は、鎌倉時代最末期～南北朝期に制作された掛軸形式の絹本絵画である。全面に折れに伴う亀裂が生じ、料絹の細かな剝離がみられ、今後新たな料絹の欠失が生じる可能性が高かったため、平成29・30年度の２ヶ年度にわたって修理事業が実施された。

事業完了後は、奈良国立博物館に寄託された（平成31年３月24日）。

文化財概要

名称・員数	絹本着色融通念仏縁起絵　一幅	指定区分	国指定重要文化財
所有者	安楽寺（田原本町大字矢部）	指定年月日	昭和 62 年６月６日

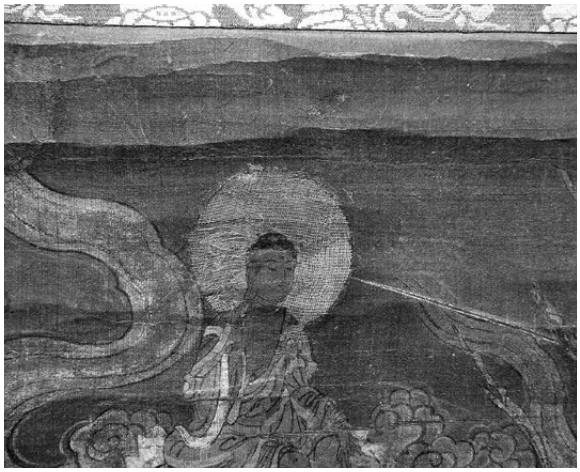
事業概要

実施期間	平成 29 年９月 13 日～平成 31 年３月 22 日	施行場所	奈良国立博物館　文化財保存修理所
施行者	株式会社　文化財保存		

法量（cm）	修理前	修理後
本紙寸法（縦 × 横）	153.0× 80.0	154.7× 80.8
表装寸法（縦 × 横）	282.0×105.0	252.0×101.4

修理仕様

	修理前の状況	主な修理方針
料絹	所々で折れやしわのため欠失。過去の修理による補絹あり。	欠失箇所を電子線劣化絹で補絹。旧補絹は除去。補絹箇所は図像を描かず、画面の色調に合わせた色を補彩。
折れ	所々に強い折れ。折山の亀裂の小口に剝離。	折れ箇及び今後俺を生じる可能性がある箇所に細く帯状に裁断した楮紙を裏面から貼り付けて補強。
付着物	下部に白い点状の付着物あり。	エタノールを含ませた筆で絡め取るなど除去。
汚れ	経年による汚れあり。	濾過水を噴霧、溶け出た汚れを吸取紙で吸着。
表装裂	寸法がやや大きい。明治期以降か。	適切な大きさで新調。
飾り金具	軸首、端食金具、吊り金具が揃う。	再使用。
収納	漆塗り被蓋箱に収納。	本紙の安全な保存のため太巻添軸を新調し太く巻くようにする。軸に合う桐二重箱を新調。



【料絹　修理前】

【料絹　修理後】

【折れ　修理前】

【折れ　修理後】

【全体　修理前】

【全体　修理後】

（２）県指定文化財

平成30年度に下記の町内文化財が奈良県の有形文化財に指定された（平成31年２月22日、奈良県教育員会告示第24号）。本指定により、町内の県指定文化財は８件となった。以下に答申内容を抜粋して示す。

【木造阿弥陀如来及両脇侍像】

種　　別　　有形文化財（彫刻）
名称及び員数　　木造阿弥陀如来及両脇侍像（もくぞうあみだにょらいおよびりょうきょうじぞう）　３躯
所　在　地　　磯城郡田原本町大字蔵堂354番地
所有者の氏名　　浄福寺
法　　量　　像高　　中尊87.7cm（２尺８寸９分）／左脇侍61.8cm（２尺３分）／右脇侍62.2cm（２尺５分）
時　　代　　鎌倉時代（13世紀）
説　　明　　田原本町蔵堂の浄福寺に本尊として伝わる等身大の阿弥陀三尊像である。阿弥陀は両手の第１・２指を捻じて来迎印を結び、観音は左膝を立てて両手で持物を捧げ持ち、勢至は跪坐して胸前で合掌する。こうした姿は臨終を迎える者のもとに来迎した阿弥陀三尊を表しており、両脇侍の天衣や裙裾が後方にたなびき、正面で腰布の下端が反返する表現からは来迎の速さや臨場感が窺える。

三尊とも檜材製で、中尊は頭体幹部を通して正中線で矧ぐ左右２材からなり、内刳りの上割首して左肩外側部、右肩先、両足部等を矧ぐ。両脇侍は頭体を通して１材より彫出して前後に割矧ぎ、内刳りの上割首して両肩先、両足部、裙裾等を矧ぐ。中尊の伏せ目で穏やかな顔立ちや、大きく丈の低い肉髻、彫りの浅いなだらかな衣文表現などに平安後期の定朝様が継承されているが、胸が張り胴部を絞る体躯や、両膝上の腰布下端を波打たせる点には写実性が認められる。像内は表面の起伏に合わせて均一に刳り抜かれ、条帛を別材矧ぎ付けとする構造からも制作は13世紀初め頃と考えられる。京都仏師の作とされる京都・廬山寺の阿弥陀三尊像（重文）とは様式、構造ともに共通点が多く、作者系統を考える上でも注目される。

両脇侍は、勢至が髻の髪束を捻らせ、上下の元結間の毛筋をＶ字形に表し元結上で四巴に結び、また腰に巻いた帯が裙の上下に出入りするなど、左右を差別化している点も注目される。背中に窪みや条帛の矧付け方も両脇侍で異なっており、担当仏師の違いによるものと考えられる。

本三尊像は木部材の後補部が少なく保存状態は良好である。来迎場面の彫像は『扶桑略記』に寛徳２年（1045）に三条天皇の皇子敦明親王が六条邸内に阿弥陀迎接像を造立したとあるのが文献上の初見とされ平安末から鎌倉時代にかけて作例が知られるが、県内で坐像形式の来迎彫像は珍しい。浄福寺は元亀２年（1571）の開基とされ、本三尊像は他所から移安されたとみられるが、県内に伝わる来迎彫像として貴重であるとともに、彫刻史上においても高い価値をもつものである。

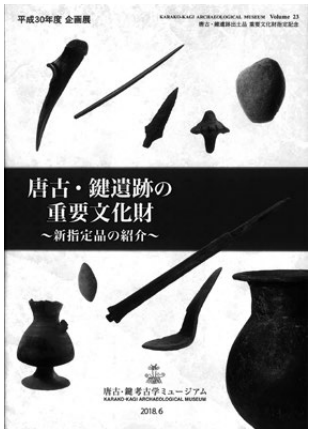
奈良県地域振興部文化財保存課2020『奈良県指定文化財　平成30年度版（第55集）』

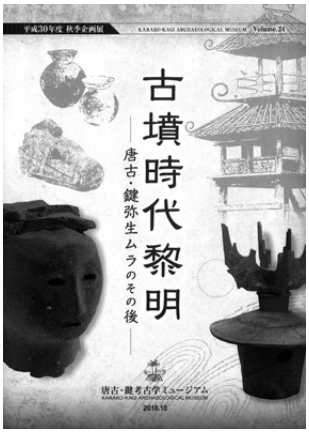
２．刊行物一覧

本年度は、下記７点の書物を印刷した。

【刊行物名】

書　籍　名	発行日	部　数	内　容
『唐古・鍵考古学ミュージアム　常設図録』	2018年５月	1,000部	唐古・鍵考古学ミュージアムのリニューアルオープンに伴い、内容を一新した常設展示図録
唐古・鍵考古学ミュージアム　企画展図録 『唐古・鍵遺跡の重要文化財～新指定品の紹介～』	2018年５月	2,500部	国の重要文化財指定を受けた唐古・鍵遺跡出土品を紹介
唐古・鍵考古学ミュージアムリニューアル記念シンポジウム資料集『重要文化財指定～出土品が語る弥生世界』	2018年６月	500部	唐古・鍵遺跡の出土品が重要文化財指定を受け、唐古・鍵考古学ミュージアムがリニューアルオープンすることを記念して開催したシンポジウムの資料
唐古・鍵考古学ミュージアム　秋季企画展図録 『古墳時代黎明―唐古・鍵弥生ムラのその後―』	2018年10月	2,000部	弥生時代の大集落である唐古・鍵遺跡が、どのように古墳時代を迎え、また適応していったかを探る展示
桜井市・田原本町共催シンポジウム資料集 『卑弥呼のクニを探る　―唐古・鍵から纒向へ―』	2019年１月	500部	桜井市・田原本町共催シンポジウム資料
『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅳ ―土製品・青銅器鋳造関連遺物・金属製品・ 玉製品・骨角牙製品・繊維製品他・補遺編―』	2019年３月	600部	唐古・鍵遺跡出土資料の解説目録。土製品・鋳造関連遺物他と、補遺として『目録Ⅰ』・『目録Ⅱ』から遺漏した土器を掲載
『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　正誤表』	2019年３月	800部	『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅰ』・『Ⅱ』・『Ⅲ』の正誤表





３．資料の活用

（１）資料の貸出

平成30年度は、下記の通り遺物を貸出した。唐古・鍵遺跡出土品が重要文化財指定を受けたことにより、まず地元での展示・活用を進めたため、例年より貸出件数が少ない。

継続貸出は、３機関に95点の遺物を貸出した。

【貸出資料の一覧】

貸出先／展覧会名／期間	遺　跡　名	資　料　名	点数
兵庫陶芸美術館／ 『弥生の美―土器に宿る造形と意匠―』 平成30年３月10日～平成30年５月27日	唐古・鍵遺跡	壷・ミニチュア土器・記号土器	26点
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館／ 速報展『大和を掘る36』 平成30年７月14日～平成30年９月２日	唐古・鍵遺跡	土器棺2	13点
	宮古北遺跡	甕2	
	阪手細長遺跡	鉢・東海系土器・須恵器壷・瓦器椀3・瓦器皿・土師器皿・円筒埴輪	
２機関／延べ会期期間日数130日	延べ４遺跡		39点

【資料の継続貸出】

貸出先／展覧会名／期間	遺　跡　名	資　料　名	点数
香芝市二上山博物館　常設展示 【貸出期間】平成30年４月１日～平成31年３月31日	唐古・鍵遺跡	壷・甕・高坏・槍先形石器	4点
大阪府立弥生文化博物館　常設展示 【貸出期間】平成30年４月１日～平成31年３月31日	唐古・鍵遺跡	土弾	2点
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　常設展示 【貸出期間】平成30年４月１日～平成31年３月31日	唐古・鍵遺跡	土製品・木製品・石製品	80点
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　常設展示 【貸出期間】平成30年６月15日～平成31年３月31日	唐古・鍵遺跡	土製銅鐸鋳型外枠・土製武器鋳型外枠・土製不明鋳型外枠・高坏形土製品・送風管・穂摘具・打製石戈・石製銅鐸鋳型残欠	9点
４件	延べ４遺跡		95点

（２）写真掲載・撮影

写真の貸出及び掲載（転載含む）は33件213点であった。写真掲載の内容は、唐古・鍵遺跡の出土遺物の利用度が高い。

【写真掲載・撮影】

貸　出　先	掲　載　書　籍　等	名称（遺跡名）	資　料　名	点数
個人	包装用紙	唐古・鍵遺跡	復元楼閣	１点
田原本町観光協会	産経新聞４月19日朝刊広告	唐古・鍵遺跡史跡公園	遺構展示情報館外観	１点
㈱コミニケ	近鉄ニュース６月号	唐古・鍵遺跡史跡公園	遺構展示情報館外観	１点
㈱洋泉社	『歴史REAL　日本の起源』	唐古・鍵遺跡	唐古・鍵ムラ鳥瞰図	１点
糸魚川市教育委員会	『日本の国石「ひすい」―バラエティに富んだ鉱物の国』	唐古・鍵遺跡	褐鉄鉱容器と翡翠製勾玉	１点
国立歴史民俗博物館	総合展示第１展示室（先史・古代）グラフィックパネル等	唐古・鍵遺跡	復元楼閣・記号土器片(2)・青銅器未成品・土製銅鐸鋳型外枠・土製銅鐸鋳型外枠(復元)	６点
大阪府立弥生文化博物館	平成30年度夏季特別展『弥生のマツリを探る―祈りのイメージと祭場―』関連印刷物	清水風遺跡	絵画土器(5)	10点
		唐古・鍵遺跡	絵画土器(4)・翡翠製勾玉を納めた褐鉄鉱容器	
地域情報ネットワーク㈱	『月刊大和路ならら2018年７月号』	唐古・鍵遺跡	絵画土器(4)・籾圧痕土器・弥生土器・翡翠製勾玉を納めた褐鉄鉱容器・農具集合・食膳具集合・高坏形土製品と送風管集合・第１次調査風景(2)・第３次調査風景・環濠(2)・ケヤキ原木出土状況・洪水埋没・柱穴群・竪穴住居・第74次調査大型建物跡・井戸・集水施設・木器貯蔵穴・炉跡状遺構・方形周溝墓・木棺墓・環濠土器一括投棄・イノシシ下顎骨一括投棄・唐古・鍵４号墳・空撮・末永雅雄講演・既調査図・大和唐古石器時代遺物図集・弥生土器の記号分類表	43点
		唐古南氏居館跡推定地	大溝	
		清水風遺跡	絵画土器(2)・土器絵画実測図・前漢鏡・河跡	
		八尾九原遺跡	絵画土器	
		阪手東遺跡	方形周溝墓	
		唐古・鍵遺跡史跡公園	航空写真	
	『月刊大和路ならら2019年４月号』	唐古・鍵遺跡史跡公園	大型建物がARで出現・古代鏡ipad	２点
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所	『An Illustrated Companion to Japanese Archaeology』	唐古・鍵遺跡	航空写真・弥生土器集合	２点（転載）
㈱雄山閣	講座『畿内の古代学Ⅱ古墳時代の畿内』	唐古・鍵遺跡	小型銅鐸の鋳型外枠	１点
	『奈良のミュージアム』(仮題)	唐古・鍵遺跡	記号土器・石製銅鐸鋳型と土製銅鐸(2)・楼閣が描かれた土器片・翡翠製勾玉を納めた褐鉄鉱容器・航空写真	７点
		唐古・鍵考古学ミュージアム	エントランス	
学校法人河合塾	2018年度第２回センタートレーニングテスト地理歴史(高校生対象)	唐古・鍵遺跡	復元楼閣・絵画土器	２点（転載１）
㈱ゴーウェスト	NHK『釣り人万歳』	唐古・鍵遺跡	褐鉄鉱容器と翡翠製勾玉・翡翠製勾玉(3)	４点
京阪園芸㈱	唐古・鍵遺跡史跡公園パンフレット	唐古・鍵遺跡	唐古・鍵ムラ鳥瞰図・第74次調査風景・大型建物跡・楼閣が描かれた土器片・褐鉄鉱容器と翡翠製勾玉・鶏頭形土製品	10点
		唐古・鍵遺跡史跡公園	遺構展示情報館内観	
		唐古・鍵考古学ミュージアム	ミュージアム外観及び第２展示室	
		道の駅「レスティ唐古・鍵」	道の駅外観	
尼崎市教育委員会	第48回尼崎市立田能資料館特別展『腕輪モノがたり』関連印刷物	唐古・鍵遺跡	銅釧(3)	３点
㈱筑摩書房	ちくま学芸文庫『つくられた卑弥呼』および、電子書籍版	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた土器片	１点（転載）
長浜市長浜城歴史博物館	企画展『賤ヶ岳合戦と七本槍』関連印刷物	個人蔵	平野権平宛羽柴秀吉判物・平野権平宛豊臣秀吉朱印状	２点
㈲アート・エフ	『2018年度 中３公立模試』塾用テキスト	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた土器片	１点
静岡県埋蔵文化財センター	平成30年度巡回展『いつもそばに動物がいた～出土品から知るヒトと動物の歴史』関連印刷物	唐古・鍵遺跡	鳥装のシャーマン模型	１点
㈱日経カルチャー	旅行会員誌「旅だより」１月号・２月号、日経新聞掲載広告	唐古・鍵遺跡	復元楼閣	１点
個人	『古代天皇誕生記』	唐古・鍵遺跡	子持勾玉・巫女形埴輪・翡翠製勾玉を納めた褐鉄鉱容器・唐古・鍵ムラ鳥瞰図・復元銅鐸	５点
橿原市教育委員会	歴史に憩う橿原市博物館平成31年度春季特別展『オトコとオンナ』関連印刷物	笹鉾山２号墳	馬牽き１号人物埴輪・１号馬形埴輪	２点
糸魚川市教育委員会	『翡翠って何だろう』	唐古・鍵遺跡	褐鉄鉱容器と翡翠製勾玉	１点（転載）
㈲エヌツー	ぴあ関西MOOKS『日帰りドライブぴあ2019-2020』	唐古・鍵考古学ミュージアム	第１展示室・第２展示室・唐古・鍵ムラジオラマ	３点
TVSテレビ制作㈱	THE!鉄腕!DASH	唐古・鍵遺跡	翡翠製勾玉	１点

㈱フクト	『夏の生活　社会　歴史Ⅰ』	唐古・鍵遺跡	弥生土器	１点 （転載）
㈱日本入試センター	2019年度版『社会５年デイリーサピックス540-21』	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた土器片	１点 （転載）
㈱エスアンド	『おにぎりの文化史― おにぎりはじめて物語―』	唐古・鍵遺跡	稲束と炭化米・弥生土器(2)	３点 （転載）
㈱アーテファクトリー	『文部科学省検定教科書用図書「中学社会歴史的分野」』 （通常版教科書・拡大教科書・指導書・デジタル教科書・デジタル教材）	唐古・鍵遺跡	弥生土器	１点 （転載）
㈱山川出版社	『図説　歴史散歩事典』	唐古・鍵遺跡	弥生土器(6)・石製農工具	７点
㈱アフロ	2019年度第１回記述模試「日本史」	唐古・鍵遺跡	弥生土器	１点
東京書籍㈱関西支社	奈良県小学校社会科通信「WORK OUT」６月号	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた土器片	１点
田原本・まちをすきになる会	『石橋亦史氏を偲ぶ書』	唐古・鍵考古学ミュージアム	田原本の歴史地図	１点
㈱新泉社	『纒向王宮への道のり 邪馬台国時代を考える』	唐古・鍵遺跡	記号土器集合(4)・弥生土器の記号分類表	５点 （転載１）
	シリーズ「遺跡を学ぶ」135 『唐古・鍵遺跡』	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた土器片・絵画土器(2)・記号土器集合(2)・弥生土器集合(2)・井戸供献赤彩土器・失敗土器・搬入土器(2)・搬入土器集合・古墳時代土器集合(3)・農具集合・叩き板・食膳具集合・紡織具集合・サヌカイト原石集合・サヌカイト製石器集合・鞘入り石剣・流紋岩製石庖丁製作工程・結晶片岩製石庖丁製作工程・鶏頭形土製品・土製銅鐸鋳型外枠・鋳造関連遺物集合・銅鐸片・翡翠製勾玉が納められた褐鉄鉱容器(2)・翡翠製勾玉(2)・穿孔されたイノシシ下顎骨・麻布・第１次調査風景(2)・木器貯蔵穴・方形周溝墓・木棺墓・大型建物柱・南東部多重環濠・環濠砂層埋没状況・区画溝・井戸供献土器出土状況・ケヤキ原木出土状況・イノシシ下顎骨一括投棄・大和唐古石器時代遺物図集・空撮・復顔模型・機織りをする風景模型・復元銅鐸・大型建物模型・大型建物3Dモデル・唐古・鍵ムラジオラマ・既調査図・大型建物平面図(2)・絵画土器実測図(2)・唐古・鍵遺跡および周辺遺跡分布図・唐古・鍵遺跡および周辺遺跡変遷図・唐古・鍵遺跡と清水風遺跡関係図・唐古・鍵ムラに運び込まれた土器(2)・木製品製作工程図・土製銅鐸鋳型構造図・弥生土器の記号分類表・復元楼閣	79点
		唐古・鍵遺跡史跡公園	大型建物柱・空撮(2)	
		唐古・鍵考古学ミュージアム	第１展示室	
		清水風遺跡	絵画土器(2)・前漢鏡・絵画土器実測図	
		八尾九原遺跡	絵画土器	
		阪手東遺跡	方形周溝墓	
		―	森本六爾	
33件		延べ41遺跡等		213点

（３）資料調査及び資料分析

本町所有・保管遺物について、下記の者・機関による資料調査（熟覧）及び資料分析があった。

【資料調査】

調　査　日	調　査　者	資　料　名
６月８日（金）～11月22日（木）	奈良県立橿原考古学研究所	唐古・鍵遺跡　炭化米
７月26日（木）	個人	唐古・鍵遺跡　弥生時代前期壷
８月13日（月）～15日（水）	個人	唐古・鍵遺跡　土器、木器
９月13日（木）～14日（金）	個人	唐古・鍵遺跡　石剣、石小刀
10月12日（金）～31日（水）	個人（北海道大学総合博物館）	唐古・鍵遺跡　第58次調査出土キジ科骨
10月12日（金）	個人	唐古・鍵遺跡　石槌、磨石
11月25日（日）	個人	唐古・鍵遺跡　高杯
12月10日（月）	個人	唐古・鍵遺跡　平鍬身未成品
12月11日（火）	個人	羽子田１号墳　牛形埴輪
12月13日（木）	個人	唐古・鍵遺跡　銅鐸形土製品
12月20日（木）	個人	唐古・鍵遺跡　工具柄

（４）楼閣くん・ロゴマーク

平成28年度、唐古・鍵遺跡への親しみを深め、キャラクター等を積極的に利用することにより地域の活性化に資することを目的として、当遺跡キャラクター「楼閣くん」及びロゴマークの商標登録をおこなった。登録したのは、右に示すキャラクター２図形とロゴマーク１図形である。なお、商標登録にあたっては地方創生推進交付金を活用した。登録後の利用件数は次表のとおり。

【キャラクター（左：図第１、右：図第２）】

【ロゴマーク】

【楼閣くん・ロゴマーク利用一覧】

平成29年度

利用者	利用図形			利用目的
	キャラクター		ロゴマーク	
	図第１	図第２		
磯城郡聴力障害者協会	○			大会記念誌
エイワ書店	○			ホームページバナー
町観光まちづくり推進課	○			ＰＲリーフレット
町観光まちづくり推進課	○			コンテストチラシ
町長寿介護課	○			ステッカー
アート工房	○	○	○	ハンカチ
㈱リヤン・ドゥ	○	○	○	キーホルダー、ストラップ、コースター
なら・たわらもと花水木	○			菓子パッケージ
笹田織物㈱	○	○		蚊帳ふきん
町住民保健課	○	○		検診はがき
まんがの虫	○	○	○	ケーキ
田原本町社会福祉協議会	○			ポロシャツ
㈱池利	○			素麺・春雨シール
寺井布帛製造所	○	○		作務衣
ハンドメイドしずく	○	○		ストラップ
とらのん	○			弁当箱
個人	○	○	○	ＣＤラベル
ラック産業㈱	○			パンツパッケージ
プレシャスピーチ	○	○	○	クッキーパッケージ
黒田桃花会	○	○	○	ビールラベル
デザインオフィス　リバティ			○	クリアファイル、菓子パッケージ
町教育総務課	○			大会パワーポイント
町総合政策課	○	○	○	多目的広場車止め
町健康福祉課	○			給食ランチョンマット
奈良トヨタ自動車㈱	○	○		チラシ、ポスター、ＷＥＢ広告
町観光まちづくり推進課			○	道の駅広告塔
町住民保険課		○		封筒
町長寿介護課	○			システムバナー
町住民保険課		○		チラシ
唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会			○	会報、ベスト、旗
町広報課	○			名刺
町観光まちづくり推進課			○	道の駅切符
町観光まちづくり推進課			○	プロモーション用タペストリー
町広報課		○	○	書籍
デザインオフィス　リバティ			○	ウォールマグ
町住民保険課	○	○		クリアファイル
㈱京阪園芸	○	○	○	ホームページ
個人			○	コースター
唐古アマチュア無線愛好会	○	○	○	カード、旗、Ｔシャツ、ホームページ
㈱京阪園芸	○		○	職員用名刺
3Seed			○	加工食品ラッピング
㈱ウーマンライフ新聞社	○	○		観光パンフレット
計　42				

平成30年度

利用者	利用図形			利用目的
	キャラクター		ロゴマーク	
	図第１	図第２		
㈱京阪園芸	○	○	○	封筒、チラシ、看板
㈱京阪園芸	○	○		パンフレット
町立北小学校	○			賞状
計　3				

４．桜井市・田原本町共催シンポジウム

田原本町の唐古・鍵遺跡と、桜井市の纒向遺跡を活用し、多くの人々に両遺跡・市町を知ってもらうとともに、現地を訪れてその歴史を学んでいただくことを目的として、平成29年度から市町共催のシンポジウムを開催している。平成30年度は右のとおり実施した。

桜井市・田原本町共催シンポジウム
「卑弥呼の国を探る　唐古・鍵から纒向へ」

開 催 日：平成31年１月20日
会　　場：朝日生命ホール（大阪府大阪市）
主　　催：桜井市・田原本町
後　　援：読売新聞社
聴講者数：330人

【シンポジウム風景】

【シンポジウムチラシ】

5．社会教育活動

（1）町内小中学校の授業

・総合的な学習の時間及び展示会

町内小学校から依頼を受け、総合的な学習の時間として以下内容の出前授業をおこなった。これらの児童の作品（勾玉、土器）や学習成果（新聞、感想文）は、２月上旬に開催した「田原本町内の総合的な学習展示会」で展示した。

【火熾し・炊飯（唐古・鍵遺跡史跡公園）】

【町内小学校６年生の総合学習出前事業一覧】

学校名	東小学校	北小学校	田原本小学校	南小学校	平野小学校
クラス数	1	1	4	2	2
人数	19	28	101	67	60
勾玉づくり	７月９日	４月27日	５月24日	６月25日	５月８日
土器づくり	10月５日	６月29日	６月４日・５日	10月11日	６月14日
土器野焼き	10月29日	10月26日	10月３日		11月６日
ミュージアム見学	６月21日	４月27日	11月20日		
火熾し・炊飯	７月３日	５月18日	６月８日・19日	11月16日	11月13日
脱穀					

【総合的な学習展示会】

内　容	田原本町内小学校の総合的な学習展示会
開始日	２月１日
終了日	２月６日
日数	６日
人数	169人

【展示風景】

【展示会チラシ】

・中学校職場体験学習

町内中学生の職場体験学習として、田原本中学校・北中学校の生徒を受け入れ、文化財保存課と唐古・鍵考古学ミュージアムで体験学習を実施した。

【中学校職場体験学習】

受　入　日	学　校　名	内　　容	人　数
11月６～８日	田原本中学校	土器洗浄・遺物整理・土器拓本・ミュージアム受付	４人
11月13～15日	北中学校		２人
６日間	２学校		６人

・その他町内学校等からの受入れ

上記町内学校の授業の他、下記表の学校授業の受入れをおこなった。

【学校授業の受入】

日　付	学　校　名	学　年	人　数	ミュージアム	史跡公園	内　　容
８月８日	南幼稚園 東幼稚園 北幼稚園		60	○		見学
６月26日	平野小学校	5	60		○	写生
11月21日	北小学校	―	193		○	校内マラソン

（２）講師の派遣

教育委員会等の事業として下記のとおり職員を派遣した。

【講師の派遣】

実　施　日	講　座　名　等	講師
６月15日（金）	田原本町立北中学校「ゲストティーチャー事業」	藤田
８月10日（金）	大和郡山市教育研修会「中学校社会科部会」	西岡
８月24日（金）	田原本町立小・中学校初任者研修	藤田
９月27日（木）	橿原市まほろば大学校クラブ講義「奈良を掘る」	清水
10月29日（月）	田原本・まちをすきになる会「10月例会」	清水
11月５日（月）	平成30年度　歴史文化資源説明力向上研修会	奥谷
11月７日（水）	田原本町生活学校「学習会」	藤田
１月18日（金）	平成30年度　文化財担当者専門研修「史跡等保存活用課程」	清水
２月21日（木）	五條市史編集委員会専門部会準備会議	藤田
２月21日（木）	桜井市教育委員会「教育委員研修」	藤田
２月27日（水）	奈良シニア大学一般教養講座	藤田
３月21日（木）	大阪府立弥生文化博物館　平成30年度弥生フェスティバル連続講演会「弥生の拠点集落とその周辺に」	藤田

Ⅳ．資料の報告

唐古・鍵遺跡出土土器付着炭化物から見た弥生時代の鱗茎利用

東京大学総合研究博物館
佐々木　由香
株式会社パレオ・ラボ
米田　恭子
田原本町教育委員会
藤田　三郎

１．はじめに

唐古・鍵遺跡は、これまでに第128次（2020年10月現在）に及ぶ調査が実施され、弥生時代の大規模な環濠集落であると判明している。これまでの調査では、多量の弥生土器のほか、多種多様な遺物が良好な保存状態で豊富に出土しており、弥生時代の生活文化を知るうえで重要な情報を提供している。土器においても残存状況が良好で、炭化物が付着する土器が散見される。特に土器内面に付着した炭化物は、調理・加工した内容物を示すため、当時の土器の機能を検討する上でも重要である。ここでは、鱗茎と推定される植物遺体が付着した土器内面炭化物を外部形態と細胞形態の観察により同定し、弥生時代の鱗茎利用について検討した。

２．資料と方法

（１）調査の概要と資料の出土状況

今回報告する土器は、田原本町教育委員会により付着炭化物が良好な土器として抽出された土器のうち、佐々木が形態観察により、鱗茎の可能性があるとして抽出した１点である。この土器は、唐古・鍵遺跡の西地区にあたる第38次調査から出土した（第１図）。この調査では、弥生時代前期から中期前葉（大和第Ⅰ－１－ｂ様式～大和第Ⅲ－１様式）の木器貯蔵穴や土坑10数基･区画溝１条、古墳時代前期（布留１式）の井戸１基・土坑１基、中世の大溝２条を検出した。特に弥生時代前期の「木器貯蔵穴」と推定される遺構が多く、唐古・鍵遺跡では最も古い大和第Ⅰ－１－ｂ様式から大和第Ⅱ－１様式までの時期が主体となっている[1]。

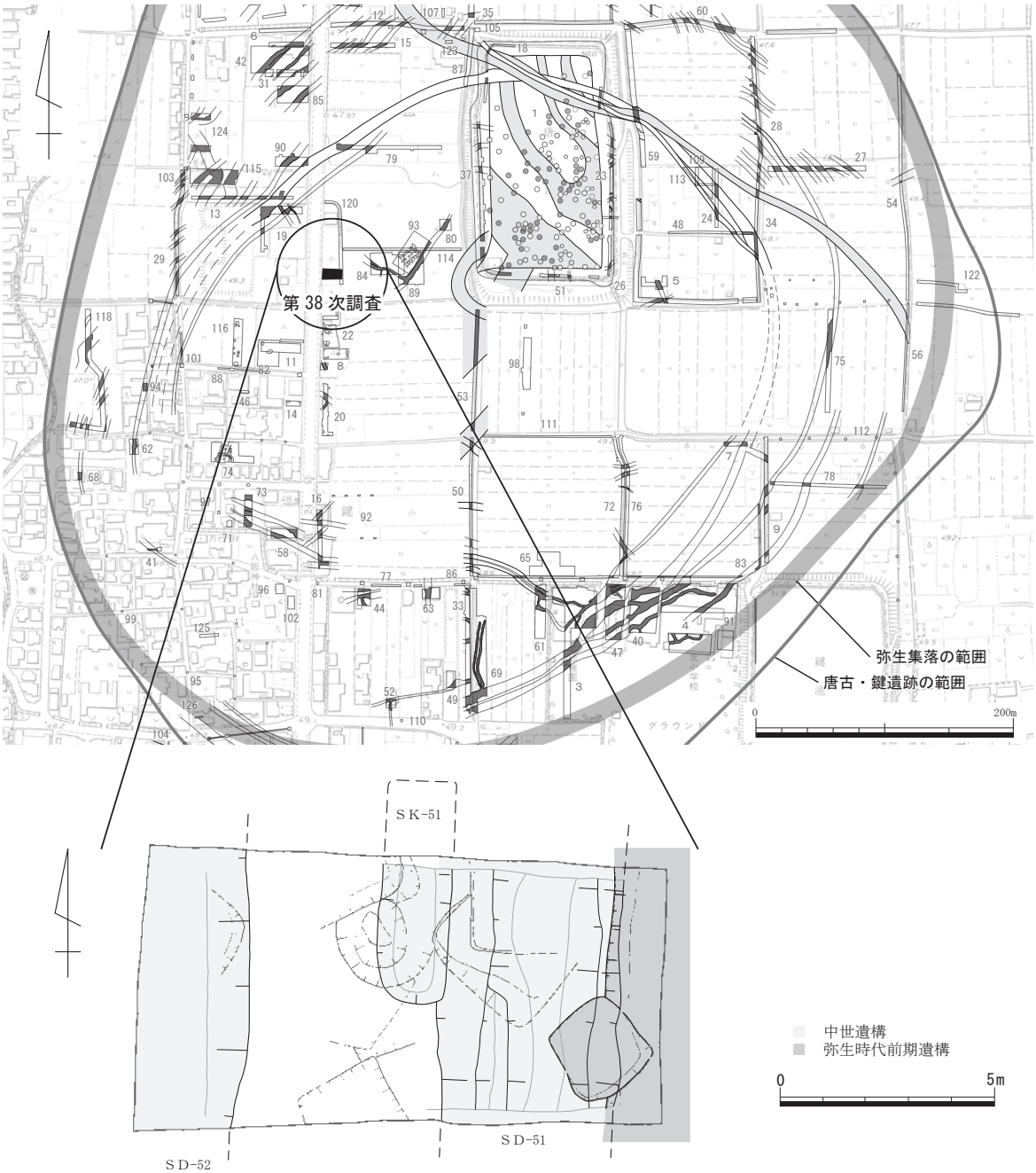
本報告土器は、調査区東端で検出した中世大溝（ＳＤ-51）の下層（第４層）から出土した（第１表）。この大溝内には多数の弥生土器が混在している状況であった。これは、前述の弥生時代前期の遺構を多数切って掘削されたためである。混在した弥生土器は、いずれも残存状況が良好であるが、これは大溝内の水分が豊富であり、比較的早く埋没したためであろう。

（２）分析方法

分析方法は、佐々木ほか（2014）に従った[2]。鱗茎と推定される植物遺体について実体顕微鏡

第１表　唐古・鍵遺跡出土の土器付着炭化物

試料No.（炭化物番号）	調査	遺構	層位	土色	グリッド	取り上げ日	遺物番号	製品コード
1（炭化物036）	カラコ38次	SD-51	第4層	暗灰色粘質土	276-277北半	891022	No. 69	KRK-038-00009PS



第 38 次調査 基礎データ

【調査地】	【調査期間】	【調査面積】	【出土遺物数】
田原本町大字唐古小字サツマ 51 番 1	1989 年 10 月 14 日～ 31 日	72 ㎡	150 箱

第 1 図　第 38 次調査区位置図および弥生時代前期・中世遺構平面図
（位置図：S ＝1/5, 000、平面図：S ＝1/150）

で観察し、デジタルマイクロスコープ（超深度マルチアングルレンズVHX-D500/D510）で写真撮影をした。その後、比較的残存が良好な箇所を４ヶ所選び、付着した炭化植物遺体の一部を手術用のメスで剝がし、カーボンテープで試料台に固定して、その後イオンスパッタにて金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（超深度マルチアングルレンズVHX-D500/D510）で検鏡及び写真撮影をおこなった。走査型電子顕微鏡で撮影した範囲において表皮細胞及び葉肉細胞それぞれ５細胞の長軸方向と短軸方向の長さを計測して、平均値と標準偏差を求めた。同定にあたっては、現生のユリ科ネギ属アサツキとノビル、ヤマラッキョウ、ユリ科アマナ属アマナ、キジカクシ科ツルボ属ツルボ、ヒガンバナ科ヒガンバナ属ヒガンバナ、キツネノカミソリの７種の炭化鱗茎と比較した(3)。

また、内面付着炭化物を用いて、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定をおこなった。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正をおこなった後、^{14}C年代、暦年代を算出した。^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した(4)。

３．結果

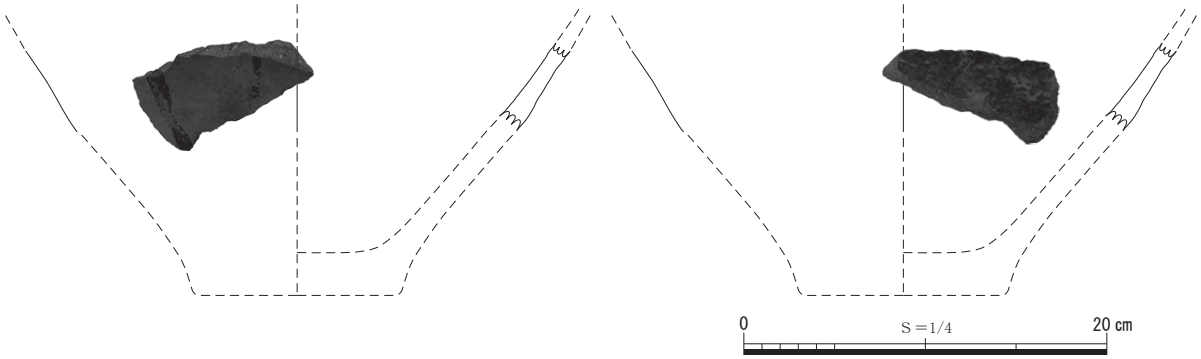
（１）付着土器の観察

本土器（第２図）は、縦8.0cm、横10.3cm、厚さ1.1cmほどの小片で、暗褐色を呈し、胎土は１㎜前後の石英粒を多く含んでいる。外面はナデ調整を施している。縦方向の２条の黒色物の付着がみられ、墨汁状の液体が垂れた痕跡を示している。また、左側の黒色物の垂れ痕は、ひび割れしていたためか破片上部の破面まで浸透している。内面は全面に黒色物が膜状に付着し、部分的にやや厚みのある部分がみられ、全体が焦げ痕跡を示している。炭化物の付着状況から煮沸したと推定されるが、外面の被熱の状況は赤変するまでには至っていない。

この破片は、土器の傾き、調整から大形鉢の胴部下半で底部に近い部位と想定される。このような大鉢は、大和第Ⅰ－１様式から大和第Ⅱ様式に多くみられる器種であり、また、色調や調整からも前述時期のなかに収まると考えられる。よって、調査地の遺構分布状況から周辺に展開した当該期の遺構が破壊され、中世遺構の堆積物に混在したと考えられる。

（２）炭化植物遺体の外形形態および細胞形態の観察

鱗茎には、鱗片が同心円状に密に重なり合う構造が通常観察される。資料の土器片に付着した炭化植物遺体について観察をおこなった結果、外部形態は残存しておらず不明であり、鱗片が同心円



第２図　資料の土器と実測図

状に重なる形態も観察されなかった（写真１）。しかし、一定方向の細胞が層状に重なる様子は分析№１や２、４で観察できた。鱗茎は、ユリ科やヒガンバナ科などに見られる地下茎の一種で、横断面の断面形態では、鱗片葉が同心円状に重なるタイプ（ノビルと、アサツキ、アマナ、キツネノカミソリなど）と軸を中心に螺旋状に重なるタイプ（ツルボなど）に分類可能である。しかし、分析試料は、いずれも断面形態が残存していなかった。また、鱗茎の形態的な特徴を示す、鱗片先端側や中心部、基部と思われる場所も残存していなかった。

鱗片葉は、１枚ごとに長方形の表皮細胞が表面（両面）を覆い、その内側にある葉肉細胞が蜂の巣状の構造を呈する。比較的残存が良い分析№１～４の４ヶ所について植物遺体の一部を採取し、走査型電子顕微鏡で細胞形態を観察したところ、分析№１には表皮細胞、分析№２は葉肉細胞？、分析№３は葉肉細胞？と列状に連なる細胞、分析№４には表皮細胞？と葉肉細胞が観察された（写真２）。

第２表　試料の細胞サイズ計測結果
（各細胞５点を計測、単位：㎜）

		表皮細胞			葉肉細胞		
		X	Y	X/Y比	X	Y	X/Y比
分析№１	1	0.14	0.04	3.50	－	－	－
	2	0.16	0.05	3.20	－	－	－
	3	0.15	0.05	3.00	－	－	－
	4	0.13	0.04	3.25	－	－	－
	5	0.16	0.05	3.20	－	－	－
	平均値	0.15	0.05	3.23	－	－	－
	標準偏差	0.01	0.00	0.16	－	－	－
分析№４	1	－	－	－	0.07	0.10	0.70
	2	－	－	－	0.06	0.10	0.60
	3	－	－	－	0.07	0.11	0.64
	4	－	－	－	0.06	0.08	0.75
	5	－	－	－	0.06	0.09	0.67
	平均値	－	－	－	0.06	0.10	0.67
	標準偏差	－	－	－	0.00	0.01	0.05

このうち、計測が可能な分析№１の表皮細胞と分析№４の葉肉細胞各５点の長軸方向と短軸方向の長さを計測したところ、分析№1の表皮細胞は、長軸方向の平均値が0.15±0.01㎜、短軸方向の平均値が0.05±0.00㎜、分析№4の葉肉細胞は、長軸方向の平均値が0.06±0.00㎜、短軸方向の平均値が0.10±0.01㎜であった（第２表）。

現生鱗茎の観察では、表皮細胞の大きさと長短比に種ごとの違いが見られるため[3]、長短比（X/Y比）を求めた。分析№１の表皮細胞のX/Y比は3.23±0.16、分析№４の葉肉細胞は、0.67±0.05であった（第３表）。比較した現生の炭化鱗茎標本の中では、表皮細胞は、アサツキとノビル、ツルボ、キツネノカミソリ、葉肉細胞ではアサツキとツルボ、ヒガンバナの標準偏差内に含まれていた。

分析№１の表皮細胞の形態では、長方形の細胞が比較的規則的に連なっており、その角はやや丸みを帯びている。こうした表皮細胞の形態をもつ現生鱗茎はノビルとツルボのみである。さらに、ツルボの表皮細胞中には、気孔が認められる場合がある。同様に、分析№４の葉肉細胞の形態では、幅広の六角形の細胞で、角がやや丸みを帯びる。こうした葉肉細胞の形態をもつ現生鱗茎はアサツキとツルボのみである。ツルボは葉肉細胞の中にしばしば針状のシュウ酸カルシウムの結晶が見られるが、試料の中には見られなかった。

さらに、土器を用いた鱗茎の炭化実験では、ノビルやアサツキはデンプンを含まないために単独では土器に付着しないが、ツルボはデンプンを含むために、焦げて炭化すると、土器に付着する結果が得られている[5]。

上記を総合すると、形態での分類やシュウ酸カルシウムといった明瞭な痕跡は観察できなかったが、土器の中で単一の植物を調理もしくは加工していたと仮定すると、表皮細胞と葉肉細胞で共通する特徴をもち、かつお焦げで残りやすいツルボが炭化した可能性が高い。

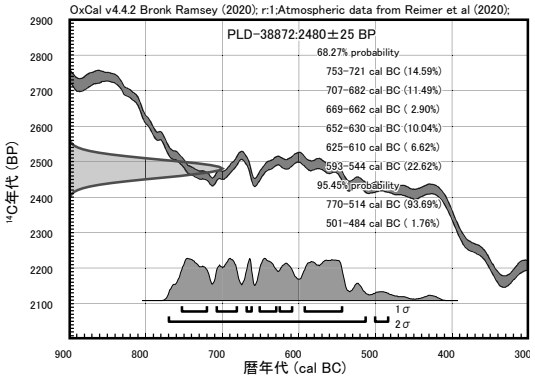
第３表　試料と現生炭化鱗茎の表皮細胞および葉肉細胞の平均値と標準偏差（現生炭化鱗茎は各５点の平均値）

	鱗茎	表皮細胞（㎜）			葉肉細胞（㎜）			付加情報
	直径（㎝）	X（長軸）	Y（短軸）	X/Y比	Y（長軸）	X（短軸）	X/Y比	
分析№.１	－	0.05 ± 0.00	0.15 ± 0.01	3.23 ± 0.16	－	－	－	－
分析№.４	－	－	－		0.10 ± 0.01	0.06 ± 0.00	0.67 ± 0.05	－
現生炭化アサツキ	0.4～0.9	0.04 ± 0.00	0.13 ± 0.01	3.12 ± 0.30	0.10 ± 0.01	0.07 ± 0.01	0.67 ± 0.26	
現生炭化ノビル	0.9～2.0	0.06 ± 0.00	0.21 ± 0.01	3.24 ± 0.36	0.13 ± 0.01	0.07 ± 0.01	0.51 ± 0.10	
現生炭化ヤマラッキョウ	0.5～0.9	0.02 ± 0.00	0.22 ± 0.03	10.30 ± 2.36	0.06 ± 0.01	0.06 ± 0.01	0.99 ± 0.12	
現生炭化アマナ	0.6～1.7	0.06 ± 0.00	0.28 ± 0.04	4.48 ± 0.61	0.11 ± 0.01	0.10 ± 0.01	0.82 ± 0.05	
現生炭化ツルボ	0.7～2.0	0.04 ± 0.00	0.13 ± 0.01	3.12 ± 0.30	0.13 ± 0.01	0.09 ± 0.01	0.68 ± 0.03	シュウ酸カルシウムの針状の結晶
現生炭化ヒガンバナ	1.5～5.0	0.04 ± 0.00	0.22 ± 0.01	5.90 ± 0.58	0.12 ± 0.01	0.08 ± 0.01	0.68 ± 0.13	
現生炭化キツネノカミソリ	2.0～2.5	0.04 ± 0.00	0.12 ± 0.01	3.00 ± 0.16	0.13 ± 0.00	0.07 ± 0.00	0.57 ± 0.04	

（３）土器型式と暦年代

第４表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正をおこなって暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、暦年較正結果を、第３図に暦年較正結果をそれぞれ示す。

^{14}C年代は、2480±25 yrBP、２σの暦年代範囲は、770-514 cal BC（93.69 %）及び501-484 cal BC（1.76%）であった。小林（2017）ほかを参照すると、この年代は、弥生時代前期の長原式併行の年代であった(6)。



第３図　暦年較正図

第４表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	前処理	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-38872	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L,水酸化ナトリウム：0.1 mol/L,塩酸：1.2 mol/L）	-24.99±0.29	2480±25	2480±25	753-721 cal BC (14.59%) 707-682 cal BC (11.49%) 669-662 cal BC (2.90%) 652-630 cal BC (10.04%) 625-610 cal BC (6.62%) 593-544 cal BC (22.62%)	770-514 cal BC (93.69%) 501-484 cal BC (1.76%)

４．考察

弥生時代前期（大和第Ⅰ－１様式～第Ⅱ様式）、770 ～ 484 cal BCの暦年代が得られた土器付着炭化物は形態からの分類はできなかったが、細胞のサイズや形態、土器への付着状況から今回比較した現生鱗茎７種の中ではキジカクシ科ツルボ属のツルボである可能性が最も高かった。

これまで弥生時代の土器付着炭化鱗茎としては、徳島県庄・蔵本遺跡の第28次調査から出土した弥生時代前期前半から前期中葉の壷？、第27次調査から出土した弥生時代中期前半から中期中葉の壷？があり、いずれもツルボと同定されている(7)。特に、弥生時代前期前半から前期中葉の例は、

ツルボ自体で年代測定が実施され、2485±20 ^{14}C BP、2σの暦年代で768～540 cal BCと本資料と同時期かやや古い年代であった[8]。

ツルボは、土手や山野の日当たりが良い場所に生育する[9]。えぐみがあるため、利用にあたってはアク抜きが必要で、民俗例では水に晒したり、数日間の煮沸をおこなったとされる[10]。食用のほか薬用にも用いられる。本資料は外部形態が観察できない点やアクの原因となるシュウ酸が確認できなかったため、アク抜き後の長時間煮詰めた状態で土器に付着した可能性が考えられる。

本研究はJSPS17K01198及び20H05811（代表：佐々木由香）の助成を受けた。

註

（１）田原本町教育委員会1990「(13). 唐古・鍵遺跡第38次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報１ 1988・1989年度』p.17

（２）佐々木由香・米田恭子・小林和貴2014「遺跡出土鱗茎同定のための識別方法」『日本植生史学会第29回大会要旨集』p.43

（３）佐々木由香・米田恭子・町田賢一2018「小竹貝塚出土の土器付着炭化鱗茎の同定」『大鏡』37. 61-70富山考古学会

（４）a.Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360

b.中村俊夫2000「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編『日本先史時代の^{14}C年代』：3-20, 日本第四紀学会

c.Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 1-33, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

（５）佐々木ほか　未公表

（６）a.小林謙一2017『縄文時代の実年代―土器型式編年と炭素14年代―』同成社

b.小林謙一2009「近畿地方以東の地域への拡散」西本豊弘編『新弥生時代のはじまり第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代』55-82, 雄山閣

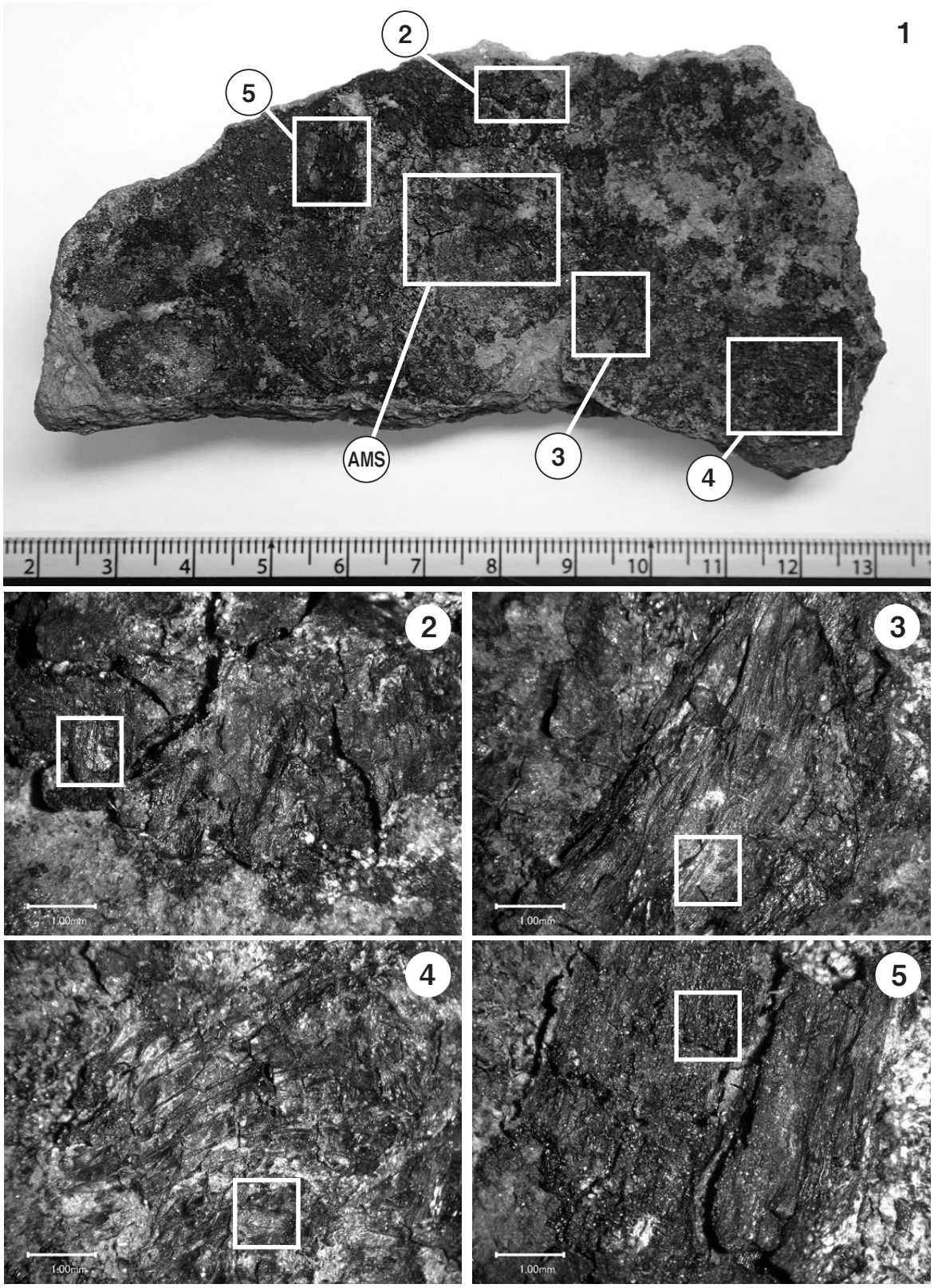
c.藤尾慎一郎2009「弥生時代の実年代」西本豊弘編『新弥生時代のはじまり第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代』9-54, 雄山閣

（７）米田恭子・佐々木由香2017「庄・蔵本遺跡出土の土器付着炭化鱗茎の同定」『徳島大学埋蔵文化財調査室紀要』３, 80-88

（８）伊藤　茂・安昭炫・佐藤正敏・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・黒沼保子2017「庄・蔵本遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定」『徳島大学埋蔵文化財調査室紀要』３, 67-77

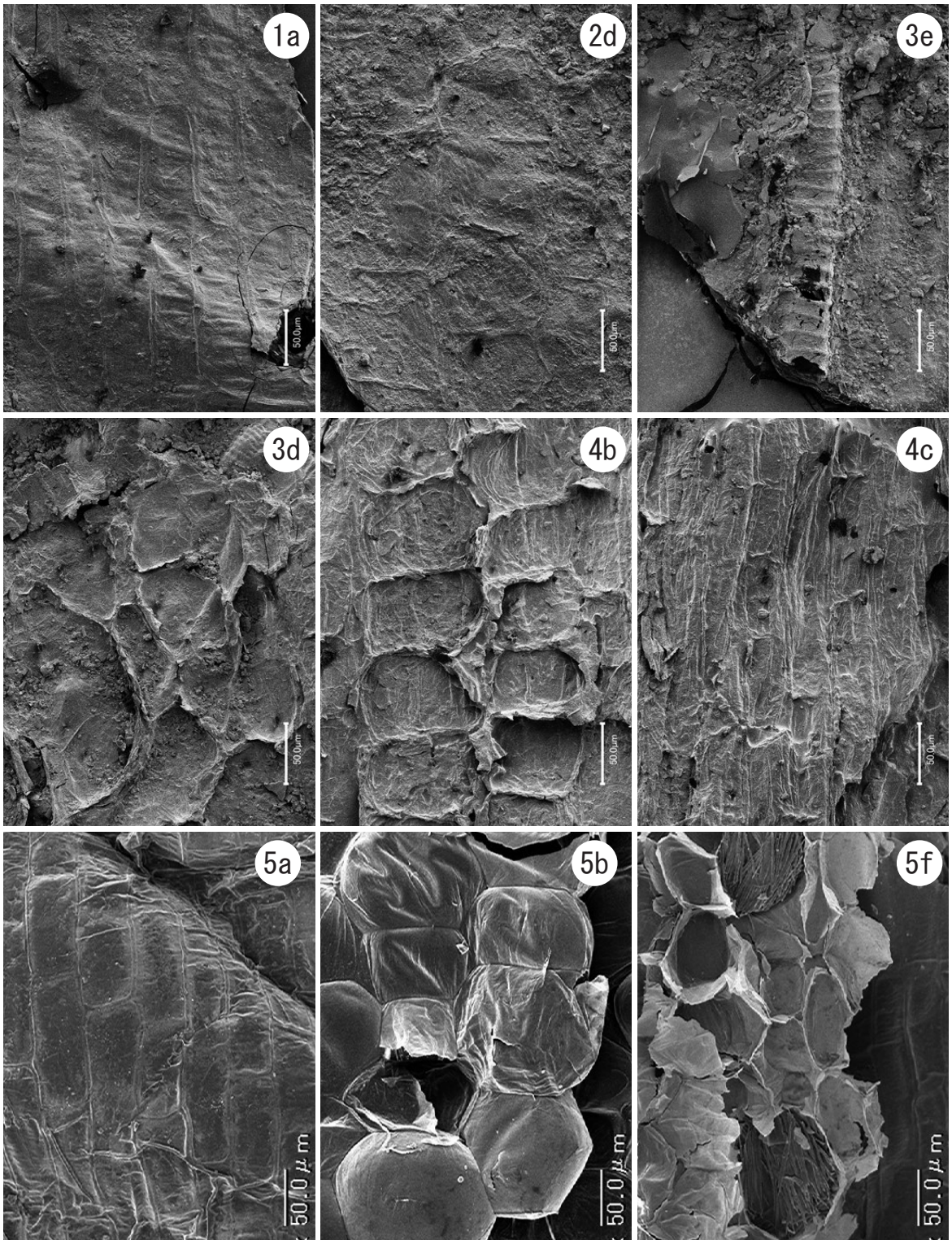
（９）林　弥栄1983『日本の野草』山と渓谷社

（10）野本寛一2020『採集民俗論』昭和堂



1．資料内面（枠は拡大写真撮影位置およびAMS試料採取位置）、2．炭化植物遺体の拡大（分析No.1）、3．炭化植物遺体の拡大（分析No.2）、4．炭化植物遺体の拡大（分析No.3）、5．炭化植物遺体の拡大（分析No.4）
2～5の枠は走査型電子顕微鏡用試料採取位置

写真１　唐古・鍵遺跡出土の土器付着炭化植物遺体



1．分析 №.1、2．分析 №.2、3．分析 №.3、4．分析 №.4、5．現生炭化ツルボ（佐々木ほか（2018）を改変）
a：表皮細胞、b：葉肉細胞、c：表皮細胞？、d：葉肉細胞？、e：不明、f：シュウ酸カルシウムの針状結晶

写真２　唐古・鍵遺跡出土の土器付着炭化植物遺体及び現生炭化鱗茎の走査型電子顕微鏡写真

唐古・鍵遺跡出土の青銅器鋳造関連遺物（補遺）

桜井市立纒向学研究センター
寺澤　薫
田原本町教育委員会
藤田　三郎
奈良県立橿原考古学研究所
奥山　誠義

１．はじめに

唐古・鍵遺跡は弥生時代の大環濠集落（拠点）であり、その出土品は多種多様で拠点集落の状況をよく示している。そのなかでも特筆されるのが青銅器鋳造関連遺物である。銅鐸や武器などの土製鋳型外枠や高坏形土製品、送風管などが多量に出土していることから、単発的（一過性）な青銅器生産でなく、一定期間かつ継続的に鋳造をおこなっていたと考えられる。

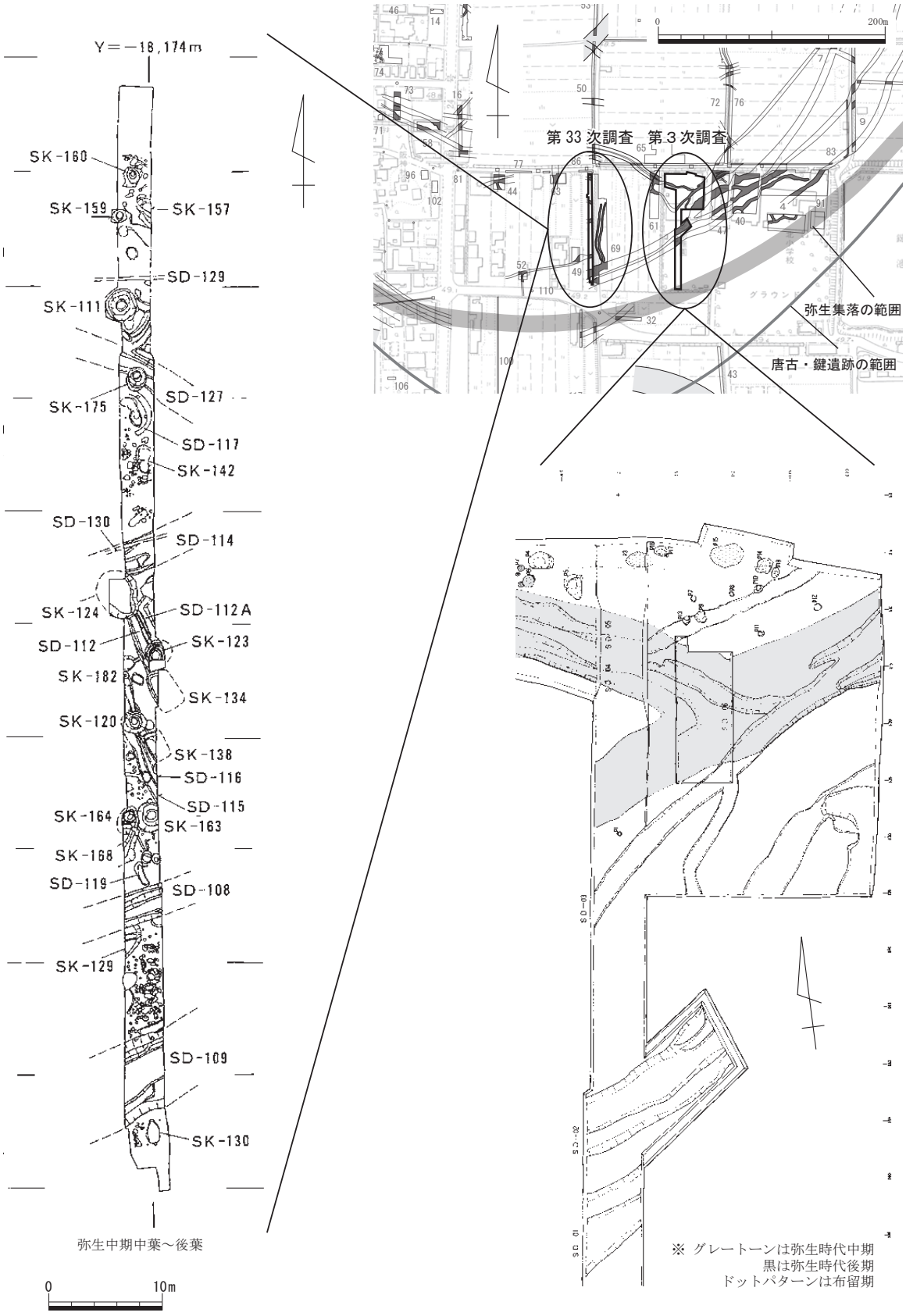
このような青銅器鋳造関連遺物については、これまでに出土したものをすべて洗い出し、2009年に『唐古・鍵遺跡Ⅰ　特殊遺物・考察編』として報告をおこなった(1)。その後、田原本町では重要文化財の指定を受けるにあたり、奈良県立橿原考古学研究所から唐古・鍵遺跡の第３～12次調査（第10次を除く）の遺物の返還を受けた。このような報告書作成・遺物の返還という流れの中にあって、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館がリニューアルのため閉館となり、博物館の北井利幸氏が収蔵遺物の確認作業中に今回紹介する唐古・鍵遺跡の第３次調査の鋳張り状青銅製品等３点の遺物を見つけることになった。これら遺物は、当時、調査担当者である故 久野邦雄氏が鋳造技術を研究するため(2)、博物館での管理となったが、久野氏の急逝によりその所在が長らく不明になっていたものである。これら遺物については、既に報告した青銅器鋳造関連遺物を補う重要なものであるという認識のもと、また、第33次調査出土品の再整理(3) においても２点の高坏形土製品を確認していたこともあり、これらを併せて５点について青銅器鋳造関連遺物の補遺として報告するものである。

２．鋳造関連遺物が出土した調査の概要

第１表に示すように、これら５点の遺物は唐古・鍵遺跡の南地区にあたる第３次調査(4) と第33次調査(5) で出土したものである。この南地区は、既に報告しているように青銅器鋳造工房跡に推定される場所にあたり、その中心は第65次調査地付近にある。この第65次調査地の南側隣接地が第３次調査地、西南西60mが第33次調査地になる。

第１表　青銅器鋳造関連遺物出土の唐古・鍵遺跡調査地の概要

次数	調査地	調査期間	主要遺構	主要遺物	備考
第３次調査	田原本町鍵161番地ほか	1977. 8. 1～1977. 11. 15	環濠３条・井戸・土坑	弥生土器・木製農具未成品・青銅器鋳造関連遺物・イノシシ下顎14個体等	
第33次調査	田原本町鍵262番地1ほか	1987. 11. 5～1988. 5. 1	環濠３条・区画溝・井戸・木器貯蔵穴・土坑・柱穴・土壙墓	弥生土器・木製農具未成品・木戈・細形銅矛片・銅鏃等	再整理2011. 9. 20～2012. 5. 10



第１図　第３・33次調査区位置図および遺構平面図（位置図：S＝1/5,000、平面図：S＝1/500）

第３次調査地では、北端の西拡張区で２条の小溝（ＳＤ-04･05／幅約1.5～２m･深さ約0.3～0.4m）２条を検出しており、この両溝を含む周辺から石製銅鐸鋳型や土製銅鐸鋳型外枠・武器鋳型外枠、高坏形土製品、送風管などが多量に出土した。このことから、北側の第65次調査地の工房付近からこれら遺物が投棄されたと推察された。１の鋳張り状青銅製品の出土については､棒びんに｢カラコ３次表採｣と記載があるが、寺澤は「上記小溝を検出した西拡張区の掘り下げ時の廃土から見つかったもの」と記憶している。２の鉱滓状不明品は､「唐古 東区 SD-03 黒粘Ⅱ S10-15 771102」と記載があるが、遺構名については整理段階で「ＳＤ-06（106)」と改称したもので、調査区の北東から南西方向に走行する環濠からの出土である。３の鉄滓状不明品は､「カラコ3次 SD-02 黒粘Ⅱ 770902」とあることから、調査区中央やや南側で検出した環濠からの出土である。１は、廃土からの出土であるため時期は決められないが、両小溝は大和第Ⅴ様式なのでその可能性はある。２は大和第Ⅲ-３・４様式～第Ⅳ様式、３は大和第Ⅴ様式の可能性が高い。２の鉱滓状不明品が大和第Ⅲ-３・４様式に所属した場合、第３次調査地西側隣接地の第61次調査で出土した送風管（M5154（６）／ＳＫ-115 大和第Ⅲ-４様式）と同時期となり、鋳造関連遺物としては最も古い遺物になる。

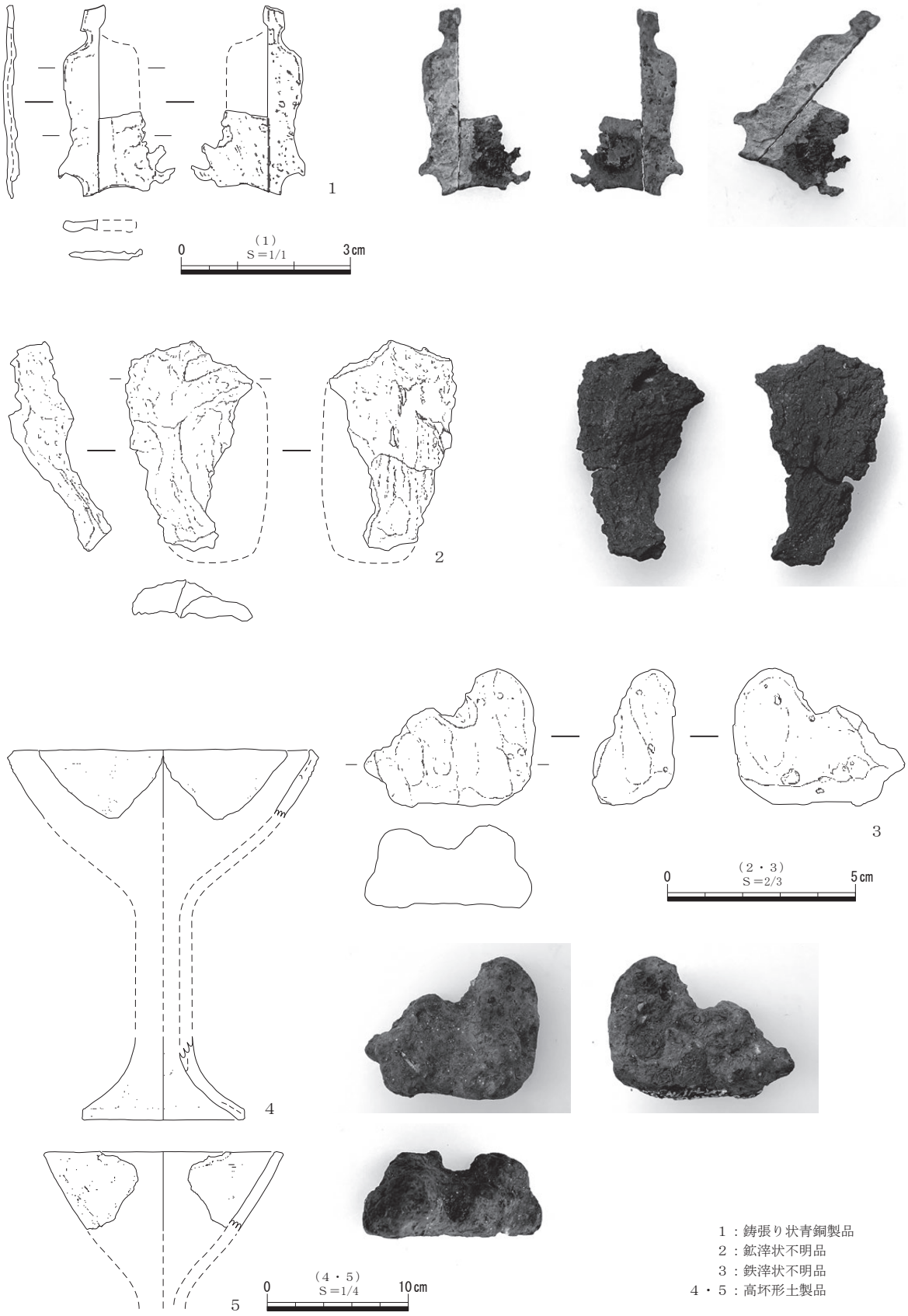
一方、４・５の高坏形土製品が出土した第33次調査地では、これまでに青銅器鋳造関連遺物は確認していない。しかし、この調査地の東側隣接地の第69次調査地北半で、３点の青銅器鋳造関連遺物（土製武器鋳型外枠M5040・高坏形土製品M5110・送風管M5155）が出土していることから、それらと一連の遺物散在の状況を示すものと考えられる。この付近の青銅器鋳造関連遺物はごく僅かであり、遺物の広がりから見れば最西端といえる。さて、４は坏部と脚部の２片であり、４の坏部と５は、調査区北端の第Ⅳ層 黒褐色粘質土層から、４の脚部は前述地区の近くの井戸（ＳＫ-111第２層）から出土した。黒褐色粘質土層は大和第Ⅲ-３様式・Ⅳ-１様式・Ⅴ-１様式、ＳＫ-111第２層は大和第Ⅳ-１様式の土器が伴っている。したがって、これら高坏形土製品は大和第Ⅳ-１様式に所属する可能性が高いであろう。

今回報告する遺物は、いずれも青銅器鋳造工房と関連する遺構からの出土ではなく、鋳造後の廃棄によって散在してものと考えられるが、廃棄後のちかい時期を示すものと考えられる。

第２表　青銅器鋳造関連遺物一覧表

番号	製品名 製品コード	次数	遺構	土層	地区	出土日	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	時期（共伴土器）	備考
1	鋳張り状青銅製品 KRK-003-00003M	第３次		表採 （廃土）		7709--	3.36	2.00	0.20	1.89	大和第Ⅴ様式？	未指定
2	鉱滓状不明品 KRK-003-00001コ	第３次	ＳＤ- 06 (106)	黒粘Ⅱ	東区　S10-15	771102	5.57	3.18	1.62	14.99	大和第Ⅲ-３・４ ～Ⅳ様式	未指定
3	鉄滓状不明品 KRK-003-00002コ	第３次	ＳＤ- 02 (102)	黒粘Ⅱ		770902	4.40	1.62	2.08	25.16	大和第Ⅴ様式	未指定

番号	製品名 ミュージアムコード	次数	遺構	層位／土層	地区	出土日	口径 (cm)	裾径 (cm)	厚さ (cm)	時期（共伴土器）	備考
4	高坏形土製品（坏部） MD-鋳造-0145-1	第33次	－	第Ⅳ層 黒褐色粘質土層	303-306東半	880414	17.0	－	0.9	大和第Ⅲ-３ ・Ⅴ様式？	指定番号 1742
	高坏形土製品（脚部） MD-鋳造-0145-2	第33次	ＳＫ-111	第２層 灰黒色粘質土	南半	880328	21.0	－	1.0	大和第Ⅳ-1様式	指定番号 1742
5	高坏形土製品 MD-鋳造-0146	第33次	－	第Ⅳ層 黒褐色粘質土層	290-303	880419	－	11.2	0.8	大和第Ⅳ-1様式	指定番号 1741



1：鋳張り状青銅製品
2：鉱滓状不明品
3：鉄滓状不明品
4・5：高坏形土製品

第２図　出土遺物

３．出土品の観察

鋳張り状青銅製品（第２図－１）

長軸3.36㎝、短軸2.0㎝、最大厚0.2㎝の扁平な板状の製品である。１片あるが、もとは１つであったものが縦方向に裁断され、その内の１片がさらに横方向に裁断され、欠失している。また、残された裁断破片の片面には研磨がみられる。これらについては、久野氏の著作(7) において、本品の分析値が掲載されていることから、そのための試料として使われたと思われる。

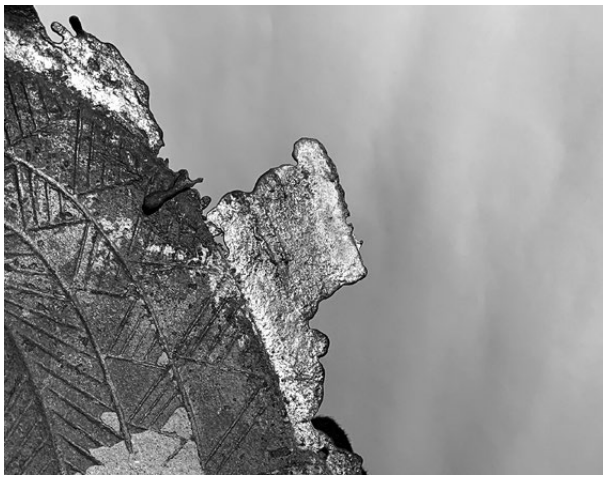


写真１　復元銅鐸鋳造時の鋳張り

本品は、ほぼ長方形を呈するが、短辺の一つ（上端）は突起状になっている。その先端は折れ面であり、本来の鋳造された製品からの除去の跡と考えられる。本品は全体に扁平であるが、縁辺はやや膨らみがみられ、このような形状は鋳張りにみられる特徴と考えられる（写真１）(8)。表面全体は、淡緑色を呈し、微細な「ス」がみられる。ただし、下端部分はやや棘状にささくれ、深い暗緑色を呈している。

鉱滓状不明品（第２図－２）

長軸5.57㎝、短軸3.18㎝、最大厚1.62㎝の不整形なもので、長辺部分の一端は欠失していると思われる。自然に生成されたもので、全体に黒褐色（暗めの海老茶色）を呈し、表面全体は流状溶岩のようなガサガサ感を呈す。中央で２片に折れているが、出土後のものである。その折れ面をみると、内部は表面とは異なり緻密（緻密で固くなった粘土のよう）である。短辺（上部）には、0.3㎝×0.7㎝ほどの空洞があるが、本品が生成された時の一連の形状である。

鉄滓状不明品（第２図－３）

長軸4.4㎝、短軸3.55㎝、最大厚2.08㎝で、全体に凹凸のある不整形な自然生成のものである。一部にはやや平坦を呈する部分がある。全体にみられる凹凸は丸みがある。表面には、0.1㎝以下の小さなくぼみが多くみられる。また、表面には0.1㎝ほどの石粒も内包している。茶褐色を呈す。

高坏形土製品（第２図－４・５）

４の坏部は、復元口径21.0㎝の椀形を呈するものである。口縁部はやや内湾し、ヨコナデによって斜め上方に突出する。外面の口縁部には３条の浅い凹線文を巡らせるが、ナデやミガキによって不明瞭になっている。坏部は、斜位の粗いハケ後ナデ、さらに縦位のミガキをおこなう。内面は斜位の粗いハケを施す。この外内面にみられる粗いハケや凹線文は、同一原体の可能性があり、この種のハケは高坏形土製品に使用される一連のハケ原体（M5113・5114）である。長い脚柱部が想定されるが、欠失している。脚裾部は短い「ハ」字形を呈し、上記製品に似る。外面は器面を整えるような弱いケズリをおこなう。内面の上部は弱い横位ケズリ、下半は強いナデで仕上げる。色調は、暗灰褐色を呈する。

５は、高坏形土製品の坏部で、復元口径16㎝の小形品である。坏部は、椀形というより直線的で

やや内湾する円錐状を呈する。坏部下端はやや歪になっていることから、注ぎ口近くの破片の可能性がある。外面の口縁部は横位ケズリ、それより下は縦位ケズリをおこなう。内面は粗い横位ハケ後弱くナデを施す。このハケは、前述４と似る。色調は、淡灰褐色を呈す。

４．出土品の科学的分析

鋳張り状青銅製品（青銅器鋳造関連遺物　№１、第２図－１）および鉱滓状不明品２点（青銅器鋳造関連遺物　№２；第２図－２および№３；第２図－３）の計３点について、蛍光Ｘ線分析により元素分析を行った。蛍光Ｘ線分析には、日本電子株式会社製JSX-3100RⅡを用い、測定条件を第３表に示す。いずれの含有量も、ファンダメンタルパラメータ法（FP法）による半定量値である。

分析の結果、**鋳張り状青銅製品**（青銅器鋳造関連遺物　№１、第２図－１）は、３片12ヶ所の測定をおこないCu、Sn、Pbの３成分からなる青銅製であることを確認した。この製品においては、最もCu含有量が多い箇所で、Cuが65wt%、Snが20wt%、Pbが12wt% であった。一部の測定箇所において、わずかにAg、Sbを検出した。

第３表　蛍光Ｘ線分析　測定条件

使用機器	JSX-3100RⅡ
管球	ロジウム（Rh）
管電圧	50kV
管電流	自動
測定時間	100秒
照射径	１㎜
雰囲気	大気

この鋳張り状青銅製品については、分析方法は未確認であるが分析例が示されている[9]。この既報によれば、検出元素を基にした含有量はCuが52.67％、Snが14.2％、Pbが9.6％とされ、青銅の主成分であるCu、Sn、Pbの３成分で100％換算すると68.08％、Snが18.38％、Pbが12.39％であったと記されている。

本分析（蛍光Ｘ線分析）においては、検出元素を基にした含有量はCuが65.63wt%、Snが20.51wt%、Pbが12.49wt%であった。また、青銅の主成分であるCu、Sn、Pbの３成分で100％換算すると、Cuが66.02wt%、Snが20.99wt%、Pbが13.00wt%であった。

先述の通り既報の分析方法が不明[10] であるため単純に比較はできないが、参考までに本分析による結果と比較すれば、既報の分析例とは若干の差異が見られるが、概ね同等な含有量が算出された。

鉱滓状不明品（青銅器鋳造関連遺物　№２；第２図－２）は、６ヶ所の測定をおこない、いずれの箇所においてもFeが75 ～ 90wt%程度、そのほかSi、K、Ca、Ti、Mnを検出した。

鉱滓状不明品（青銅器鋳造関連遺物　№３；第２図－３）は、９ヶ所の測定をおこない、Feが80wt%前後、Siが10wt%前後、そのほかK、Ca、Ti、Mnを検出した。一部において、Feが90wt%程度であったほかCa、Ti、Mnを検出した。

鉱滓状不明品はいずれもFe含有量が多いことから、鉄製品に関連する遺物と考えられる。

５．おわりに

今回報告した鋳造関連遺物３点の科学的分析の結果、鋳張り状青銅製品は青銅製品、鉄滓状不明品と鉱滓状不明品は鉄関連の遺物であることが判明した。鋳張り状青銅製品の分析数値は、前掲『報告Ⅰ』で示された銅鐸片の熔解した分析結果（Cu：92.57wt%、Sn：2.83wt%、Pb：3.35wt%）[11]

とは大きく異なっており、本品が銅鐸鋳造時の鋳張りであったか、他の製品時のものなのか、また、鋳張りという製品縁辺の特性のため、製品本来の成分の値を表さないのか、判断しがたい。

また、鉄滓状不明品と鉱滓状不明品についても、蛍光Ｘ線分析という限られた方法のため、その生成過程や内容までには至らなかった。ただし、唐古・鍵遺跡においては、鉄関連資料は板状鉄斧やヤリガンナ等極限られた弥生時代後期後半以降の資料しか残存していない中、鍛冶に関連する可能性を示す、それも弥生時代中期後半から後期初頭の可能性があることから重要な資料となろう。

本報告では、資料の紹介という点に重きを置いたが、これら資料のもつ価値は高く、課題も多い。今後のさまざまな科学的分析や他の同品分析データとの比較、実験考古学による検証等に委ねたい。

今回の資料の探索・返還・報告等において、北井利幸・卜部行弘両氏には大変お世話になりました。感謝申し上げます。

（１・２・５：藤田・寺澤、３：藤田、４：奥山）

註

（１）田原本町教育委員会編2009「青銅器鋳造関連遺物」『唐古・鍵遺跡Ⅰ　特殊遺物・考察編』

（２）久野邦雄1986「我国における古代銅の世界１　弥生式時代の青銅製品について」『銅』№.1 社団法人 日本銅センター

久野邦雄1987「我国における古代銅の世界２　弥生式時代の青銅器の生産遺跡について」『銅』No.2 社団法人 日本銅センター

久野邦雄1997a『青銅器の考古学』学生社　16・25頁

久野邦雄1997b『銅鐸の復元研究』久野邦雄氏遺稿集刊行会

（３）第33次調査の再整理は、2011年９月20日～2012年５月10日に実施した。

（４）奈良県立橿原考古学研究所編1978『昭和52年度 唐古・鍵遺跡発掘調査概報』

（５）田原本町教育委員会編1989「昭和62･63年度 唐古・鍵遺跡第33次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要11』

（６）『唐古・鍵遺跡Ⅰ』に掲載した青銅器鋳造関連遺物については、「M」を付した掲載番号を併記した。

（７）前掲註（２）　1986文献。

（８）唐古・鍵考古学ミュージアムの展示において、鋳造実験をおこなった際、このような形状の鋳張りがみられた。

（９）久野雄一郎1979「伝羽曳山出土（狭山藩旧蔵）銅鐸の金属学的調査報告」『橿原考古学研究所紀要（考古学論攷）３』

（10）前掲註（９）。

（11）村上隆2009「唐古・鍵遺跡から出土した金属生産に関わる遺物の科学的分析」『唐古・鍵遺跡Ⅰ　特殊遺物・考察編』

田原本町文化財調査年報 27
2018年度

令和３年３月30日

編集発行　田原本町教育委員会
印　　刷　株式会社 アイプリコム